

平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび市街地再開発計画に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

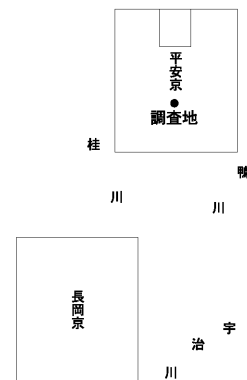
平成14年5月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡
- 2 調査所在地 京都市下京区中堂寺南町・粟田町・命婦町・坊城町
- 3 委 託 者 住宅・都市整備公団関西支社
- 4 調査期間 1991年7月15日～2002年5月23日
- 5 調査面積 15,780m²
- 6 調査担当者 平尾政幸・藤村敏之・藤村雅美・大立目 一・永田宗秀・山口 真
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「島原」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系(改正前)平面直角座標系 (ただし、単位(m)を省略した)
- 9 使用標高 T.P.:東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点(一級基準点)を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付け、遺構種類を前に付した。
- 13 遺物番号 土器類・石製品に通し番号を付し、瓦類・金属製品・木製品・骨は種類別に番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 平尾政幸・山口 真・永田宗秀
- 18 編集・調整 児玉光世・清藤玲子・近藤章子
- 18 航空写真 図版に使用した航空写真は都市整備公団の提供による。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1 . 調査経過	1
(1) 平成 3 年度の調査	4
(2) 平成 5 年度の調査	7
(3) 平成 6 年度の調査	11
(4) 平成 7 年度の調査	17
(5) 平成 8 年度の調査	22
(6) 平成 9 年度の調査	23
(7) 平成10年度の調査	24
(8) 平成11年度の調査	27
(9) 平成12年度の調査	29
(10) 平成13年度の調査	29
2 . 遺 構	36
(1) 左京六条一坊一町・二町の遺構	36
(2) 朱雀大路	37
(3) 右京六条一坊三町の遺構	38
(4) 右京六条一坊六町の遺構	39
(5) 右京六条一坊十一町の遺構	48
(6) 右京六条一坊十四町の遺構	49
3 . 遺 物	54
(1) 平安時代以前の遺物	54
(2) 平安時代前期の遺物	57
(3) 平安時代後期から鎌倉時代の遺物	75
(4) 江戸時代の遺物	93
4 . ま と め	94

図 版 目 次

- 図版 1 遺構 調査地周辺航空写真（平成元年 5 月 27 日撮影）
図版 2 遺構 調査地周辺航空写真（平成 14 年 4 月 4 日撮影）
図版 3 遺構 1 HK地区 5 次調査 1 区 全景（北から）

- 2 HK地区5次調査2・6区 全景(東から)
- 3 HK地区5次調査3区 全景(東から)
- 4 HK地区5次調査4区 全景(東から)
- 図版4 遺構 1 HK地区5次調査5区 全景(西から)
- 2 HK地区5次調査4区 朱雀大路東側溝SD01・SD02(北から)
- 図版5 遺構 1 HK地区5次調査5区 樋口小路北側溝SD03・SD04(西から)
- 2 HK地区5次調査5区 坊城小路西側溝SD05(北東から)
- 図版6 遺構 1 HK地区5次調査5区 井戸SE06(北から)
- 2 HK地区6次調査1区 全景(北から)
- 図版7 遺構 1 HK地区7次調査 全景(北西から)
- 2 HK地区8次調査1区 全景(北から)
- 3 HK地区8次調査2区 全景(北から)
- 図版8 遺構 1 XF地区8次調査1区 全景(東から)
- 2 XF地区8次調査2区 全景(東から)
- 3 XF地区8次調査3区 全景(東から)
- 図版9 遺構 1 XF地区8次調査3区 井戸SE13(西から)
- 2 XF地区8次調査5区 建物SB09と西坊城小路西側溝SD24(北から)
- 図版10 遺構 1 XF地区8次調査5区 西坊城小路西側溝SD24・SD25(北から)
- 2 XF地区8次調査4区 池SG26洲浜(北西から)
- 図版11 遺構 1 XF地区8次調査4区 SG26土器出土状況(南東から)
- 2 XF地区8次調査5区 井戸SE22(南から)
- 3 XF地区8次調査3区 井戸SE21(西から)
- 図版12 遺構 1 XF地区8次調査3区 SX15下層土器出土状況(南東から)
- 2 XF地区9次調査2区 全景(南から)
- 3 XF地区9次調査1区 全景(東から)
- 図版13 遺構 1 XF地区9次調査3区 全景(北から)
- 2 XF地区9次調査4区 池SG26北岸(北東から)
- 図版14 遺構 1 XF地区9次調査1区 井戸SE31(西から)
- 2 XF地区9次調査1区 井戸SE32(南西から)
- 図版15 遺構 1 XF地区10次調査1区 全景(北東から)
- 2 XF地区10次調査2区 全景(東から)
- 図版16 遺構 1 XF地区10次調査1区 楊梅小路北側溝SD35・SD36(西から)
- 2 XF地区10次調査1区 川岸の柵SA46(北東から)
- 3 XF地区10次調査1区 井戸SE39(北から)
- 図版17 遺構 1 XF地区10次調査1区 建物SB41・SB42(西から)

		2	XF地区11次調査1区	建物群SB54・SB55・SA59（西から）
図版18	遺構	1	XF地区11次調査2区	全景（北から）
		2	XF地区11次調査3区	全景（西から）
図版19	遺構	1	XF地区11次調査4区	全景（北東から）
		2	XF地区11次調査5区	全景（西から）
図版20	遺構	1	XF地区11次調査5区	川跡SD53（西から）
		2	XF地区11次調査5区	井戸SE52（南から）
		3	XF地区11次調査5区	井戸SE51（北から）
図版21	遺構	1	XF地区11次調査5区	溝SD66（北から）
		2	XF地区13次調査1区	全景（南西から）
		3	XF地区13次調査3区	全景（南から）
図版22	遺構	1	XF地区13次調査2区	全景（北西から）
		2	XF地区13次調査4区	全景（北西から）
図版23	遺構	1	XF地区13次調査5区	全景（南東から）
		2	XF地区13次調査4区	溝SD73（南から）
		3	XF地区13次調査4区	溝SD73土器出土状況（南から）
図版24	遺構	1	XF地区13次調査2区	井戸SE71（北から）
		2	XF地区14次調査	全景（南から）
		3	XF地区14次調査	井戸SE75（南から）
図版25	遺構	1	XF地区15次調査	全景（東から）
		2	XF地区15次調査	井戸SE76（北から）
図版26	遺構	1	XF地区16次調査	全景（北東から）
		2	XF地区17次調査1区	全景（北西から）
図版27	遺構	1	XF地区17次調査1区	御土居濠SD67（北から）
		2	XF地区17次調査2区	全景（北から）
図版28	遺構	1	XF地区17次調査3区	全景（東から）
		2	XF地区17次調査4区	全景（北から）
		3	XF地区17次調査5区	全景（北から）
		4	XF地区18次調査1区	全景（北から）
図版29	遺構	1	XF地区18次調査2区	全景（北西から）
		2	XF地区18次調査2区	西坊城小路東側溝SD78（北から）
図版30	遺構	1	XF地区18次調査3区	全景（西から）
		2	XF地区19次調査1区	全景（北から）
図版31	遺構	1	XF地区19次調査2区	全景（西から）
		2	XF地区19次調査2区	東部（北西から）

- 図版32 遺構 1 XF地区19次調査3区 全景(東から)
2 XF地区19次調査2区 溝SD80(西から)
- 図版33 遺構 1 XF地区19次調査2区 建物SB79(西から)
2 XF地区19次調査2区 建物SB79地業(西から)
- 図版34 遺構 1 XF地区19次調査2区 建物SB79地業下部(西から)
2 XF地区19次調査2区 建物SB79地業最下部(西から)
- 図版35 遺構 1 XF地区19次調査2区 建物SB79地業の板痕跡(北西から)
2 XF地区19次調査2区 建物SB79地業断面(北東から)
- 図版36 遺物 平安時代前期の軒丸瓦
- 図版37 遺物 平安時代前期の軒平瓦
- 図版38 遺物 平安時代後期から鎌倉時代の軒丸瓦
- 図版39 遺物 平安時代後期から鎌倉時代の軒丸瓦
- 図版40 遺物 平安時代後期から鎌倉時代の軒丸瓦・軒平瓦
- 図版41 遺物 平安時代後期から鎌倉時代の軒平瓦
- 図版42 遺物 平安時代後期から鎌倉時代の軒平瓦・丸瓦
- 図版43 遺物 平安時代後期から鎌倉時代の平瓦、刻印瓦・ヘラ記号
- 図版44 遺物 SX15下層出土土器
- 図版45 遺物 SX15下層・SD53下層出土土器
- 図版46 遺物 石器・石製品、SE13出土土器
- 図版47 遺物 SE13出土土器
- 図版48 遺物 SE13・SD77出土土器
- 図版49 遺物 SE50出土土器
- 図版50 遺物 SE50・SD34出土土器
- 図版51 遺物 SD34出土土器
- 図版52 遺物 SD34出土土器
- 図版53 遺物 SD34出土土器・土製品
- 図版54 遺物 SD53出土土器
- 図版55 遺物 Pit69・十一町整地層・SE51出土土器
- 図版56 遺物 SD24・SK30出土土器
- 図版57 遺物 SG26出土土器
- 図版58 遺物 SG26出土土器
- 図版59 遺物 SB79出土土器
- 図版60 遺物 1 SB79出土輸入陶磁器
2 SD67出土銭貨

插图目次

图 1	调查位置图 (1 : 4,000)	2
图 2	HK地区 5 次调查前全景	4
图 3	HK地区 5 次调查 1 · 3 区平面图 (1 : 200)	4
图 4	HK地区 5 次调查 2 · 4 · 6 区平面图 (1 : 200)	5
图 5	HK地区 5 次调查 5 区平面图 (1 : 200)	6
图 6	HK地区 6 次调查前全景	7
图 7	HK地区 6 次调查 1 区平面图 (1 : 200)	7
图 8	HK地区 6 次调查 2 · 3 区平面图 (1 : 200)	8
图 9	XF地区 8 次调查前全景	8
图 10	XF地区 8 次调查风景	8
图 11	XF地区 8 次调查 1 · 2 · 4 区平面图 (1 : 200)	9
图 12	XF地区 8 次调查 3 · 5 区平面图 (1 : 200)	10
图 13	XF地区 9 次调查风景 (写真测量)	11
图 14	XF地区 10 次调查前全景	11
图 15	XF地区 9 次调查 1 区平面图 (1 : 200)	12
图 16	XF地区 9 次调查 2 · 4 区平面图 (1 : 200)	13
图 17	XF地区 9 次调查石列	13
图 18	XF地区 9 次调查池下層断面	13
图 19	XF地区 9 次调查 3 区平面图 (1 : 200)	14
图 20	XF地区 10 次调查 1 区北部平面图 (1 : 300)	15
图 21	XF地区 10 次调查 1 区南部平面图 (1 : 300)	16
图 22	XF地区 10 次调查 SE38	16
图 23	XF地区 10 次调查 SE40	16
图 24	XF地区 10 次调查 2 区平面图 (1 : 200)	17
图 25	HK地区 7 次调查前全景	17
图 26	HK地区 7 次调查平面图 (1 : 200)	18
图 27	XF地区 11 次调查前全景	18
图 28	XF地区 11 次调查风景	18
图 29	XF地区 11 次调查 5 区东部平面图 (1 : 300)	19
图 30	XF地区 11 次调查 5 区西部平面图 (1 : 300)	20
图 31	XF地区 11 次调查 1 ~ 4 区平面图 (1 : 300)	21
图 32	HK地区 8 次调查前全景	22

図33	HK地区 8 次調査朱雀大路路面	22
図34	HK地区 8 次調査平面図 (1 : 200)	22
図35	XF地区13次調査前全景	23
図36	XF地区13次調査風景	23
図37	XF地区13次調査 1 区平面図 (1 : 200)	24
図38	XF地区13次調査 2 区平面図 (1 : 200)	25
図39	XF地区13次調査 3 ~ 5 区平面図 (1 : 200)	26
図40	XF地区14次調査前全景	27
図41	XF地区14次調査風景	27
図42	XF地区15次調査前全景	27
図43	XF地区15次調査風景	27
図44	XF地区14次調査平面図 (1 : 200)	28
図45	XF地区15次調査平面図 (1 : 200)	28
図46	XF地区16次調査平面図 (1 : 200)	28
図47	XF地区16次調査前全景	29
図48	XF地区16次調査風景	29
図49	XF地区17次調査前全景 (4 区)	29
図50	XF地区17次調査風景	29
図51	XF地区17次調査 1 区平面図 (1 : 200)	30
図52	XF地区17次調査 2 区平面図 (1 : 200)	30
図53	XF地区17次調査 3 区平面図 (1 : 200)	30
図54	XF地区17次調査 4 区平面図 (1 : 200)	31
図55	XF地区17次調査 5 区平面図 (1 : 200)	31
図56	XF地区18次調査前全景 (1・2 区)	31
図57	XF地区18次調査 4 区全景	31
図58	XF地区18次調査 1・2 区平面図 (1 : 200)	32
図59	XF地区18次調査 3・4 区平面図 (1 : 200)	33
図60	XF地区19次調査 1・2 区平面図 (1 : 300)	34
図61	XF地区19次調査 3 区平面図 (1 : 200)	34
図62	XF地区19次調査前全景 (1・2 区)	35
図63	XF地区19次調査前全景 (3 区)	35
図64	SD01・SD02実測図 (1 : 100)	36
図65	SE06実測図 (1 : 50)	37
図66	朱雀大路路面SF08断面図 (HK地区 8 次調査 2 区北壁、 1 : 50)	38
図67	SE76実測図 (1 : 50)	38

図68	SD67断面図 (1 : 100)	39
図69	SE13実測図 (1 : 50)	40
図70	SD24・SD25断面図 (XF地区 8 次調査 5 区、 1 : 50)	41
図71	SE22実測図 (1 : 50)	42
図72	SB79平面図 (1 : 100)	43
図73	SB79断面図 (1 : 50)	44
図74	SB79地業下部の構造 (1 : 100)	45
図75	SX27実測図 (1 : 50)	46
図76	SX83実測図 (1 : 50)	47
図77	SK14実測図 (1 : 20)	47
図78	SE50実測図 (1 : 50)	48
図79	SE51実測図 (1 : 50)	48
図80	SE52実測図 (1 : 50)	49
図81	SD34断面図 (1 : 50)	50
図82	SD35・SD36断面図 (1 : 50)	51
図83	SE40実測図 (1 : 50)	52
図84	SX15下層出土土器実測図 (1 : 4)	55
図85	SD53下層出土土器実測図 (1 : 4)	56
図86	石器・石製品実測図 (48は 1 : 2、他は 1 : 4)	56
図87	SE13出土土器実測図 (1 : 4)	57
図88	SD77出土土器実測図 (1 : 4)	58
図89	SE39出土土器実測図 (1 : 4)	59
図90	SE50出土土器実測図 (1 : 4)	60
図91	SK47出土土器実測図 (1 : 4)	61
図92	SX15出土土器実測図 (1 : 4)	63
図93	SD34出土土器実測図- 1 (1 : 4)	65
図94	SD34出土土器実測図- 2 (1 : 4)	66
図95	SD34出土土器実測図- 3 (1 : 4)	67
図96	SD53出土土器実測図 (1 : 4)	68
図97	Pit69出土土器実測図 (1 : 4)	69
図98	十一町整地層出土土器実測図 (1 : 4)	69
図99	SE51出土土器実測図 (1 : 4)	71
図100	SE52出土土器実測図 (1 : 4)	71
図101	平安時代前期の軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)	73
図102	鴟尾実測図 (1 : 4)	74

図103	萬年通寶写真・拓影（1：2）	74
図104	銚貝写真・実測図（1：2）	75
図105	SD01出土土器実測図（1：4）	76
図106	SE30出土土器実測図（1：4）	76
図107	SE71出土土器実測図（1：4）	76
図108	SD80出土土器実測図（1：4）	77
図109	六町土取り跡出土須恵器実測図（1：4）	78
図110	SK23出土土器実測図（1：4）	78
図111	SE32出土土器実測図（1：4）	78
図112	SD24出土土器実測図（1：4）	80
図113	SK33出土土器実測図（1：4）	80
図114	SG26出土土器実測図（1：4）	82
図115	SB79出土土器実測図（1：4）	83
図116	SE06出土土器実測図（1：4）	84
図117	平安時代後期から鎌倉時代の軒瓦拓影・実測図- 1（1：4）	87
図118	平安時代後期から鎌倉時代の軒瓦拓影・実測図- 2（1：4）	89
図119	平安時代後期から鎌倉時代の軒瓦拓影・実測図- 3（1：4）	90
図120	SD01出土木簡実測図（1：4）	92
図121	SD01出土ヒト下顎骨	92
図122	SD67出土陶磁器実測図（1：4）	93
図123	SD67出土銭貨拓影（1：2）	93

表 目 次

表 1	調査一覧表	2
表 2	遺構概要表	53
表 3	出土遺物の概略表	54
表 4	SE13出土土器類の構成	57
表 5	SD77出土土器類の構成	58
表 6	SE39出土土器類の構成	61
表 7	SE50出土土器類の構成	61
表 8	SK47出土土器類の構成	62
表 9	SX15出土土器類の構成	62

表10	SD34出土土器類の構成	64
表11	SD53出土土器類の構成	69
表12	十一町整地層出土土器類の構成	70
表13	SE51出土土器類の構成	70
表14	SD01出土土器の構成	75
表15	SE30出土土器の構成	75
表16	SE71出土土器の構成	77
表17	SD80出土土器の構成	77
表18	SK23出土土器の構成	79
表19	SE32出土土器の構成	79
表20	SD24出土土器の構成	79
表21	SK33出土土器の構成	79
表22	SG26出土土器の構成	81
表23	SB79出土土器の構成	81
表24	SE06出土土器の構成	85
表25	遺物概要表	93

付 表 目 次

付表 1	SX15下層出土掲載土器一覧表	96
付表 2	SD53下層出土掲載土器一覧表	98
付表 3	SE13出土掲載土器一覧表	98
付表 4	SD77出土掲載土器一覧表	99
付表 5	SE39出土掲載土器一覧表	101
付表 6	SE50出土掲載土器一覧表	101
付表 7	SK47出土掲載土器一覧表	103
付表 8	SX15出土掲載土器一覧表	104
付表 9	SD34出土掲載土器一覧表	106
付表10	SD53出土掲載土器一覧表	113
付表11	Pit69出土掲載土器一覧表	115
付表12	十一町整地層出土掲載土器一覧表	115
付表13	SE51出土掲載土器一覧表	115
付表14	SE52出土掲載土器一覧表	116

付表15	SD01出土掲載土器一覧表	117
付表16	SE30出土掲載土器一覧表	117
付表17	SE71出土掲載土器一覧表	118
付表18	SD80出土掲載土器一覧表	119
付表19	六町土取り跡出土掲載土器一覧表	119
付表20	SK23出土掲載土器一覧表	120
付表21	SE32出土掲載土器一覧表	120
付表22	SD24出土掲載土器一覧表（17次調査出土分）	121
付表23	SD24出土掲載土器一覧表（13次調査出土分）	122
付表24	SK33出土掲載土器一覧表	123
付表25	SG26出土掲載土器一覧表	123
付表26	SB79出土掲載土器一覧表	128
付表27	SE06出土掲載土器一覧表	130
付表28	SD67出土掲載土器一覧表	134

平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡

1. 調査経過

今回報告する一連の調査は、住宅都市整備公団（現都市整備公団、以下公団とする）により、平成3年度から14年度にかけて実施されたJR丹波口駅周辺市街地再開発計画に伴うものである。

再開発の対象範囲は、現五条通とJR山陰線が交差する周辺の東西約700 × 南北約500 の広範な地域で、平安京朱雀大路およびその両側の、左京六条一坊一・二・三町・右京六条一坊三・四・五・六・十一・十二・十三・十四町に該当する。

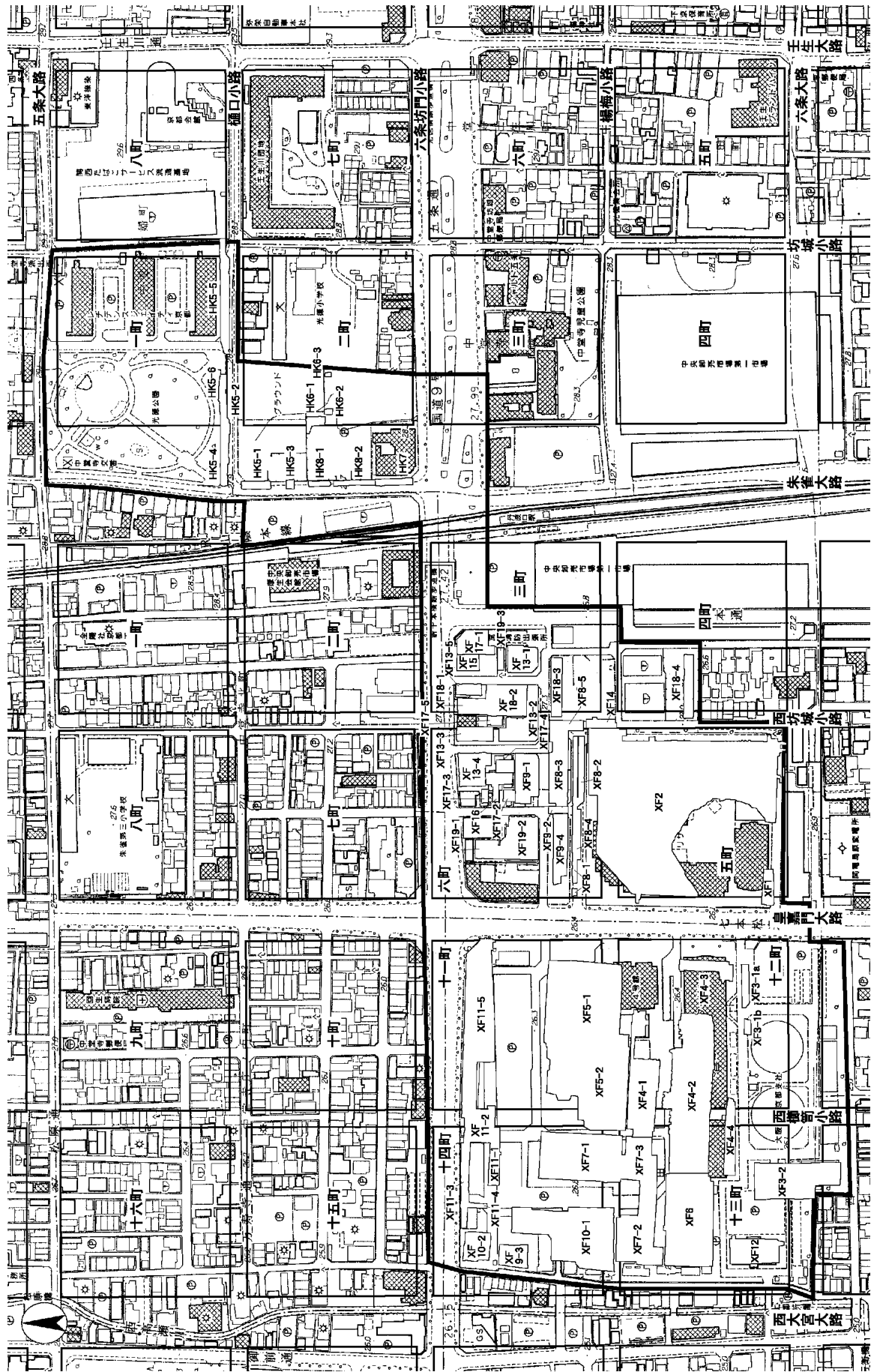
今回の調査対象地および周辺は、これまでに左京六条一坊八町に該当する旧専売公社五条工場跡地の東半部、右京七条一坊二・三・四町に該当する京都中央卸売市場場内、八町の京都市立朱雀第三小学校内、また今回の再開発対象地域に含まれる範囲でも公団関連以外に右京六条一坊五・六・十一・十二・十三・十四町の大阪ガス京都工場跡地など多数の埋蔵文化財発掘調査が実施され、平安京内では比較的調査密度の高い地域のひとつである。

こうした調査によって、条坊関連遺構や邸宅跡を構成する建物・溝・井戸など平安時代前期の遺構群や平安時代後期から鎌倉時代の建物・溝・井戸などの遺構、あるいは縄文時代から古墳時代の平安京造営以前の遺構・遺物が多数検出されるなど多くの成果を得ている。

今回は、朱雀大路および左京側（以下HK地区とする）では、主として日本たばこ産業敷地（旧専売公社五条工場跡地）の南西部、現万寿寺通の北側と千本通の東側に沿った地域で、両街路の拡幅部分を対象に、この地区としては5～8次の4次にわたる調査を実施し、また右京側（以下XF地区とする）では、大阪ガス京都工場跡地北部と国道9号線（現五条通）拡幅に伴う住宅地等の区画整理区域を対象として、8～11次および13～19次の11次にわたる調査を実施した（図1・表1）。

これらの調査の結果、HK地区では朱雀大路東側溝、樋口小路北側溝、坊城小路西側溝など平安京の条坊関連遺構や鎌倉時代の井戸を、XF地区でも楊梅小路北側溝、西坊城小路側溝など条坊関連遺構のほか、建物や井戸、溝など邸宅の一部とみられる遺構群や京内を流れる川跡など平安時代前期の遺構、また御堂や苑池を伴う鎌倉時代の邸宅、近世の遺構としては御土居の濠、さらに縄文時代から古墳時代の遺物を含む流路や湿地跡などの下層遺構を検出し、周辺の調査と同様に重要な成果を得ることができた。

これら総数15次、調査区にして40箇所の調査に関して、以下この章では調査を実施した年度毎に各調査について概述する。ただし、2章では同一遺構の延長を異なる年次で調査した事例も多く、重複を避けるため各調査で検出した遺構について平安京の町単位にまとめ、遺物については3章で時期ごとに記述を進めることにしたい。



※太枠内が再開発対象地域。右京をXF地区、左京をHKG地区とする。数字は調査次数と調査区番号。濃い灰色で塗りつぶした箇所が本報告分の調査区。

図1 調査位置図(1:4,000)

次数	調査年度	対象地域	所在地	面積 (㎡)	調査期間	主な遺構
XF1*	昭和62年度	右京六条一坊五町	下京区中堂寺南町17他	55	1987.08.03~1987.08.04	
XF2*	"	右京六条一坊五町	下京区中堂寺南町	10,013	1987.09.16~1988.04.21	平安前期邸宅 既報告
XF3*	平成元年度	右京六条一坊十二・十三町 七条一坊十六町	下京区中堂寺栗田町1	1,610	1989.03.28~1989.06.07	六条大路北側溝・通地
XF4*	"	右京六条一坊十二・十三町	下京区中堂寺栗田町1	5,670	1989.07.20~1990.05.30	掘立柱建物・井戸・溝
XF5*	平成2年度	右京六条一坊十一町	下京区中堂寺栗田町	6,050	1991.02.12~1991.06.19	掘立柱建物・井戸・溝
XF6*	平成3年度	右京六条一坊十三町	下京区中堂寺栗田町1	2,000	1991.11.18~1992.03.07	掘立柱建物・井戸
XF7*	平成4年度	右京六条一坊十三・十四町	下京区中堂寺栗田町1	3,805	1992.07.13~1993.01.14	楊梅小路北側溝・掘立柱建物・川跡
XF8	平成5年度	右京六条一坊六町	下京区中堂寺南町	1,400	1993.08.07~1994.03.24	湿地・西坊城小路西側溝・掘立柱建物・柵・井戸・池
XF9	平成6年度	右京六条一坊五・十四町	下京区中堂寺南町地内	1,247	1994.04.18~1994.08.31	湿地・柱穴・井戸・溝
XF10	"	右京六条一坊十四町	下京区中堂寺栗田町地内	2,770	1994.08.29~1995.02.24	川跡・井戸・柵・溝・掘立柱建物・楊梅小路北側溝
XF11	平成7年度	右京六条一坊十一・十四町	下京区中堂寺栗田町地内	3,320	1995.04.10~1995.12.01	掘立柱建物・川跡・井戸
XF12*	平成8年度	右京六条一坊十三町	下京区中堂寺栗田町地内	650	1996.09.02~1996.12.28	掘立柱建物・溝
XF13	平成9年度	右京六条一坊三・六町	下京区中堂寺南町地内	1,894	1997.07.13~1997.12.19	掘立柱建物・溝・柵・井戸・池・西坊城小路西側溝
XF14	平成10年度	右京六条一坊六町	下京区中堂寺南町地内	120	1998.10.26~1998.12.14	西坊城小路西側溝・井戸
XF15	"	右京六条一坊三町	下京区中堂寺南町	210	1999.01.29~1999.03.10	井戸
XF16	平成11年度	右京六条一坊六町	下京区中堂寺南町地内	230	1999.09.29~1999.10.26	特になし
XF17	平成12年度	右京六条一坊三・六町	下京区中堂寺南町	555	2000.01.18~2000.04.12	西坊城小路西側溝・御土居濠
XF18	平成13年度	右京六条一坊三・五町	下京区中堂寺南町地内	1,385	2000.04.09~2000.10.05	西坊城小路東側溝・溝
XF19	"	右京六条一坊六町	下京区中堂寺南町	1,058	2001.12.03~2002.05.23	溝・建物(御堂)・川跡
HK5	平成3年度	左京六条一坊一町	下京区中堂寺命婦町地内	1,170	1991.07.15~1991.10.30	朱雀大路東側溝・樋口小路北側溝・坊城小路西側溝
HK6	平成5年度	左京六条一坊二町	下京区中堂寺坊城町	100	1993.08.07~1994.03.24	朱雀大路東側溝・井戸
HK7	平成7年度	朱雀大路	下京区中堂寺坊城町地内	133	1995.12.04~1995.12.29	朱雀大路路面・湿地状の堆積
HK8	平成8年度	朱雀大路	下京区中堂寺坊城町地内	188	1996.11.05~1996.12.06	湿地状の堆積・近世土壌

* 印は今回報告分以外の調査 XF1・2次調査については報告済み

XF地区

HK地区

(1) 平成 3 年度の調査

HK地区 5 次調査を実施した。

HK地区 5 次調査 (図 2 ~ 5、図版 3 ~ 6) 調査地は、現万寿寺通と千本通の拡幅予定部分に沿う東西約175、南北38の横L字形の地区である。調査区の幅が狭く町の主要な部分にはかからないが、東西方向部分が左京六条一坊一町の南辺、南北方向部分が朱雀大路の路面に該当し、主に同大路や樋口小路・坊城小路の側溝など平安京条坊街路に関連する遺構の検出が期待された。

調査は専売公社時代の建物基礎や既存建物の解体工事に伴う廃材搬出路の確保などを考慮し、全体を6区の調査区に分割し実施した。土層堆積は現表土下約1.5まで専売公社五条工場の建設に伴う整地層、その下に約0.15~0.2の旧耕土があり、それを除くと遺構面が現れる。この面で近世から平安時代までのすべての遺構を検出した。遺構の大半は近世以降の土取り跡と思われる土壌であるが、このほか平安・鎌倉時代の遺構としては、予想された朱雀大路東側溝、樋口小路北側溝、坊城小路西側溝などの条坊関連遺構や、石組みの井戸などを検出した。

朱雀大路東側溝は新旧の2条 (SD01 : 12世紀、SD02 : 13世紀) があり、新しい方が西に



図 2 HK地区 5 次調査前全景

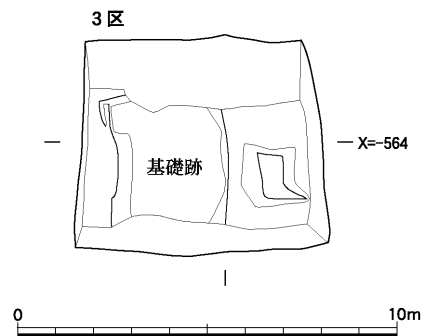
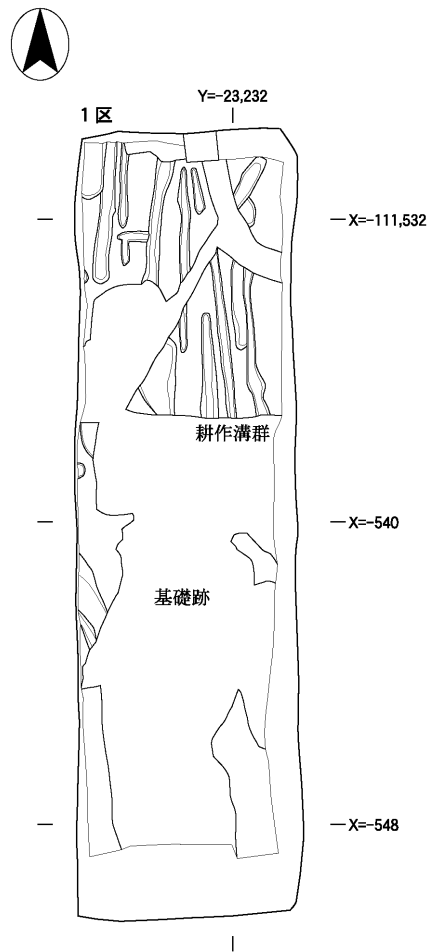


図 3 HK地区 5 次調査 1・3区平面図 (1 : 200)

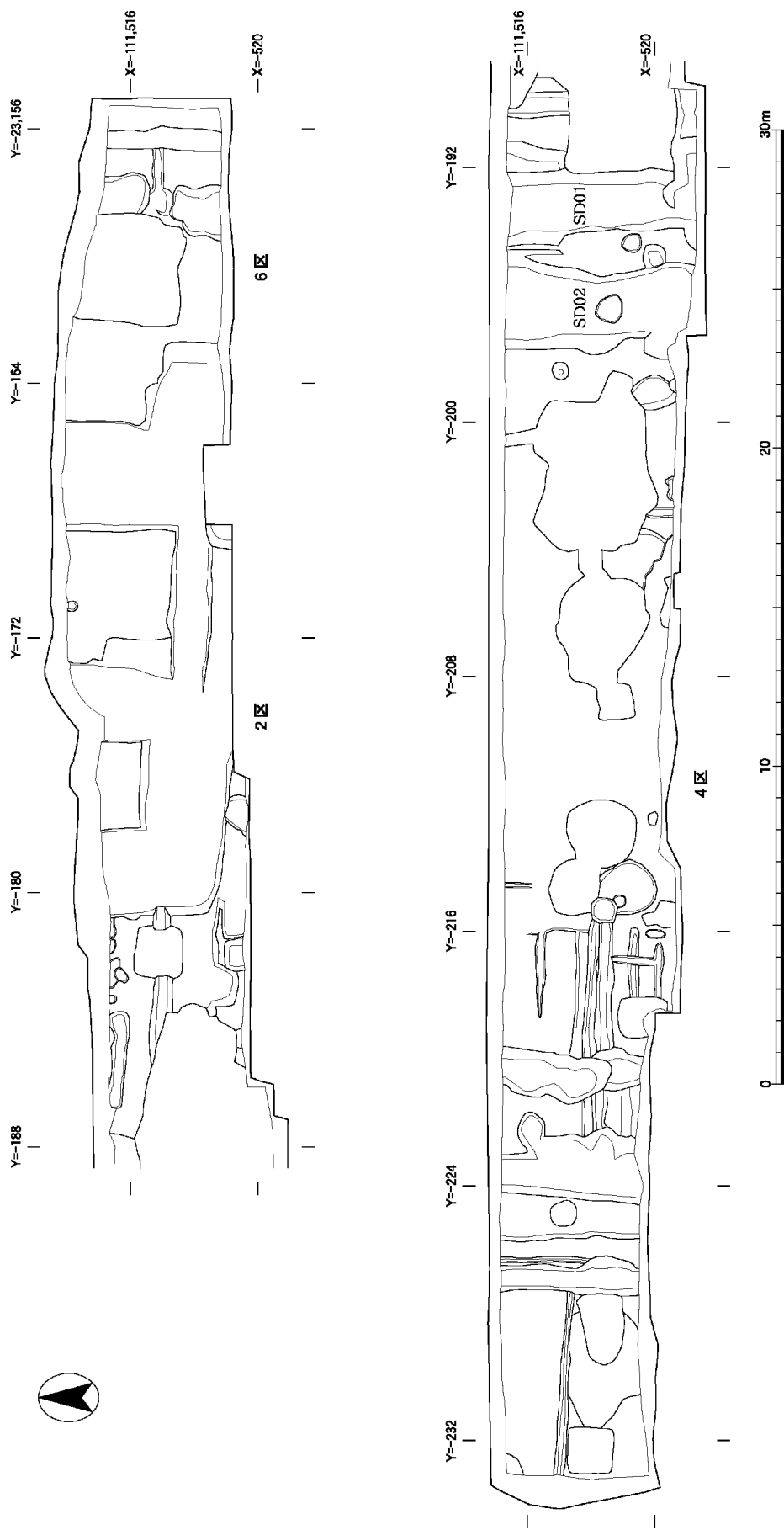


図4 HK地区5次調査2・4・6区平面図(1:200)

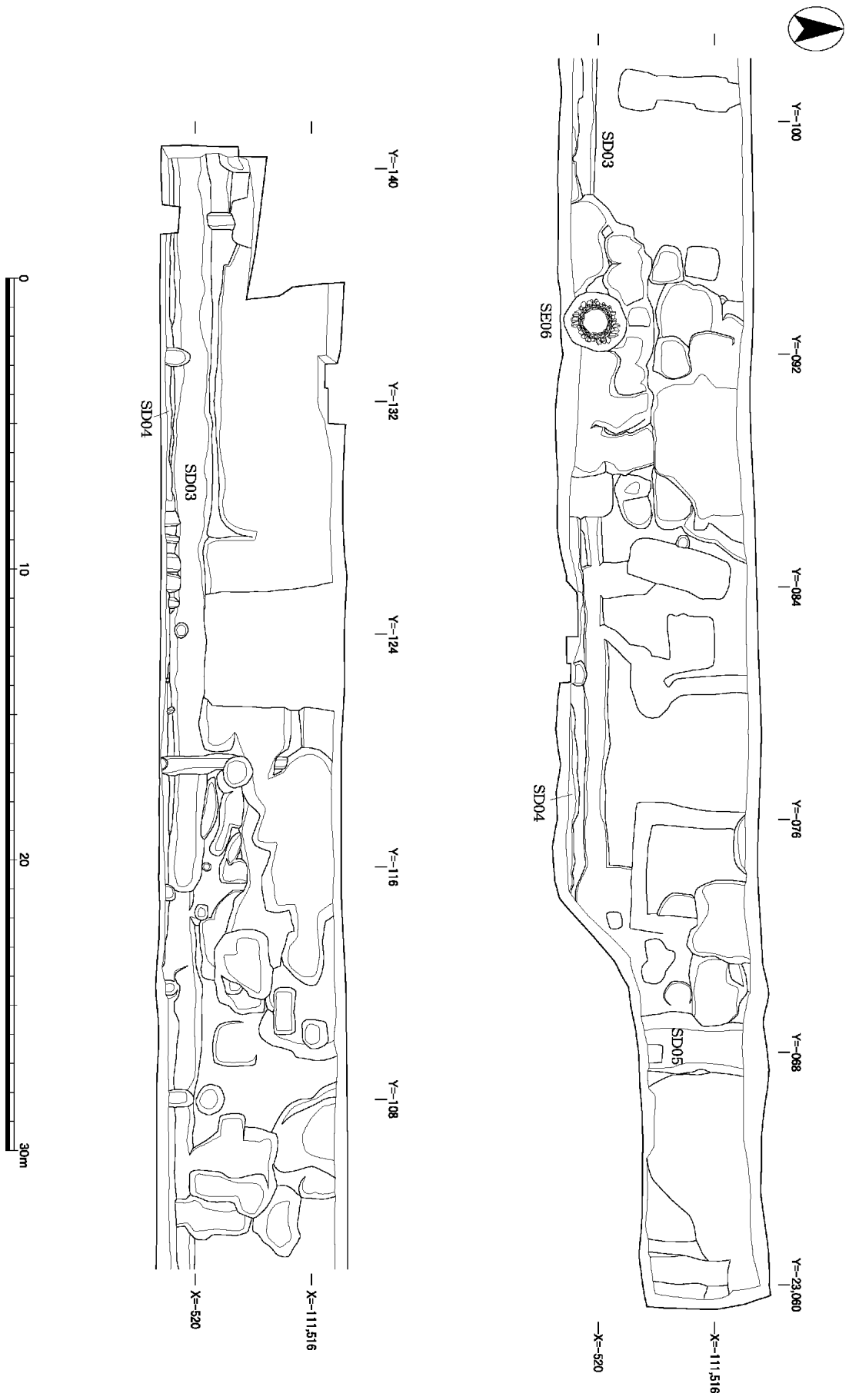


図5 HK地区5次調査5区平面図(1:200)

約3 移動している。SD01からは少量の土器類の他、「南無大日 如来力」と墨書された木簡や牛馬の肢骨・頭骨のほか、ヒトの下顎骨（成人男性）が1点出土した。樋口小路北側溝も南北に接して2条（SD03・04）検出し、時期も朱雀大路東側溝に対応している。古い北側のSD03の一部では下層から10世紀代の遺物が出土しており、前身の溝の存在が想定できる。この両側溝が13世紀代になっていずれも道路側に移動している点は興味深い。坊城小路西側溝は東側が基礎で破壊されており12世紀代のものを1条（SD05）検出したただけだが、他の側溝の状況からみてこの東側に新しい段階の溝が存在した可能性もある。石組み井戸（SE06）は鎌倉時代後半のもので、自然石を用いた石組みの井戸である。石組み内から土師器を主体とする多量の土器類が出土した。

（2）平成5年度の調査

この年度はHK地区6次調査とXF地区8次調査を実施した。

HK地区6次調査（図6～8、図版6）調査地は5次調査東西方向部分の南方約50 にあたり、左京六条一坊二町に該当する。調査対象地の地下は専売公社五条工場施設の影響を大きく受けていると予想されたため、朱雀大路東側溝推定位置があたる敷地西部と東部の2箇所に小トレンチを設け試掘調査を行った。その結果、敷地東部の2箇所の試掘トレンチでは工場施設の基礎などにより遺構面が破壊されていたが、最西部のトレンチでは朱雀大路東側溝とみられる溝跡を確認した。そのためこのトレンチを拡張する形で発掘調査を行い、朱雀大路東側溝や井戸を検出した。朱雀大路東側溝は5次調査と同様に平安時代後期と鎌倉時代初頭の2時期（SD01・SD02）のものを検出した。後者が西に移動している点も5次調査と同様である。調査範囲の制約から大部分がSD01の東肩部を検出したにとどまった。井戸（SE07）は堆積土中から少量の木片が出土したが構造は不明、遺物も少なく時期も特定できなかつた。

XF地区8次調査（図9～12、図版8～12）調査区は京都リサーチパーク北辺部に位置し、右京六条一坊六町の南部域に該当する。対象地は六町南端部から約30m北方、六町の東西端を含む長さ約120m、幅20mの帯状の部分で、現



図6 HK地区6次調査前全景

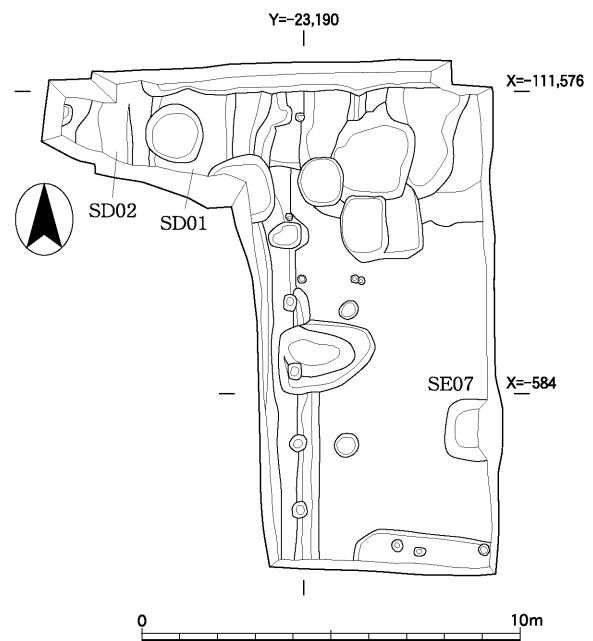


図7 HK地区6次調査1区平面図（1：200）

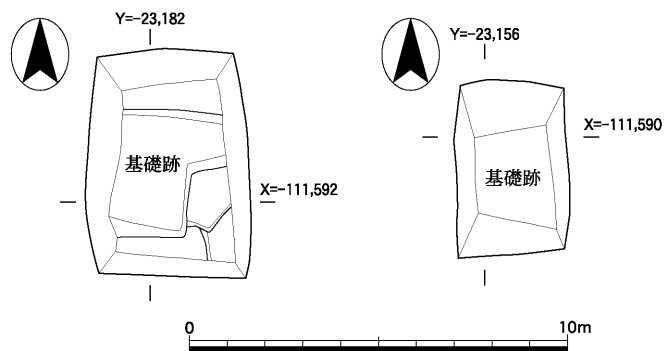


図8 HK地区6次調査2・3区平面図(1:200)

況はリサーチパークおよび地下駐車場への通路とその北側の緑地として利用されている地帯である。当地周辺では、これまでの調査で六町南端部および楊梅小路をはさんだ南側の五町に該当するリサーチパーク敷地内で、一町全域を占有する大規模な邸宅跡、また西側の皇嘉門大路を隔てた十一・十二・十三・十四町の調査では建物・井戸・溝

など多数の遺構が検出されており、平安時代前期の遺構の遺存状況が良好な地域である。調査区はリサーチパークおよび駐車場への通行の確保、ケーブル・ガス・水道・下水など既設の埋設物あるいはそれらの移設工事との関連を考慮して5分割した。調査の結果、埋設管の掘形や近世の土取で破壊されていた部分を除き遺構の残存状態は概ね良好で、縄文時代から古墳時代の遺物を含む湿地(旧流路)、それを埋め立てた遺物を多量に含む平安時代前期の整地層・建物・井戸、平安時代後期から鎌倉時代の建物・井戸・溝・池などを検出した。

平安時代前期の主な遺構としては掘立柱建物(SB09・SB10)、柵(SA11・SA12)、井戸(SE13)、土塙(SK14)、湿地および整地層(SX15)がある。建物のうち全体の平面形状が判明したのはSB09だけで、南北2間×東西3間、柱間は南北が2.4m、東西が2.1mの小規模な建物である。井戸SE13は一辺約1.2mの方形の縦板組、井戸内から土器類がまとまって出土した。

平安時代後期から鎌倉時代の遺構には掘立柱建物(SB16・SB17・SB18)、柵(SA19)、門跡と思われる一对の柱穴(SB20)、井戸(SE21・SE22)、土塙(SK23)、溝(SD24・SD25)、池(SG26)と池中の礎石列(SX27)などがある。調査区東南部で一部を検出した建物SB18は、2次調査で検出している建物53あるいは57に関連する可能性がある。溝SD24・SD25は西坊城小路の西側溝、東側のSD25が平安時代後期、SD24は平安時代末期から鎌倉時代のものであるが、後者は堆積状況や重なりから、さらにいくつかの小期に分けることができる。SE21は部材の痕跡を



図9 XF地区8次調査前全景



図10 XF地区8次調査風景

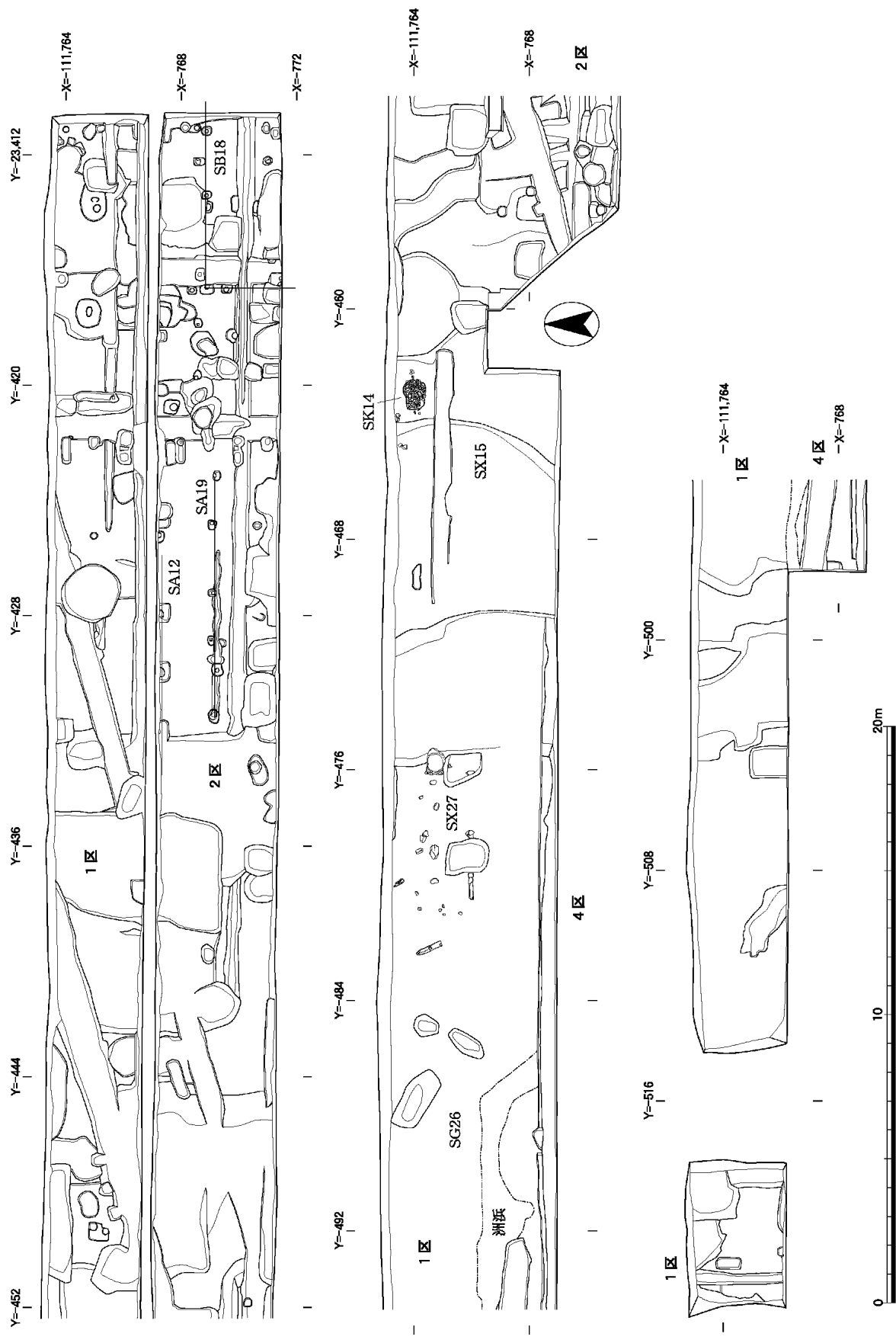


図11 XF地区8次調査1・2・4区平面図(1:200)

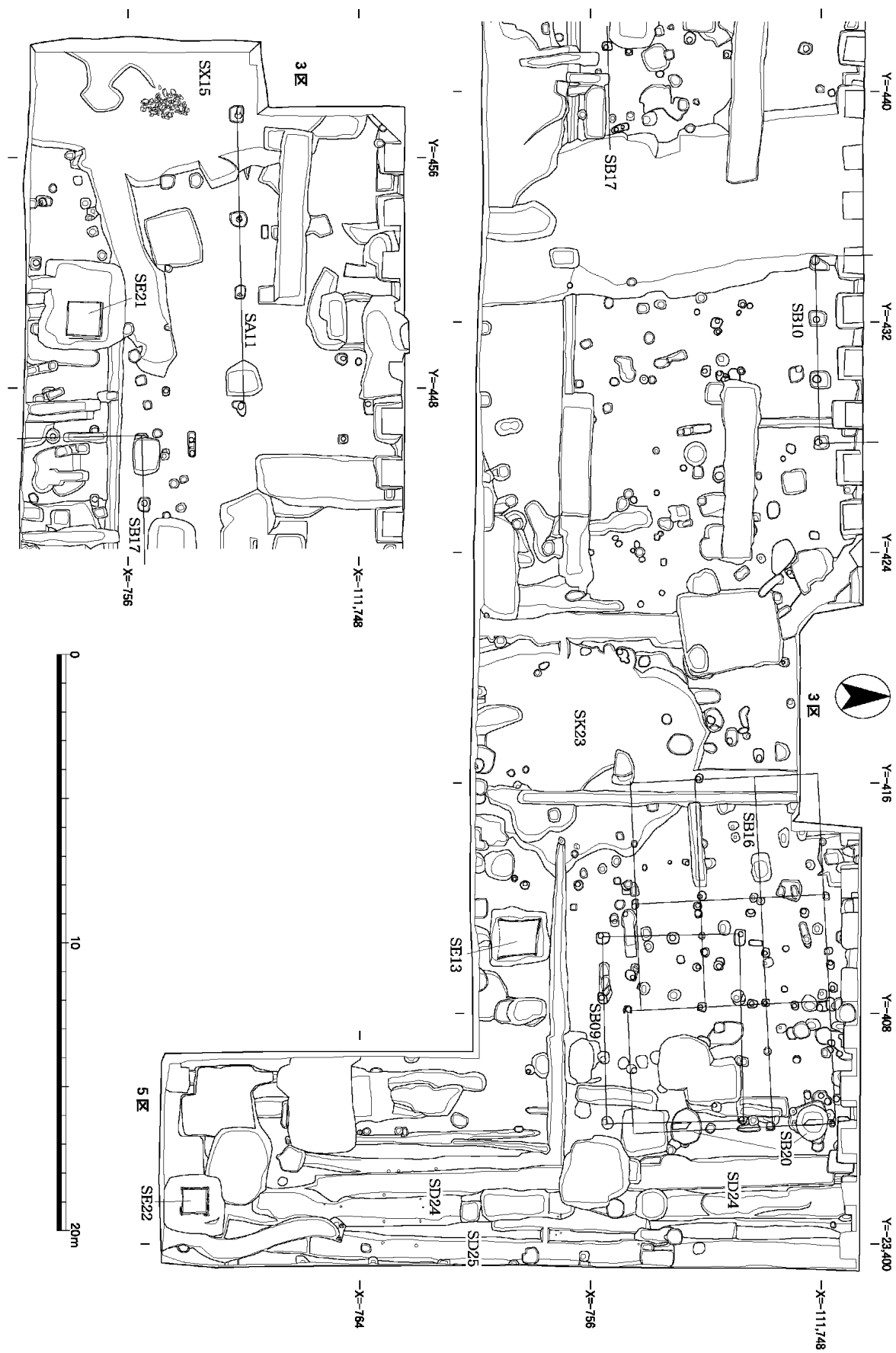


図12 XF地区8次調査3・5区平面図(1:200)

ほとんどとどめず、構造は不明だが、最下段の横棧がわずかに残存しており方形を呈するものと考えられる。SE22はSD24を切って成立しており、それ以後のものであるが、遺物には時期差はほとんどみられない。調査地西半では下層に縄文時代から古墳時代の遺物を含む湿地を検出したが、池SG26はこの湿地状の地形を利用して造られており、南岸で拳大の礫を用いた洲浜の一部を確認した。

(3) 平成6年度の調査

XF地区9次および10次調査を実施した。

XF地区9次調査(図13・15~19、図版12~14) 9次調査は1・2・4区を京都リサーチパーク北側、8次調査3区の北および西側の右京六条一坊六町南部域、3区を約300 西方の大阪ガス京都工場跡地内の公団仮事務所の建設予定地である右京六条一坊十四町の西部に設定した。リサーチパーク北側の調査では4区で、8次調査で検出した池SG26の北岸や池の北側に東西方向の石列(SX28)を確認したほか、1区では8次調査3区から続く湿地と平安時代前期の整地層の一部(SX15)、平安時代後期の溝(SD29)、井戸(SE30)、平安時代末から鎌倉時代の井戸(SE31・SE32)、土壌(SK33)などを検出した。池SG26の北岸は8次調査で確認していた南岸が礫を用いた洲浜であったのに対して礫はほとんど認められず、汀沿いに細砂が敷かれていた。SX15の東肩付近からは平安時代前期の遺物がまとまって出土している。3基の井戸はいずれも構造は方形縦板組だが、部材の残存状況は良くない。SE31は溝SD29を切って成立している。SD29は五町南北ほぼ中央に位置する東西溝で、東一・二行界付近で途切れている。8次調査と同様に西半の下層に古墳時代の遺物を含む湿地が広がっている。遺物は主に土器類と瓦類で、SE30・SE32・SG26・SK33などから平安時代後期から鎌倉時代の土器類がまとまって出土したほか、SX15から平安時代前期、下層の湿地から古墳時代の土師器・須恵器が、また土取り跡から尖頭器が1点出土している。

十四町に設定した3区では、近現代の遺物を含む整地層と旧耕土を確認したほか顕著な遺構は無く、その下層に調査区全面に広がる旧流路の一部とみられる砂礫層を確認したにとどまった。



図13 XF地区9次調査風景(写真測量)



図14 XF地区10次調査前全景

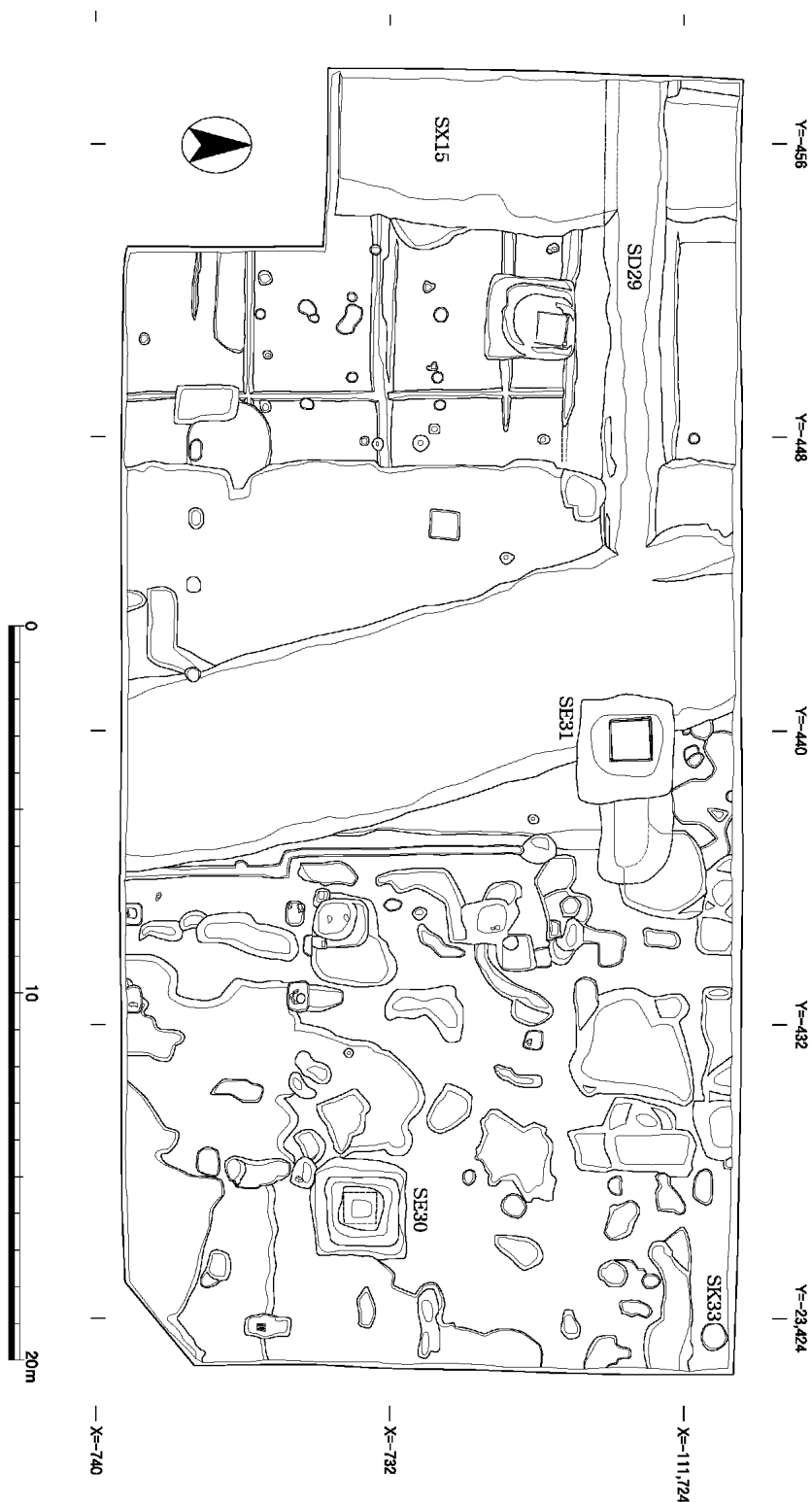


図15 XF地区9次調査1区平面図(1:200)

XF地区10次調査(図14・20~24、図版15~17) 10次調査は旧大阪ガス京都工場敷地西部で実施した。調査区は南側の1区と9次調査3区を挟んで現五条通に接する敷地北西隅の2区の2箇所を設定した。1区の予定地は南北72m、東西45mの範囲であったが、北西部分は9次調査3区において旧河川の流路跡を確認しており、顕著な遺構の残存している可能性が少ないと判断さ

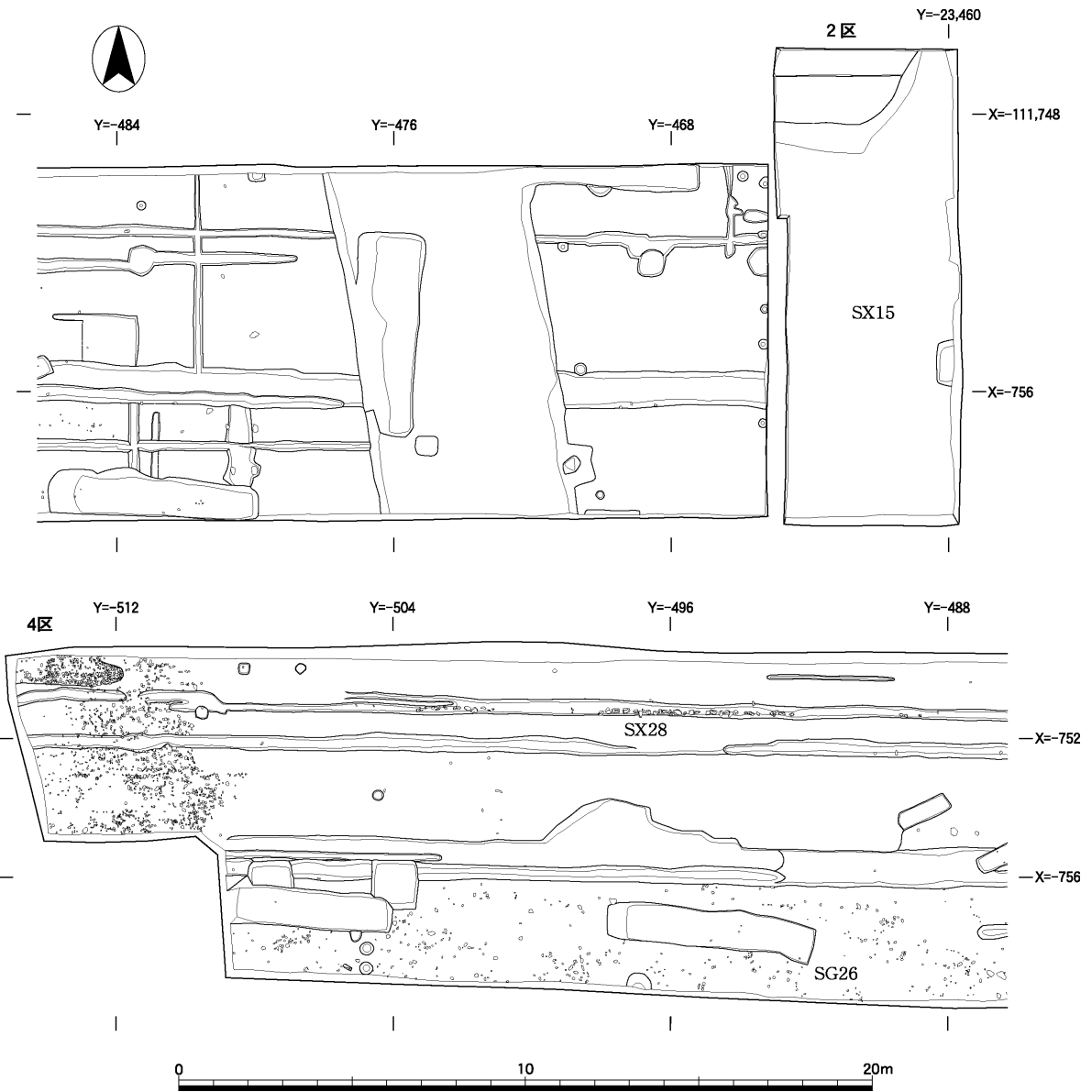


图16 XF地区9次調査2・4区平面図(1:200)



图17 XF地区9次調査石列



图18 XF地区9次調査池下層断面

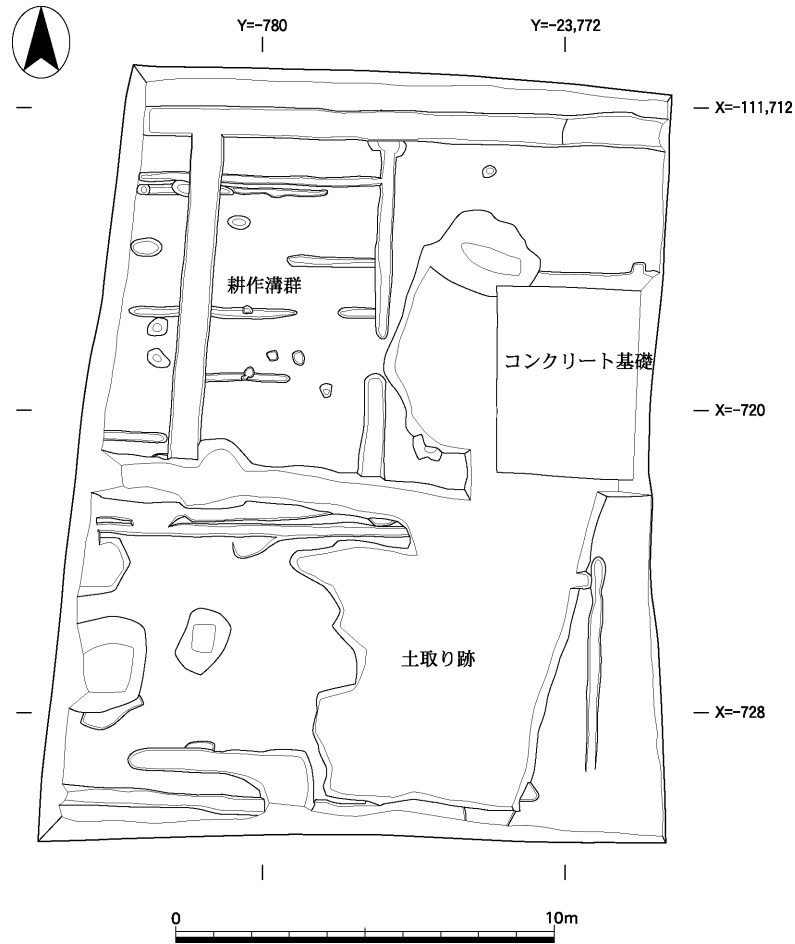


図19 XF地区9次調査3区平面図(1:200)

れたため北西の一部を除外した。この1区の東および南側では以前に7次調査を実施しており、建物群や溝など平安時代前期の遺構を多数検出している。2区は平成7年度以降の調査対象地である現五条通の拡幅予定地の最西部にあたるが、以後の調査のための仮設事務所の建設予定地、東西20m、南北18m、約360㎡について先行して調査を行うことになった。

調査の結果、1区では古墳時代から平安時代後期の旧流路跡(SD34)によって調査区西部が広範に削平されていたが、7次調査で一部を確認していた楊梅小路の北側溝の延長(SD35・SD36)を追認したほか、その北部に溝(SD37)、井戸(SE38・SE39・SE40)、掘立柱建物(SB41・SB42・SB43)、柵(SA44・SA45・SA46、SA48)、土壌(SK47)など平安時代前半期の遺構を検出した。2区は1区で検出した流路の延長上に位置しており、この流路の対岸の状況の確認を調査の主眼においた。しかし、この調査区では、一部に平安時代の柱穴と遺物包含層を検出したのみで、その下層には古墳時代の遺物を少量含む流路の堆積を確認したにとどまり、これらの流路の西岸を検出することはできなかった。

SD34は調査区(1区)内では全体的には北東から南西方向に向かう流れを形成しているが、局所的には北西から南東へと大きく蛇行した状況を示す部分も認められた。下層の数箇所まで古墳時代や弥生時代の遺物を含む層が確認できたが、大部分の堆積が平安時代前期以降のものである。



図20 XF地区10次調査1区北部平面図(1:300)

この河川は1区南東隅を残して、それより東には及んでおらず、東岸以東の高まりの部分には井戸・柵列・溝など平安時代前期の遺構群が良好に残存していた。この東岸寄りの堆積(流路1)が平安時代のものとしては最も古く、9世紀前半の遺物が出土する。これ以降の流路堆積の全般的な傾向としては流れの中心が漸時西部に移動していったようであるが、堆積の重複状況は複雑で、一旦整地され陸化した部分が、その後再移動した流路によって削平を受けたと思われるところも見受けられた。1区の範囲内では最も西部に位置する流路5が平安時代のものとしては最も新しく、12世紀代の土器・瓦などが出土している。

遺物は川跡およびそれを埋め立てた整地層から出土したものが数量的に主体を占める。これらの遺物の時期は平安時代前期から後期にまで及んでいるが、各流路の肩部付近の堆積層や、整地層の各单位から出土したものは、それぞれ型式的まとまりを持つものも多く、また破片も比較的大きなものが含まれている。このほか井戸SE39・SE40から9世紀初頭、溝SD35から9世紀後半の土器類が比較的まとまって出土した。SD34の流路5上層からは平安時代末頃の軒丸瓦など瓦類が、また下層流路からは古墳時代の土器類に混じって少量の弥生土器、大型の石包丁などが出土した。

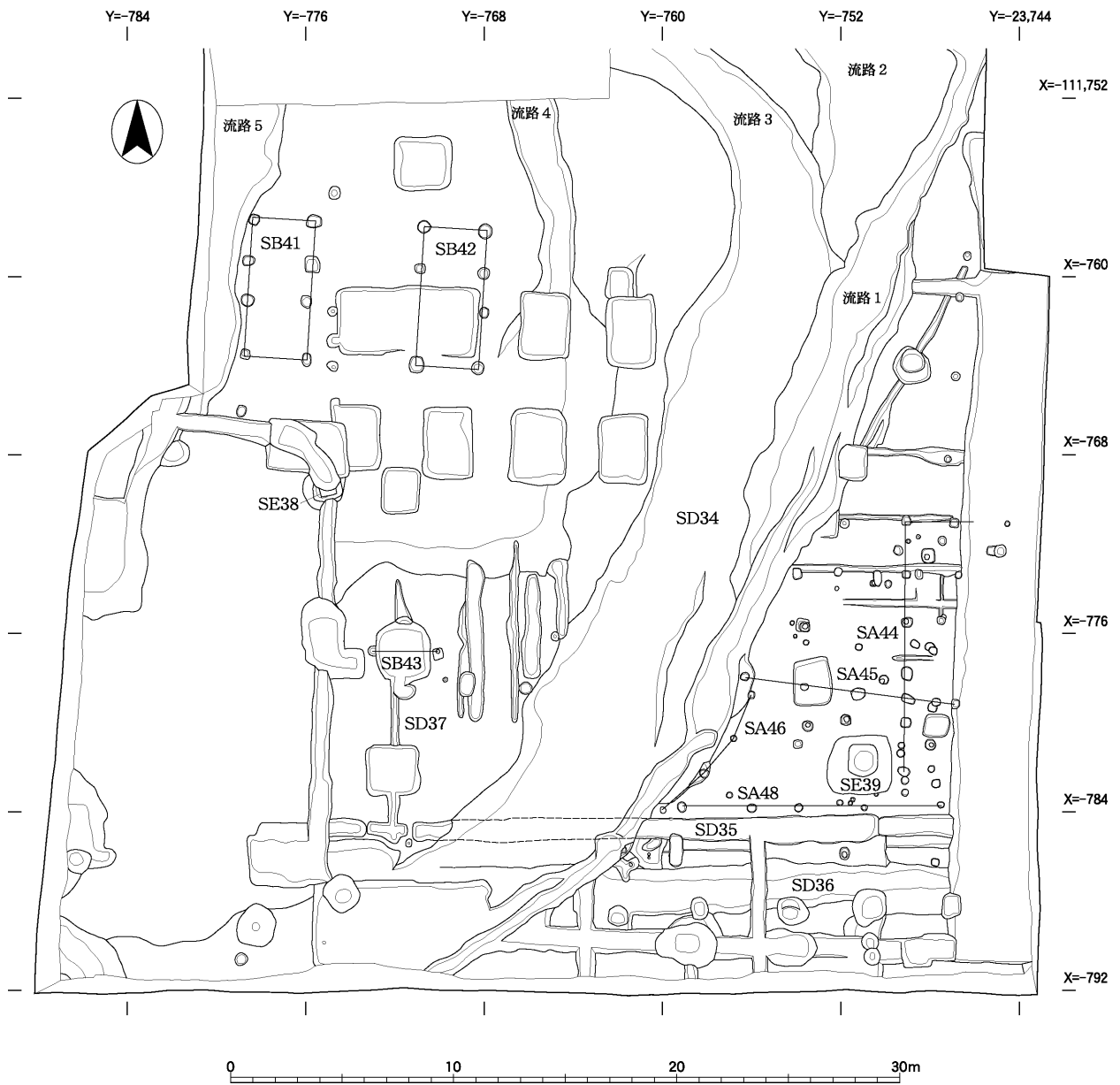


图21 XF地区10次調査1区南部平面図(1:300)



图22 XF地区10次調査SE38



图23 XF地区10次調査SE40

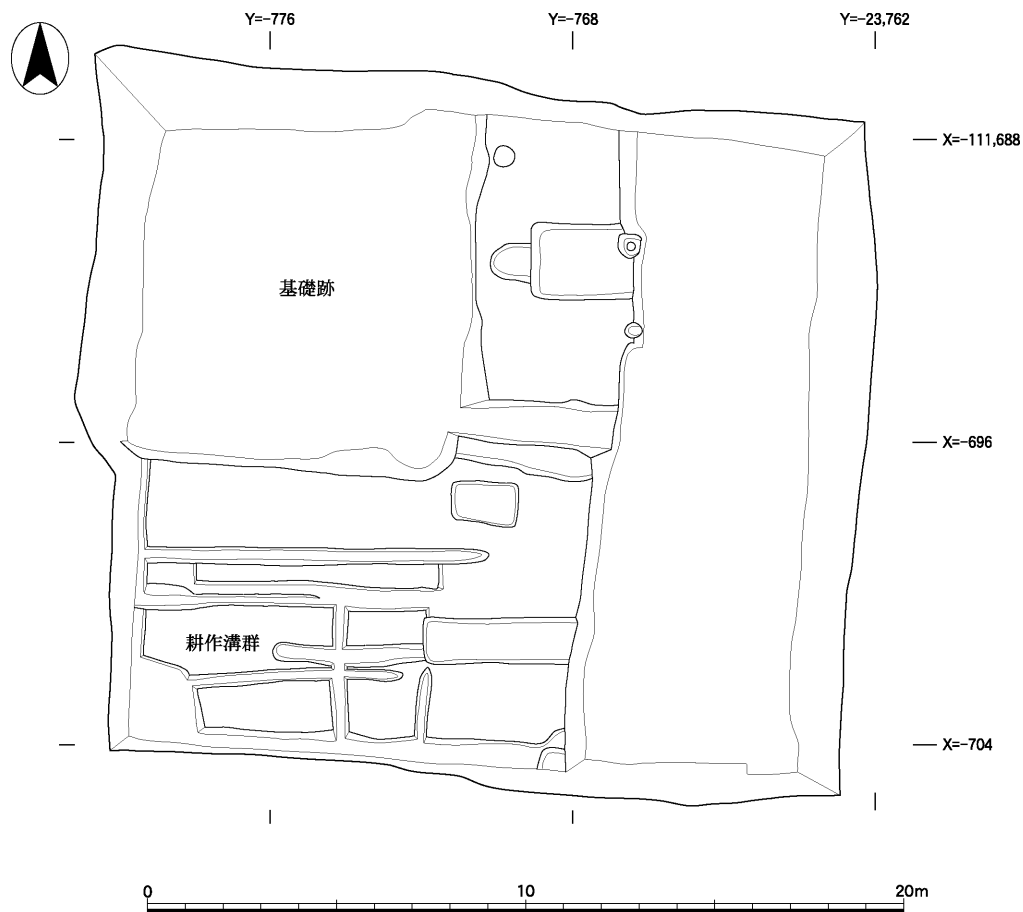


図24 XF地区10次調査2区平面図(1:200)

(4) 平成7年度の調査

HK地区7次調査とXF地区11次調査を実施した。

HK地区7次調査(図25・26、図版7) 調査区は5次調査の南北方向部の延長部で、千本通の拡幅予定地の最南部にあたる。この調査では調査区が路面のほぼ中央ということもあって平安時代の顕著な遺構は無かったが、平安時代末から鎌倉時代の遺物を含む湿地状の堆積、近世の土取り跡とみられる土壌などを検出した。

XF地区11次調査(図27~31、図版17~21) 大阪ガス京都工場跡地北部の現五条通に沿った拡幅予定部分で実施した。対象地は東西約200

で、東半が右京六条一坊十一町、西半が十四町の北部に該当する。十四町側の西部は10次調査で既に流路状の堆積を確認している。また、周辺での既往の調査の概略をみると、右京六条一坊十一町では5次調査でその南半を、十四町では7次調査3区で南東部、9次調査で南北中



図25 HK地区7次調査前全景

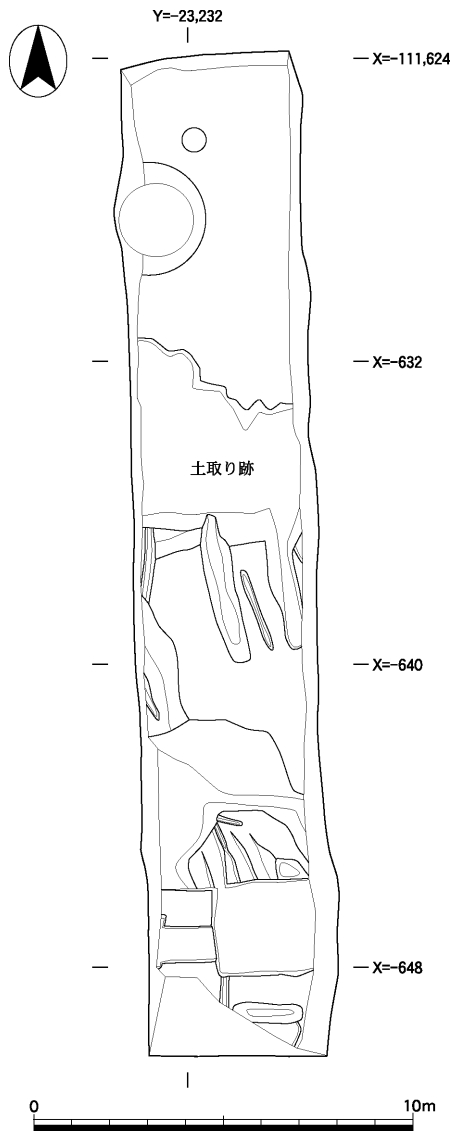


図26 HK地区7次調査平面図(1:200)

中央西側の一部、10次調査で南西部および北西の一部を対象とした発掘調査を実施している。対象地には大阪ガス京都工場当時の建物や工場施設の基礎が多数残っていたため、旧施設の配置図等を参考に十一町側は基礎跡や現状で通路として使用されている部分を避け1～4区に、十四町側では調査前に行われた旧基礎の撤去工事ののち、地下施設のあった体育館基礎を除く予定地のほぼ全域を5区として調査区を設定した。

調査の結果、配置図に記録されていたもの以外の建物やタンクなどの基礎で破壊されていた部分が多かった。特に5区ではその傾向が顕著であったが、そのほかの部分では平安時代前期の遺構が比較的良好に遺存していた。十一町では掘立柱建物(SB49)、井戸(SE50・SE51・SE52)、整地層など平安時代の遺構、また下層には少量ではあるが縄文・古墳時代の遺物を含む川跡(SD53)、十四町では掘立柱建物(SB54・SB55・SB56・SB57・SB58)や柵の一部とみられる柱穴列(SA59・SA60・SA61・SA62・SA63・SA64)、川跡(SD65)、鎌倉時代の溝(SD66)を検出した。十一町の5区東端で検出した川跡(SD53)は最終的には湿地状になっており、平安遷都後に上部が整地されたようで、平安時代前期の遺物が多数出土している。この状況は五町北西部の湿地と共通しており、

これらが一連のものである可能性が高い。十四町の平安時代の川跡(SD65)は調査区西端付近でその東肩を検出した10次調査のSD34の流路1～3の上流部にあたる。



図27 XF地区11次調査前全景



図28 XF地区11次調査風景

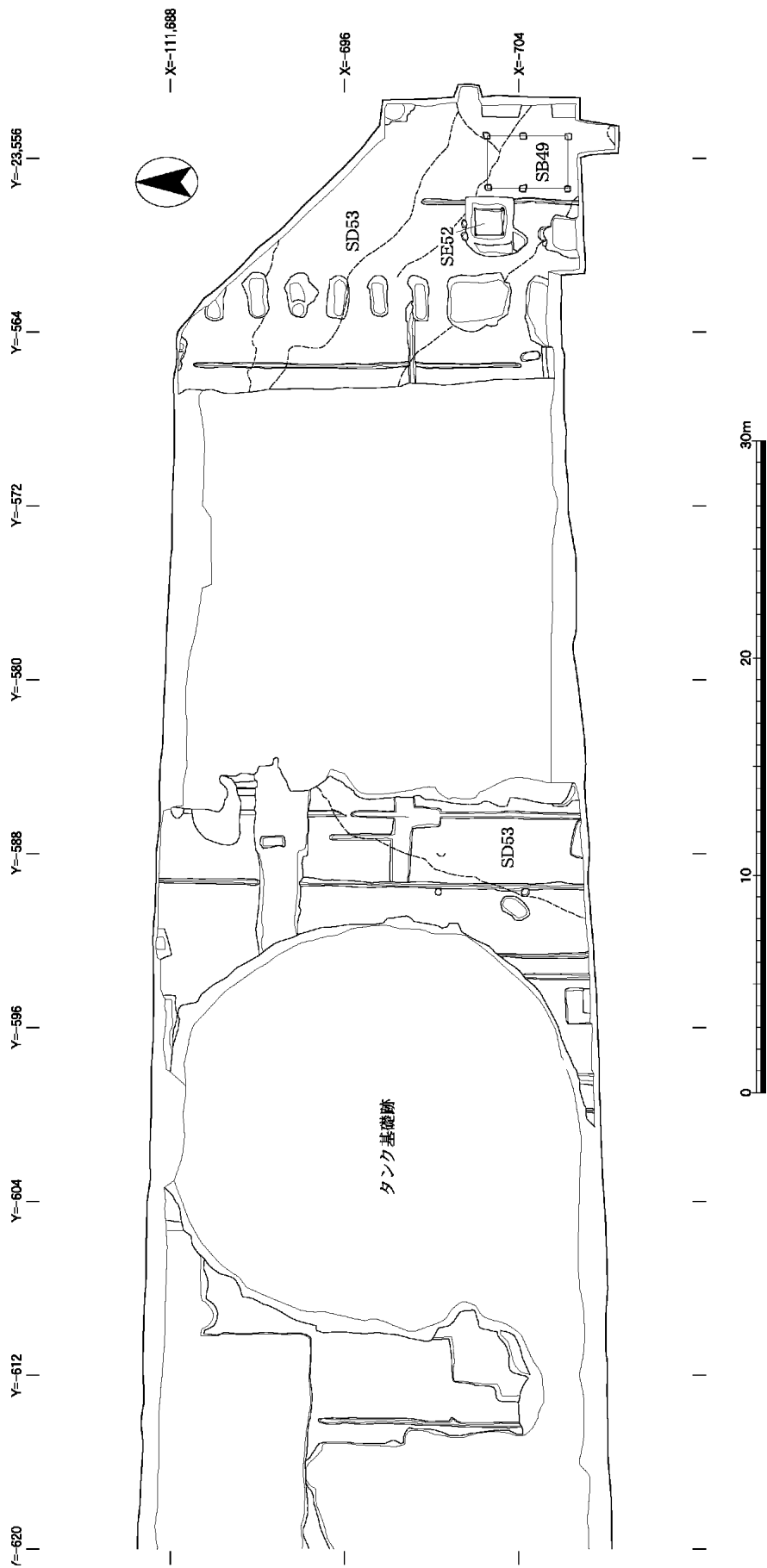


図29 XF地区11次調査5区東部平面図(1:300)

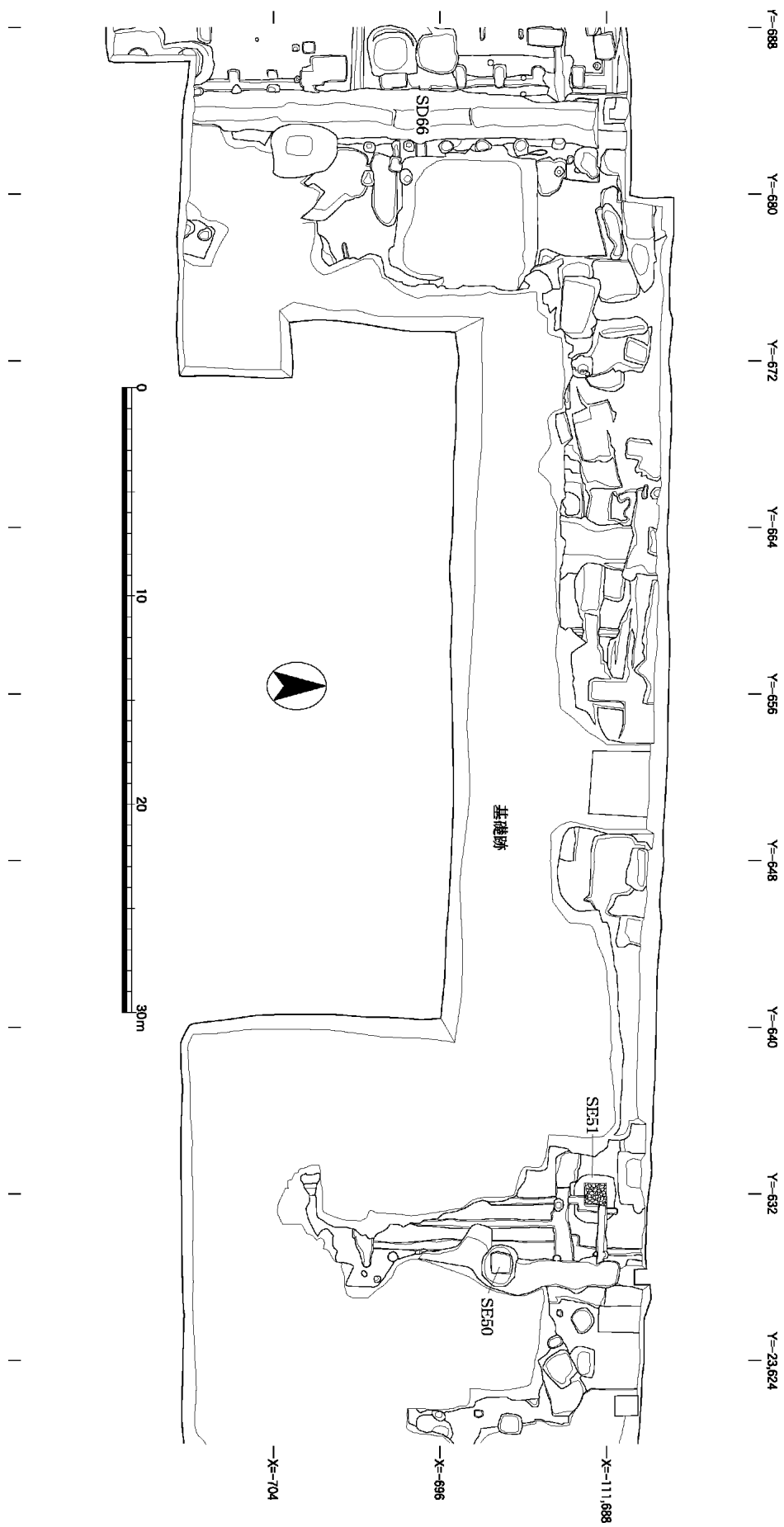


図30 XF地区11次調査5区西部平面図(1:300)

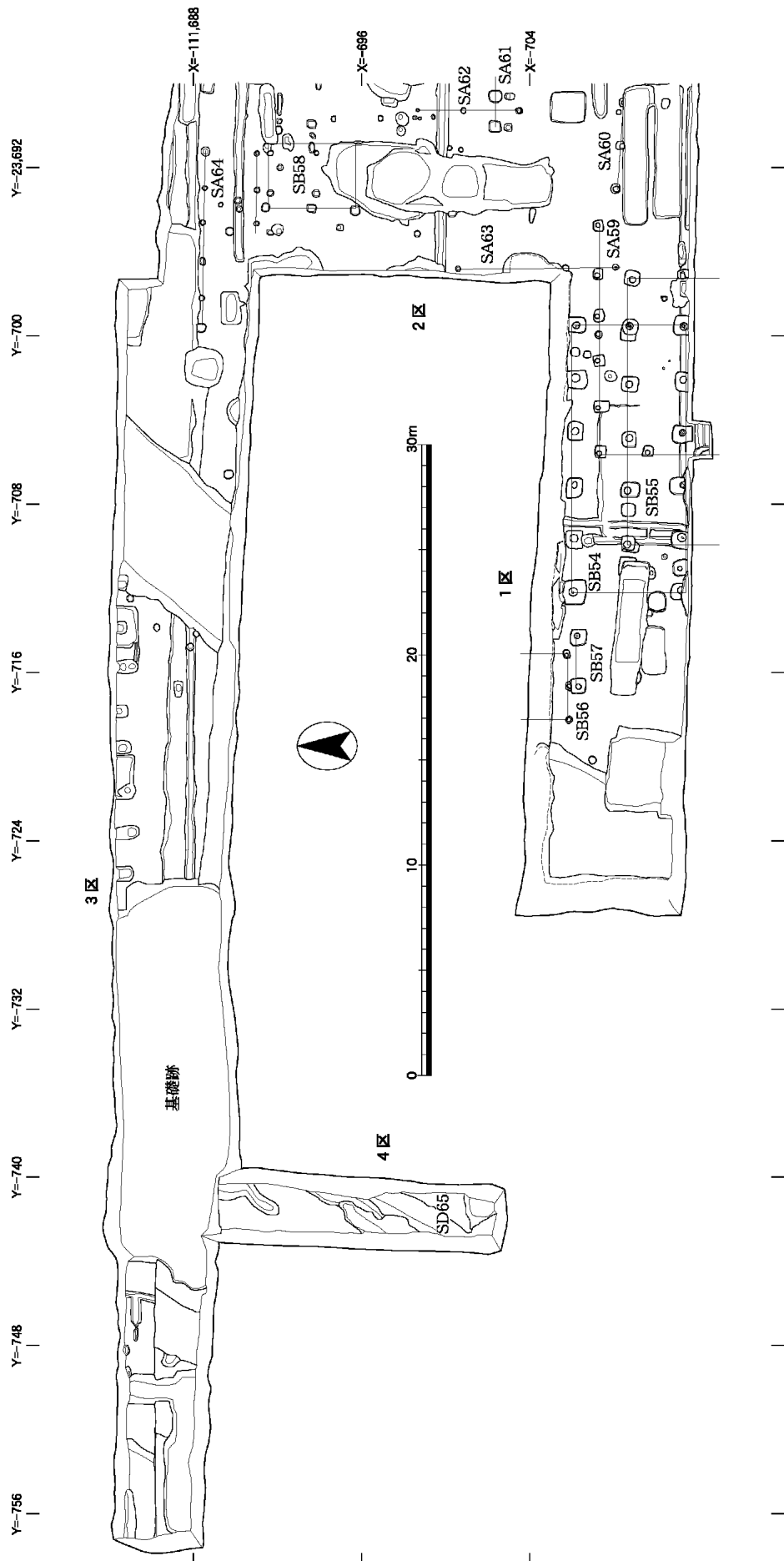


図31 XF地区11次調査1～4区平面図(1:300)



図32 HK地区 8次調査前全景



図33 HK地区 8次調査朱雀大路路面

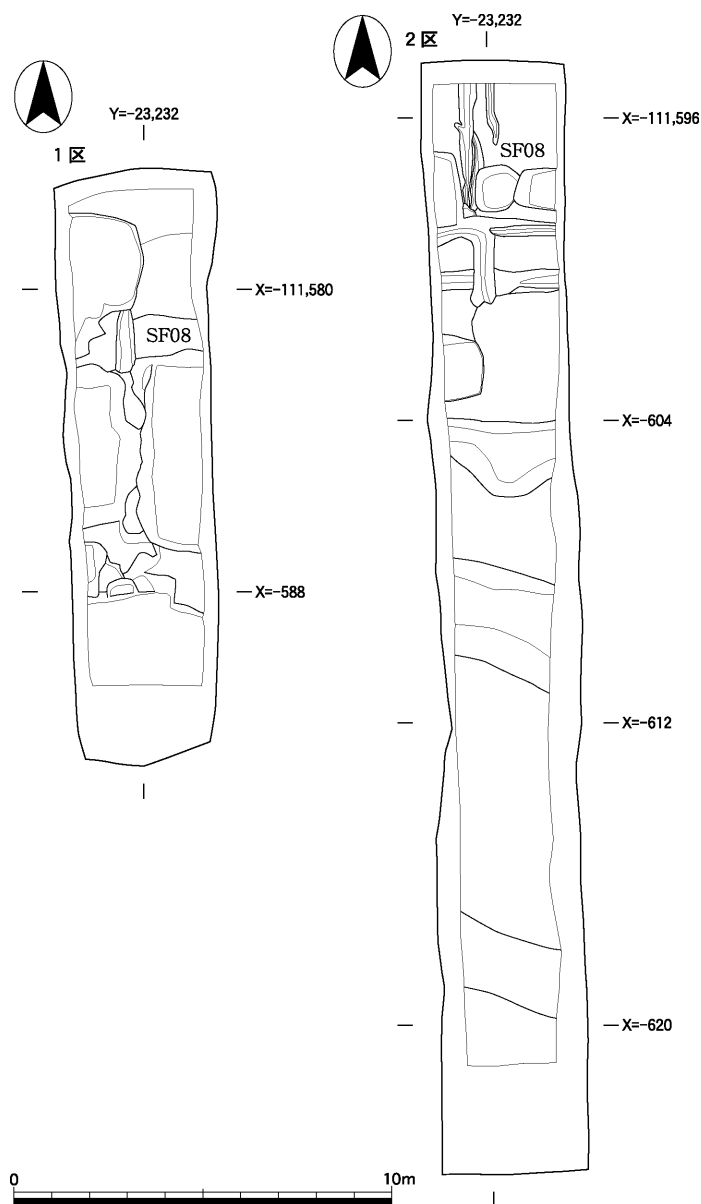


図34 HK地区 8次調査平面図 (1:200)

(5) 平成8年度の調査

千本通の拡幅予定地でHK地区8次調査を実施した。

HK地区8次調査(図32~34、図版7) 調査区は7次調査の北に位置する。調査予定地の北寄りに排水管が敷設されていたため、調査区を南北に分割し(北から1・2区)、調査を進めた。1区では基礎跡など現代の掘り込みによって、また2区北端部以南では土取り跡や近世以降の流路あるいは湿地状の遺構の一部と考えられる泥土層の厚さ約1にわたって堆積がみられ遺構の残存状況は良くなかった。しかし、1区の中央南寄りと2区の北端付近の2箇所では朱雀大路路面と考えられる整地面(SF08)を検出した。路面の整地層は小礫や瓦を含む茶褐色の粘質土と泥砂の混じるもので、地山の茶褐色砂泥上に厚さ約10cmほどを確認している。また2区の北端では轍とみられる、断面が緩いU字形を呈する溝を数条重複して検出した。

この周辺の朱雀大路関係の調査ではこれまで5次調査・6次調査で東側溝を確認していたが、路面そのものの検出は今回が初めてである。7次調査と同様に調査区が大路のほぼ中央部のため、他の平安時代の遺構は検出していないが、近接した地点で朱雀大路の側溝と路面が確認できたことは重要である。今回検出した路面は出土遺物が非常にわずかであるため時期決定に困難を伴うが、出土した瓦の時期や5次・6次調査での側溝の時期が平安時代末から鎌倉時代に属することから、ほぼ同時期のものと考えられる。

(6) 平成9年度の調査

XF地区13次調査を実施した。

XF地区13次調査(図35～39、図版21～24) 場所はXF地区8次・9次調査地の北および東側で、右京六条一坊六町と西坊城小路を隔てた三町の一部に該当する。対象地がビルや民家の跡地など、道路に区切られた小規模な単位に分散しており、1～5区の調査区を設定し順次調査を進めた。

調査の結果、後世の土取りが激しく遺構の残存状況はあまり良いとはいえない状態ではあったが、平安時代前期の柱穴、鎌倉時代の柱穴・溝・井戸・西坊城小路の西側溝を検出した。さらに1区では西肩の一部ではあるが、御土居の濠(SD67)を検出している。

1区の井戸SE68は二町域で検出した唯一の平安時代の遺構である。小規模で構造の痕跡も無く、素掘りの井戸かと思われる。

2区では西坊城小路の検出が期待されたが土取りのため路面や東側溝は明らかにできず、西側溝(SD24)のみを検出した。西側溝は数時期のものが重複しており4条を確認したが、主体は鎌倉時代前半である。SD24からは土師器や瓦器などが出土している。他の西坊城小路西側溝群からは遺物はさほど出土しなかった。また2区南壁沿いに検出した小ピット(Pit69)からは特殊な緑釉陶器蓋が出土したが、周辺に関連する遺構は無く性格は不明である。溝SD70は六町南北中心を東西に横切る位置にある。西坊城小路西側溝との関連は攪乱のため不明だが、西側溝より東へは延びず、側溝に合流していた可能性が高い。井戸SE71は六町西端に位置し、SD24に西半を切ら



図35 XF地区13次調査前全景



図36 XF地区13次調査風景

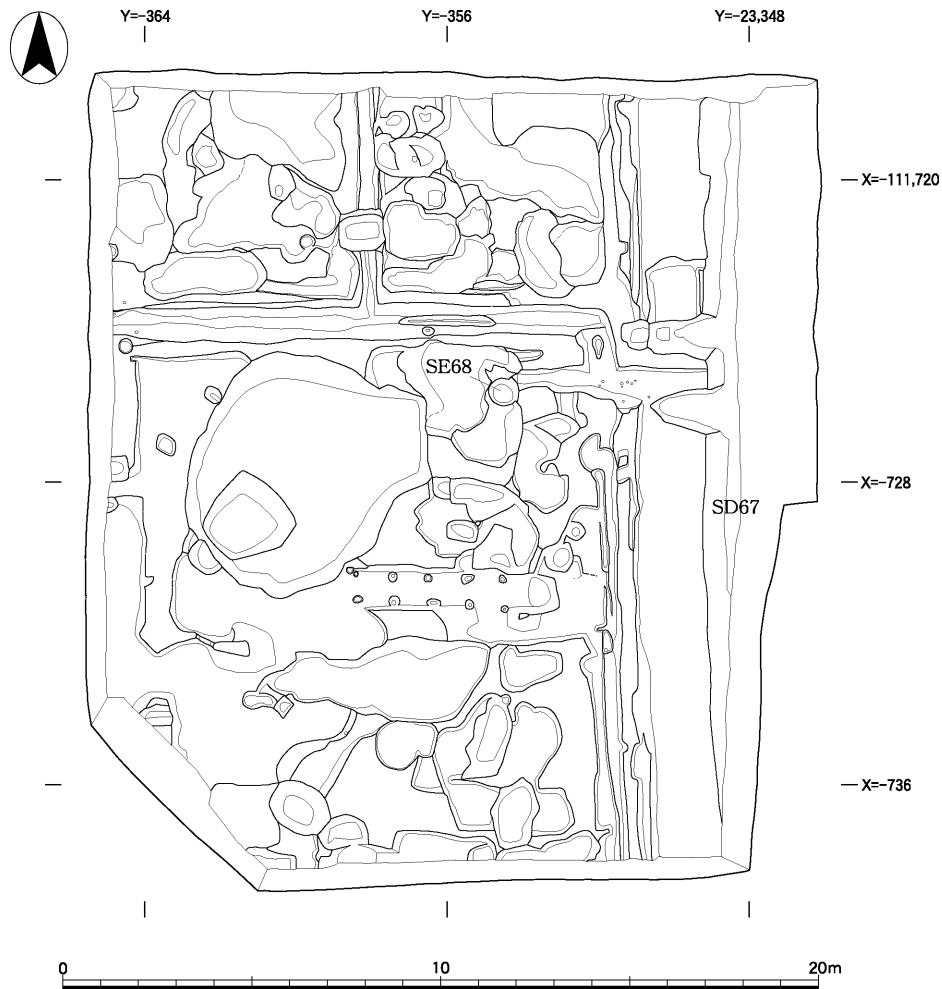


図37 XF地区13次調査1区平面図(1:200)

れている。井戸側が内側に崩れ込んでいたため、方形の縦板組であることが確認できたほか構造の詳細は不明である。遺物は少ないが平安時代後期の土師器などが出土している。

4区で検出した平安時代前期の建物SB72は一部を検出したのみで全体の規模は不明。溝SD73は六町北東部に位置する南北溝で、鎌倉時代の土器類が出土している。六町では8次調査で同時期の池・溝・井戸などを検出しており、それらと関連する可能性があるが、今回のSD70同様、8次調査でも六町を南北に二分する位置に東西方向の溝が検出されていることから別区画の施設の可能性もある。3区および5区では土取りのため顕著な遺構は検出できなかった。

(7) 平成10年度の調査

XF地区14次調査と15次調査を実施した。

XF地区14次調査(図40・41・44、図版24) 14次調査は8次調査5区の南に接して南北方向の調査区を設定した。この地点は楊梅小路と西坊城小路の交差する右京六条一坊六町の南東隅部にあたる。この調査では西坊城小路西側溝(SD24)と楊梅小路北側溝の一部(SD74)を確認したほか近世の石組み井戸(SE75)を検出した。

西坊城小路西側溝SD24は調査区中央付近で土取りなどで不明瞭になっていたが、北部および南

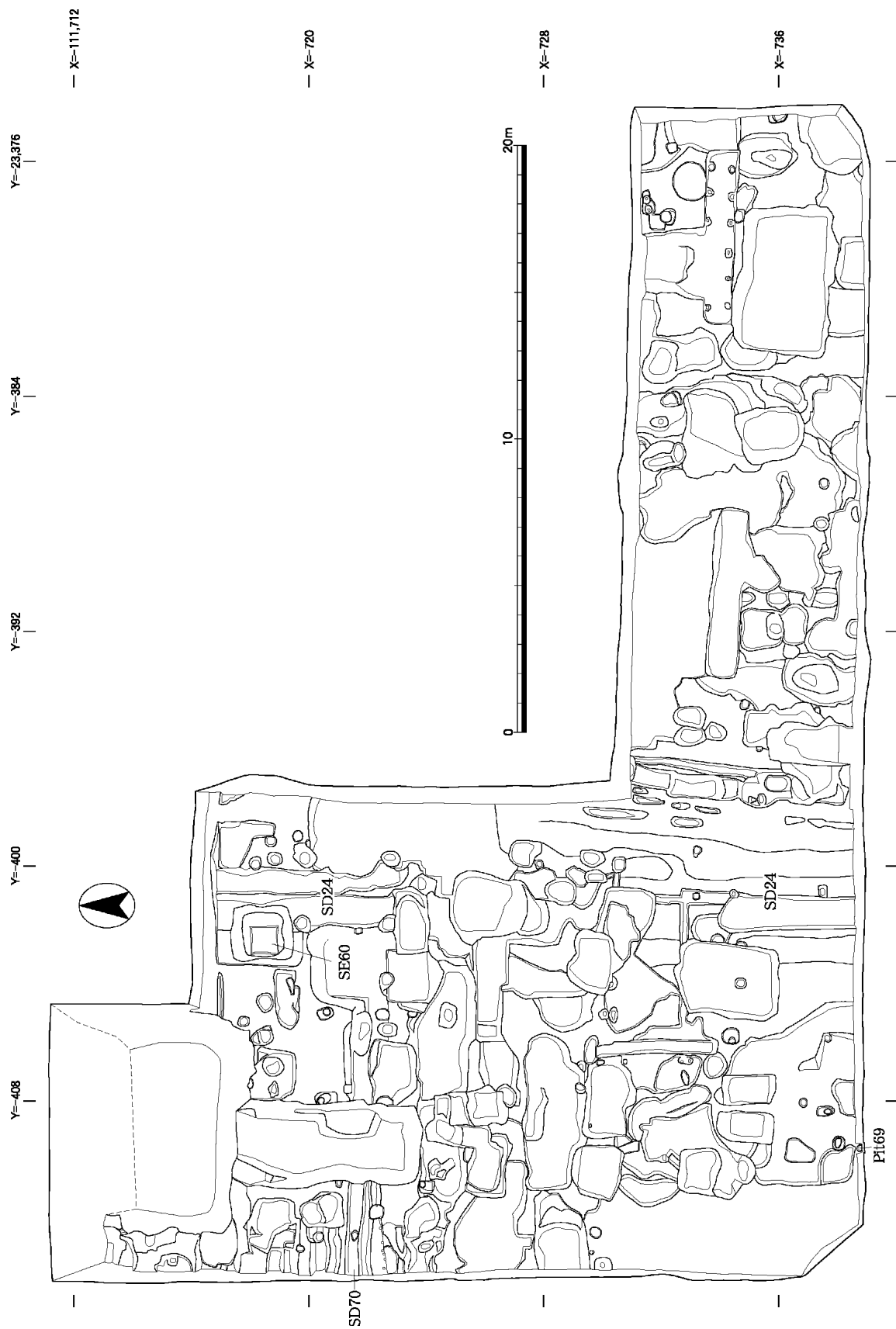


图38 XF地区13次調査2区平面図(1:200)

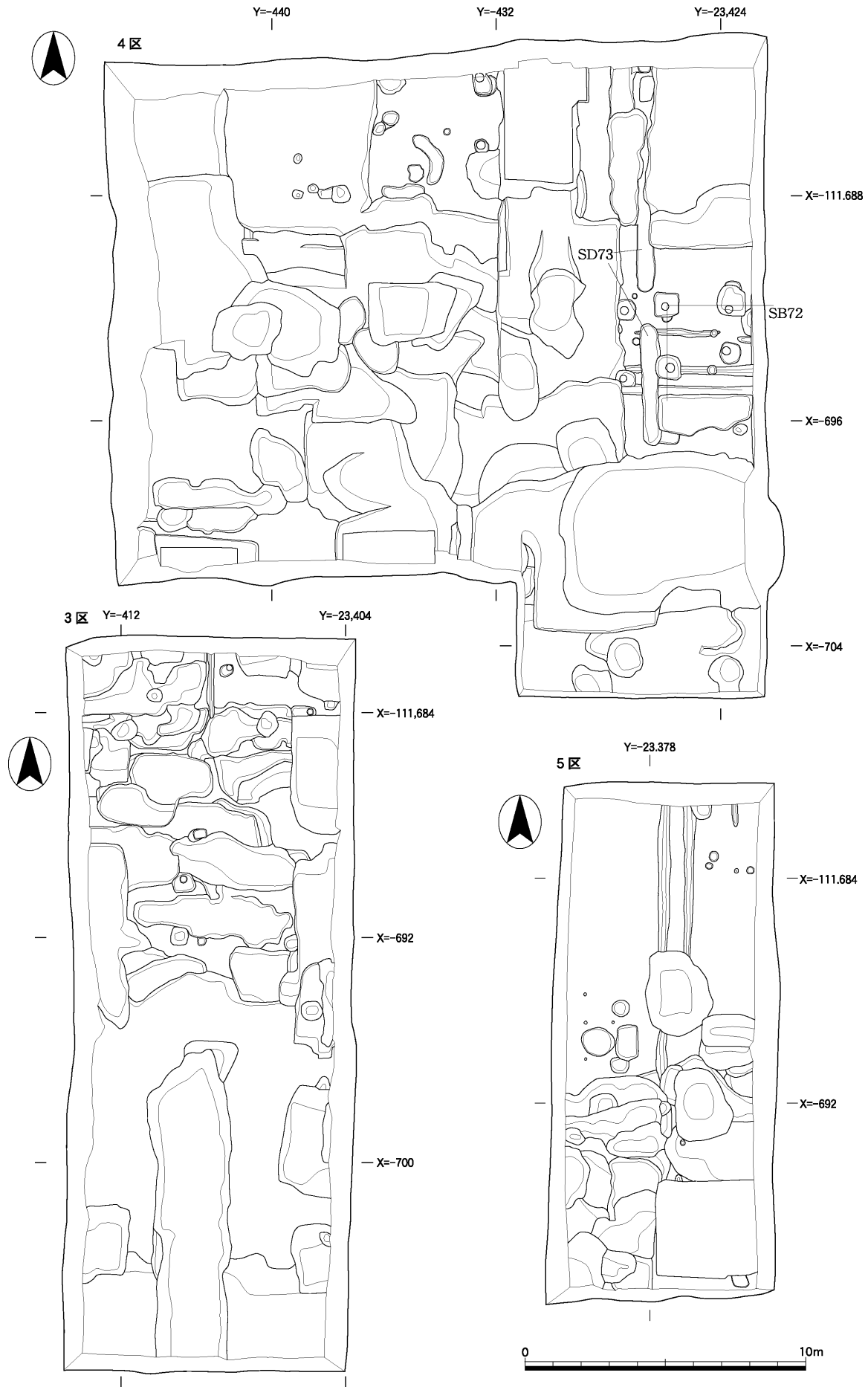


図39 XF地区13次調査3～5区平面図(1:200)



図40 XF地区14次調査前全景



図41 XF地区14次調査風景



図42 XF地区15次調査前全景



図43 XF地区15次調査風景

部では明瞭に確認できた。楊梅小路北側溝SD74は調査区ほぼ中央の西壁よりにその一部を検出した。井戸SE75は円形の掘形の最下段に曲げ物を据え、その上に方形の木枠を造り、さらにその上部が石組みの構造をとる。

遺物の出土量は各遺構とも少なく、小片になったものが多い。土取りからの出土ではあるが萬年通寶が1点出土した。

XF地区15次調査（図42・43・45、図版25） 15次調査の対象地は13次調査1区の北側で六条一坊三町の北部に該当する。南半部が基礎跡で著しく破壊されていたため北側の現五条通寄りに調査区を設定した。調査区の大半に土取り跡が分布し、調査区中央部で平安時代後期の方形縦板組井戸（SE76）を1基検出しただけである。

（8）平成11年度の調査

XF地区16次調査を実施した。

XF地区16次調査（図46～48、図版26） 調査地は右京六条一坊六町の中央やや東寄りに該当し、9次調査1区と13次4区に挟まれた位置になる。この調査では調査区のほぼ全域が土取り跡のため、ほかの遺構を検出することはできなかった。

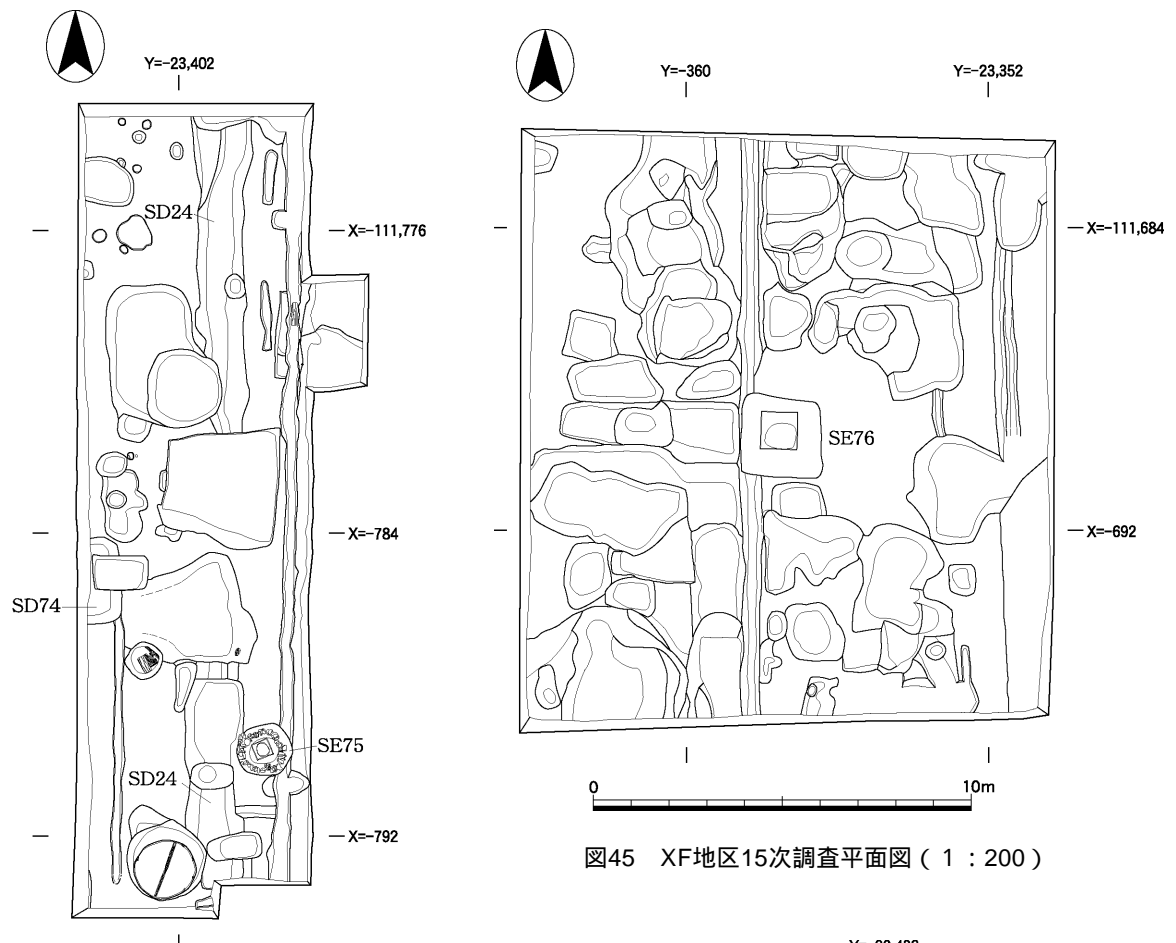


図45 XF地区15次調査平面図 (1 : 200)

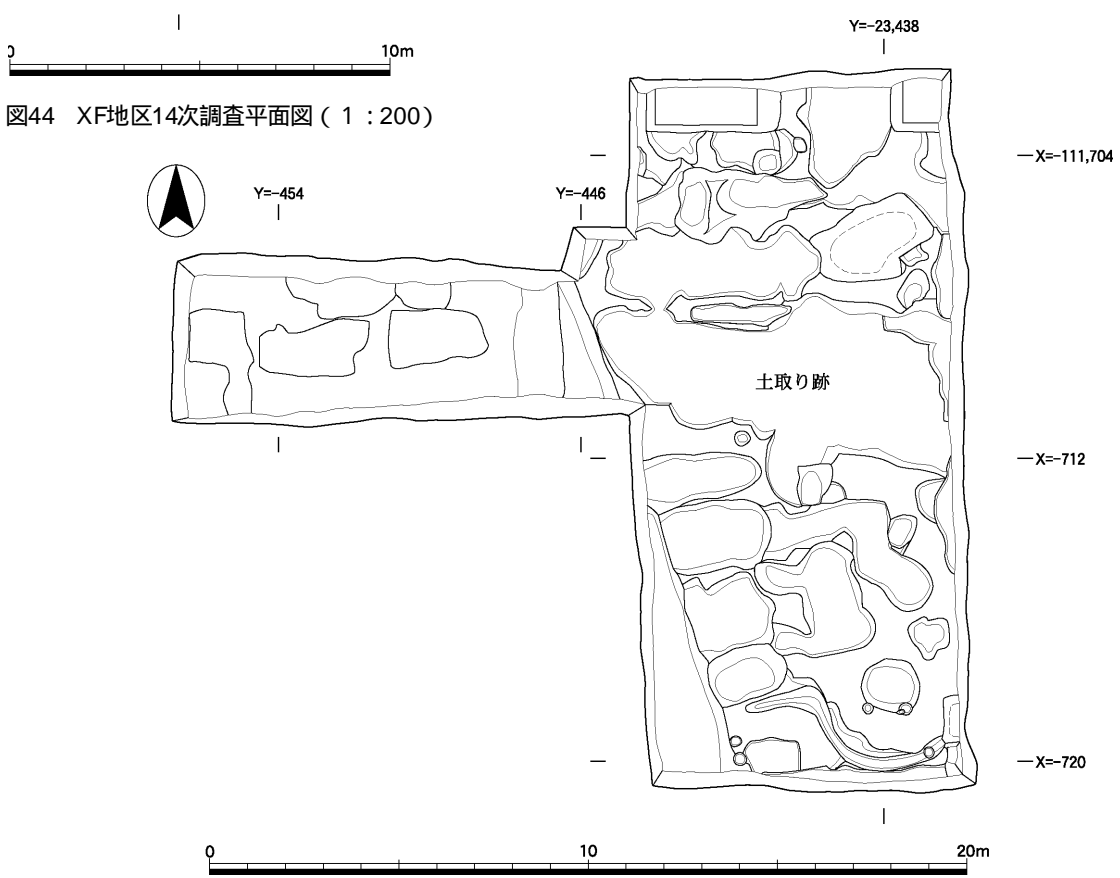


図46 XF地区16次調査平面図 (1 : 200)



図47 XF地区16次調査前全景



図48 XF地区16次調査風景

(9) 平成12年度の調査

XF地区17次調査を実施した。この年度は主に移転した個人住宅跡地が調査対象地となったため右京六条一坊六町と三町にかけて5箇所分散している。

XF地区17次調査（図49～55、図版26～28）三町の15次調査区東側に設定した1区では、平安・鎌倉時代の遺構は無かったが、御土居の濠（SD67）を検出した。この濠は13次調査1区でも西肩の一部を確認していたものである。濠の遺物はわずかであるが、17世紀後半の土器類が出土した。また埋土最上層から寛永通寶など銅銭がまとまって出土しており、濠が江戸時代前半には廃絶していたことを示している。2～4区は、16次調査区を囲む位置にそれぞれ小さな調査区を設定した。これらの調査でも16次調査区と同等に土取り跡のためほかの遺構を検出することはできなかった。5区では西坊城小路西側溝（SD24）を確認することができた。

(10) 平成13年度の調査

最終年度はXF地区18次調査と19次調査を実施した。

XF地区18次調査（図56～59、図版28～30）18次調査の対象地は右京六条一坊三町（1～3区）



図49 XF地区17次調査前全景（4区）



図50 XF地区17次調査風景

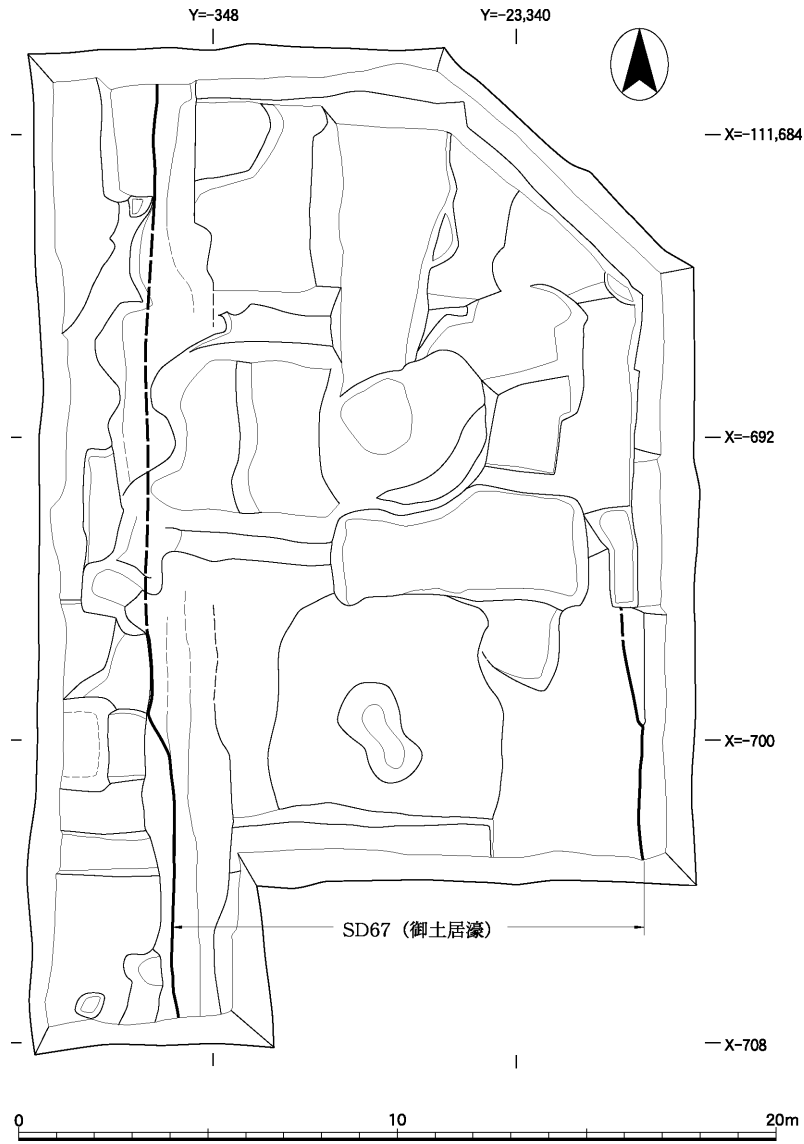


图51 XF地区17次調査1区平面図(1:200)

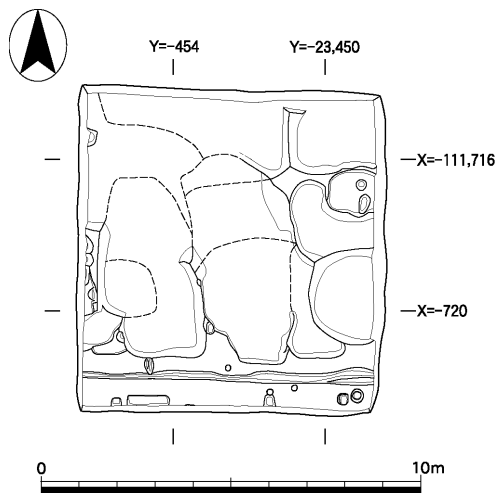


图52 XF地区17次調査2区平面図(1:200)

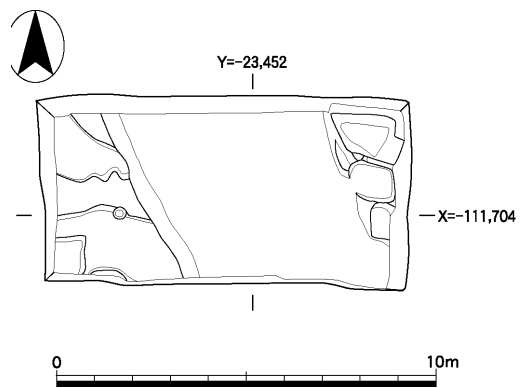


图53 XF地区17次調査3区平面図(1:200)

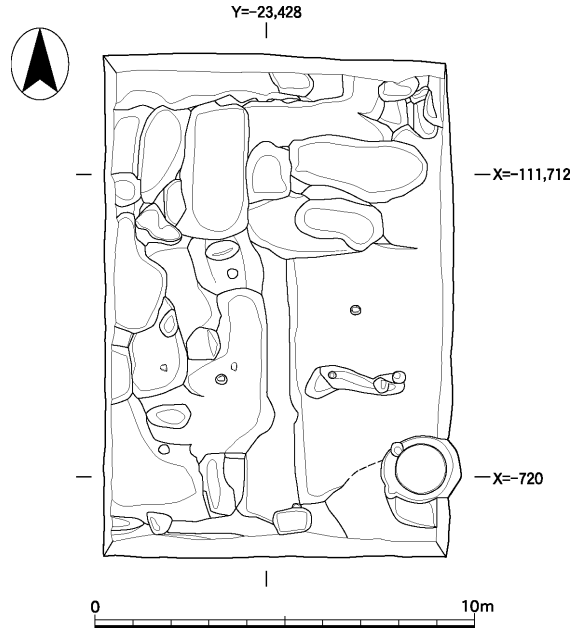


図54 XF地区17次調査4区平面図(1:200)

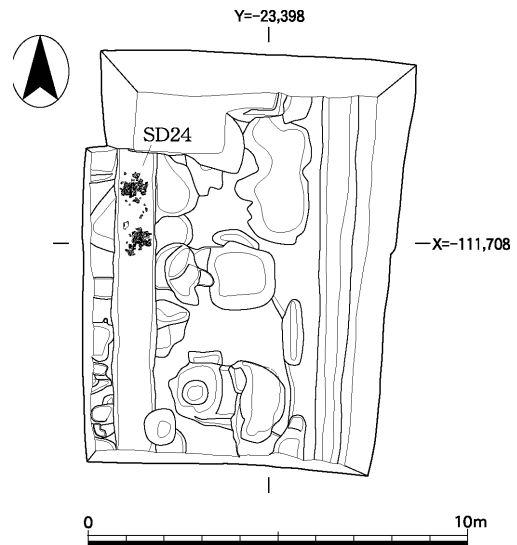


図55 XF地区17次調査5区平面図(1:200)

と四町(4区)である。1区は13次調査3区と5区の間、2区はその南側の13次調査2区の北に接して、3区は道路を挟んで13次調査2区の南に、4区は3区のさらに南約80の四町に設定した。この調査では2区で平安時代前期の溝(SD20)を検出したほか、1~3区いずれも、これまでの調査で確認できていなかった西坊城小路の東側溝を検出できた。4区でも調査区西端に同側溝の検出が想定されたが、土取りが激しく未確認である。

XF地区19次調査(図60~63、図版30~35) 19次調査対象地は右京六条一坊六町および三町に該当する。これまでに、六町については2次・8次・9次・13次・16次・17次調査、三町については13次・15次・17次・18次調査でそれぞれその一部が対象となり、三町では平安時代の井戸や近世の御土居の濠など、六町では平安時代前期の邸宅の一部とみることのできる掘立柱建物や溝・柵・井戸あるいは鎌倉時代前半の井戸・池・溝・柱穴など多数の遺構を、また条坊関係では西坊城小路および両側溝を検出している。



図56 XF地区18次調査前全景(1・2区)



図57 XF地区18次調査4区全景

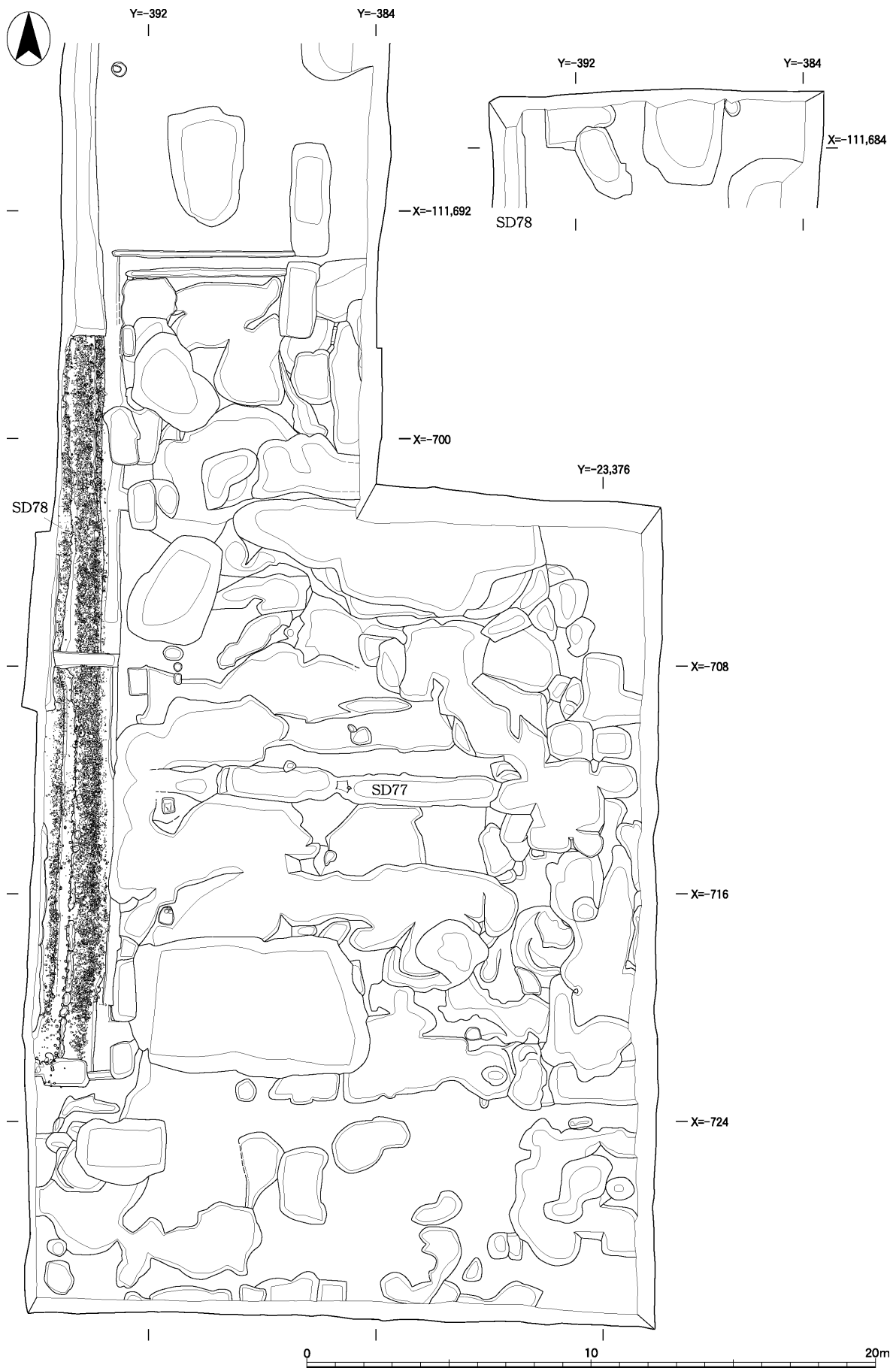


图58 XF地区18次調査1・2区平面图(1:200)

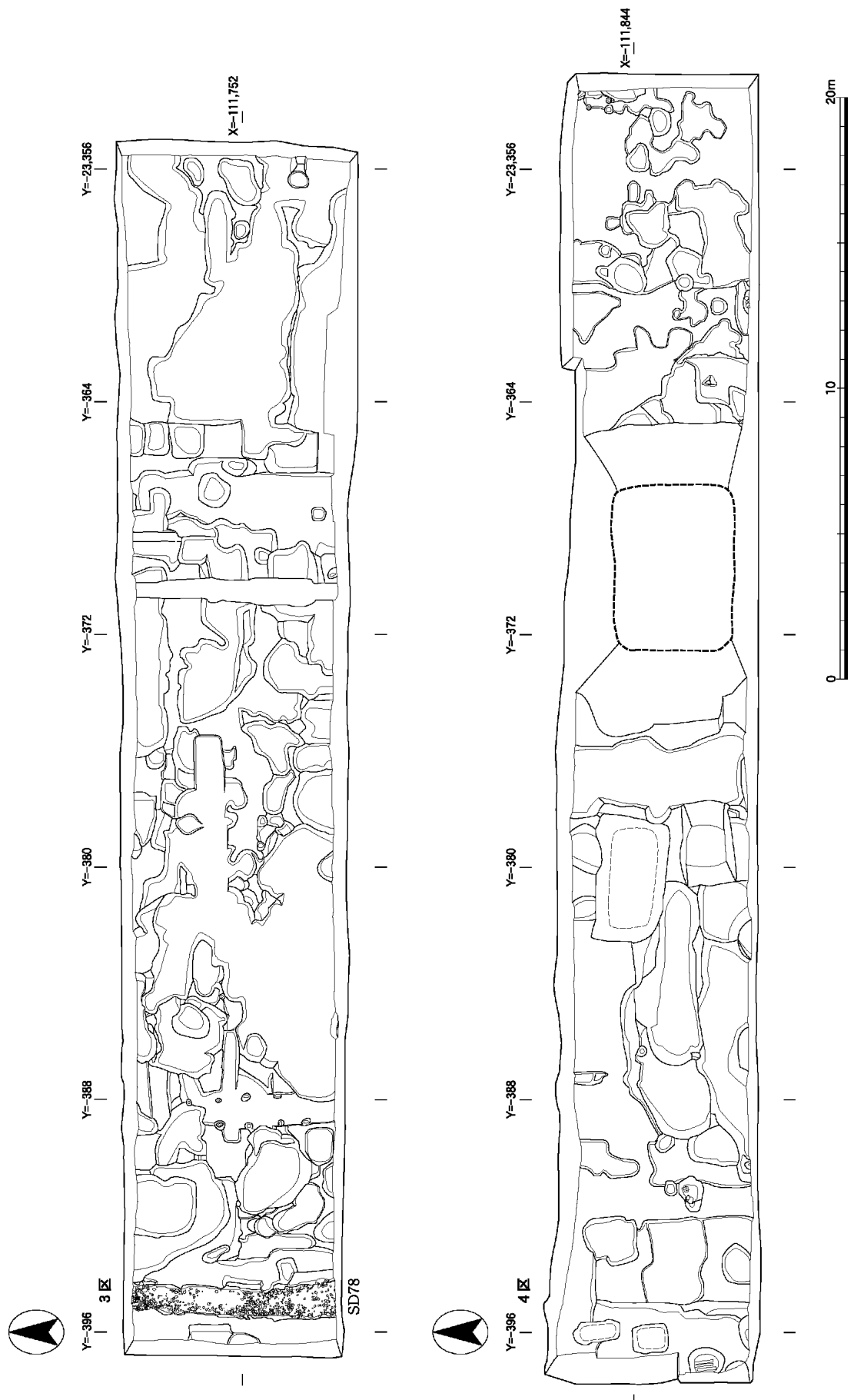


图59 XF地区18次調査3・4区平面図(1:200)

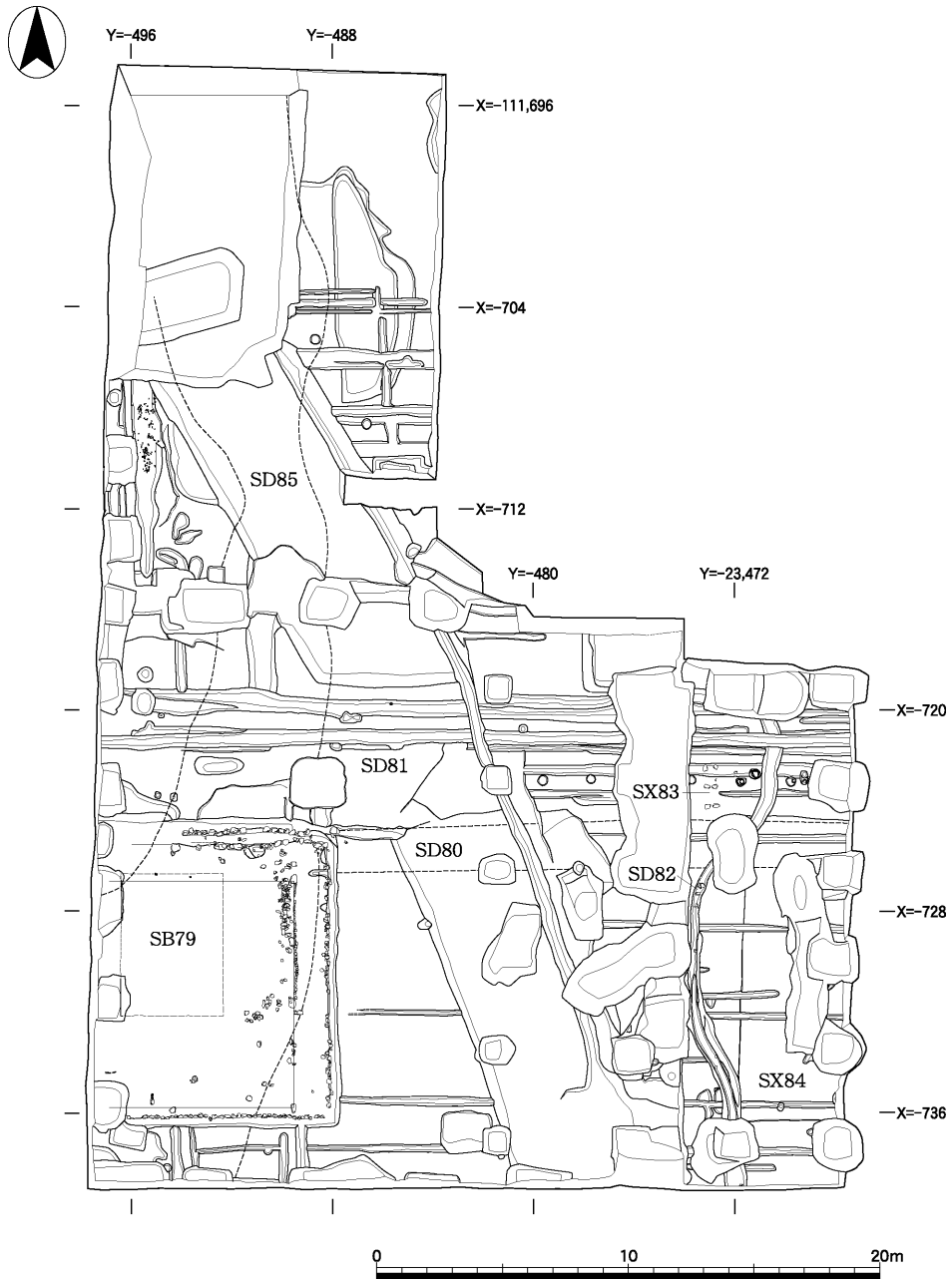


图60 XF地区19次調査1・2区平面図(1:300)

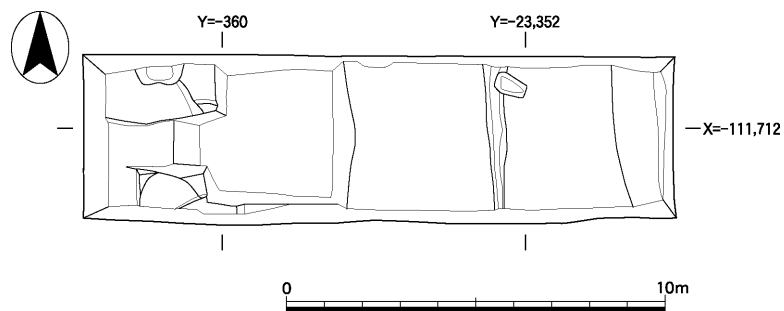


图61 XF地区19次調査3区平面図(1:200)



図62 XF地区19次調査前全景（1・2区）



図63 XF地区19次調査前全景（3区）

今回、六町域（1・2区）では、8次・9次調査で検出した鎌倉時代の池跡と同時期の御堂跡と考えられる建物跡（SB79）や溝（SD80・SD81）、整地層（SX84）、下層には平安時代以前の川跡（SD85）などを検出した。SD85は、北東から南西方向へ流れる川跡で、1区中央部から2区西部にかけて検出した。上層から弥生土器と思われる土器が少量出土したが、正確な時期は不詳である。2区で検出した御堂SB79は、前身建物が火災に遭ったのちに同じ場所に建て替えられたこと、上層と下層では礎石の配置が異なり別形態の建物の可能性があることなどが確認できた。また、この御堂跡には下層の川跡と重複する部分に、礫を多用した基礎地業が施されていたが、これには鳥羽離宮などで確認されている工法と共通する点があり注目される。今回の御堂跡と2次・8次・9次の調査結果を総合すると、六町は鎌倉時代には1町を占有し、池や持仏堂を備えた邸宅であったことが明らかになった。同じく2区の平安時代後期の東西溝SD80は六条一坊六町四・五門の境界（六町南北中心）付近に位置している。9次調査でもこの溝の延長線上に同規模の溝SD29を検出しており、六町を南北に分割する溝と考えられる。SD80の約3北側にも東西方向の同時期の溝SD90があり、両者は区画道路の側溝の可能性もある。2区東部では南北方向に大きく蛇行する溝SD82や方形の掘り込みに焼土片を多量に含む粘質土で整地したSX84を検出した。SX84の南北の範囲はSB79の位置と揃っている。また、SX84の北西部では30cm前後の石を3個ずつ2列に並べ据えた遺構（SX83）を検出している。

三町域では、13次・15次の調査区の間的小区画（3区）が対象となったが近代の土取りが激しく、御土居の濠SD67の西肩部を検出するにとどまり平安時代の遺構は検出できなかった。御土居の濠はこれまで13次および16次調査で確認しているが、今回検出したのはその中間の部分にあたる。平安時代末から鎌倉時代の遺物は土器類および瓦類である。瓦類は主にSB79の雨落ち溝や地業、および周辺の整地層から出土している。

なお、上述の御堂跡（上層建物）を検出した時点で報道発表および一般対象の現地説明会を実施した。

2. 遺 構

今回の調査で検出した遺構の時期は、平安京造営以前・平安時代前期・平安時代後期から鎌倉時代・江戸時代の4期に大きく分けることができる。平安京造営以前の遺構は概ね河川あるいは湿地など自然地形の一部である。平安時代前期の遺構は建物・井戸・溝・など邸宅関係の遺構と道路側溝など条坊関係の遺構で、右京側(XF地区)の特に西半部で多く検出している。平安時代後期から鎌倉時代の遺構には平安時代前期同様に邸宅関係と条坊関係の遺構があり、左京および朱雀大路側(HK地区)と右京側の東半部に集中している。江戸時代の遺構には御土居の濠や井戸のほか、耕作用の小溝群や土取り跡などがある。

前章では各調査について概略を述べたが、ここではそれらの調査で検出した主な遺構について平安京の条坊単位に基づいて説明を加えたい。

(1) 左京六条一坊一町・二町の遺構

SD01・SD02(図64、図版4) 一町南西隅部と二町西辺部で検出した朱雀大路東側溝である。SD01が平安時代後期(12世紀後半)、SD02が鎌倉時代(13世紀)に属する。SD01は幅約2.6

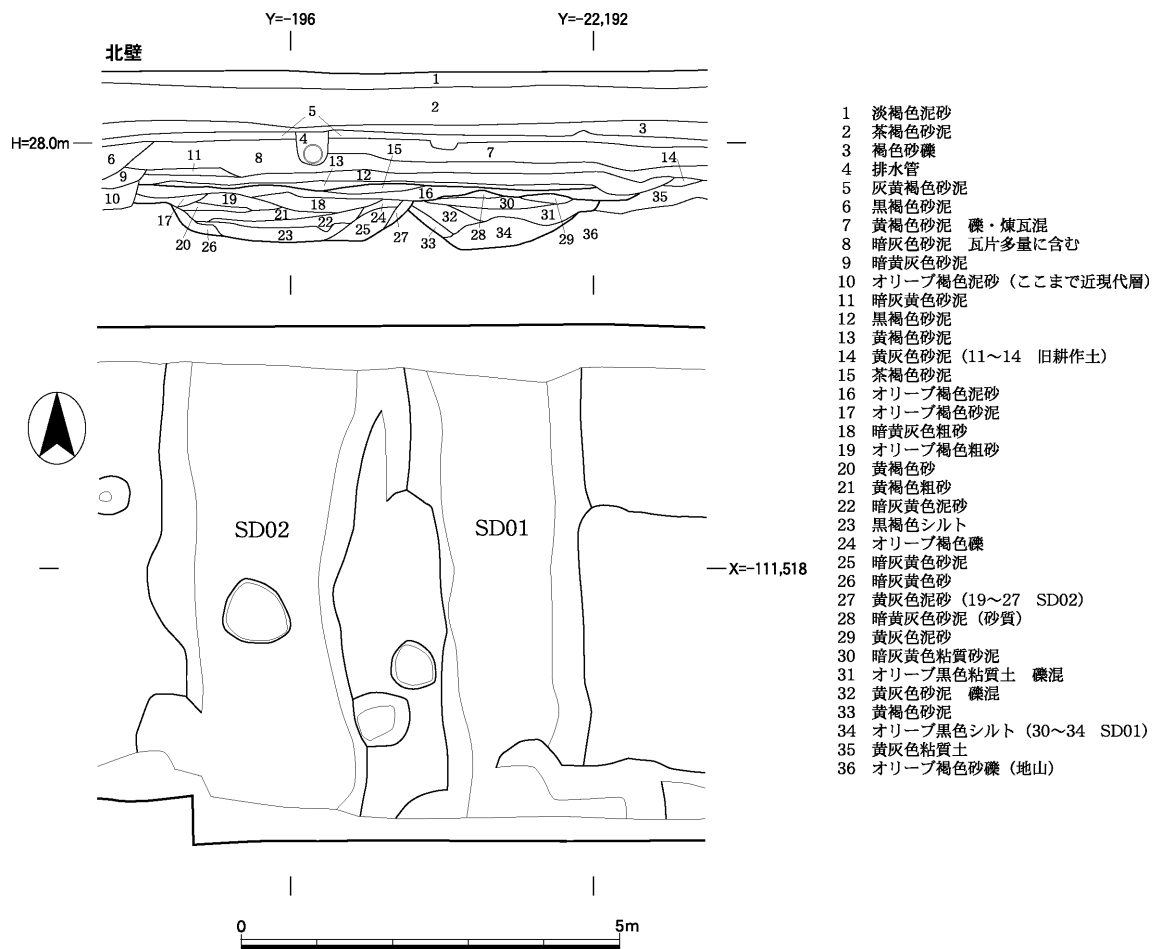


図64 SD01・SD02実測図(1:100)

深さ0.7 で、土器類のほか木簡や人骨などが出土した。SD02はSD01から中心を西側に約3 移動させており、規模は幅約3.2 、深さ0.6 である。遺物は少ない。調査区南壁付近が樋口小路北側溝との合流部に該当するが、敷地外壁基礎の掘形によって攪乱されており、詳細は明らかにできなかった。SD01の位置は推定位置とほぼ合致しており、出土遺物の型式差からみて、側溝が平安時代後期に一旦途絶した後に鎌倉時代に再度開削された時点で大路路面側に移動させられたことになる。このような状況は二町で実施した6次調査でも確認している。

SD03・SD04（図版5） 一町南辺部で検出した。いずれも樋口小路北側溝と思われ、南北に接するように検出したが、SD04の大部分は調査区外で、北肩部の一部を確認しただけである。SD03は幅約1.5 、深さ0.6 。時期はSD03が平安時代後期（12世紀後半）、SD04が鎌倉時代（13世紀）に属し、後者が小路路面側に移動している点など、朱雀大路東側溝と同様の傾向を示している。

SD05（図版5） 一町南東隅に検出した坊城小路西側溝である。幅約2.1 、深さ0.5 。時期は平安時代後期に属するが、溝東肩際から東部が土取りで深く掘り下げられていたため、朱雀大路や樋口小路のように路面側に新しい段階の溝があったかどうかを確認することはできなかった。

SE06（図65、図版6） 樋口小路北側溝SD03・SD04を切る鎌倉時代の石組み井戸。径約2の円形の掘形内に20～30cm前後の川原石を組んでいる。内径は1.2 で、石組みは9段、約1.3残存していた。最下段の石と掘形底部との間に25cmほどの間隔があるが、このあたりから腐食した木材が出土しており、木枠が据えられていた痕跡とみられる。井戸内の堆積は有機質を多く含んだ茶褐色の泥土で、土師器を主とする多量の土器類が出土した。

（2）朱雀大路

SF08（図33・66） HK地区8次調査において朱雀大路の路面とみられる整地層を検出した。路面は場所によって異なるが、概ね地山上に褐色砂泥や砂質あるいは粘質の整地層が数枚確認できた。この調査区付近はこの路面を検出した直上まで現代層が認められ、これによって路面上層部が削平されている可能性もあるが、轍状の遺構の存在からその程度は軽微と思われる。この南方の右京七条一坊に該当する京都市中央卸売市場でも朱雀大路の路面を検出している。そこでは礫や瓦片を多量に用いた整地が確認されているが、今回検出した路面の整地にはそのような形跡は無い。これはこの付近の基盤層である黄灰色砂泥が固く締まり安定していることによるものと

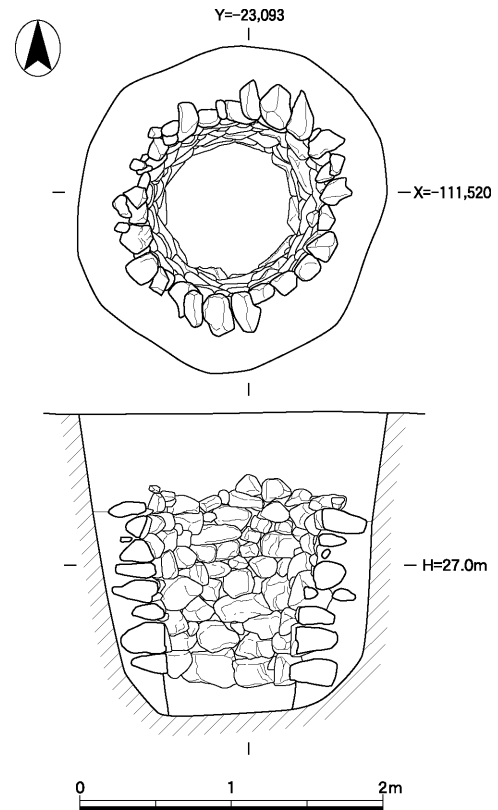


図65 SE06実測図（1：50）

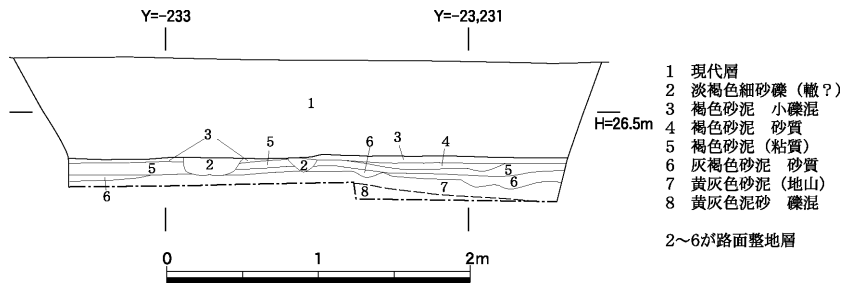


図66 朱雀大路路面SF08断面図（HK地区 8次調査 2区北壁、1：50）

思われる。轍跡や整地層から少量の土師器や瓦片が出土している。いずれも小片で時期を特定しにくい。概ね平安時代末から鎌倉時代に属するものである。

(3) 右京六条一坊三町の遺構

SE68 三町の南北中央、東三行付近に検出した井戸。上部が土取りのため激しく壊されている。径0.8と規模が小さく部材の痕跡も無いことから素掘りの井戸かと思われる。遺物は9世紀後半の土器類が少量出土した。

SD77 三町西端付近に検出した東西方向の溝。幅約1.1前後、深さ0.2で、長さ10ほどを検出した。位置からみて西坊城小路東側溝へ取り付くものと考えられるが、両端が土取り穴で破壊され小路側溝との関連は不明である。9世紀前半代の土器類がまとまって出土した。

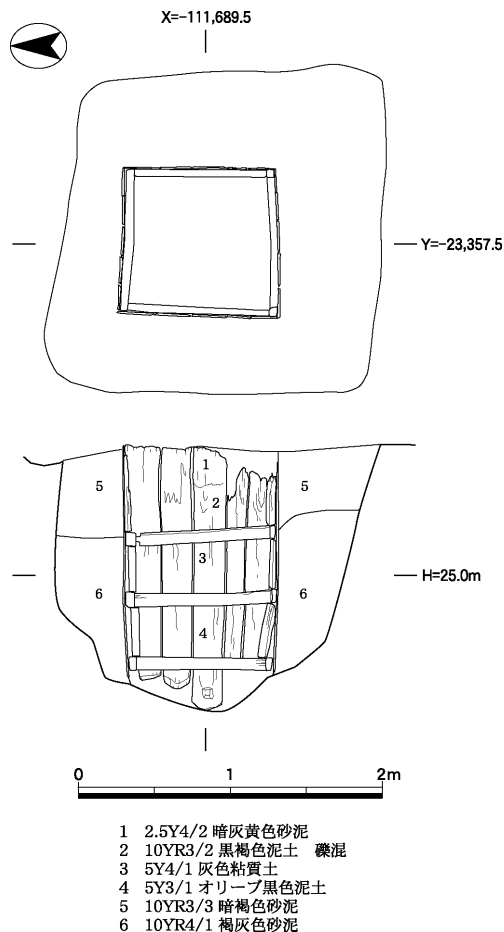


図67 SE76実測図（1：50）

SE76（図67、図版25）三町北西4/1の中央付近に位置する井戸である。掘形の平面形は一辺約2のひずんだ方形で、構造は一辺約1の方形縦板組である。検出面以下1.5ほどの構造部材の残りは良く、各面の側板や横棧が良好に遺存していた。35cm程度の間隔に縦棧で支持した横棧の周囲に幅20～30cmの縦板を各面5枚ずつ組み合わせている。縦板のなかには下端部に7cm前後の方形の穴を穿ったものがある。底部には曲物などを設置していた痕跡は無かった。井戸内からは鎌倉時代前半の土器類などが出土している。

SD78（図版29）西坊城小路東側溝である。幅約1.1前後、深さ0.2。XF地区の17次調査1・2区で約38、3区で約7検出した。溝中央部に小杭列が約12にわたって並ぶところがあるが、それに重複して近世の耕作溝があり、いずれに関連するかは不明である。溝上層からは礫や土器・瓦片が多量に出土した。周辺の調査では西側溝も検出しているが、近接する場所で比較すると西側溝に対して底部の標高が高く、また全体に西側溝

の方が深い傾向が確認できる。遺物の時期は鎌倉時代前半に属する。

SD67 (図68、図版27) 御土居の濠である。13次調査で西肩部を検出していたが、17次調査で濠幅を確認することができた。規模は幅12.5、深さは1.5前後である。底部には畦状の高まりが数箇所確認できたが、基礎など後世の掘り込みのため平面形状はあまり明瞭ではない。濠の断面形状は中央部が大きく開いたV字形で、東へはそのまま上方になだらかに傾斜が続くが、西側は途中で平坦面をなし、そこからやや急激に肩部に立ち上がる。17次調査では西肩部が近代の溝でわずかに削平されていたが、よく遺存していた13次調査では肩部から平坦部への状況が観察できた。濠の埋土は概ね黒褐色の粘質土が主体で、遺物はほとんど含まないが、少量の木片や江戸時代前半の陶器類が出土した部分もある。また、埋土最上面(層16上面)から緡銭の一部とみられる寛永通寶(宋銭2枚含む)が20数枚連なった状態で出土した。

(4) 右京六条一坊六町の遺構

SB09 (図版9) 六町南東部に位置する東西3間×南北2間の掘立柱建物。柱間は東西2.1(7尺) 南北2.4(8尺)。柱掘形0.4前後の小規模な建物である。柱筋が西偏(N2°12'E)する。南に同時期の井戸SE13があり、これと関連する建物と思われる。

SB10 SB09の西方やや北よりに検出した2.1(7尺)等間の東西方向の柱列。南に関連する柱穴は無く、北に延びる建物と考えたが、柵の可能性もある。柱掘形は0.5~0.7とSB09よりやや大きい。SB09と同様の振れを持つ。

SA11 SB10のさらに西方で六町の東西中央、北六・七門界付近に位置する東西方向の柵。3間分の柱穴を検出したが、柱間が中央2.4(8尺) 左右が4.2(14尺)と変則的である。

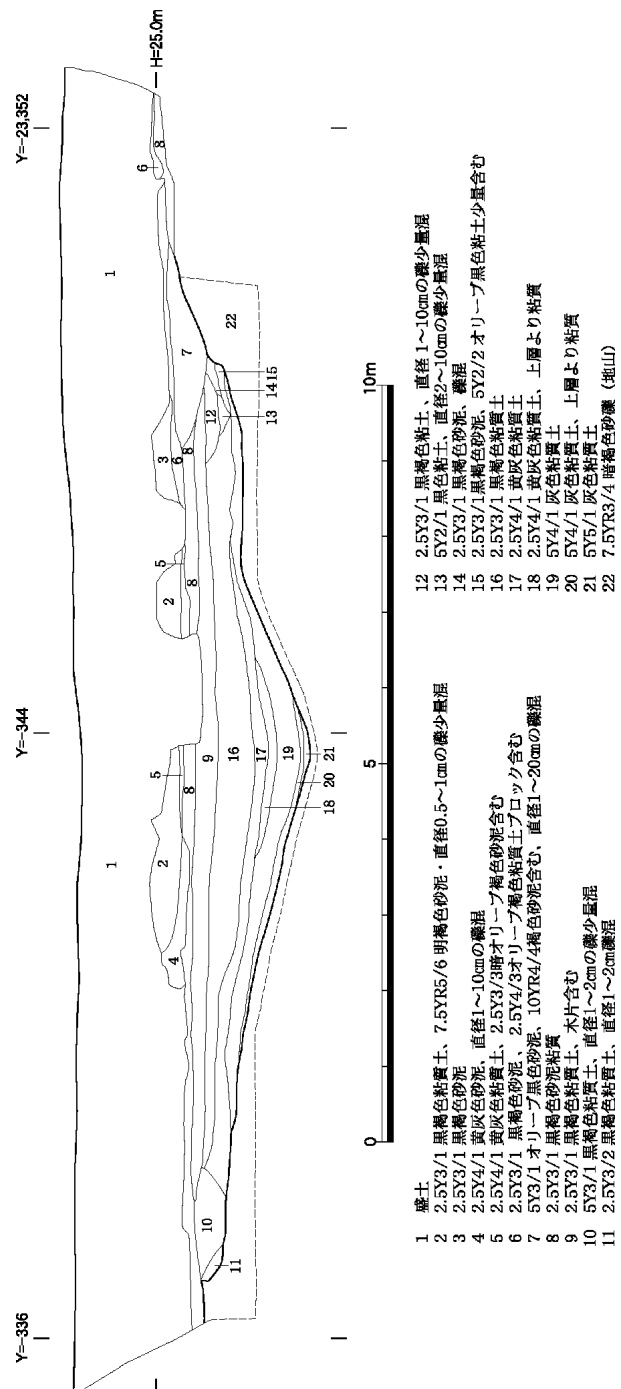


図68 SD67断面図(1:100)

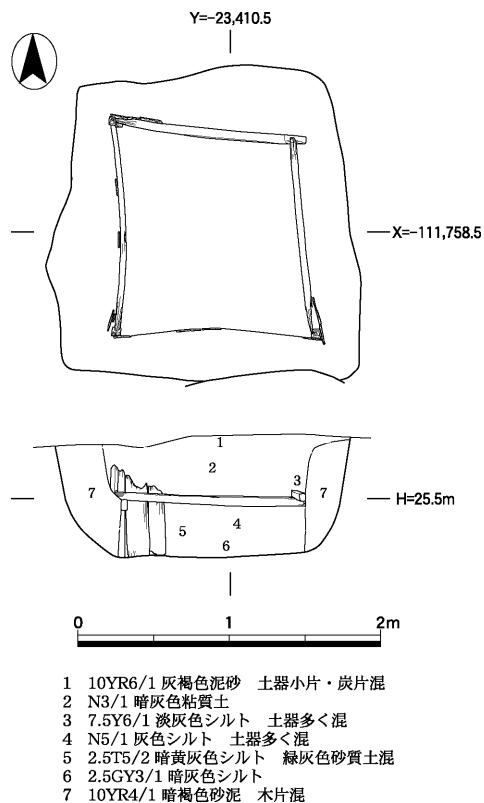


図69 SE13実測図(1:50)

SA12 SB09の約19 南に検出した東西3間分の柱列。柱間が西から2.1 (7尺) 2.1 (7尺) 2.7 (9尺)で、調査時には東側に底を持つ建物を想定したが、南北ともに関連する柱穴が無く、柵と考えた。

SB72 六町北東部に位置する掘立柱建物。建物の北西隅と思われる3基の柱穴を検出した。柱掘形は0.9~1.0、柱間は2.4 (8尺)等間である。遺物は小片ではあるが9世紀前半の土器類が少量出土した。

SE13(図69、図版9) SB09の南に位置する井戸。約2 四方の掘形に一边約1.4の比較的大きな井戸枠を造る。部材の残りはあまり良くないが、方形の縦板組で、各面には縦板材の痕跡が観察できた。残存していた板材は幅20~30cmである。底部は平坦で曲物などの施設は無い。埋土中層(層3・4・5)から9世紀前半の土器類がまとま

て出土している。井戸枠の中心がSB09の西柱筋の延長と一致し、また井戸枠北辺とSB09南柱筋との距離が2.4 (8尺)と配置の計画性がうかがえる。

Pit69 六町の東辺寄り、北五・六門界付近で検出した径0.25 の小ピットである。断面形状からみて柱穴ではないだろう。底部中央付近から特殊な緑釉陶器蓋が出土した。この蓋に接合する破片が三町(17次調査3区)で出土している。

SX15(図版12) 六町南西部に広がる旧流路上に成立した湿地を埋め立てた整地層。この旧流路は縄文時代から古墳時代の遺物を含み、平安京造営期には浅い池か湿地状になっていたものと思われる。造営時からある程度の期間をかけて東側から埋め立てられたようで、肩口には遺物が集中していたところもある。遺物の時期は9世紀初頭から後半にかけてのもので、土器類が中心である。この旧流路および湿地は南側の五町の調査でも検出しており、五町の範囲の西1/3ほどを占めている。六町中央部ではこの堆積は確認されておらず、おそらく六町北東部から南西方向に流れ込み、六町南西部から五町西部に広がりを持つものと思われる。

SB16 六町南東部、SB09と重複する鎌倉時代の掘立柱建物。平面形を完全にはとらえることはできなかったが、径0.3 前後の小柱穴を柱筋と出土遺物の時期を参考に関連づけた結果、東西約12、南北7 ほどの建物を推定した。柱間は一定しないが、1.8 (6尺)×2.1 (7尺)の総柱部を中心にして東・西・南の三方に関連する柱穴が分布している。調査区外の北へも広がる可能性がある。

SB17 SB16の約20 西方で検出した建物北辺と西辺の一部とみられる柱列。全体の形状は不

明である。柱掘形は0.4～0.6 と不揃いである。北辺は柱間2.4（8尺）で、3間分確認している。西辺は3.3（11尺）で1間分を検出した。遺物が小片で、時期は正確に特定できないが、平安時代後期以降の建物と思われる。

SB18 SB16の南に位置する掘立柱建物。検出したのは北西隅部のみだが、位置関係から2次調査で検出している建物53あるいは57に関連する可能性がある。時期は平安時代末から鎌倉時代。2次調査では五町域でこの時期の建物が、小路に沿って配置されている傾向が確認されているが、SB16などと併せ六町でも同様の傾向として理解できる。

SA19 SB18の西に位置する東西方向の柱列。柱間が東から1.5（5尺）、2.4（8尺）、1.5（5尺）、2.7（9尺）と変則的である。SB18の北辺柱筋の延長線上に乗ることから関連する柵ととらえた。

SB20 西坊城小路西側溝SD24の西側に近接して検出した門と思われる一对の柱穴。SB16の東辺に重複する。柱掘形が径約1.3、深さが0.7～0.8と周辺の柱穴と比較して特異的に大きい。柱間は4.8（16尺）で底部には2つの柱穴ともに礎板が据えられていた。2つの礎板は幅18cm、厚さ6cm、長さ1.16の板材を中央付近で斜めに切断して、それぞれの柱穴に振り分けており、同時期の造作と考えられる。

SD24・SD25（図70、図版10）西坊城小路西側溝である。SD25が平安時代後期、SD24は鎌倉時代に属する。8次調査5区・13次調査2区・14次調査・17次調査5区で総延長約74を検出しているが、SD25は8次調査5区調査区東壁沿いで確認しただけで、他の調査区では検出できなかった。SD24は場所によってわずかに異なる状況を示すが、数回にわたり造り替えられているようである。堆積土の区分が明瞭でなく、個々の単位を明らかにできなかったが、近接して数条の溝が重複したような状況を呈する。おのこの規模は場所によって異なるが、8次調査5区での観察では最終的に幅2.3、深さ0.25程度の溝になっていたようである。SD25は東肩が明らかではないが、確認できた幅が0.9、深さ0.13、上面が固く締まった褐色砂礫で覆われていた。

SE21（図版11）SB17の西に位置する井戸。掘形は一辺約3.3の方形で、北東に寄せて井戸枠を設置している。最下段の横枠（一辺1.2方形）が残っただけで、構造は不明だが、おそらく方形縦板組の井戸であったかと思われる。12世紀末頃の土器類が少量出土した。

SE22（図71、図版11）六町南西の外側に位置し、西坊城小路西側溝SD24と重複している。掘形は一辺2前後の略方形。枠の構造は方形縦板組で一辺が0.9、各辺幅20～25cmの縦板が4枚ずつ、

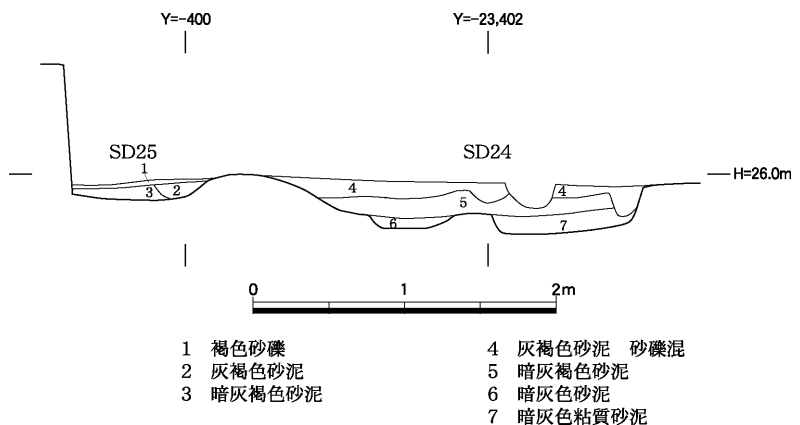


図70 SD24・SD25断面図（XF地区8次調査5区、1：50）

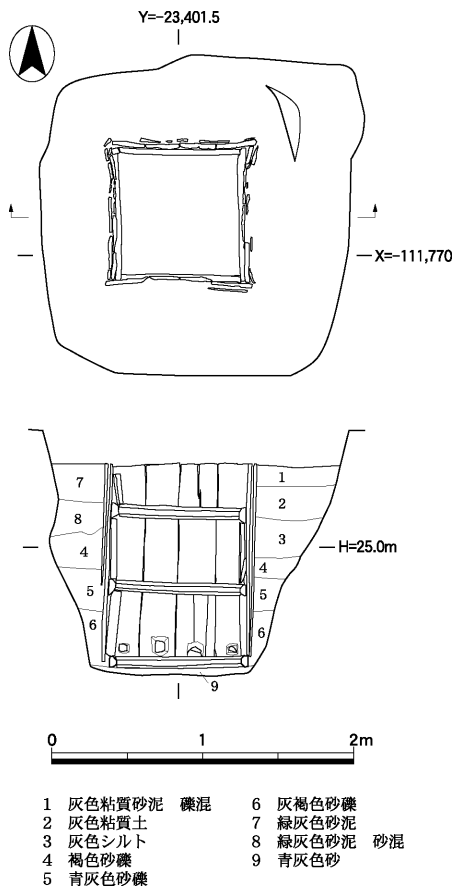


図71 SE22実測図(1:50)

掘形の北西隅に寄せて設置されている。構造は一辺0.8 の方形縦板組。構造材の遺存状況は良くない。鎌倉時代前半の遺物が出土している。

SE71 (図版24) 六町の南北中央部、町東限の外に接する位置に検出した井戸。西坊城小路西側溝SD24に切られている。井戸側が内側に崩れ込んでおり、構造の詳細は不明である。底部に一辺95cmの最下段の横枠が原位置で残存しており、方形の縦板組であることが推定できる。底部には曲物などの施設の痕跡はなかった。遺物は少ないが平安時代後期(12世紀後半)の土師器などが出土している。

SB79 (図72~74、図版33~35) 六町西部に位置する建物。周囲に石列を伴う雨落ち溝が巡る御堂と思われる。雨落ち溝は北・東・南の三方で検出したが、西側は調査区外のため未確認である。溝肩に並ぶ石列は北側のみ2列で、他は建物側の1列だけである。平面規模は南北約11.5、東西は西側が調査区外へ延びているために不明である。雨落ち溝で囲まれた内側の東寄りに礎石と思われるやや大きめの石が2.4m間隔で2間分南北に並び、この3個の礎石に沿って拳大の石が1列に並ぶ。さらに、南辺の石列近くに2個の石が4.8m間隔に配置され、その東側の石は東礎石列の南延長上に位置する。周囲の石列内側は固く整地されているが、最上部の整地層(砂・小礫)を取り除いた時点で、焼土や炭化木片を含む整地層を検出した。火災の跡を整理したような状況を示すが、礎石などの石材は火を受けておらず、この建物が被災したことを示すものではない。

さらにその裏側に目地をずらせて薄い板材をあてがっている。横枠は断面が台形を呈する部材を方形に組み四隅を角材で支持する。井戸枠は約1.3、横枠3段分が遺存していた。この井戸はSD24を切って成立しているが、出土遺物の時期にはあまり差が認められない。検出位置からみてSB18に関連するものか。

SE30 六町の東寄り、南北中央のやや南に位置する平安時代後期の井戸。掘形は一辺約2.5 の方形。腐食が激しく構造材の遺存状況は良くないが、残った部材から判断すると、一辺95cmの方形縦板組の井戸であったことが推定できる。井戸内からは平安時代後期(12世紀後半)の土器類や瓦類が出土した。

SE31 (図版14) SE30の北西約15 に位置する井戸。掘形は一辺約2.5 の方形。構造は一辺1.1 の方形縦板組で、横枠3段分、底から約0.9 の部材が遺存していた。平安時代末頃(12世紀末)の土器類が出土した。

SE32 (図版14) SE31のさらに西、SD29の南側に検出した井戸。掘形2.2~2.4 の方形。井戸枠は

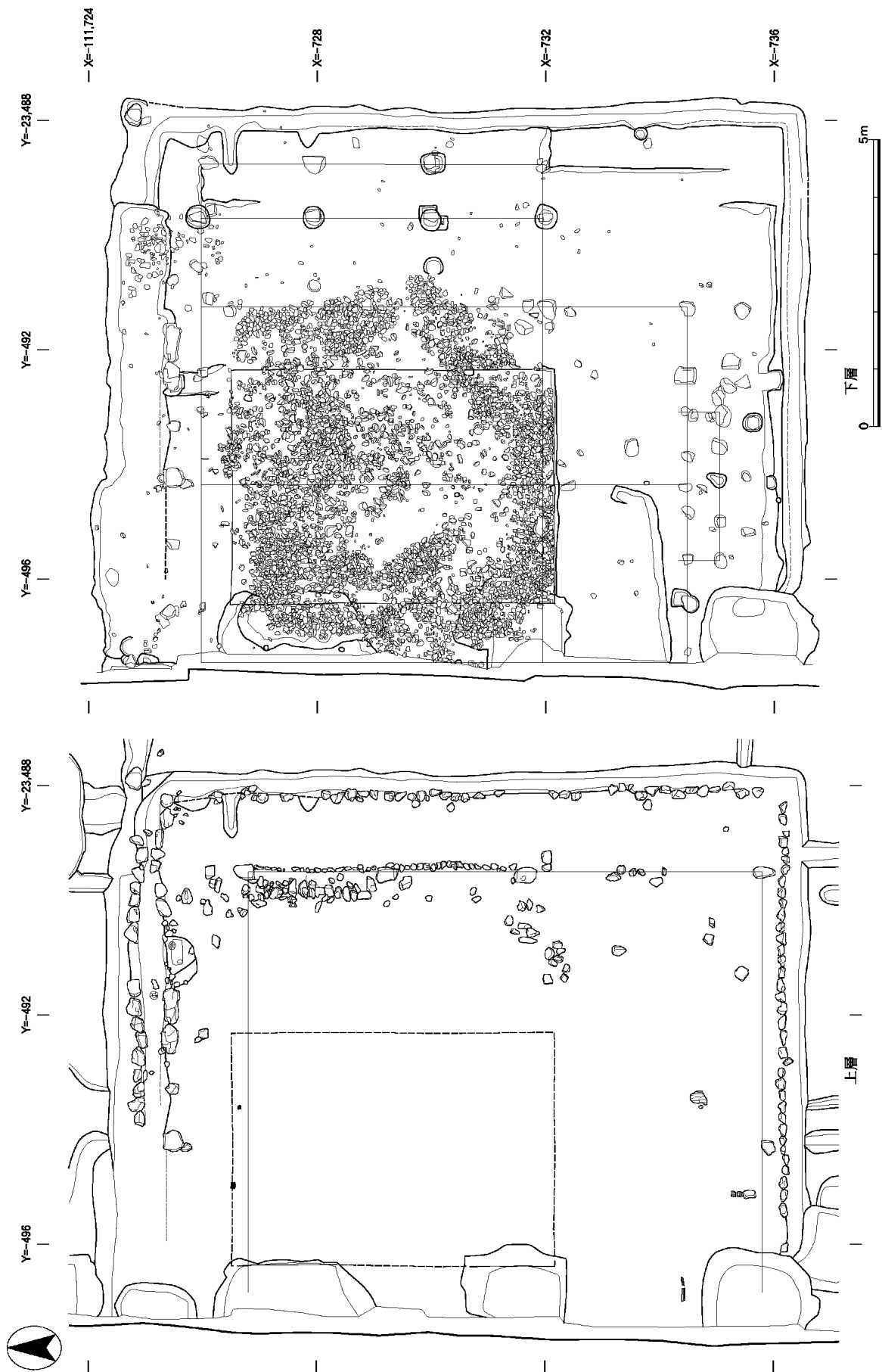


图72 SB79平面图 (1 : 100)

- 1 10YR4/4 褐灰色泥砂
- 2 5YR3/4 褐色泥砂
- 3 2.5Y3/3 暗褐色泥、土器層、雨落ち溝
- 4 5Y4/1 灰色砂礫、砂+礫、固くしまる
- 5 5Y4/1 灰色砂礫、礫層、白川砂含む
- 6 10YR3/2 暗灰色砂質、礫層、粘土、土器含む
- 7 相い砂礫層
- 8 砂礫 礫層
- 9 2.5Y4/2 黄灰色粘質土
- 10 2.5Y3/2 黒褐色粘砂、腐葉土あり
- 11 10YR2/2 暗灰色粘質土(シルト)
- 12 2.5Y4/2 暗灰色粘砂、粘土が混じる
- 13 10YR3/4 暗褐色粘砂(砂質)
- 14 7.5YR3/3 暗褐色粘砂
- 15 2.5Y4/2 暗灰色粘砂
- 16 2.5Y3/2 黒褐色粘砂+10YR4/4 褐色粘砂(少量)でヤーン状
- 17 2.5Y3/2 暗灰色粘砂(19よりやや粘質)
- 18 2.5Y3/2 黒褐色粘砂
- 19 2.5Y3/2 黒褐色粘砂
- 20 2.5Y4/2 暗灰色粘砂
- 21 2.5Y4/2 暗灰色粘砂、こぶし大の礫が混じる
- 22 10YR4/3 にぶい黄褐色粘砂
- 23 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘砂
- 24 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘砂
- 25 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘砂、こぶし大の礫あり
- 26 10YR4/2 暗灰色粘砂(21よりやや粘質)
- 27 2.5Y4/2 暗灰色粘砂、こぶし大の礫が混じる
- 28 2.5Y3/2 17にハこぶし大の礫が混じる
- 29 5YR4/8 赤褐色粘砂
- 30 2.5Y4/1 黄灰色粘砂
- 31 上記3種がヤーン状になり、こぶし大の礫を含む
- 32 5Y3/2 暗赤褐色粘砂(φ3~10cm大の礫)
- 33 3cm以下の礫~こぶし大以下の礫が詰まる+2.5Y3/2 黒褐色粘質土が混じる
- 34 こぶし大~それ以上の礫が密に詰まる単体の層
- 35 10YR5/6 黄褐色粘砂(φ3cm~こぶし大の礫)
- 36 2.5Y3/1 黒褐色粘質土にφ3cm~こぶし大の礫が混じる
- 37 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘砂に少量の礫が混じり、20cm以上の少量の礫がまばらに埋入

- 36 2.5Y5/3 黄褐色粘砂、礫が多い
- 37 2.5Y3/2 黒褐色粘砂、礫が多い
- 38 2.5Y3/2 黒褐色粘砂
- 39 2.5Y5/1 黒褐色粘質土
- 40 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土(少量の礫)、φ5cm~こぶし大の礫が密に詰まる
- 41 2.5Y3/3 40に下層の粘土が多く入る
- 42 2.5Y3/2 黒褐色粘土
- 43 2.5Y3/3 黄褐色粘土
- 44 2.5Y4/6 44に褐色粘砂が混じる
- 45 2.5Y4/2 暗灰色粘砂+細砂にこぶし大の礫が混じる
- 46 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘砂
- 47 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
- 48 2.5Y3/1 黒褐色粘質土に2.5Y4/6 オリーブ褐色の砂少量混じる
- 49 10YR2/1 黒褐色粘質土
- 50 2.5Y3/1 黒褐色粘砂、やや粘質、52.57より砂を多く含む
- 51 2.5Y3/1 黒褐色粘質土に2.5Y3/2 オリーブ褐色粘質土(φ0.5~2cmの礫)
- 52 10YR 3/1 黒褐色粘砂、φ2~3cmの礫混じる下面に同色砂層
- 53 2.5Y3/1 黒褐色粘砂、やや粘質で51の砂が少量混じる
- 54 2.5Y2/1 黒褐色粘質土
- 55 10YR 3/2 黒褐色粘砂
- 56 2.5Y3/1~2/1 黒褐色~黒褐色粘質土(φ2cmほどの礫少量混じる)-5Y2/1 黒褐色粘質土+48
- 57 10YR2/2 黒褐色粘砂
- 58 2.5Y3/1 黒褐色粘砂、やや粘質
- 59 2.5Y4/1~3/1 灰黄色~黒褐色粘質土(水分多く含む)
- 60 2.5Y3/2 黒褐色粘砂
- 61 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘砂(φ2~15cmの礫多い)
- 62 2.5Y3/1 黒褐色粘質土に2.5Y5/6 黄褐色粘質土少量混じる
- 63 2.5Y2/1 黒褐色粘質土(水分多く含む)
- 64 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘砂
- 65 2.5Y4/1~3/1 黄灰色~黒褐色粘砂(水分多く含む)
- 66 10YR4/6 褐色粘砂(φ1~5cm)、腐植土
- 67 10YR3/1 黒褐色粘砂-2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土、礫(φ1~15cmまで)
- 68 2.5Y4/2 暗灰色粘砂、緻密
- 69 5Y5/2 灰オリーブ粘砂、礫混じる(φ2~5cm)

下層流路 (SD85) の自然堆積

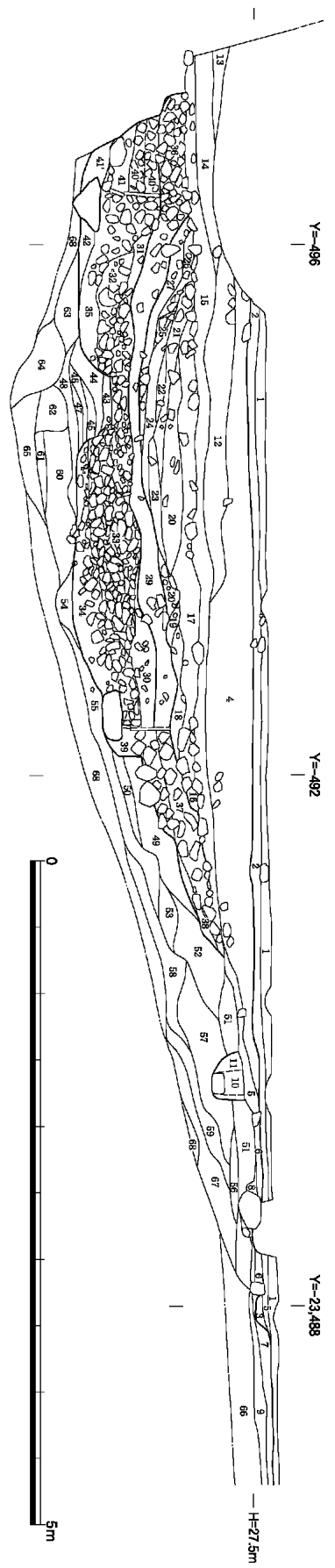


図73 SB79断面図 (1:50)

礎石を取り除き、焼土や整地層を掘り下げると、下層の東辺に3個の礎石および1箇所の礎石据え付け痕とその0.9 西側のそれぞれ礎石に対応する位置に柱穴を、さらに東柱筋南端から西2.4 のところに礎石があり、その南2.4 にも2列の東西石列を検出した。これらの礎石および柱穴の配置から約6 四方の母屋(3間)に東に庇(1.5)と縁(0.9)、南に庇(2.4)が付く建物が想定できる。また上下の建物は周囲の石列の内側におさまるような位置に建てられているが柱筋が異なることを確認した。以上のことから下層の御堂が火災に遭い、上層の建物はそれを再建したものであることが判明した。また整地層下部には礫を多量に用いた地業を検出している。地業は東西約5.7 、南北11.7 の掘形内に、横板と杭で東西約4 、南北6 の枠を組み、その中に砂質土と多量の礫を埋め戻している。整地層以下の土層堆積状況や、この木枠の東西中心が下層建物の母屋の東西中心と一致している点から、この地業は下層御堂の造営時に施行されたものと推定できる。

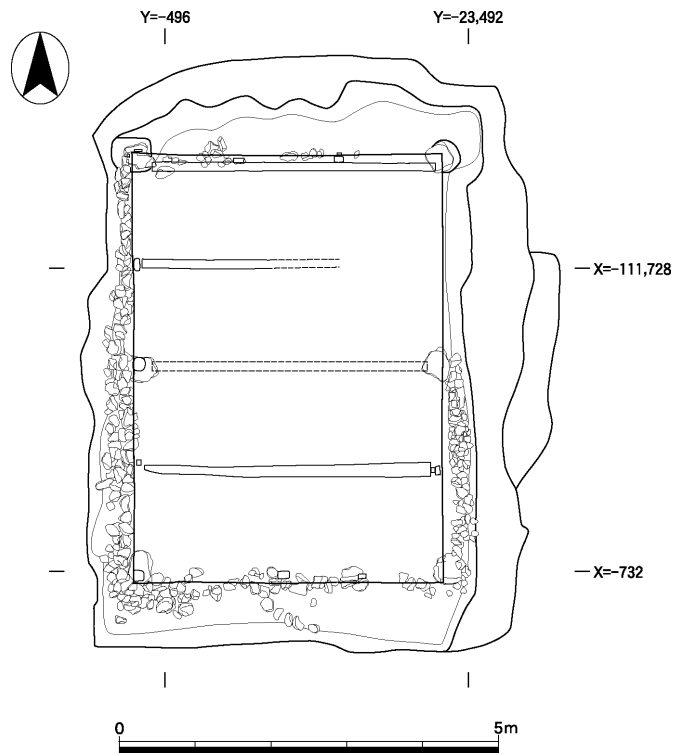


図74 SB79地業下部の構造(1:100)

SG26(図18、図版10・11・13) 六町南西部で検出した鎌倉時代の池。下層の湿地SX15が平安時代前期以降東側から整地されていったことは既に述べたが、その整地の範囲がどこまで及んでいたかを確認することはできなかった。ただ、この池の下層湿地からは平安時代前期の遺物は出土せず、この周辺は湿地の状態で放置されていた可能性が高い。池はそのような自然地形を利用して造られたものと思われる。東部の岸の状況は明瞭ではないが南岸では拳大の礫を用いた洲浜を検出し北岸では砂利を敷いた汀を確認している。池の大きさは南北の幅が約10 、東西は東岸がやや不明瞭であるがSK14の位置などから、およそ35 ほどと推定している。東西に長く南に緩やかに湾曲する形状が想定できる。池の深さは、さほどなく最も深いところでも岸から0.4 程度である。池の堆積土は暗灰褐色のシルト質の泥土で、土器類が集中して出土した箇所もある。

SX27(図75) SG26の中央東寄りに検出した南北2列に並ぶ石群。北列の東端には礎石が据えられていた。礎石は長径0.8 で上面に径0.6mの柱座が造り出されている。他の石は25~30cmのものが多く、このまま機能したのか礎石の根固めであったのかは不明であるが、池中に設置された何らかの施設の基礎部分と思われる。

SX28(図17) SG26北岸から約6 北に検出した石列。拳大の自然石を東西方向に並べている。途中で途切れる部分もあるが、約15 の長さにわたって確認した。

SX28(図17) SG26北岸から約6 北に検出した石列。拳大の自然石を東西方向に並べている。途中で途切れる部分もあるが、約15 の長さにわたって確認した。

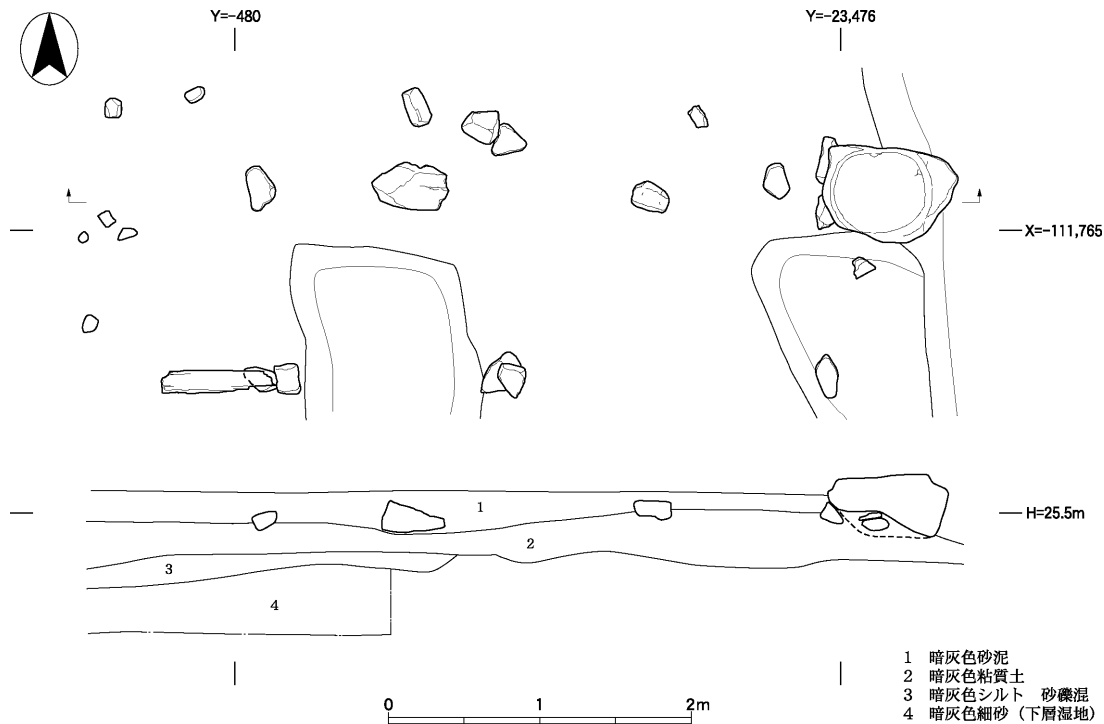


図75 SX27実測図(1:50)

SD29 六町南北中心付近に検出した東西方向の溝。東一・二行界付近で途切れている。幅1.5~1.6、深さ0.4、井戸SE31に切られている。平安時代後期(12世紀)の土器類が出土した。

SD70 六町南北中心に位置する東西方向の溝。南肩部を近世の耕作溝に切られているため正確な規模は不明だが、残存部で幅0.5、深さ0.15を測る。検出位置からみて六町を区画する施設の可能性があるが、周辺が土取りによって攪乱されており詳細は不明である。

SD73(図版23) 六町北東部に検出した南北方向の溝。SB72の西脇を通るが、時期は平安時代後期。途中で1ほど途切れている箇所があるが、総検出長は調査区北端から南へ約14。幅0.6、深さ0.1で、調査区北壁寄り土師器が重なって出土した。

SD74 14次調査区の西壁に検出した溝。六町南東隅の外側に位置し、楊梅小路北側溝の一部と考えられる。幅2.2、深さ0.35、土取りにより西坊城小路西側溝との関係は明らかではない。

SD80(図版32) 六町南北中心付近を通る東西方向の溝。御堂SB79北雨落ち溝の下部で検出した。東へ延長した位置にSD29がある。溝の断面形状や出土遺物の時期がSD29と共通し、一連の溝である可能性が高い。

SD81 SD80の北約3をSD80に並行して走る東西溝。幅は0.6、深さ0.3とSD80と比較して小規模であるが、ほぼ同時期の遺物が出土していること、SD80の北肩部が六町南北中心にほぼ揃うことなどから、両者が町内を通る道路の側溝の可能性もある。

SD82 六町中央部で検出した南北方向の溝。後述するSX84をよけるように蛇行している。南流して池SG26に注ぐものと考えられるが、取り付け部付近が近代の掘り込みで破壊されており、確認できなかった。規模は幅が0.3~1.0、深さ0.1~0.2と一定しない。

SX83 (図76) SD82の西に検出した2列の石列。
長径30cm前後の平らな自然石を3個ずつ南北に2列並べ据えている。性格は不明だが、石は東西・南北方向ともほぼ等間隔に配置されており、SX27と同様に何らかの施設の基礎部分であろう。

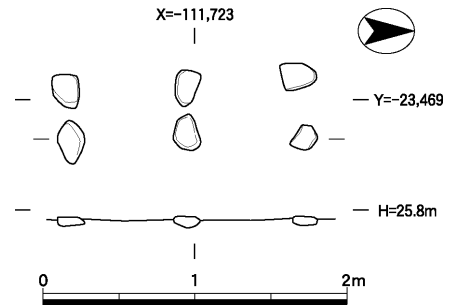


図76 SX83実測図(1:50)

SX84 19次調査2区で六町中央部に検出した矩形の掘り込み。南北長12で南北および西辺を検出したが、東は調査区外へ延びる。各辺とも直線的で、ほぼ垂直に掘られている。この内側に焼土と土器の細片を含む固く締まった茶灰色砂泥が均一に堆積しており、掘り込み地業の可能性ある。南と北の辺がSB79のそれぞれの辺とほぼ揃っている。東方の9次調査1区でも、19次調査ほど範囲は明確ではないが、調査区西部に同様の焼土と細かな土器片を含む整地状の堆積を確認しており、それと関連づければ、六町中心部に南北端をSB79と揃えた施設が存在したことが想定できる。

SK14 (図77) 六町の東西ほぼ中央南部、SG26の東で検出した土壌。東西約1、南北0.7で、土壌内には礫・瓦片・土器片を多量に含む暗褐色砂泥が堆積していた。

SK23 六町の南東部、SB16の南西隅付近に位置する。東西約8、南北8以上で平面形は不整形、深さは0.25前後の浅い落ち込み状の土壌である。平安時代末頃の土器類や瓦類が出土した。

SK33 SE30の北約9に位置する径0.7の円形土壌。深さは0.2と浅いが、土壌内に土師器が充填された状態で出土した。時期は鎌倉時代に属する。

SD85 六町西部を北東から南西方向へ流れる川跡。川幅は約3~9と一定しないが、南部ではさらに広がるようである。深さは最も深い部分で約1.8。水分を含んだ腐植土やシルト・砂層が重層して堆積している。SB79はこの川跡上に建てられており、中央の地業は軟弱なこの川の堆積層を取り除き、地盤改良を施したものである。弥生土器らしき土器片が少量出土しており、平安時代以前の川と思われるが、厳密に特定できない。

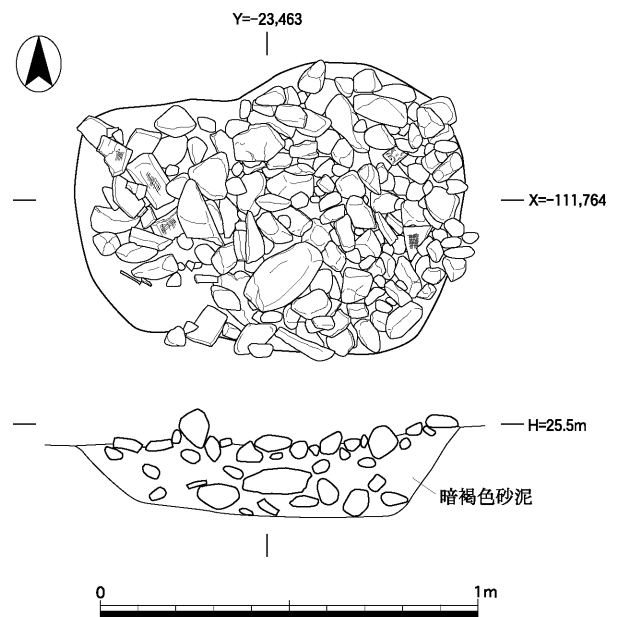


図77 SK14実測図(1:20)

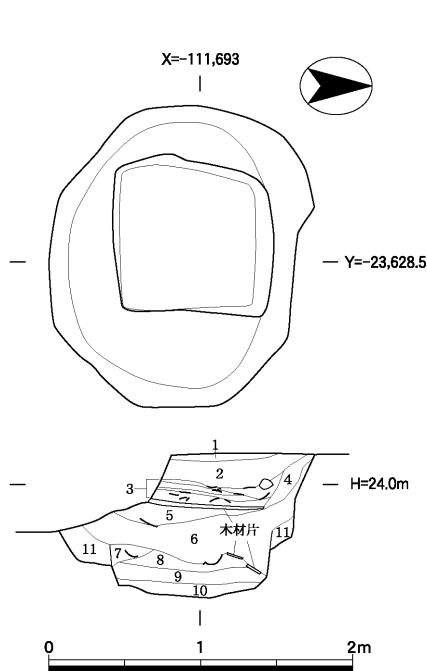
SE75 (図版24) 西坊城小路と楊梅小路の交差部で検出した近世の井戸。掘形は径約1.5の円形。最下段に曲物を据え、その上に両端を相欠きにした幅約12cmの板で方形の木枠を造り、さらにその上部に石を組み上げる。江戸時代の陶磁器が少量出土した。

(5) 右京六条一坊十一町の遺構

SB49 十一町東端付近に位置する東西1間×南北2間の掘立柱建物。柱間は東西2.4 (8尺) 南北は北から1.5 (5尺) 2.1 (7尺)。柱掘形0.3 前後の小規模な建物である。西に近接して井戸SE52があり、関連施設と思われる。

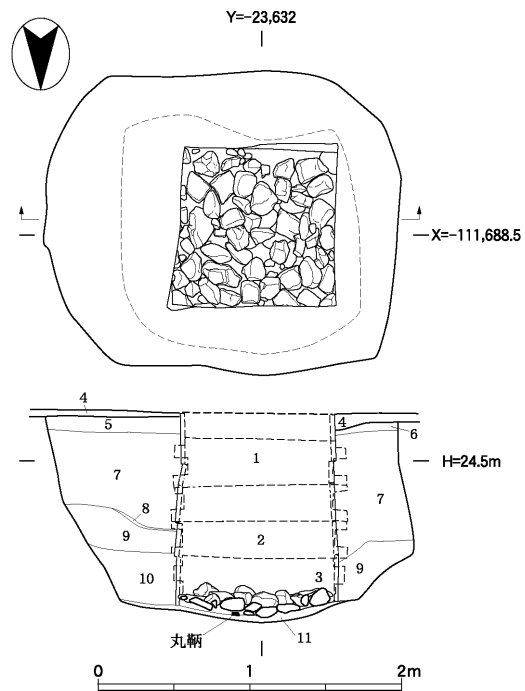
SE50 (図78) 十一町北西1/4の中央やや東寄りに位置する井戸。部材がほとんど残存しておらず構造は不明であるが、掘形最下部に一边1 ほどの方形の窪みがあり、また下層の堆積土中に板状の木片が含まれていることなどから方形の木枠組が想定できる。上層部に木炭や炭化物を多く含む土層(層3)が堆積し、9世紀前半の土器類が多量に出土した。この層以下に50cm程度のあまり遺物を含まないシルト層の堆積が数層認められる。井戸が廃絶し、しばらく放置されたのちに土器類が投棄されたものと考えられる。

SE51 (図79、図版20) SE50の北西約15 に検出した井籠組みの井戸である。木枠そのものは腐食し、ほとんど残存していなかったが、周囲の壁に材の形状が転写されており、構造が復元できた。井戸側は幅25~30cmの板材の両端を相欠きにして一边1.1 の方形の枠を造り重ねている。枠は5段分を確認した。底部には径15cmほどの川原石を敷き詰めている。石敷きの上部からは9世紀末頃の土器類が良好な状態で、また石敷きの下から白色の丸靱が出土した。丸靱は井戸中央付近の石の下で表面を上にはほぼ水平な状態で出土しており、石の隙間から落ち込んだもので



- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1 赤褐色砂泥 (鉄分多い) | 7 淡褐色砂 |
| 2 灰褐色砂泥 土器片混 | 8 黒色炭化物 |
| 3 黒色の炭化物と灰色粘質土の互層 | 9 暗灰色シルト |
| 4 灰色砂泥 | 10 茶褐色砂礫 |
| 5 灰色シルト (均質) | 11 灰色シルト礫混 (掘形) |
| 6 青灰色シルト | |

図78 SE50実測図 (1:50)



- | | |
|-------------------|-------------------------|
| 1 茶褐色砂泥 | 7 淡黄灰色と暗灰色の粘質土がマール状に混じる |
| 2 暗灰色粘質土 | 8 褐色砂 |
| 3 暗青灰色シルト | 9 暗灰色粘質土 黄灰色粘土混 |
| 4 褐色泥砂 土器片混 (整地層) | 10 黄褐色砂礫 暗灰色粘質土混 |
| 5 灰褐色砂泥 | 11 黄褐色細砂礫 |
| 6 暗灰褐色砂泥 | |

図79 SE51実測図 (1:50)

はなく石が敷かれる時点で埋設されたものと考えられる。また、この井戸の周辺部では厚さ5cmほどの整地層が認められたが、井戸枠はこの層の上面で、掘形はこの層を除去した段階で検出した。したがって整地は井戸が造られた時あるいはその後に施されたものといえる。この整地層には井戸内から出土した土器群より古い型式に属する9世紀後半の土器が含まれており、井戸の使用期間を推定することができる。

SE52 (図80、図版20) 十一町東端付近、SB49の西に検出した井戸。最下段の方形木枠痕跡が残存していたが、構造の詳細は不明である。南東部の建物SB12と関連するものとみられる。9世紀末頃の土器類が少量出土した。

SD53 (図版20) 十一町東部で検出した川跡。下層で縄文土器や古墳時代の須恵器が出土している。六町のSX15と同様に平安時代前期には湿地状となり、上部に整地されたようである。整地の時期はSX15よりやや新しく、出土遺物は9世紀中頃～後半のものが多い。

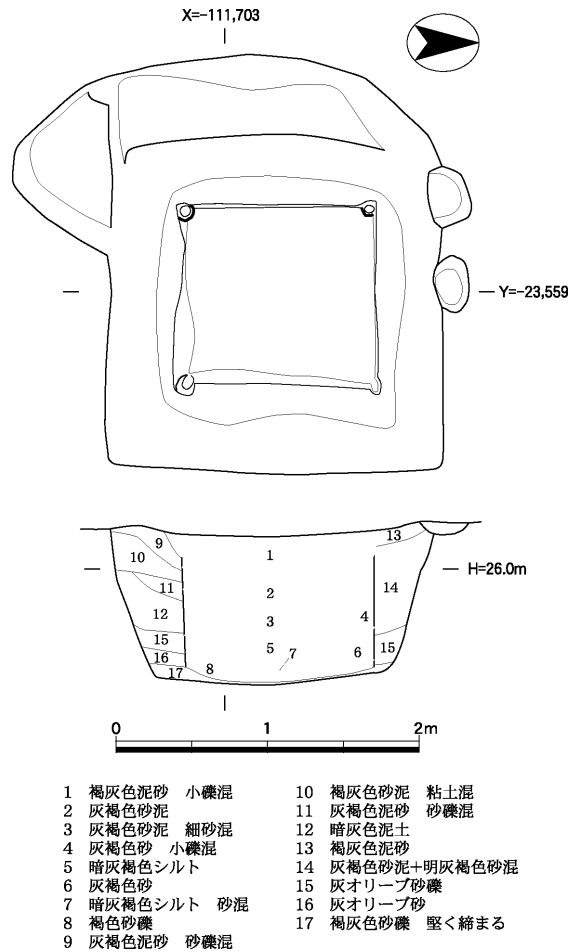


図80 SE52実測図 (1:50)

(6) 右京六条一坊十四町の遺構

SD34 (図81) 十四町西半部で検出した古墳時代から平安時代後期の川跡。概ね北東から南西方向に向かう流れを形成しているが、堆積は複雑で局所的には北西から南東へと大きく蛇行した状況を示す部分や下層流路を斜めに横切って流れていた痕跡も認められた。最下層では古墳時代の遺物を含む層も随所で確認できたが、大部分の堆積が平安時代前期以降のものである。東岸寄りの堆積(流路1)が平安時代のものとしては最も古く、9世紀前半の遺物を多量に含む。流路堆積の全般的な傾向としては流れの中心が漸時西側に移動していったようで、遺物の時期も大筋では西に行くほど新しくなる。しかし、重複状況は複雑で、整地され一旦陸化した部分に再び流路が移動し削平を受けたところも見受けられた。調査区西端の流路5が最も新しく、12世紀代の土器・瓦などが出土している。十四町北部の11次調査4区で検出したSD65はこのSD34流路1～3の上流にあたる。

SD35 (図82、図版16) 楊梅小路北側溝。幅0.9～1.1、深さ0.2～0.3。平安京造営当初にはSD34の流路1が十四町内を流れており、その時点ではSD34に流入していたようである。7次

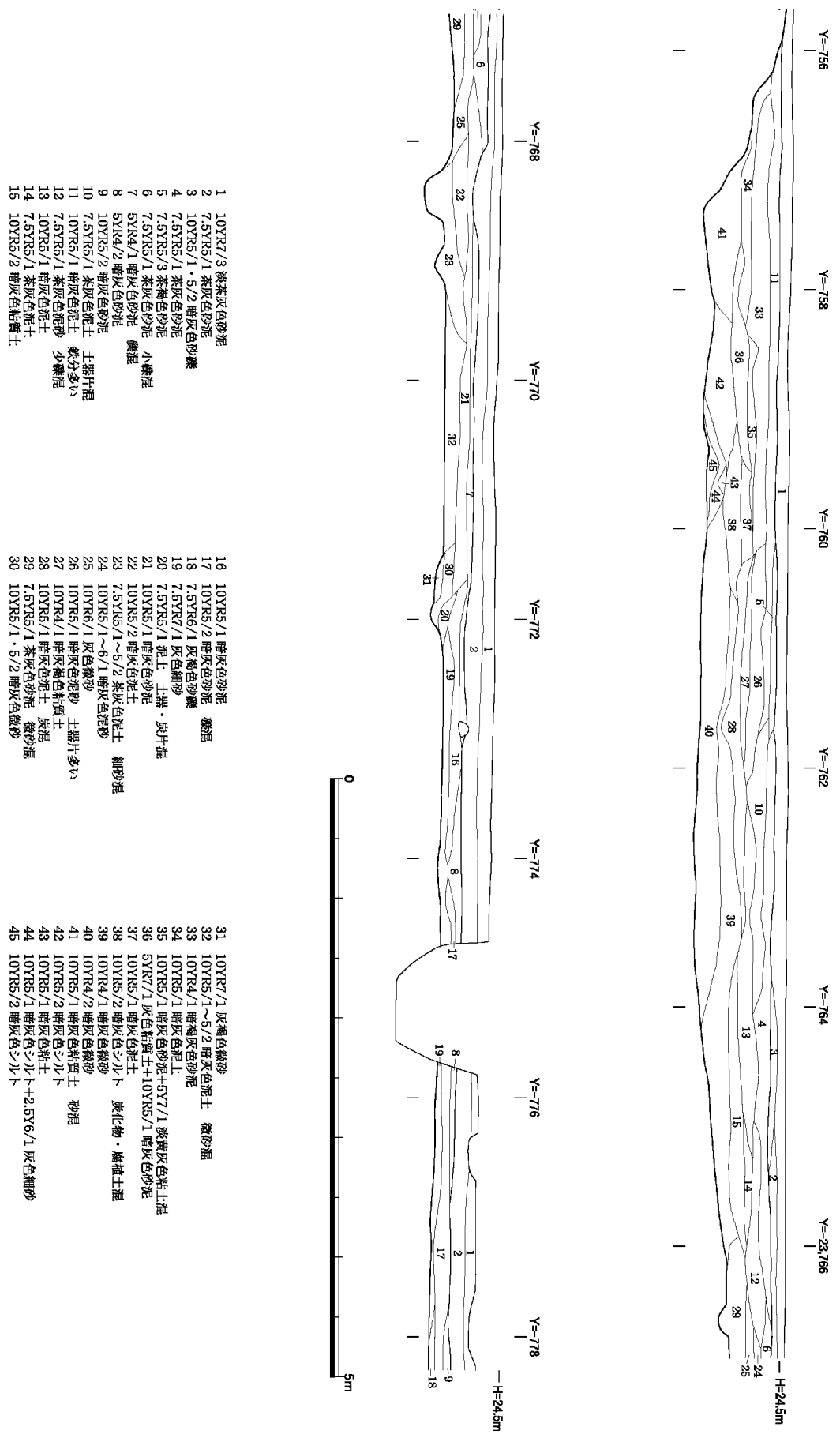


图81 SD34断面图 (1 : 50)

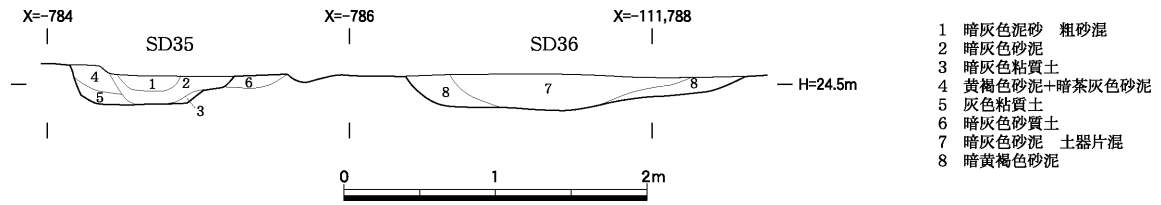


図82 SD35・SD36断面図(1:50)

調査で検出した南側溝では流入部に板で囲んだ施設が造られており、楊梅小路がSD34によって途切れていたことを示している。9世紀後半には東からSD34を埋め戻して小路や側溝は西に延長されているが、再び新しい流路に西側を削平されている。平安京内に造営後しばらくの間、町や小路を横切って流れていた自然河川が残っていたことを示す興味深い例である。

SD36(図82、図版16) SD08の南側に位置する東西方向の溝。すでに7次調査で検出していたものだが、10次調査でも東側の延長部を追認した。幅2.4、深さ0.2。SD35と同様に楊梅小路北側溝と思われるが、両者の遺物に大きな型式差がなく前後関係は不明である。

SD37 東三・四行界のわずかに東に位置する南北方向の溝。SD08に接続している。北へは約10m確認できたが、それ以北は後世の流路によって削り取られており不明。幅0.3、深さ0.1。

SB41・SB42(図版17) 十四町南西部で検出した2棟の掘立柱建物。規模は同一で、柱筋も揃う。柱間は南北3間、北から1.8(6尺)、1.8(6尺)、2.7(9尺)。東西は1間2.7(9尺)である。柱掘形は0.6前後。上部が流路により削平されており、柱穴は深さ0.1弱残っていただけである。東南側の遺構群に対してSD34(流路1)を挟んだ位置に東西に並ぶ。柱筋が東偏する。

SB43 SB42の南方約12に3.0(10尺)の間隔で東西1間分の柱跡を検出した。北八門のほぼ中央に位置しており、柵の一部かもしれない。

SA44 SD34の東に検出した柵。南北に2.25(7.5尺)等間で5間、北端で東に方向を変える。

SA45 SD34東肩からSE39の北側を通る柵。東西方向に3間を検出。柱間は2.25(7.5尺)等間で、大きく東偏する。

SA46(図版16) SD34の東肩に沿って並ぶ柵列。4間分検出した。柱間は北2間が2.1(7尺)、南2間は2.4(8尺)。この位置はSD34(流路1)が最も深くなっている部分に対応している。

SA48 SD35北肩沿いに十四町南限に並ぶ東西方向の柱列。柱間は不揃いで東から3.6(12尺)、3.0(10尺)、2.1(7尺)、3.0(10尺)。

SB54(図版17) 十四町北東域で検出した掘立柱建物。東西5間×南北2間で柱間は東西の両端が2.7(9尺)ほかは2.4(8尺)、南北は2.7(9尺)等間。柱掘形は0.9~1.1の方形、柱根が残る柱穴もある。

SB55(図版17) SB54と重複する掘立柱建物。北側柱筋の東西5間と南に1間分検出した。柱間は梁・桁ともに2.55(8.5尺)等間。柱掘形は0.9前後の方形。

SB56 SB54の西に検出した東西2間の小柱穴。柱間は1.5（5尺）で、柱掘形は0.3~0.4の円形。SB54の北側柱筋に揃っており、付属する小建物と考えた。

SB57 SB56に南接する東西一对の柱穴。柱間は2.4（8尺）。柱掘形は0.8の方形。周囲に関連する柱穴は無く、性格は不明である。SB56を切っている。

SB58 SB54の北東部に位置する掘立柱小建物。南北2間×東西1間で、柱間は2.1（7尺）等間、東西3.3（11尺）柱掘形は0.3の方形。

SA59（図版17） SB54およびSB55と重複する柵。東西5間と西端から南に折れる1間を検出した。柱間は2.1（7尺）等間。柱掘形は0.6~0.7の方形。

SA60 SB54西側に検出した東西2間の柱穴。柱間は2.1（7尺）等間。柱掘形は0.4前後の円形。SB55の北側柱筋を東に延長した位置にあるが、柱筋が東偏している。

SA61 SA60の北約6に検出した東西2間の柱穴。柱間は1.5（5尺）等間。柱掘形は0.7前後の方形。各柱穴の0.5南に0.4の柱穴が対応して並ぶ。

SA62 SA61を横切る南北方向の柵。柱間は2.4（8尺）等間。柱掘形は0.2前後の円形。

SA63 SA59東端部を横切る南北方向の柵。2.4（8尺）等間3間分を検出したが、北から2つ目の柱穴は基礎跡のため未確認。柱掘形は0.2前後の円形。

SA64 SB58北部に位置する東西方向の柵。5間分検出した。西1間が1.5（5尺）他は1.8（6尺）等間。南2.4（8尺）に柱間が揃う柱穴列が2間分あり東西方向の小建物の可能性もある。柱掘形は0.2~0.4前後の円形。

SE38（図22） SB41の南に位置する方形木枠組の井戸。北半を埋設管の掘形、上部は流れによって削平を受け、底部から約30cm残存していた。木枠は最下段の南辺と西辺の一部、約0.6が残る。

SE39（図版16） 十四町南端付近に位置する井戸。掘形は上部が東西3、南北2.7、下部では径1.3の円形になる。縦板が内側に倒れ込んだ状態で検出されたが、底部付近の部材の分布状況や、横棧などの支持材が検出されなかったことから、径1程度の円形板組の井戸と推定した。同様の構造の井戸は2次調査（五町）でも2基検出している。9世紀前半の土器類が出土した。

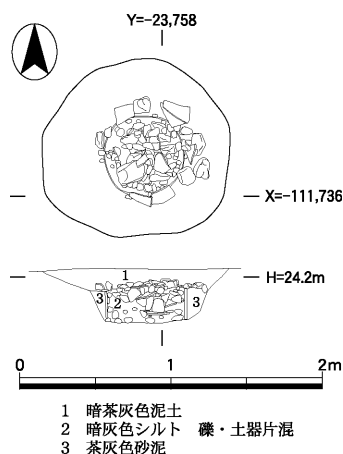


図83 SE40実測図（1：50）

SE40（図23・83） 十四町西半の南北中央やや北寄りに検出した井戸。底部の曲物だけが残る。上部構造は流路によって不明。9世紀初頭の土器類が出土した。

SK47 SE40の南約3に位置する径1.2、深さ0.2の土壇。南西の一部をSD34（流路2）に削られている。9世紀初頭の土器類が出土した。

SD66（図版21） 十四町東限推定位置に検出した南北方向の溝。検出位置から西櫛笥小路の西側溝かと思われたが、遺物の時期は平安時代末頃に属し、逆台形を呈する断面形状も通常の小路側溝と比較すると異質である。幅2.2、深さ1.2。

表2 遺構概要表

地区	時代	平安時代以前	平安時代前期	平安時代後期	平安時代末～鎌倉時代	江戸時代
左京六条一坊	一町			朱雀大路東側溝 SD01 樋口小路北側溝 SD03	朱雀大路東側溝 SD02 樋口小路北側溝 SD04 坊城小路西側溝 SD05 井戸 SE06	土取り跡
	二町			朱雀大路東側溝 SD01	朱雀大路東側溝 SD02 樋口小路北側溝 SD04	井戸 SE07 土取り跡
朱雀大路					路面 SF08	土取り跡
右京六条一坊	三町		井戸 SE68 溝 SD77	井戸 SE76	西坊城小路東側溝 SD78	御土居濠 SD67 土取り跡
	四町					土取り跡
	六町	湿地 SX15下層 川 SD85	掘立柱建物 SB09 掘立柱建物 SB10 掘立柱建物 SB72 柵 SA11 柵 SA12 井戸 SE13 湿地・整地 SX15 ピット Pit69	西坊城小路西側溝 SD25 掘立柱建物 SB16 掘立柱建物 SB17 掘立柱建物 SB18 門 SB20 柵 SA19 溝 SD29 溝 SD70 溝 SD73 溝 SD74 溝 SD80 溝 SD81 井戸 SE21 井戸 SE22 井戸 SE30 井戸 SE31 井戸 SE71	西坊城小路西側溝 SD24 御堂 SB79 地業? SX84 池 SG26 礎石列 SX27 石列 SX28 石列 SX83 溝 SD82 井戸 SE32 土壌 SK14 土壌 SK23 土壌 SK33	井戸 SE75 土取り跡
	十一町	川 SD53	掘立柱建物 SB49 井戸 SE50 井戸 SE51 井戸 SE52			
	十四町		楊梅小路北側溝 SD35 楊梅小路北側溝 SD36 掘立柱建物 SB41 掘立柱建物 SB42 掘立柱建物 SB43 掘立柱建物 SB54 掘立柱建物 SB55 掘立柱建物 SB56 掘立柱建物 SB57 掘立柱建物 SB58 柵 SA44 柵 SA45 柵 SA46 柵 SA48 柵 SA59 柵 SA60 柵 SA61 柵 SA62 柵 SA63 柵 SA64 川 SD34・SD65 溝 SD37 井戸 SE38 井戸 SE39 井戸 SE40 土壌 SK47		溝 SD66	

3. 遺物

今回報告する遺物の時期を大きく区分すると、平安時代以前・平安時代前期・平安時代後期から鎌倉時代・江戸時代の4群に分けることができる。平安時代以前の遺物には縄文土器・弥生土器・古墳時代の土師器・須恵器のほか、石器・石製品がある。これらの遺物は近世の土取り跡に混入していたもの以外、ほとんどが平安時代の遺構下層に検出した旧流路や湿地など自然堆積の中から出土したもので、明確な遺構に伴うものはなく、量もわずかである。平安時代前期の遺物は湿地や河川を埋め立てた整地層・井戸・土壌などからまとまった土器群が多数出土している。これらの遺物の属する時期は、平安京造営時から概ね9世紀いっぱいまでで、平安時代中期から後期前半にあたる10・11世紀の遺物は皆無に近い状態である。その空白期を経て平安時代後期後半から鎌倉時代にかけての遺物群が、左京側や御堂を検出した六町など、皇嘉門大路以東に集中して出土する。この地域が平安時代後期頃に再開発されたことを示すものであろう。鎌倉時代後期以降再び空白期間があり、次に出土するのは江戸時代の遺物である。しかし、この時期の遺物は、平安・鎌倉期のものに比べ量的にはわずかである。すべての調査を通じて出土した平安時代以降の土器類の総量は破片数にして285,786片にのぼる。各調査単位での数量と種類の概略は下表に示した。以下では主要な遺物について時期を追って概説する。

(1) 平安時代以前の遺物

SX15下層出土土器(1~42)(図84、図版44・45、附表1) 縄文土器(1・2・38~41)、弥生土器(3~14・37)、古墳時代の土師器(15~20)、須恵器(21~36・42)がある。18の台付き甕と21~34の須恵器が近接した地点で出土した以外は、流路堆積の砂層や腐植土層から散発的に出土している。縄文土器は口縁部や体部上方に刻み目凸帯を付す深鉢が主で、ほかの器形はほとんどない。京都盆地では弥生前期の土器と共伴する例が多い。弥生土器は前期から後期にかけてのものがある。総量は多くないが、中期のものが中心である。古墳時代の土器類は5世紀末から6世紀代のものが主体をなし、それより新しいものは出土しない。

表3 出土遺物の概略表

	HK5	HK6	HK7	XF8	XF9	XF10	XF11	XF13	XF14	XF15	XF16	XF17	XF18	XF19	総数
土師器	14,586	322	560	30,510	25,791	44,770	21,517	30,561	2,537	4,160	1,018	5,108	18,882	40,301	240,623
黒色土器	-	-	-	257	90	844	638	47	-	-	-	2	40	9	1,927
瓦器	300	22	68	-	656	597	36	499	262	214	37	219	1,121	653	4,684
須恵器	391	69	115	2,625	1,546	8,807	5,224	1,737	454	397	134	66	2,177	929	24,671
緑釉陶器	-	7	1	379	148	541	718	110	-	-	-	4	12	12	1,932
白色土器	-	-	3	1	6	1	6	10	5	6	-	13	56	11	118
灰釉陶器	-	8	1	228	101	524	450	157	-	-	-	11	13	2	1,495
国施釉陶器	9	8	19	-	56	137	86	272	15	-	4	20	134	38	798
焼締陶器	61	25	103	-	305	284	55	310	48	7	73	227	959	136	2,593
輸入陶磁器	95	31	87	154	448	398	90	936	113	243	66	223	983	280	4,147
その他	-	1	-	137	331	288	381	100	58	248	53	220	976	5	2,798
総数	15,442	493	957	34,291	29,478	57,191	29,201	34,739	3,492	5,275	1,385	6,113	25,353	42,376	285,786

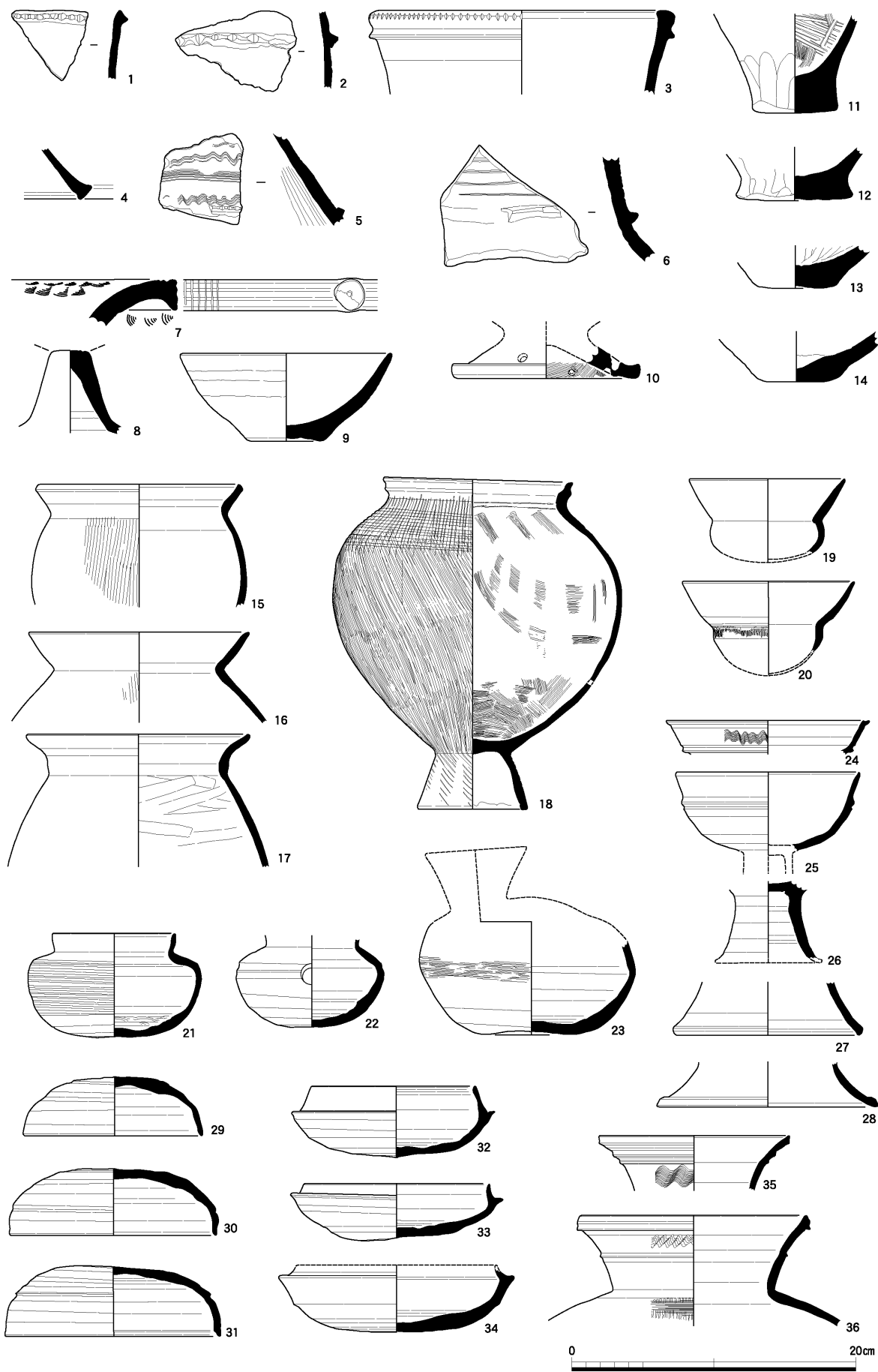


图84 SX15下層出土土器実測图(1:4)

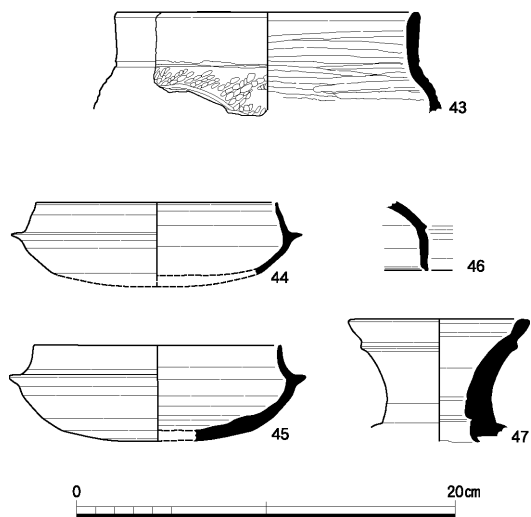


図85 SD53下層出土土器実測図(1:4)

SD53下層出土土器(43~47)(図85、図版45、付表2) 縄文土器(43)、古墳時代の須恵器(44~47)がある。縄文土器は流路最下層から後期の浅鉢が1点出土した。須恵器はそれより上層の腐植土や砂層から出土しているが、量は少ない。飛鳥・奈良時代の遺物が全く無い点はSX15と同様であるが、遺物の密度は低く、分布もより分散的である。

石器・石製品(48~53)(図86、図版46) 尖頭器(48)、石斧(49)、砥石?(50)、石包丁(51・52)、石製模造品(53)が出土した。48は江戸時代の土取り跡に混入していたものである

が、49・50・52・53がSX15下層、51がSD34の下層からの出土である。48は透明感のある灰色チャート製で、基部と先端部がわずかに欠損しているが、ほぼ完全な状態である。49は刃部が失われているが、大型蛤刃石斧と思われる。石材は白い斑晶を含んだ安山岩。50は黒色の泥岩あるいは粘板岩で、片面が平坦に磨滅し、多数の擦過痕が認められる。砥石として使用されたものか。51は粘板岩製の石包丁。残長が23cmを超える大型品である。刃部は内湾する。背部が幅10cmほど突出し、2箇所径5mmの孔をあける。52も粘板岩製だが、51より硬質である。背部の小片であるが、2箇所の孔が確認できる。53は滑石製の剣形模造品。片面に鑄をつくり、基部に小孔をあける。

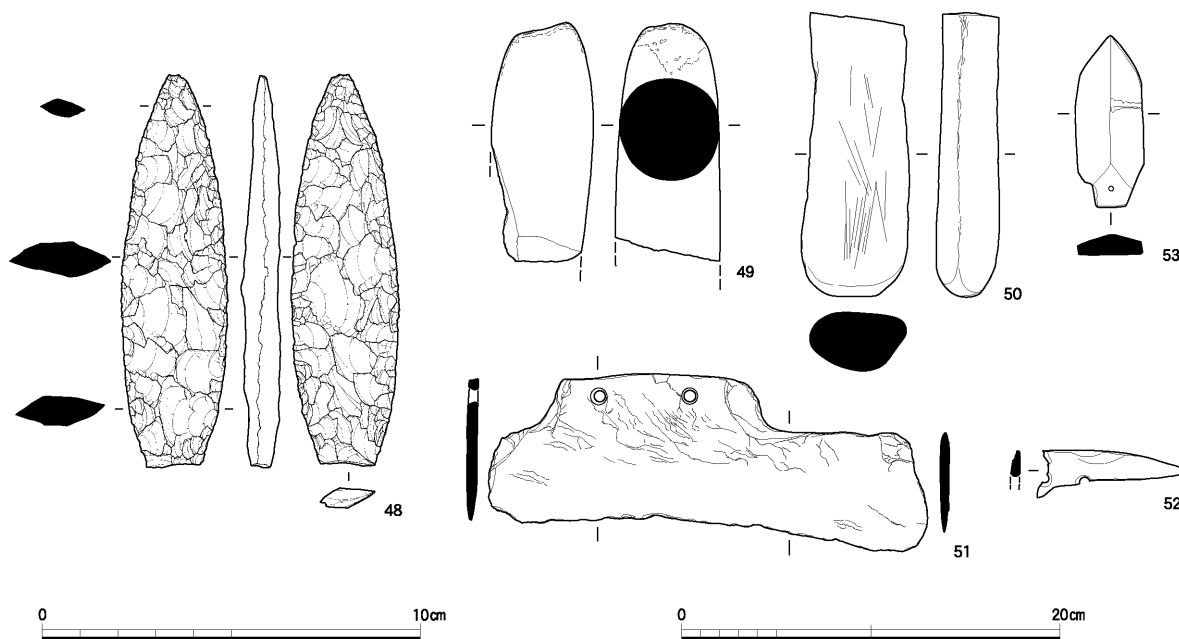


図86 石器・石製品実測図(48は1:2、他は1:4)

(2) 平安時代前期の遺物

SE13出土土器 (54 ~ 74) (図87、図版46 ~ 48、表4、付表3) 井戸内中層からまとまって出土した土器群である。土師器椀A (54・55) ・杯A (56) ・皿C (57) ・皿A (63・64) ・皿A (58 ~ 62) ・杯B (65) ・甕 (66) ・壺E (67) ・高杯 (68・69) 須恵器鉢D (72) ・壺M (70) ・壺L (71) ・壺E (73) ・杯蓋 (74) このほか小片で図示していないが、黒色土器杯などがある。右表中の緑釉陶器と灰釉陶器は最上層からの出土で、井戸が完全に埋没した後の遺物であり、中層の土器群とは異なる時期のものと思われる。皿Cを除く土師器椀皿類の外表面はすべてヘラケズリ、壺Eや高杯杯部外面にはケズリの後、ヘラミガキが施されている。杯Bは器表が磨滅し、明確ではないがやはり外面をヘラミガキしているようである。甕は内外面ともにハケメ調整を施すが、外面にはその下にタタキ成形の痕跡が残る。須恵器は全体に量も少なく、細片になったものが多い。図示したものが比較的形をとどめるもので、壺類が多く、食器類はわずかで、74の杯蓋も硯として使用されている。9世紀初頭の土器群。

表4 SE13出土土器類の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	杯・椀・皿	945	87.9%
	高杯・盤・鉢	36	3.3%
	甕・釜・鍋	81	7.5%
	その他	6	0.6%
	不明	7	0.7%
	小計	1075	100.0%
黒色土器	杯・椀・皿	69	95.8%
	甕	3	4.2%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	72	100.0%
	須恵器	杯・椀・皿	24
壺・瓶		44	37.0%
鉢		12	10.1%
甕・大型壺		28	23.5%
その他		0	0.0%
不明		11	9.2%
小計		119	100.0%
緑釉陶器		杯・椀・皿	3
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	3	100.0%
	白色土器	杯・椀・皿	0
高杯		0	-
盤		0	-
その他		0	-
不明		0	-
小計		0	-
灰釉陶器	杯・椀・皿	7	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	7	100.0%
	輸入陶磁器	杯・椀・皿	0
壺・瓶		0	-
その他		0	-
不明		0	-
小計		0	-
他		その他・不明	1
総数		1277	100.0%

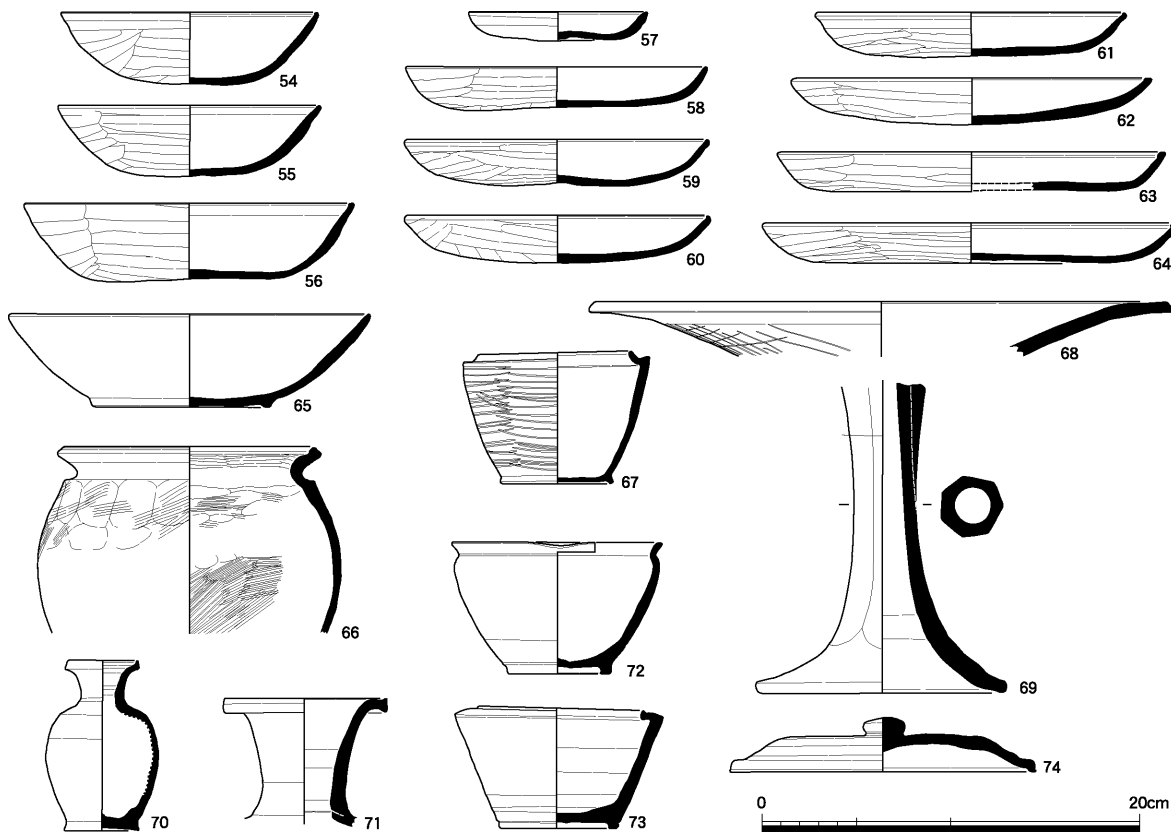


図87 SE13出土土器実測図 (1 : 4)

表5 SD77出土土器類の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	杯・碗・皿	642	94.1%
	高杯・盤・鉢	2	0.3%
	甕・釜・鍋	37	5.4%
	その他	0	0.0%
	不明	1	0.2%
	小計	682	100.0%
黒色土器	杯・碗・皿	10	100.0%
	甕	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	10	100.0%
須恵器	杯・碗・皿	8	25.0%
	壺・瓶	12	37.5%
	鉢	0	0.0%
	甕・大型壺	10	31.2%
	その他	0	0.0%
	不明	2	6.3%
	小計	32	100.0%
緑釉陶器	杯・碗・皿	0	-
	壺・瓶	0	-
	その他	0	0.0%
	不明	0	-
	小計	0	-
白色土器	杯・碗・皿	0	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	0.0%
	不明	0	-
	小計	0	-
灰釉陶器	杯・碗・皿	0	-
	壺・瓶	0	-
	その他	0	0.0%
	不明	0	-
	小計	0	-
輸入陶磁器	杯・碗・皿	0	-
	壺・瓶	0	-
	その他	0	0.0%
	不明	0	-
	小計	0	-
他	その他・不明	15	2.0%
総数		739	100.0%

SD77出土土器 (75~99)(図88、図版48、表5、付表4)

総数は739片と多くないが、SE13の土器群と同様に9世紀初頭のまとまった土器群である。9割以上を土師器が占め、須恵器・黒色土器はわずかである。

土師器には碗A(75~80)・杯A(82~84)・皿A(87~90)・皿A(86)・盤(91)・甕(92・93)のほか河内系と思われる杯(81)・皿(85)などがある。須恵器には杯蓋(94・95)・杯B(96)・壺G(97)・壺M(98)・壺L(99)がある。81・85以外の土師器食器類の外表面調整はヘラケズリのもので主体を占める。甕は底部までわかるものは無いが、ハケメ調整を施すものが多い。81・85は平安京から出土する通常の土師器とは異なり、胎土や口縁部の形態、口縁部のナデ調整など制作技法に河内産の土師器との共通点が多く認められる。須恵器は破片数で見れば食器類より壺類の方が多いが、小片になったものが大半で、図示したもの以外は形態が判明する資料は少ない。黒色土器は杯が出土しているが、小片で図示できない。いずれも内面だけを黒色化し、暗文を施すものである。

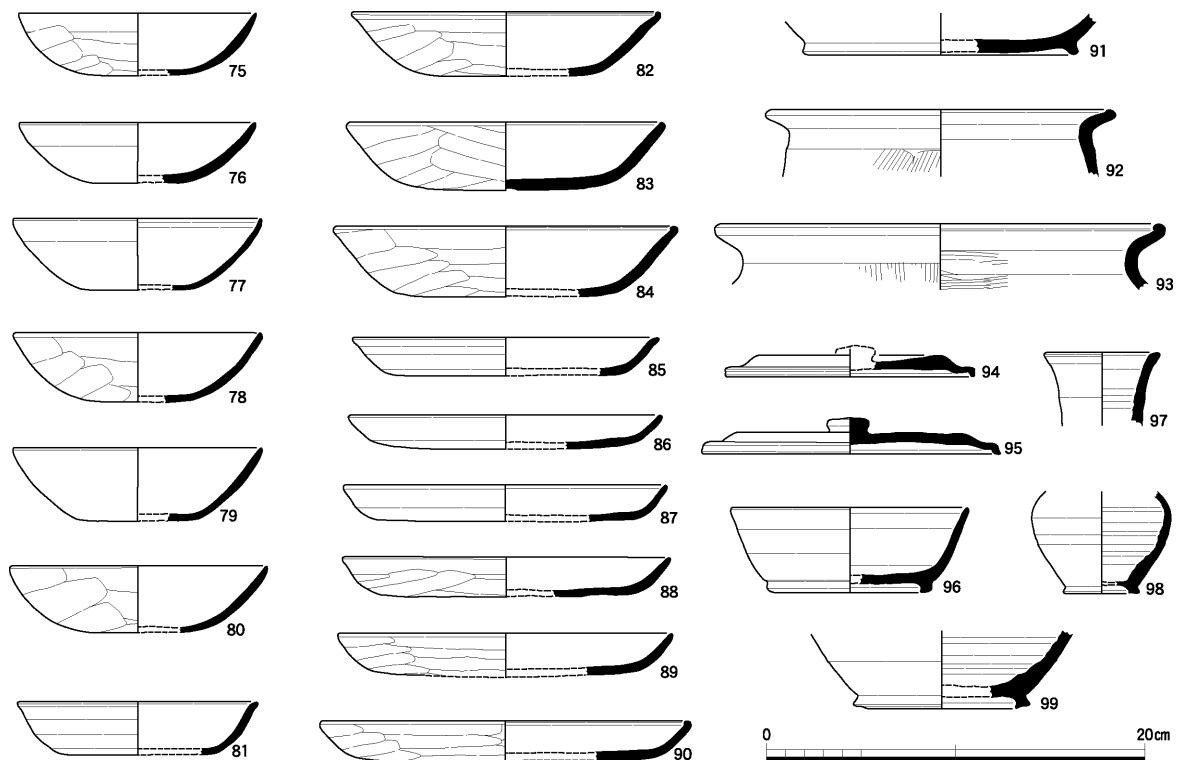


図88 SD77出土土器実測図(1:4)

SE39出土土器(100~109)(図89、表6、付表5) 総量は多くないが、井戸底からまとまって出土した。土師器椀A(100)・皿A(102)・杯A(103)・河内系の皿(101)・杯(104・105)須恵器杯B(106)・壺A(107)・壺L(108・109) 黒色土器杯・甕などがある。河内系のものを除いた土師器食器類の外面調整は基本的にヘラケズリである。101は底部オサエ、口縁部を底部近くまでナデ調整を施す。104・105は外面オサエ調整の後、粗いヘラミガキ、内面には雑な螺旋暗文を施す。104・105の胎土は粒子がやや粗く暗赤褐色を呈するが、101は淡黄灰色で細粒の胎土を用いている。須恵器は少なく、食器類では106以外形態を復元できるものはない。

SE50出土土器(110~151)(図90、図版49・50、付表6、表7) 総数6,163片の土器類が出土している。土師器椀には椀A(110~117)・皿A(118~123)・皿A(124~126)・杯A(127~131)・河内系の杯(134・135・138)・皿(136・137・139~141)・椀(132)・杯B(133)・甕(142~144)・製塩土器(145)がある。椀Aに外面に粗いヘラミガキを施したもの(110・

111)が少量あるが、それ以外は河内系の食器類を除けばすべて外面ヘラケズリ調整である。河内系と思われる食器類には胎土が暗褐色から暗赤褐色を呈するもの(132~138)と明灰褐色を呈するもの(139~141)の2群が認められる。形態的にも特徴差があり、別生産地の製品群と思われるが、いずれの群も平安京で主流を占める土師器とは異なる特徴を持つ。132と133の外面は粗くヘラミガキされ、133の内面には3段の螺旋暗文が施されている。甕類の外面は基本的にはハケメ調整である。内面にはハケメ痕跡と、コテ状工具の痕跡を持つものがある。145の製塩土器は平安京出土のものとしては全体の形状がわかる貴重な資料である。砂粒を多く含む粗い胎土で、外面には強くオサエ痕が、内面には縦方向にナデ痕跡が残る。黒色土器には杯(147)のほか甕が少量あるが、いずれも小片である。147の内面は丁寧にヘラミガキされ、暗文を配している。須恵器は非常に少なく、食器類には形態を復元できるものはない。壺M(148)・短頸壺(149)・鉢D(150)・円面硯(151)を図示した。緑釉陶器・白色土器が上層から少量出土しているが、いずれも細片で層位的にも主体をなす土器群に伴うものではない。しかし、土師器食器類の形式的特徴には、SE13やSD77と比較すればやや後出的な要素が認められ、この土器群の示す時期に近い時

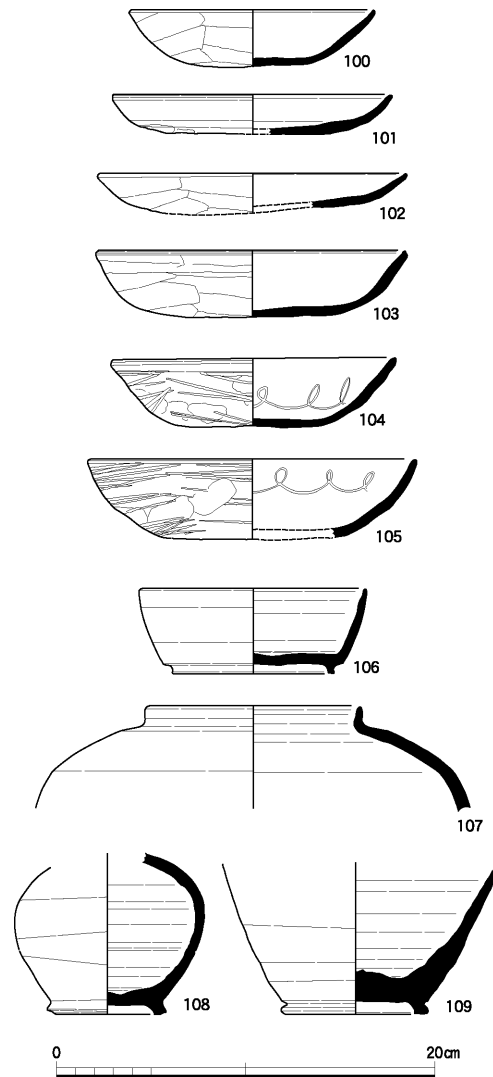


図89 SE39出土土器実測図(1:4)

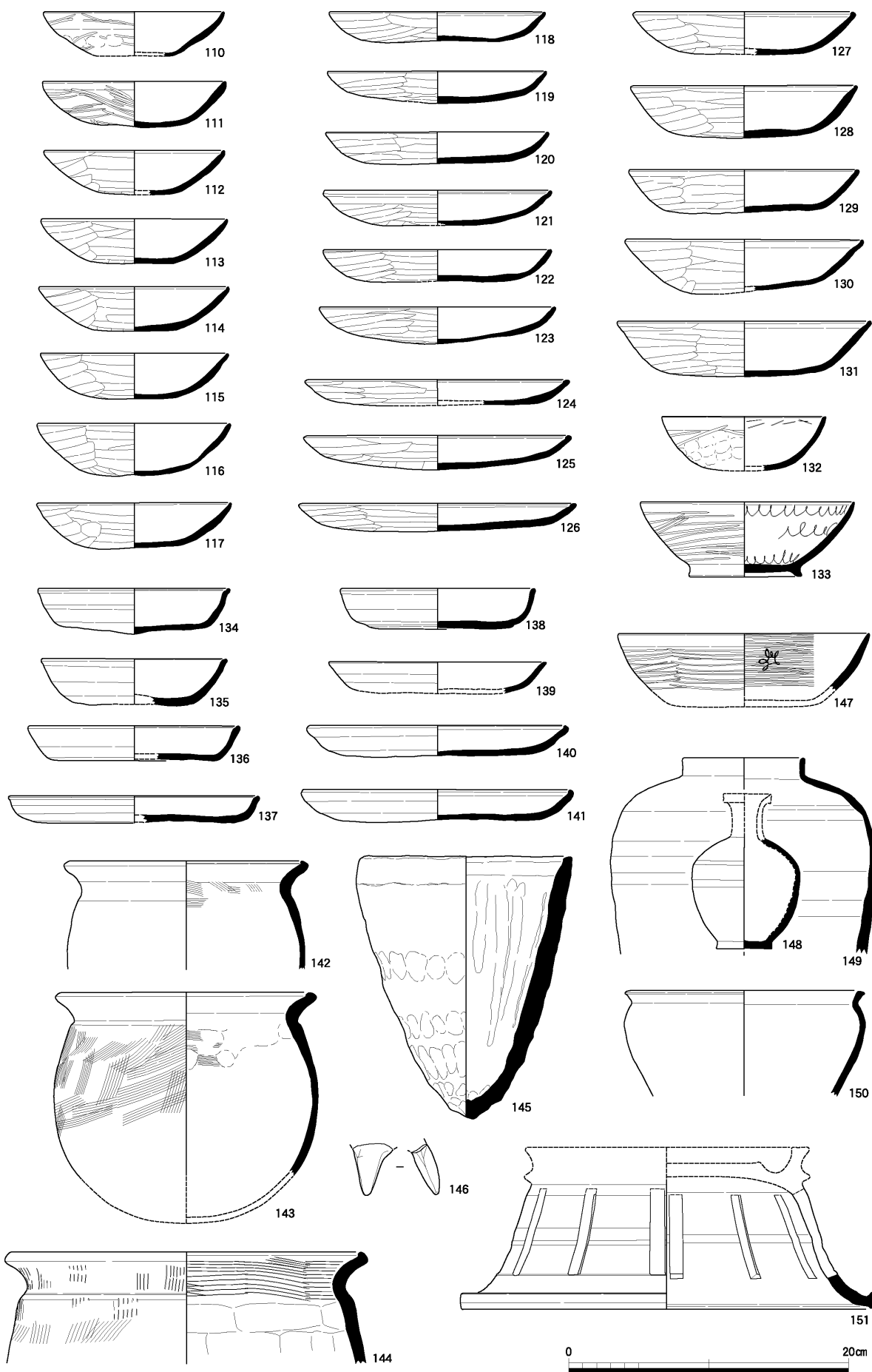


图90 SE50出土土器实测图(1:4)

表6 SE39出土土器類の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	杯・椀・皿	274	88.9%
	高杯・盤・鉢	3	1.0%
	甕・釜・鍋	24	7.8%
	その他	0	0.0%
	不明	7	2.3%
	小計	308	100.0%
黒色土器	杯・椀・皿	2	28.6%
	甕	5	71.4%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	7	100.0%
須恵器	杯・椀・皿	8	21.0%
	壺・瓶	9	23.7%
	鉢	0	0.0%
	甕・大型壺	16	42.1%
	その他	0	0.0%
	不明	5	13.2%
	小計	38	100.0%
緑釉陶器	杯・椀・皿	0	-
	壺・瓶	0	-
	その他	0	0.0%
	不明	0	-
	小計	0	-
白色土器	杯・椀・皿	0	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	0.0%
	不明	0	-
	小計	0	-
灰釉陶器	杯・椀・皿	0	-
	壺・瓶	0	-
	その他	0	0.0%
	不明	0	-
	小計	0	-
輸入陶磁器	杯・椀・皿	0	-
	壺・瓶	0	-
	その他	0	0.0%
	不明	0	-
	小計	0	-
他	その他・不明	1	0.3%
総数		354	100.0%

表7 SE50出土土器類の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	杯・椀・皿	5399	92.4%
	高杯・盤・鉢	7	0.1%
	甕・釜・鍋	438	7.5%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	5844	100.0%
黒色土器	杯・椀・皿	131	97.8%
	甕	3	2.2%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	134	100.0%
須恵器	杯・椀・皿	42	34.1%
	壺・瓶	21	17.1%
	鉢	5	4.1%
	甕・大型壺	40	32.5%
	その他	9	7.3%
	不明	6	4.9%
	小計	123	100.0%
緑釉陶器	杯・椀・皿	4	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	4	100.0%
白色土器	杯・椀・皿	0	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	0.0%
	不明	0	-
	小計	0	-
灰釉陶器	杯・椀・皿	6	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	6	100.0%
輸入陶磁器	杯・椀・皿	0	-
	壺・瓶	0	-
	その他	0	0.0%
	不明	0	-
	小計	0	-
他	その他・不明	52	0.8%
総数		6163	100.0%

点で緑釉陶器や白色土器が成立した可能性はある。このほか、土馬の脚部（146）が1点出土している。

SK47出土土器（152～161）（図91、表8、付表7）総数282片と少ないが、9世紀初頭の土器群が出土した。土師器椀A（152・153）・皿A（154）・皿A（155）、須恵器杯蓋（156・157）・杯B（158）・壺M（159）・壺L（160・161）、緑釉単彩陶器などがある。土師器食器類の外表面調整はすべてヘラケズリである。159の口頸部の接合は三段構成によるが、この大きさの壺類ではあまり例がない。161の底部外面には糸切り痕が残り「×」のヘラ記号が認められる。緑釉単彩陶器は小片で器形は明らかではないが、施釉部位や厚さなどから羽釜か甌の一部かと思われる。

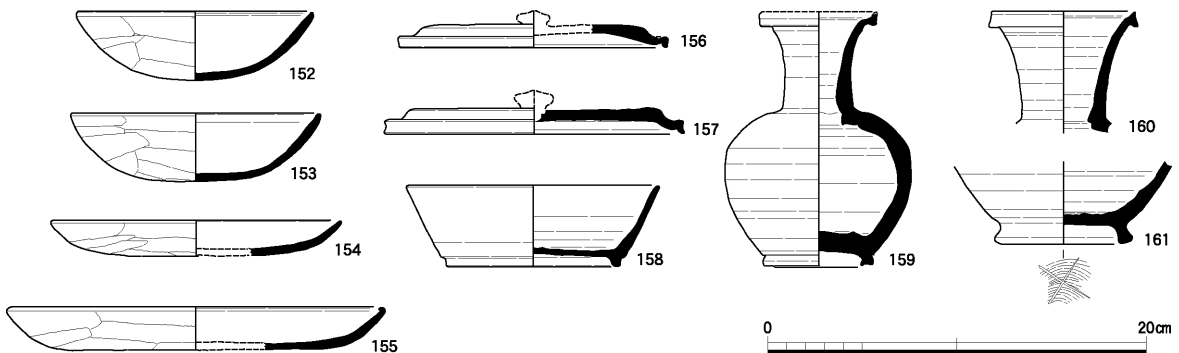


図91 SK47出土土器実測図（1：4）

SX15出土土器(162~205)(図92、表9、付表8) 整地層からの出土で細片になったものが多く、特に土師器は全体の形状がわかるものは少ない。属する時期も9世紀初頭から後半にかけて幅を持つ。土器類は総数5,164片出土し、土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・白色土器・灰釉陶器・輸入陶磁器がある。土師器には図示した皿A(162~164)・杯B(165)・盤(166)・甕(167~170)のほか高杯・鉢などがある。椀・皿類には外面をヘラケズリ調整したものもあるが、図示したものはすべてナデとオサエによるものである。165の杯B外面はヘラケズリでミガキはない。黒色土器には杯(171)・椀(172)のほか甕・鉢などがあるが細片で図示できない。すべて内面だけを黒色化している。須恵器には杯蓋(173・174)・杯B(175~179)・皿(180・181)・椀(182・183)・壺M(184・186)・壺L(185)・壺A?(188)・鉢(189)などがある。椀・皿は山城系の緑釉陶器と同系の形態や製作技法を持つ。壺類の中には体部上位に凸帯を2条巡らせる播磨系と思われるもの(187)がある。緑釉陶器には皿(190・191・195)・椀(192~194・196~201)のほか、緑釉単彩陶器の火舎(202)や壺がある。緑釉陶器椀・皿類の底部は大半が削り出し高台の山城系の製品であり、東海系の製品はわずかである。白色土器は器形不明の小片が1点出土した。灰釉陶器には椀(203・205)・皿(204)と壺・瓶類がある。203の高台形態は非常に新しい特徴を持ち、この整地層上部の平安時代後期から鎌倉時代の土層からの混入の可能性が有る。輸入陶磁器は図示していないが、越州窯青磁の椀と香炉と思われる小片がある。

表8 SK47出土土器類の構成

器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	杯・椀・皿	210	92.9%	80.1%
	高杯・盤・鉢	1	0.5%	
	甕・釜・鍋	15	6.6%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	226	100.0%	
黒色土器	杯・椀・皿	0	-	0.0%
	甕	0	-	
	その他	0	-	
	不明	0	-	
	小計	0	-	
須恵器	杯・椀・皿	20	37.0%	19.1%
	壺・瓶	17	31.5%	
	鉢	0	0.0%	
	甕・大型壺	14	25.9%	
	その他	0	0.0%	
	不明	3	5.6%	
	小計	54	100.0%	
緑釉陶器	杯・椀・皿	1	100.0%	0.4%
	壺・瓶	0	0.0%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	1	100.0%	
白色土器	杯・椀・皿	0	-	0.0%
	高杯	0	-	
	盤	0	-	
	その他	0	-	
	不明	0	-	
	小計	0	-	
灰釉陶器	杯・椀・皿	0	-	0.0%
	壺・瓶	0	-	
	その他	0	-	
	不明	0	-	
	小計	0	-	
輸入陶磁器	杯・椀・皿	0	-	0.0%
	壺・瓶	0	-	
	その他	0	-	
	不明	0	-	
	小計	0	-	
他	その他・不明	1	-	0.4%
総数		282	-	100.0%

表9 SX15出土土器類の構成

器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	杯・椀・皿	3196	80.9%	76.5%
	高杯・盤・鉢	136	3.4%	
	甕・釜・鍋	509	12.9%	
	その他	2	0.1%	
	不明	108	2.7%	
	小計	3951	100.0%	
黒色土器	杯・椀・皿	119	84.4%	2.7%
	甕	15	10.6%	
	その他	7	5.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	141	100.0%	
須恵器	杯・椀・皿	146	18.2%	15.5%
	壺・瓶	105	13.1%	
	鉢	42	5.2%	
	甕・大型壺	462	57.7%	
	その他	3	0.4%	
	不明	43	5.4%	
	小計	801	100.0%	
緑釉陶器	杯・椀・皿	197	87.2%	4.4%
	壺・瓶	10	4.4%	
	その他	17	7.5%	
	不明	2	0.9%	
	小計	226	100.0%	
白色土器	杯・椀・皿	0	0.0%	0.0%
	高杯	0	0.0%	
	盤	0	0.0%	
	その他	0	0.0%	
	不明	1	100.0%	
	小計	1	100.0%	
灰釉陶器	杯・椀・皿	21	52.5%	0.8%
	壺・瓶	19	47.5%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	40	100.0%	
輸入陶磁器	杯・椀・皿	3	75.0%	0.1%
	壺・瓶	0	0.0%	
	その他	1	25.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	4	100.0%	
他	その他・不明	0	-	0.0%
総数		5164	-	100.0%

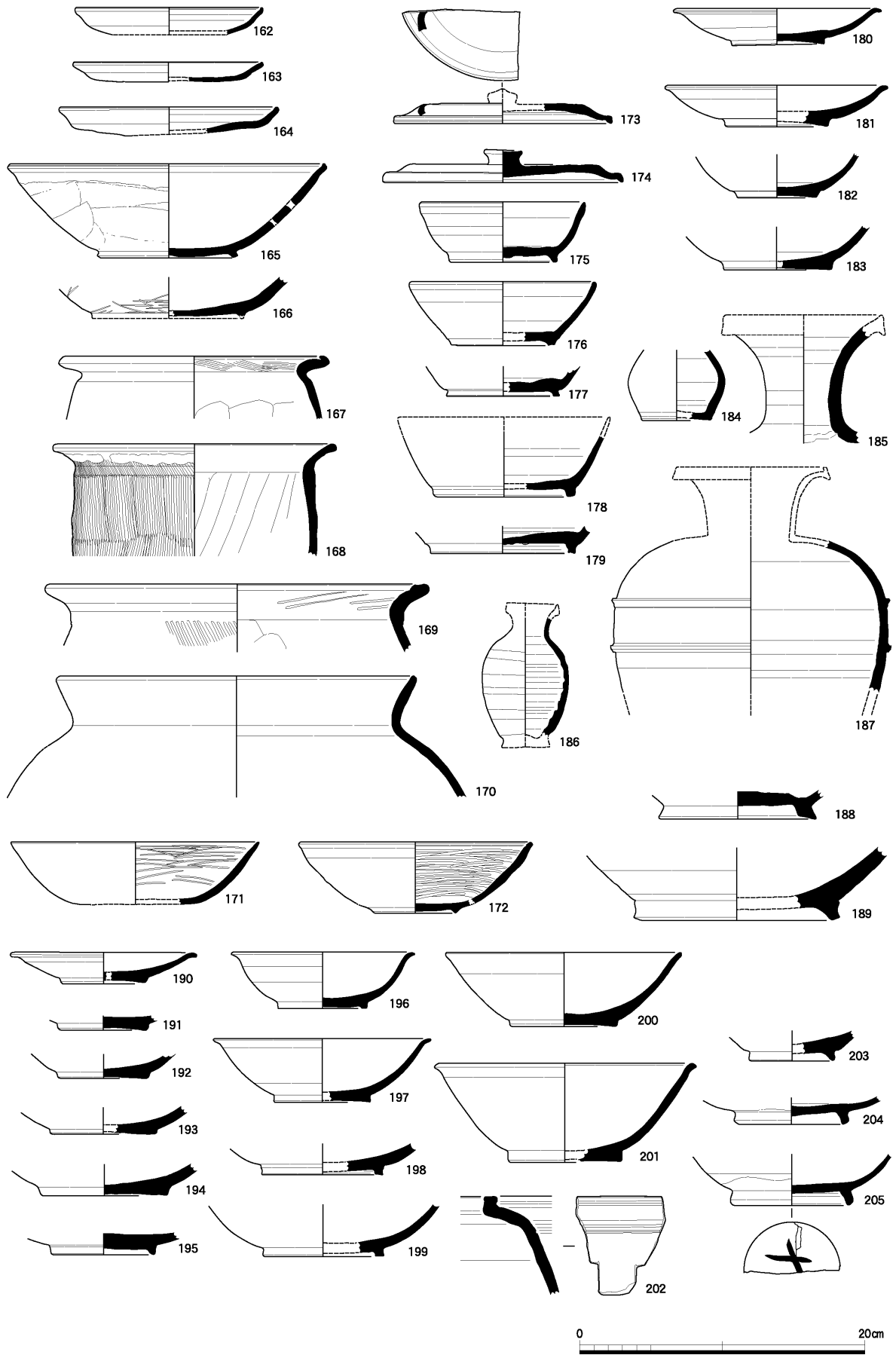


图92 SX15出土土器实测图(1:4)

SD34出土土器（206～333）（図93～95、図版50～53、表10、付表9）遺構の規模が大きいこともあり、今回報告する中では最も多量の土器類が出土している。流路堆積からの出土で、明確に出土層位を区分することはできず時期幅はあるが、主体をなすのは9世紀初頭から後半にかけてのものである。土器類は総数31,574片出土し、土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・白色土器・灰釉陶器・輸入陶磁器がある。土師器には椀A（206～211）・杯A（212～216）・皿A（217～224）・皿A（225・226）・杯B（227・228）・甕（229～232）・製塩土器（233）・高杯などがある。図示した土師器は主に流路1から出土したもので、9世紀前半の特徴を持つ。食器類の外表面調整はヘラケズリが主体をなすが、椀Aの一部にオサエの後に粗くヘラミガキを施すもの（206・210）が含まれている。220の底部外面には「大」の墨書がある。甕類には外面にハケメを持つものやタタキ痕跡のあるもの、人面土器によくみられるオサエ痕を残したものなどがある。黒色土器には杯（234）・甕（235）や鉢がある。すべて内面だけを黒色化している。234の内外面は丁寧に磨かれているが、235は口縁部内面を粗く磨いているだけである。須恵器には杯B（236～249）・杯蓋（250～260）・杯A（261～264）・杯C（265～267）・皿C（268～270）・壺蓋（280・281）・壺M（271～273・275～277・282・283）・壺L（278・279）・壺G（274・306）・壺A?（285）・鉢D（284）・搦鉢（286）・甕（288～293）・硯（287）がある。杯B240の底部外面には墨書があるが、判読できない。杯蓋には硯に転用したものが多い。蓋260には外面

表10 SD34出土土器類の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	杯・椀・皿	22202	88.9%
	高杯・盤・鉢	320	1.3%
	甕・釜・鍋	1817	7.2%
	その他	16	0.1%
	不明	622	2.5%
	小計	24977	100.0%
黒色土器	杯・椀・皿	408	78.5%
	甕	90	17.3%
	その他	11	2.1%
	不明	11	2.1%
	小計	520	100.0%
須恵器	杯・椀・皿	1189	22.5%
	壺・瓶	905	17.1%
	鉢	268	5.1%
	甕・大型壺	2574	48.6%
	その他	17	0.3%
	不明	341	6.4%
	小計	5294	100.0%
緑釉陶器	杯・椀・皿	348	91.6%
	壺・瓶	15	3.9%
	その他	6	1.6%
	不明	11	2.9%
	小計	380	100.0%
白色土器	杯・椀・皿	1	100%
	高杯	0	0.0%
	盤	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	1	100.0%
灰釉陶器	杯・椀・皿	217	77.2%
	壺・瓶	60	21.3%
	その他	3	1.1%
	不明	1	0.4%
	小計	281	100.0%
輸入陶磁器	杯・椀・皿	1	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	1	100.0%
	他	その他・不明	121
総数		31575	- 100.0%

の鈕横に「寮」の墨書がある。他に墨書を持つ須恵器としては杯C267の底部外面に「厨」、壺M283の底部外面に「水取？」（左にもう1文字あるが不明）の2点がある。緑釉陶器には椀（294・295・297・298・301～304）・皿（296・299・300）のほか壺瓶類がある。山城系の製品が多数を占めるが、299～301のように陰刻花文を施した東海系の製品も少量含まれている。また、器表を密にヘラミガキした東海系の緑釉陶器素地と思われる椀（305）が1点ある。白色土器は椀（321）が1点出土している。灰釉陶器には椀（317・319・320）・皿（316・318）・耳皿（314）・壺蓋（308）・短頸壺（309）・長頸瓶（307）・瓶（310・312・313・315）・小壺（311）がある。椀皿類の高台形態は、いわゆる三日月高台が多く、角高台のものは少ない。ハケ塗りの施釉痕跡が確認できる資料が多いが、壺蓋308には明瞭な施釉痕跡が認められない。輸入陶磁器は越州窯青磁椀の底部（322）が1点出土している。このほかに土馬（323～329）・土錘（332・333）・ミニチュアの鍋（330）・墨書人面土器（331）などの土製品がある。土馬323には墨で馬具が描かれている。

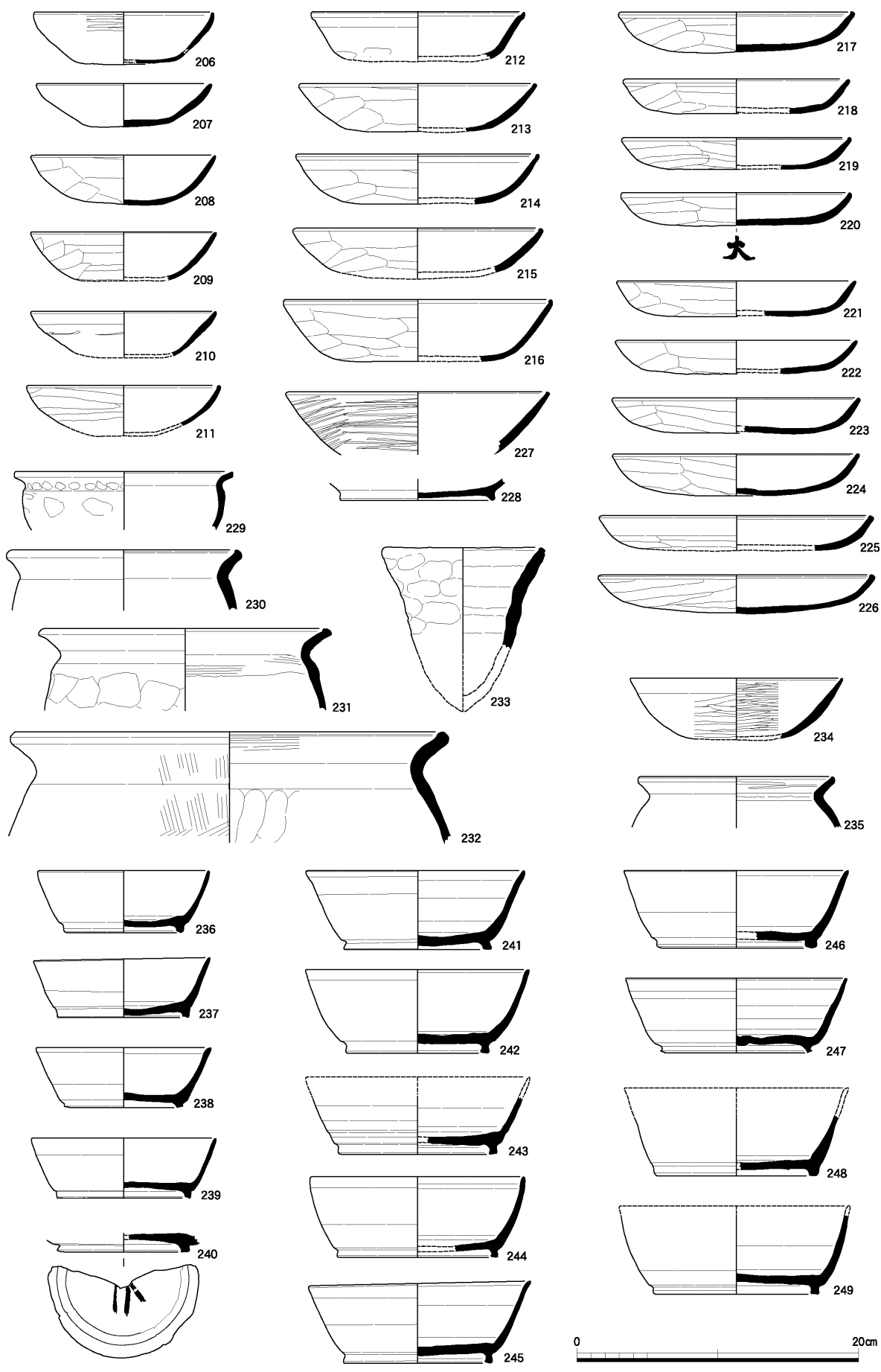


图93 SD34出土土器实测图-1 (1:4)

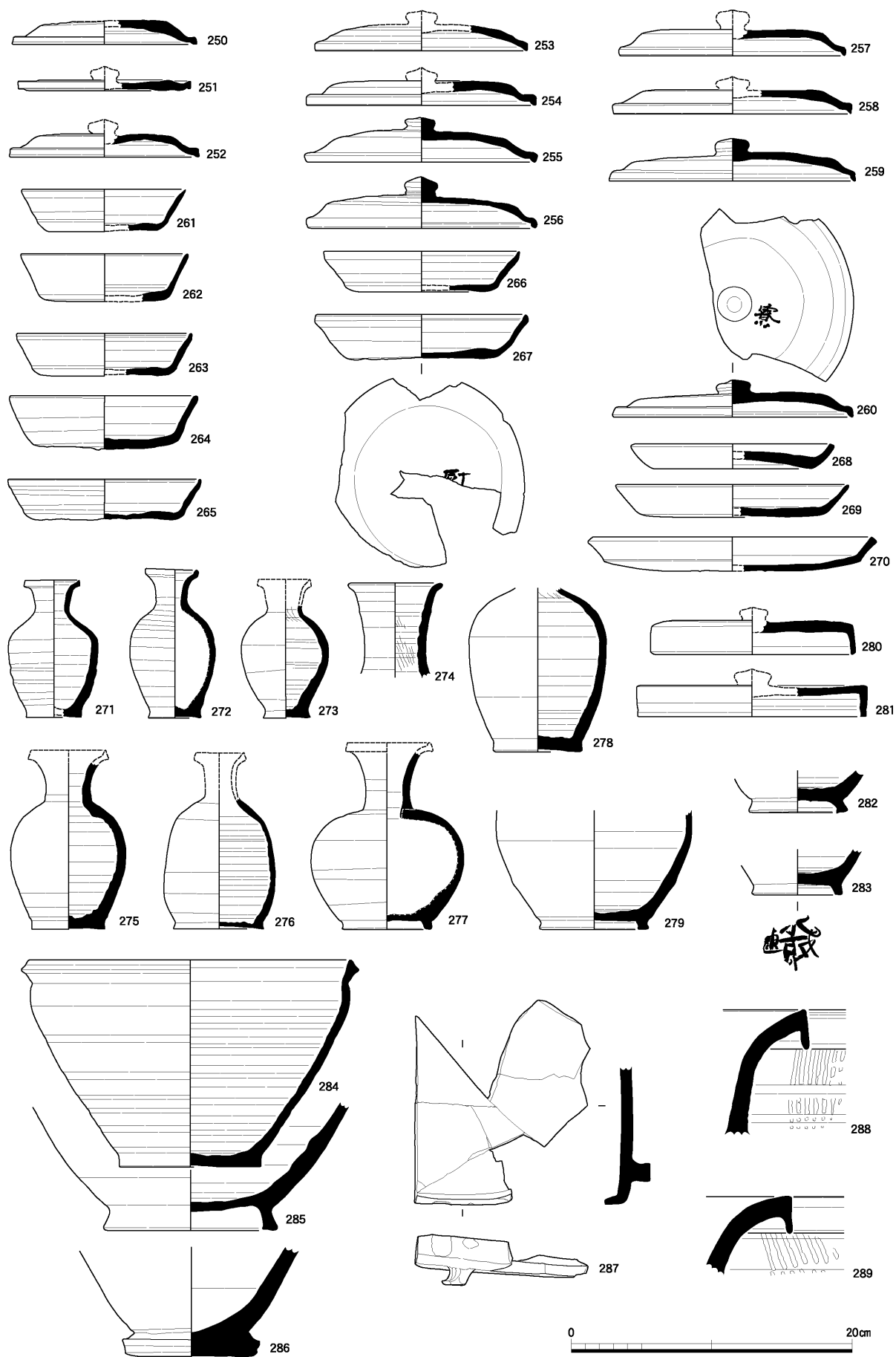


图94 SD34出土土器实测图-2 (1:4)

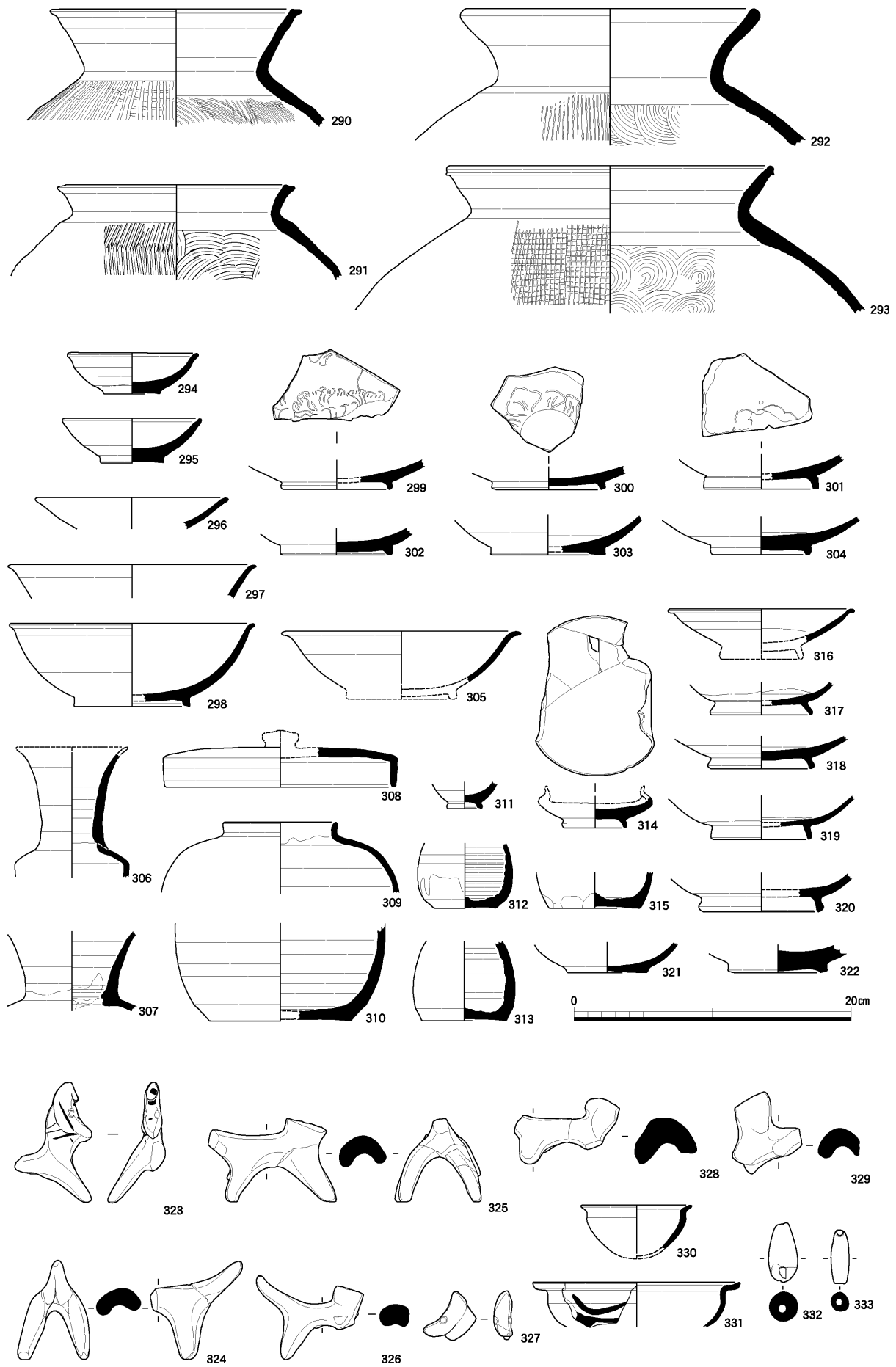


图95 SD34出土土器实测图-3 (1:4)

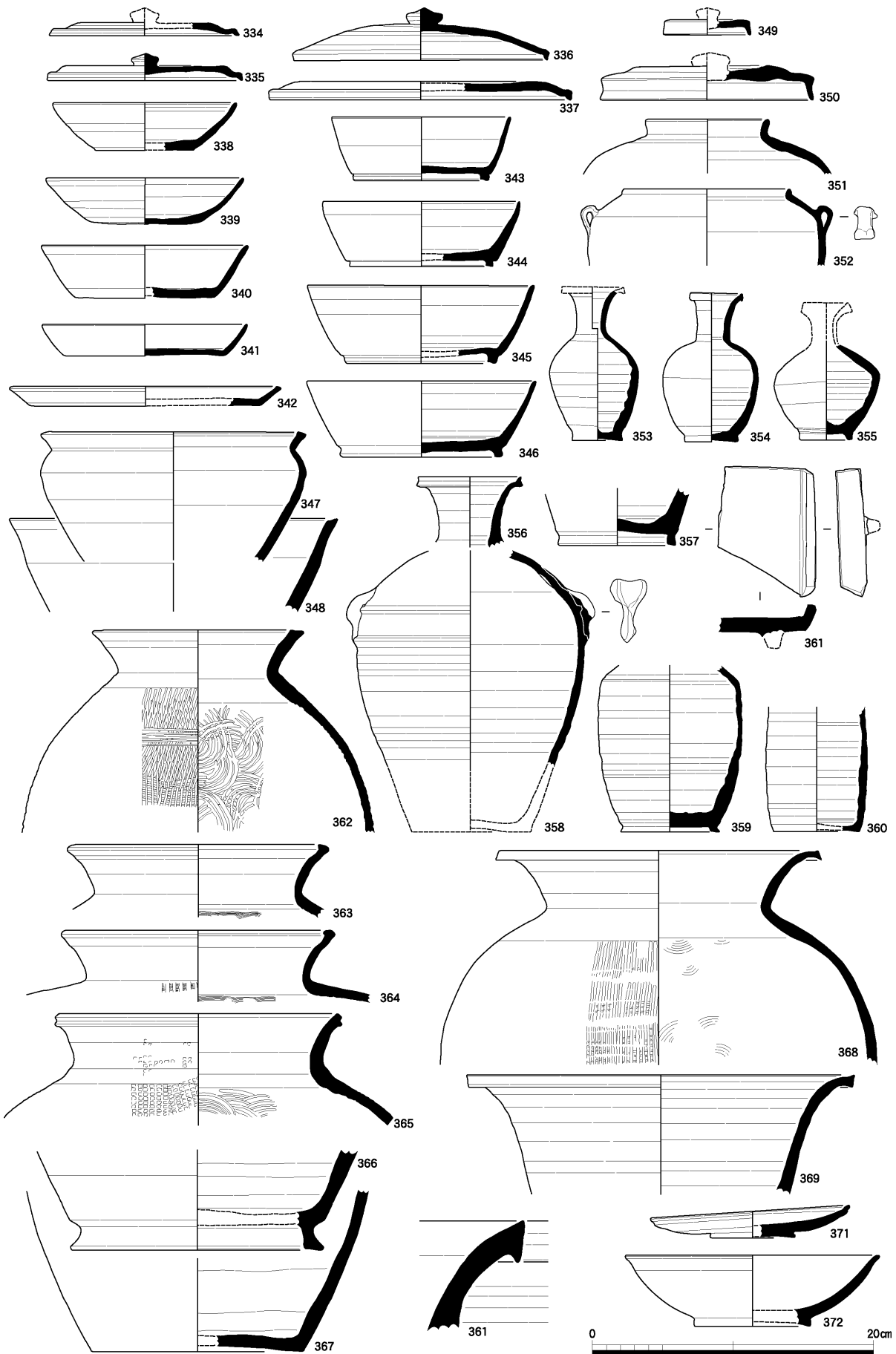


图96 SD53出土土器实测图(1:4)

SD53出土土器(334~372)(図96、図版54、表11、付表10) この土器群は川跡の整地に含まれていたもので、平安京造営期から9世紀後半までの幅を持つ資料である。土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器があるが、多くが細片になっており、図示できる資料は少ない。ここでは比較的遺存状態が良好な須恵器を中心に記述する。須恵器には杯蓋(334~337)・杯A(338~340)・杯B(343~346)・皿A(341)・皿C(342)・鉢D(347)・鉢(348)・壺蓋(349・350)・短頸壺(351・352)・壺M(353~355)・壺L(356)・壺(357~360)・大型壺(366・367)・甕(362~365・368~370)・硯(361)がある。杯蓋336は褐色味の強い胎土や形態的特徴からみて東海系の製品と思われる。短頸壺352は肩部に耳を付す。壺Mには底部に高台を付けるものと糸切りのままのものがある。壺358・359・360は平安京ではあまり類例を見ない資料である。358は体部上方に2条の凸帯を持ち、上段の凸帯を跨いで耳を付す。SX15出土の187と同様に播磨系の製品であろう。甕類の破片は多く、大きさや口縁部形態には多様な種類がある。硯は風字硯が1点出土しているほか、杯蓋を転用したものがある。緑釉陶器皿(371)と椀(372)を図示した。いずれも山城系の製品である。

Pit69出土土器(373)(図97、図版55、付表11) 円盤状の天井部に外反する環状の鈕を付け、口縁部はほぼ垂直に垂下する。天井部中央には小孔をあける。類例を見ない特殊な形態の蓋であるが、三重県斎宮跡出土緑釉陶器にこの形態の蓋と意匠が共通する香炉身がある。

十一町整地層出土土器(374・375)(図98、図版55、表12、付表12) 井戸SE51周辺を整地した土層から出土した土器群。9世紀後半に位置づけられる。井戸掘形と木柵との関係から、井戸が使用されている段階での整地であることが確認できた。土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器など総数で6,163片の土器類があるが、整地層が踏み固められていたため多くが微細な破片となっており、形状の判明するものはわずかである。灰釉陶器の鳥鈕蓋(374)と越州窯青磁椀(375)を図示した。374は小型の壺蓋上部に粘土塊を貼り付け、鳥の頭部を成形した後、裏面から粘土をくりぬいて中空にしている。

374は小型の壺蓋上部に粘土塊を貼り付け、鳥の頭部を成形した後、裏面から粘土をくりぬいて中空にしている。

表11 SD53出土土器類の構成

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・椀・皿	6947	89.3%
	高杯・盤・鉢	47	0.6%
	甕・釜・鍋	585	7.5%
	その他	6	0.1%
	不明	197	2.5%
	小計	7782	100.0%
黒色土器	杯・椀・皿	129	78.2%
	甕	23	13.9%
	その他	0	0.0%
	不明	13	7.9%
	小計	165	100.0%
須恵器	杯・椀・皿	525	22.4%
	壺・瓶	197	8.4%
	鉢	52	2.2%
	甕・大型壺	1417	60.4%
	その他	0	0.0%
	不明	155	6.6%
	小計	2346	100.0%
	緑釉陶器	杯・椀・皿	233
壺・瓶		1	0.4%
その他		15	6.0%
不明		1	0.4%
小計		250	100.0%
白色土器	杯・椀・皿	0	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
灰釉陶器	杯・椀・皿	78	88.7%
	壺・瓶	9	10.2%
	その他	1	1.1%
	不明	0	0.0%
	小計	88	100.0%
輸入陶磁器	杯・椀・皿	1	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	1	100.0%
他	その他・不明	102	- 1.0%
総数		10734	- 100.0%

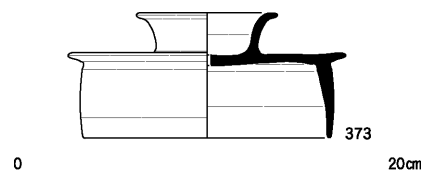


図97 Pit69出土土器実測図(1:4)

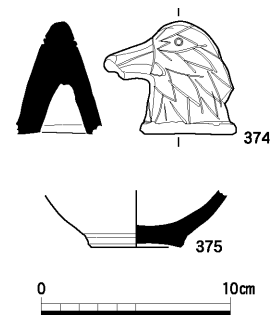


図98 十一町整地層出土土器実測図(1:4)

表12 十一町整地層出土土器類の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	杯・椀・皿	4052	89.6%
	高杯・盤・鉢	67	1.5%
	甕・釜・鍋	268	5.9%
	その他	0	0.0%
	不明	134	3.0%
	小計	4521	100.0%
黒色土器	杯・椀・皿	112	82.3%
	甕	13	9.6%
	その他	0	0.0%
	不明	11	8.1%
	小計	136	100.0%
須恵器	杯・椀・皿	155	14.5%
	壺・瓶	201	18.8%
	鉢	57	5.3%
	甕・大型壺	527	49.4%
	その他	20	1.9%
	不明	108	10.1%
	小計	1068	100.0%
緑釉陶器	杯・椀・皿	176	97.2%
	壺・瓶	5	2.8%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	181	100.0%
白色土器	杯・椀・皿	0	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
灰釉陶器	杯・椀・皿	167	91.8%
	壺・瓶	15	8.2%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	182	100.0%
輸入陶磁器	杯・椀・皿	1	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	1	100.0%
他	その他・不明	74	- 1.2%
総数		6163	- 100.0%

表13 SE51出土土器類の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	杯・椀・皿	1210	92.3%
	高杯・盤・鉢	11	0.8%
	甕・釜・鍋	61	4.7%
	その他	1	0.1%
	不明	28	2.1%
	小計	1311	100.0%
黒色土器	杯・椀・皿	34	89.4%
	甕	2	5.3%
	その他	0	0.0%
	不明	2	5.3%
	小計	38	100.0%
須恵器	杯・椀・皿	32	15.1%
	壺・瓶	25	11.8%
	鉢	20	9.4%
	甕・大型壺	124	58.5%
	その他	0	0.0%
	不明	11	5.2%
	小計	212	100.0%
緑釉陶器	杯・椀・皿	87	97.8%
	壺・瓶	2	2.2%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	89	100.0%
白色土器	杯・椀・皿	1	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	1	-
灰釉陶器	杯・椀・皿	78	91.8%
	壺・瓶	7	8.2%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	85	100.0%
輸入陶磁器	杯・椀・皿	0	-
	壺・瓶	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
他	その他・不明	9	- 0.5%
総数		1745	- 100.0%

SE51出土土器 (376~398) (図99、図版55、表13、附表13) 井戸底部の石敷き上から出土した土器群である。土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・白色土器・灰釉陶器など、総数1,745片が出土している。完全な状態で出土したものや接合して完形に復元できるものが多い。土師器には椀A (376~379)・杯B (380)・皿A (381~383)・高杯 (384)・甕などがある。食器類は薄く仕上げられている。外面調整は基本的にはオサエとナデによるが、椀Aの1点 (379) だけにヘラケズリが施されている。甕は胴部の破片が多く、形状を知り得るものはない。黒色土器には図示した椀 (389・390) のほか甕があるが、すべて小片である。椀の内面は丁寧にヘラミガキされているが、外面はヘラケズリでミガキは施さない。390には体部内面に暗文が認められる。須恵器には壺M (385)・杯B (386)・鉢 (387)・鉢D (388)・甕がある。386の体部は内湾気味に大きく開き椀形化している。387・388の鉢は篠窯の製品と思われる。甕はすべて胴部の破片で形態は不明。緑釉陶器は89片出土したが、全形がわかるものは椀 (391) と皿 (392) だけである。391は底部糸切り未調整で、底部外面には施釉していない。392は削り出しの蛇の目高台。全面にハケ塗り施釉するが、底部外面の釉層は薄い。いずれも山城系の製品である。白色土器は椀の小片が1点ある。灰釉陶器は耳皿 (393)・皿 (394・395)・椀 (396~398)・瓶などがある。393の底部は糸切り未調整、394の底部外面には「西方」と墨書されている。灰釉陶器椀皿類の施釉法はハケ塗り (395・398) と浸け掛け (394・396・397) の両者がある。この土器群の年代は9世紀末頃に位置づけられる。これをこの井戸の廃絶期とすれば、先述した整地層に含まれる遺物の

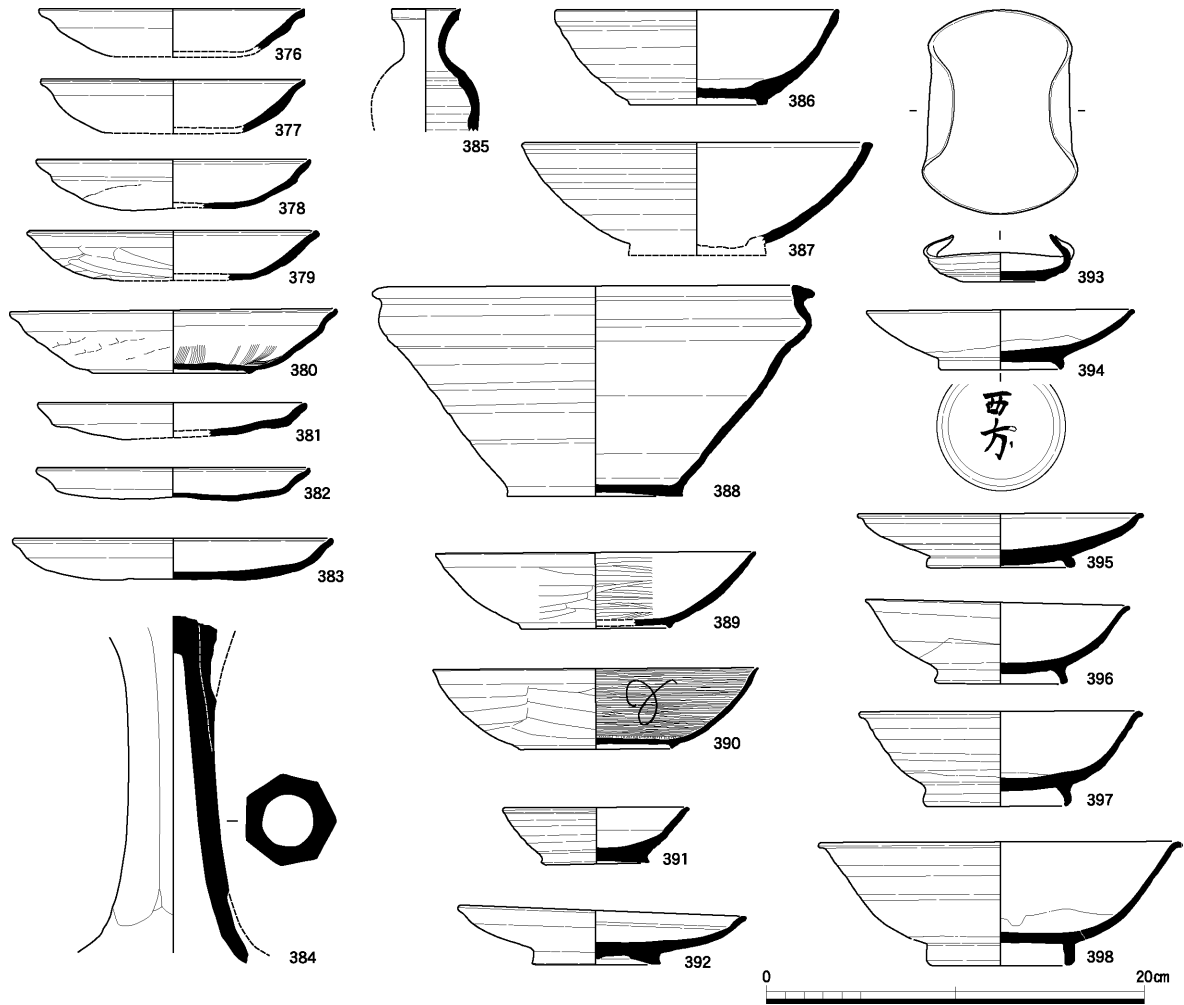


図99 SE51出土土器実測図(1:4)

年代との関係から井戸の存続期間を9世紀後半～末頃と推定できる。

SE52出土土器(399~404)(図100、付表14) 底部の褐色砂礫層から出土した土器。総数495片と少量であるが、SE51の土器類と同様9世紀末頃に位置づけられ、十一町北部が衰退する時期を示す資料として重要である。土師器皿A(399・400)・椀A(401)・杯B(402)・緑釉陶器椀(403)・灰釉陶器皿(404)を図示した。このほか黒色土器・須恵器・白色土器があるがほとんどが細片である。土師器食器類の外表面調整はすべてオサエとナデによる。402の内面にはハケメが明瞭に残る。403の底部は糸切り未調整。山城系の製品である。404はハケ塗り施釉。底部の切り離しが糸切りではなく、ヘラ切りであることから猿投窯以外の製品と思われるが、産地は特定できない。

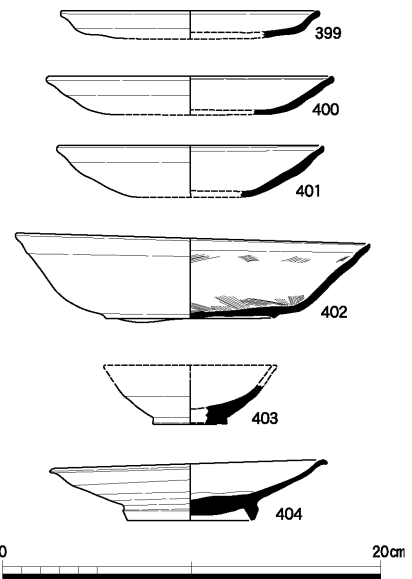


図100 SE52出土土器実測図(1:4)

瓦類(瓦1~21・101・102)(図101・102、図版36・37・43) 平安時代前期の瓦類はすべて右京側のXF地区で出土しており、特に十四町のSD34から多く出土している。軒丸瓦・軒平瓦・鴟尾のほか平瓦・丸瓦や刻印を持つ瓦があり、平安京以前の都城で使用されていた搬入瓦も多いが、ここでは軒丸瓦12点・軒平瓦8点・鴟尾1点・刻印2点について一括して概略を記す。

瓦1 複弁蓮華文軒丸瓦 中房蓮子は1+8。外区内縁の珠文は24である。外区外縁には凸鋸齒文を配する。色調は均一な淡灰色、硬質である。平城宮6320型式(Abか)。三町土取り跡出土。

瓦2 複弁蓮華文軒丸瓦 中房蓮子数が1+5+9。外区内縁に珠文、外縁は線鋸齒文。瓦当裏面には布目と指オサエ痕が残る。顎部分はケズリ調整。灰~灰白色を呈し、軟質である。平城宮6301B型式。六町SE13出土。

瓦3 複弁蓮華文軒丸瓦 外区の珠文の間隔が広い。裏面に布目が残る。暗茶灰色を呈し、焼成が甘く軟質である。『平安京古瓦図録』(以下『平古』とする)77と同系か。十四町SD34出土。

瓦4 単弁蓮華文軒丸瓦 弁の配置が不均等である。外区内縁に珠文、外縁に線鋸齒文を配する。砂粒が多く軟質、型式は不明。十四町SD34出土。

瓦5 複弁蓮華文軒丸瓦 4葉と思われるが、瓦当面が崩れており判然としない。外区の珠文間隔は広い。裏面に布目が確認できる。硬質で灰色を呈する。型式不明。十四町耕作溝出土。

瓦6 複弁蓮華文軒丸瓦 外区から弁にかけて范傷が認められる。淡灰色で軟質。平城宮6235型式に類似する。十四町SD34出土。

瓦7 単弁蓮華文軒丸瓦 『平古』52に似るが、弁同士が接しており、明らかに異范である。淡灰褐色、軟質。十一町整地層出土。

瓦8 複弁蓮華文軒丸瓦 内側の界線が正円ではなく、弁端のふくらみに対応して曲線を描く。珠文間隔は広い。周縁をヘラケズリしている。灰~暗灰色、硬質である。十四町SD34出土。

瓦9 単弁蓮華文軒丸瓦 弁は厚く盛り上がる。平城宮6133型式のいずれかと思われる。十四町SD34出土。

瓦10 複弁蓮華文軒丸瓦 珠文は大きい。灰色~淡赤灰色で、やや軟質。『平古』36・37と同系か。十四町SD34出土。

瓦11 重圏文軒丸瓦 小片で型式は特定できない。表面は黒灰色、胎土は灰白色で軟質。十四町SD34出土。

瓦12 複弁蓮華文軒丸瓦 花卉が粗雑で単弁のようにも見える。暗灰色を呈し、軟質で表面が磨滅している。『平古』45と同系か。十四町SD34出土。

瓦13 唐草文軒平瓦 中央部が欠損しているが、均整唐草文と思われる。表面は暗灰色、胎土は灰色で軟質。平城宮6685型式か。三町土取り跡出土。

瓦14 均整唐草文軒平瓦 曲線顎で下外区に線鋸齒文、上外区と脇区には珠文を配する。珠文は楕円形。凹面に布目、凸面には縄目タタキ痕が残る。端部は横方向にヘラケズリする。中心飾りの形がわずかに異なるが平城宮6671型式か。灰白色、軟質。三町土取り跡出土。

瓦15 均整唐草文軒平瓦 側面はヘラケズリ調整。表面は黒灰色、胎土は明灰色で軟質である。

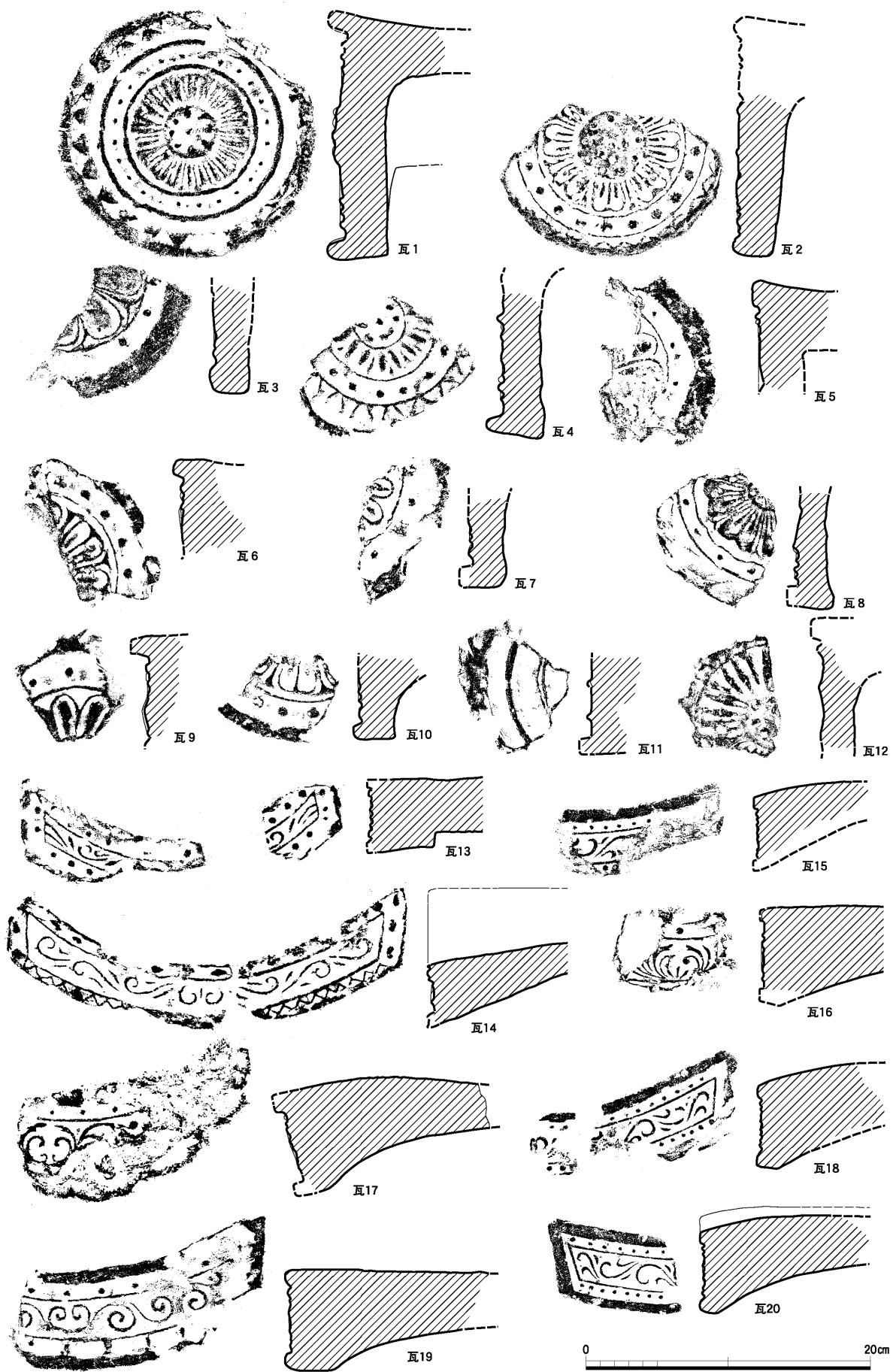


図101 平安時代前期の軒瓦拓影・実測図（1：4）

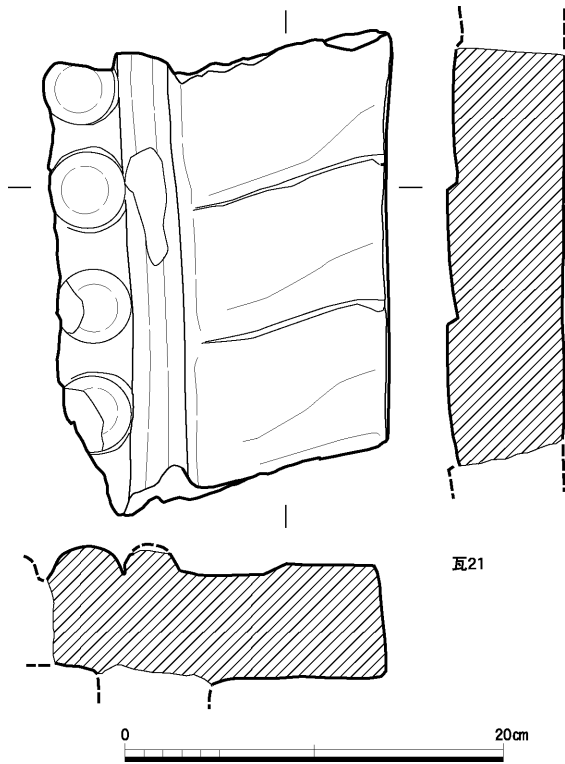


図102 鴟尾実測図(1:4)

平城宮6721C型式。十四町SD34出土。

瓦16 均整唐草文軒平瓦 凹面に布目痕。凸面は縦方向にヘラケズリ調整。『平古』299・300・302と同系、平城宮式6732型式か。六町土取り跡出土。

瓦17 唐草文軒平瓦 曲線顎で、凹面には布目痕。端部は横方向ヘラケズリ調整。凹面は縦方向にヘラケズリ調整。淡灰褐色でやや軟質。『木村捷三朗収集瓦図録』図版11の73と同種。栗栖野瓦窯の製品か。十一町SD53出土。

瓦18 均整唐草文軒平瓦 側面と下端部をヘラケズリ。凹面は横方向にヘラ調整。色調は灰色で軟質。平城宮6721C型式。六町土取り跡出土。

瓦19 均整唐草文軒平瓦 曲線顎、凹面には布目痕が残る。端部は横方向にヘラ削り調整。

『長岡京古瓦聚成』第67図61(平安京西鴻臚館出土)と同種。三町土取り跡出土。

瓦20 均整唐草文軒平瓦 端部は横方向にヘラケズリ。表面は黒灰色、胎土は灰色でやや軟質。平城宮6721C型式。十四町SD34出土。

瓦21 鴟尾 鱗部と珠文を配する縦帯の一部。鱗の単位は片切り彫りで表現する。全体をナデ調整し、タタキ痕は見えない。胎土には砂粒を多く含み、灰色硬質である。十四町SD34出土。

瓦101 『在』銘刻印瓦 丸瓦凸面に刻印する。小片のため部位を特定しがたいが、凹面の布目や厚みから玉縁付近と思われる。焼成は軟質である。三町土取り跡出土。

瓦102 『司』銘刻印瓦 平瓦小口に刻印する。硬質で青灰色。三町土取り跡出土。

金属製品(金1)(図103) 万年通寶が1点(金1)出土している。出土位置は楊梅小路路面に該当するが、近世の土取り跡からの出土である。表面が腐食し銭文がやや不鮮明になっている。

石製鏝具(739~741)(図104) 丸柄2点(739・741)と巡方1点(740)がある。739は灰白色の石材を用い表面の研磨は丁寧で、光沢を帯びる。裏面の3箇所潜り孔をあけるが、左の潜り孔は加工中に石材が剥離したため、向きを変えて再加工している。SD03出土。740は灰白色と淡緑灰色の縞状の色調でやや軟質の石材を用いている。垂孔から下が欠損している。表面がやや風化気味で光沢はない。裏面3箇所に潜り孔が残る。

十一町整地層出土。741はわずかに透明感のある白色の石材。表面の研磨は非常に丁寧で強い光沢を持つ。側面はつや消しに仕上げている。裏面の2箇所に潜り孔を配する。十一町SE51出土。



図103 万年通寶写真・拓影(1:2)

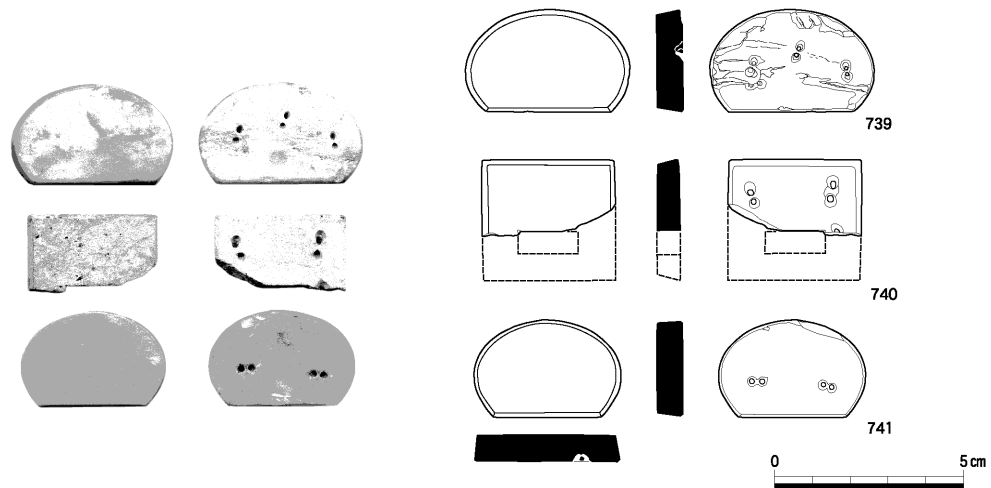


図104 鉢具写真・実測図（1：2）

（3）平安時代後期から鎌倉時代の遺物

この時期の土器類には平安時代後期後半（12世紀後半）・平安時代末から鎌倉時代前期（12世紀末から13世紀初頭）・鎌倉時代後半（13世紀後半）に属する3群がある。平安時代後期後半に属する遺物はHK地区の朱雀大路関係の遺構やXF地区の六町を中心とする地域から出土している。平安時代末から鎌倉時代前期の遺物はその大半がXF地区の六町周辺からの出土である。鎌倉時代

表14 SD01出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	碗・皿	116	91.3%
	鉢・盤	1	0.8%
	甕・鍋・釜	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	10	7.9%
	小計	127	100.0%
瓦器	碗・皿	1	14.3%
	鍋・釜	5	71.4%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	1	14.3%
小計	7	100.0%	
須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	2	6.9%
	鉢	4	13.8%
	壺・瓶	5	17.2%
	甕	15	51.7%
	その他	0	0.0%
	不明	3	10.4%
小計	29	100.0%	
白色土器	杯・碗・皿	0	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
小計	0	-	
焼締陶器	壺	0	0.0%
	甕	6	85.7%
	鉢・盤	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	1	14.3%
小計	7	100.0%	
輸入陶磁器	碗・皿	6	66.7%
	壺・瓶	3	33.3%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	9	100.0%
他	その他・不明	0	-
総数		179	100.0%

表15 SE30出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	碗・皿	1008	99.2%
	鉢・盤	1	0.1%
	甕・鍋・釜	1	0.1%
	その他	0	0.0%
	不明	6	0.6%
	小計	1016	100.0%
瓦器	碗・皿	6	17.1%
	鍋・釜	9	25.7%
	壺・瓶	1	2.9%
	火舎・火鉢	15	42.8%
	その他	1	2.9%
	不明	3	8.6%
小計	35	100.0%	
須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	3	9.7%
	鉢	7	22.6%
	壺・瓶	6	19.3%
	甕	15	48.4%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
小計	31	100.0%	
白色土器	杯・碗・皿	0	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
小計	0	-	
焼締陶器	壺	0	0.0%
	甕	0	0.0%
	鉢・盤	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	4	100.0%
	小計	4	100.0%
輸入陶磁器	碗・皿	10	58.8%
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	7	41.2%
	小計	17	100.0%
他	その他・不明	1	-
総数		1104	100.0%

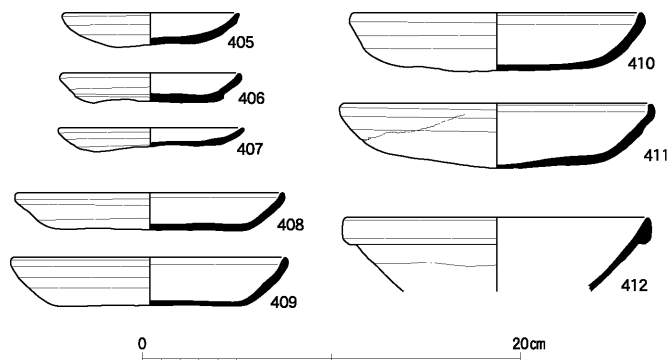


図105 SD01出土土器実測図(1:4)

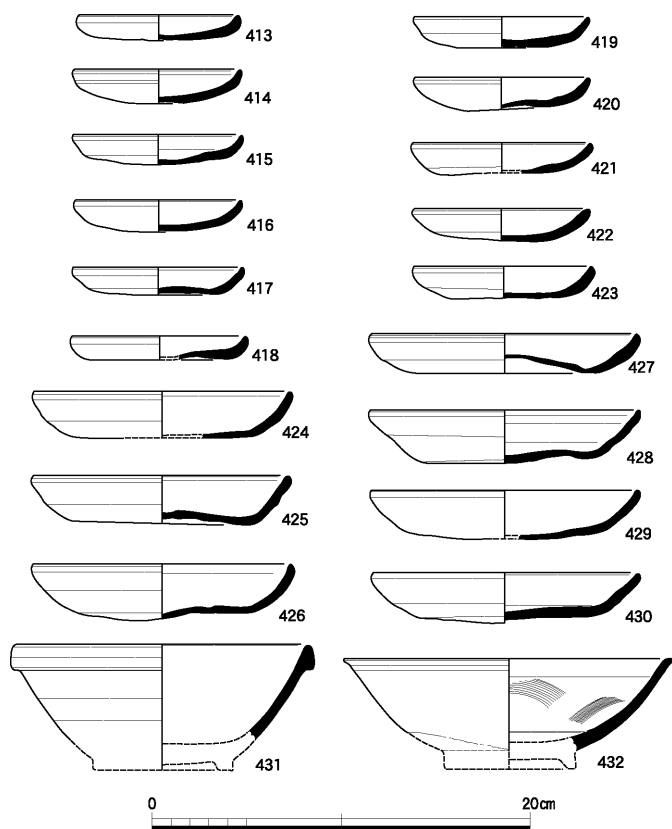


図106 SE30出土土器実測図(1:4)

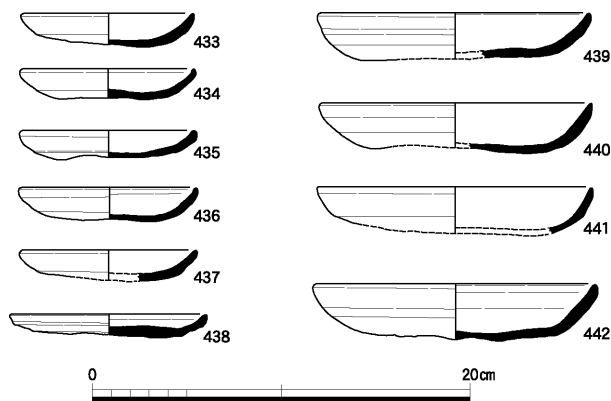


図107 SE71出土土器実測図(1:4)

後半の遺物はHK地区のSE78以外では出土していない。

SD01出土土器(405~412)(図105、表14、付表15) 土師器・瓦器・須恵器(山茶碗を含む。以下同)・焼締陶器・輸入陶磁器がある。土師器には皿N・鉢などがあるが、大半が皿である。皿Nは口径で16.0cm前後(410・411)・14.5cm前後(408・409)・9.7cm前後(405~407)の3群に分けられる。調整はナデとオサエによる。総体に胎土は緻密で、色調は灰白色~浅黄橙色を呈する。瓦器には碗・羽釜・鍋があるが、小片のため図示できない。須恵器には山茶碗・鉢・壺・甕などがあるが、これもすべて細片である。焼締陶器は大部分が甕胴部の破片で形状の判明するものはないが、タタキ目などの特徴から、常滑釜の製品と考えられるものが多い。輸入陶磁器には図示した口縁部が玉縁状に肥厚する白磁碗(412)のほか、白磁の壺(水注か)があるが形状は不明である。この土器群の属する時期は12世紀後半に位置づけられる。

SE30出土土器(413~432)(図106、表15、付表16) 土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・輸入陶磁器があるが、9割以上を土師器が占め、そのほとんどが皿である。皿Nには口径で14.0cm前後(413~423)と9.5cm前後(424~430)の2種がある。いずれも内面および口縁部外面をナデ、外面はオサエ調整。胎土は細粒で、にぶい黄橙色を呈するものが多い。429には赤褐色

の粒子が多く含まれている。土師器はこのほかには鉢と甕の細片が1片ずつあるだけである。瓦器には椀・羽釜・火鉢があるが、細片で図示できない。須恵器には山茶椀・鉢・壺・甕などがある。半数が甕体部の破片である。焼締陶器は器形不明の細片が4片ある。輸入陶磁器は白磁椀（431・432）がある。型的にはSD01のものに近いが、皿Nの口径が大小ともにやや縮小している傾向が認められ、後出的な様相として理解できる。

SE71出土土器（433～442）（図107、表16、付表17）
 総数は少ないが、井戸底部付近から出土した形式的にまとまった資料である。土師器・瓦器・須恵器があるが、大半が土師器皿である。土師器皿Nには口径14.6cm前後（439～442）・9.4cm前後（433～438）の2群がある。他はナデ調整する内面と口縁部外面をナデ、外面はオサエ調整。胎土は灰白色～淡黄色で精良。時期はSD01と同様に12世紀後半に位置づけられる。

SD80出土土器（443～451）（図108、表17、付表18）
 土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・輸入陶磁器がある。

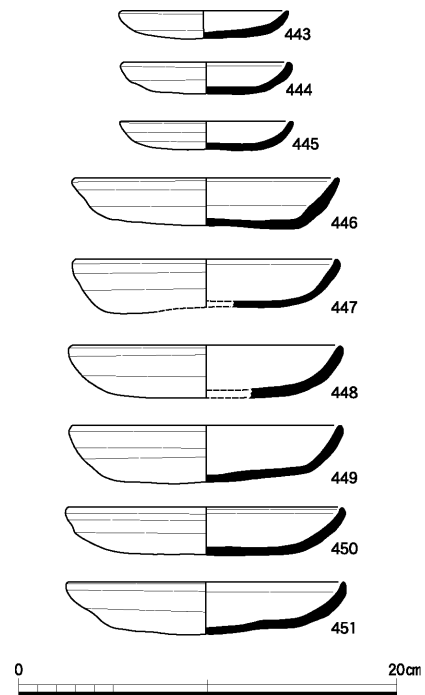


図108 SD80出土土器実測図（1：4）

表16 SE71出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	椀・皿	116	100.0%
	鉢・盤	0	0.0%
	甕・鍋・釜	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	116	100.0%
瓦器	椀・皿	1	100.0%
	鍋・釜	0	0.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
須恵器・山茶椀	杯・椀・皿	1	12.5%
	鉢	0	0.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	甕	6	75.0%
	その他	0	0.0%
	不明	1	12.5%
白色土器	杯・椀・皿	0	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
焼締陶器	壺	0	-
	甕	0	-
	鉢・盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
輸入陶磁器	椀・皿	0	-
	壺・瓶	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
他	その他・不明	0	-
	小計	0	-
総数		125	100.0%

表17 SD80出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	椀・皿	4351	99.7%
	鉢・盤	5	0.1%
	甕・鍋・釜	1	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	8	0.2%
	小計	4365	100.0%
瓦器	椀・皿	21	36.8%
	鍋・釜	12	21.1%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	21	36.8%
	その他	1	1.8%
	不明	2	3.5%
須恵器・山茶椀	杯・椀・皿	3	3.7%
	鉢	16	20.0%
	壺・瓶	3	3.7%
	甕	53	66.3%
	その他	1	1.3%
	不明	4	5.0%
白色土器	杯・椀・皿	0	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
焼締陶器	壺	0	0.0%
	甕	2	4.5%
	鉢・盤	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	42	95.5%
	小計	44	100.0%
輸入陶磁器	椀・皿	21	67.8%
	壺・瓶	1	3.2%
	その他	9	29.0%
	不明	0	0.0%
	小計	31	100.0%
他	その他・不明	27	-
	小計	27	-
総数		4604	100.0%

総数4,604片出土している。大部分が土師器皿類で、その大半が細片になっており、形状を復元できたものは少ない。土師器皿Nには口径14.5cm前後(446~451)と9.1cm前後(443~445)の2群が認められる。いずれも内面および口縁部外面にナデ、外面にはオサエ調整を施す。胎土は浅

黄橙色~にぶい黄橙色を呈する。このほか土師器には鉢と甕の破片が少量ある。須恵器には山茶椀・鉢・壺・甕などがあるが、大半が甕胴部の破片である。焼締陶器は甕の胴部と器形の特定できない破片がある。輸入陶磁器は白磁椀・壺のほか、黄釉褐彩の盤の破片が出土している。この土器群も12世紀後半に位置づけられる。

六町土取り跡出土須恵器(452)(図109、付表19) 近世の土取跡からの出土ではあるが、東播系の製品と思われる須恵器大型壺(452)が1点ある。外面をナデ調整するが、体部外面の中程に平行タタキ目を残し、底部近くにオサエ痕と横方向のコテ調整痕が認められる。内面には粘土接合痕が明瞭に残る。器表および胎土は灰白色でやや軟質である。単独で出土しているため時期を特定しがたいが、周辺では12世紀後半~13世紀前半の遺物しか出土しておらず、それらとほぼ同時期のものと思われる。

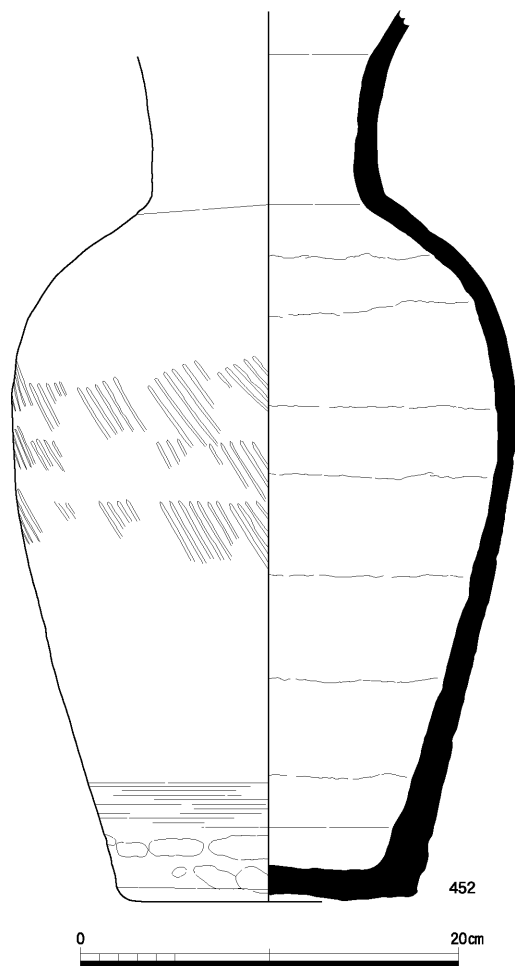


図109 六町土取り跡出土須恵器実測図(1:4)

SK23出土土器(453~466)(図110、表18、付表20) 土師器・瓦器・須恵器・白色土器・

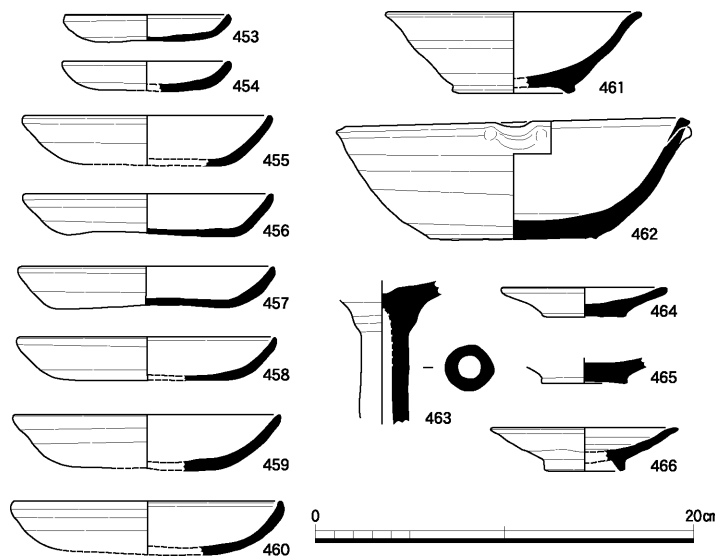


図110 SK23出土土器実測図(1:4)

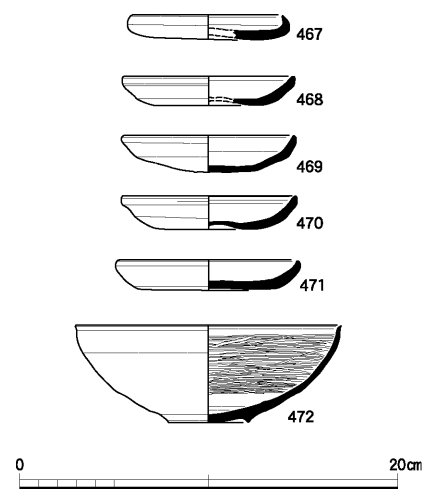


図111 SE32出土土器実測図(1:4)

表18 SK23出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	碗・皿	2061	98.0%
	鉢・盤	8	0.4%
	甕・鍋・釜	10	0.5%
	その他	0	0.0%
	不明	23	1.1%
	小計	2102	100.0%
瓦器	碗・皿	3	100.0%
	鍋・釜	0	0.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	3	100.0%
須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	51	26.5%
	鉢	3	1.6%
	壺・瓶	14	7.3%
	甕	114	59.4%
	その他	1	0.5%
	不明	9	4.7%
	小計	192	100.0%
白色土器	杯・碗・皿	2	66.7%
	高杯	1	33.3%
	盤	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	3	100.0%
焼締陶器	壺	0	-
	甕	0	-
	鉢・盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
輸入陶磁器	碗・皿	3	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	3	100.0%
他	その他・不明	0	-
総数		2303	100.0%

表19 SE32出土土器の構成

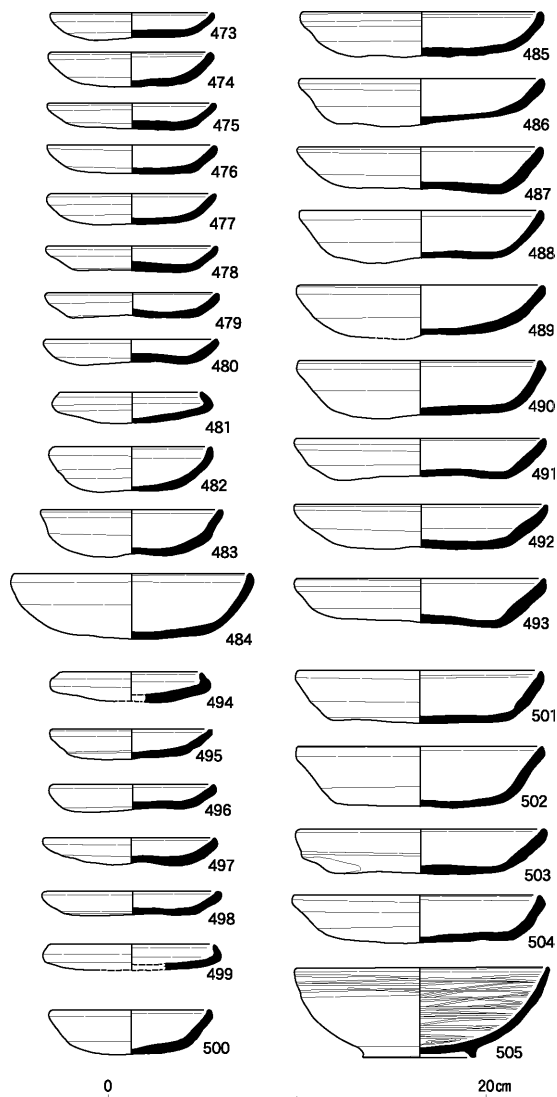
器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	碗・皿	218	98.6%
	鉢・盤	0	0.0%
	甕・鍋・釜	3	1.4%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	221	100.0%
瓦器	碗・皿	11	100.0%
	鍋・釜	0	0.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	11	100.0%
須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	0	0.0%
	鉢	0	0.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	甕	4	100.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	4	100.0%
白色土器	杯・碗・皿	0	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
焼締陶器	壺	0	0.0%
	甕	0	0.0%
	鉢・盤	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	5	100.0%
	小計	5	100.0%
輸入陶磁器	碗・皿	0	-
	壺・瓶	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
他	その他・不明	0	-
総数		241	100.0%

表20 SD24出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	碗・皿	9815	99.3%
	鉢・盤	5	0.1%
	甕・鍋・釜	38	0.4%
	その他	0	0.0%
	不明	24	0.2%
	小計	9882	100.0%
瓦器	碗・皿	29	26.6%
	鍋・釜	14	12.9%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	65	59.6%
	その他	0	0.0%
	不明	1	0.9%
	小計	109	100.0%
須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	35	13.2%
	鉢	18	6.8%
	壺・瓶	35	13.2%
	甕	164	61.7%
	その他	2	0.8%
	不明	12	4.5%
	小計	266	100.0%
白色土器	杯・碗・皿	1	100.0%
	高杯	0	0.0%
	盤	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	1	100.0%
焼締陶器	壺	0	0.0%
	甕	3	100.0%
	鉢・盤	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	3	100.0%
輸入陶磁器	碗・皿	19	90.5%
	壺・瓶	1	4.8%
	その他	1	4.8%
	不明	0	0.0%
	小計	21	100.0%
他	その他・不明	13	-
総数		10295	100.0%

表21 SK33出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	碗・皿	977	100.0%
	鉢・盤	0	0.0%
	甕・鍋・釜	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	977	100.0%
瓦器	碗・皿	1	100.0%
	鍋・釜	0	0.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	1	100.0%
須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	1	100.0%
	鉢	0	0.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	甕	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	1	100.0%
白色土器	杯・碗・皿	0	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
焼締陶器	壺	0	-
	甕	0	-
	鉢・盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
輸入陶磁器	碗・皿	0	-
	壺・瓶	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
他	その他・不明	0	-
総数		979	100.0%



473~493 : 17次調査、494~505 : 13次調査出土分

図112 SD24出土土器実測図(1:4)

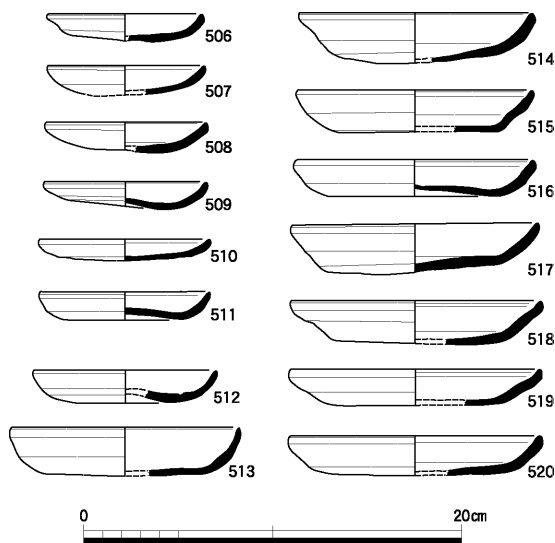


図113 SK33出土土器実測図(1:4)

輸入陶磁器がある。土師器皿Nは口径14.4cm前後(455~460)と9.1cm前後(453・454)の2群がある。胎土は灰白色で緻密なものと橙~赤褐色で雲母や赤色粒の目立つものがある。内面および口縁部外面にナデ、外面にはオサエ調整を施す。瓦器は椀の小片が少量出土している。須恵器には山茶椀(461)・鉢(462)・壺・甕がある。462には片口が付く。白色土器には高杯(463)・皿(464・465)がある。量は少なく、図示したものがすべてである。皿の底部は糸切り未調整。輸入陶磁器には白磁椀・皿(466)の破片が3片ある。12世紀末頃の土器群である。

SE32出土土器(467~472)(図111、表19、付表21) 総数241片と出土量は少ない。大半が土師器で、ほかに瓦器・須恵器・焼締陶器が少量ある。土師器には皿Ac(467)と皿N(468~471)がある。皿Nには口径9.2cm前後(468~470)とそれよりやや大きめの9.8cm(471)がある。瓦器椀(472)は内面を比較的密にミガキ調整するが、外面にはミガキはない。これも12世紀末頃の土器群である。

SD24出土土器(473~505)(図112、図版56、表20、付表22・23) 西坊城小路西側溝SD24は数次の調査で検出しているが、今回は六町の南北中央付近の2箇所からそれぞれまとまって出土した土器群から抽出したものを提示する(473~493・494~505)。この二つの土器群には、ほとんど型式差が無く、ほぼ同時期(13世紀初頭)の遺物と考えられる。図上では比較しやすくするため2群に分けたが、内容の記述は一括する。総数で10,295片の土器類が出土しており、土師器・瓦器・須恵器・白色土器・焼締陶器・輸入陶磁器がある。土師器には皿N・皿Ac(481・494)・皿

Sがあり、皿Nは口径で13.2cm前後（485～493・501～504）と9.0cm前後（473～480・495～498）の2群に分けられ、前者の中には502のように深い形態のものが少数含まれる。皿Acは口径8.6cm、底部がやや下方にふくらむ。皿Sは白色系の土師器で、口径が12.9cmのもの（484）と8.7cm前後（482・500）、それよりやや大きい9.7cmのもの（483）がある。皿Sc（499）は皿Acに類似した形態だが、胎土や調整は皿Sと共通する。皿Nおよび皿Acの胎土は概ね黄橙色～鈍い橙色を呈するものが多く、皿Sは灰白色で精良である。いずれも内面および口縁部外面にナデ、外面にはオサエ調整を施すが、皿Sの調整は丁寧である。瓦器には図示した椀（505）以外に羽釜・火鉢などがある。須恵器には山茶椀・鉢・壺・甕などがあるが、小片ばかりである。白色土器は椀の小片が1点出土した。焼締陶器は甕の胴部片が3片、輸入陶磁器には白磁椀・壺のほか黄釉褐彩の盤の破片が1点ある。12世紀末頃の土器群。

SK33出土土器（506～520）（図113、表21、付表24） 瓦器椀と山茶椀の小片が1片ずつある以外はすべて土師器皿類である。皿類には皿N・皿Snがあり、皿Nは口径で13.0cm前後（514～520）・8.5cm前後（506～511）の2群に分けられる。皿Snは通常のものとは異なり、皿Nに類似する形態をとるが、胎土や調整の特徴は一般的な皿Sと共通する。口径9.7cm（512）と12.2cm（513）の2種がある。

SG26出土土器（521～606）（図114、図版57・58、表22、付表25） 総数4,126片の土器類が出土した。大半が土師器皿類で、ほかに瓦器・須恵器・焼締陶器・輸入陶磁器が少量ある。土師

表22 SG26出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	椀・皿	3966	99.4%
	鉢・盤	4	0.1%
	甕・鍋・釜	5	0.1%
	その他	0	0.0%
	不明	15	0.4%
	小計	3990	100.0%
瓦器	椀・皿	24	72.7%
	鍋・釜	2	6.1%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	6	18.2%
	その他	0	0.0%
	不明	1	3.0%
小計	33	100.0%	
須恵器・山茶椀	杯・椀・皿	7	13.7%
	鉢	4	7.9%
	壺・瓶	8	15.7%
	甕	30	58.8%
	その他	0	0.0%
	不明	2	3.9%
小計	51	100.0%	
白色土器	杯・椀・皿	0	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
小計	0	-	
焼締陶器	壺	0	0.0%
	甕	0	0.0%
	鉢・盤	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	2	100.0%
	小計	2	100.0%
輸入陶磁器	椀・皿	4	40.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	6	60.0%
	不明	0	0.0%
	小計	10	100.0%
他	その他・不明	40	- 1.0%
総数		4126	- 100.0%

表23 SB79出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	椀・皿	13112	99.5%
	鉢・盤	0	0.0%
	甕・鍋・釜	3	0.0%
	その他	4	0.0%
	不明	67	0.5%
	小計	13186	100.0%
瓦器	椀・皿	76	44.2%
	鍋・釜	57	33.1%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	19	11.0%
	その他	2	1.2%
	不明	18	10.5%
小計	172	100.0%	
須恵器・山茶椀	杯・椀・皿	11	4.5%
	鉢	45	18.2%
	壺・瓶	27	10.9%
	甕	142	57.5%
	その他	22	8.9%
	不明	0	0.0%
小計	247	100.0%	
白色土器	杯・椀・皿	4	100.0%
	高杯	0	0.0%
	盤	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	4	100.0%
焼締陶器	壺	0	0.0%
	甕	33	91.7%
	鉢・盤	1	2.8%
	その他	2	5.5%
	不明	0	0.0%
	小計	36	100.0%
輸入陶磁器	椀・皿	70	71.4%
	壺・瓶	21	21.4%
	その他	7	7.2%
	不明	0	0.0%
	小計	98	100.0%
他	その他・不明	588	- 4.1%
総数		14331	- 100.0%

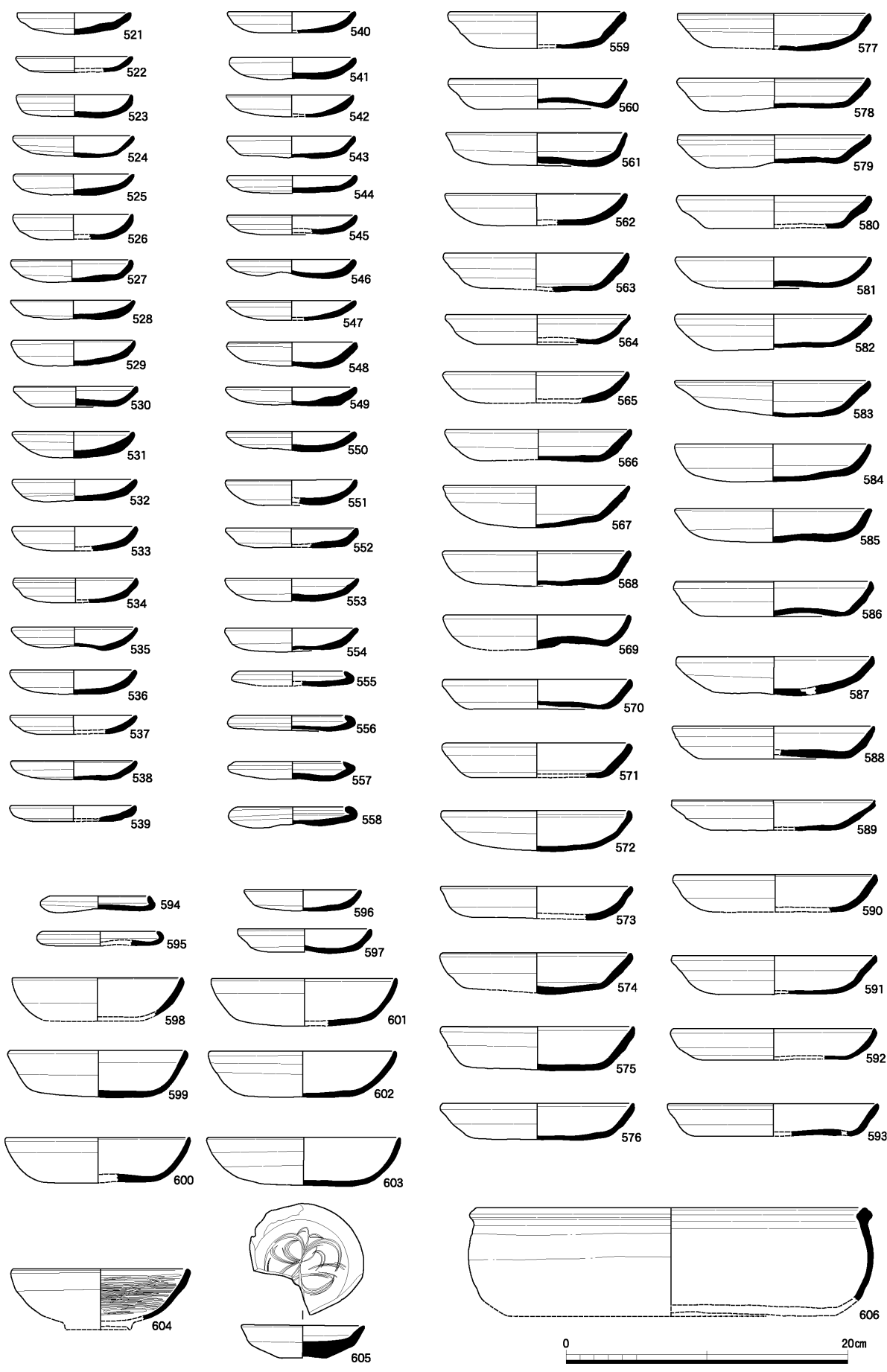


图114 SG26出土土器实测图(1:4)

器皿類には皿N・皿Ac・皿S・皿Sn・皿Scがあり、皿Nは口径で大きく分けて8.6cm前後のもの（521～554）と13.6cm前後を中心にするもの（562～592）がある。このほかに12cm台（559～561）や15cm台のもの（593）も少量あるが、これらを階級として明確に分離できるような分布状況ではない。皿Ac（555～558）は口径9.0cm前後のものがある。皿S（598～603）は口径12.2～13.8cmで、やや深みが強い。皿Sn（596・597）は皿Nの小型のものに類似する形態で、口径9.0cm前後。皿Scは皿Acに類似する形態で口径8.2cm（594）と9.0cmのもの（595）がある。土師器皿類の胎土や調整はSD24やSK33のものと同通している。数量的には皿N系が圧倒的に多く、皿S系はわずかである。瓦器には椀（604）のほか少量の鍋・火鉢の破片がある。椀の内面は密にヘラミガキされているが、外面はオサエ調整だけである。須恵器には山茶椀・鉢・壺・甕などがあるがすべて小片である。焼締陶器は器形の特定不可能な小片が2片ある。輸入陶磁器には図示した龍泉窯系の青磁皿（605）・黄釉褐彩盤（606）のほか白磁椀の小片がある。13世紀初頭の土器群。

SB79出土土器（607～653）（図115、図版59・60、表23、付表26）御堂の上層建物に関わる土器群を図示した。総数で14,331片が出土しているが、細片が多く図示できたものはわずかである。土師器・瓦器・須恵器・白色土器・焼締陶器・輸入陶磁器がある。9割以上が土師器でそのほとんどが皿類である。土師器皿類には皿N・皿S・皿Scがある。皿Nには口径8.4cm前後のもの（607～620）・13.0cm前後のもの（621～627）と14cmを超えるもの（628）がある。皿Sには口径8.6cm（632）・10.9cm（633）・13.0cm（634・635）の3種がある。皿Sc（629～631）は口径

6.5～6.8cmで大きさがほぼ揃っている。土師器にはこのほか甕や器形の特定できない破片がある。瓦器には椀・羽釜・鍋・火鉢などがある。須恵器には山茶椀・鉢・壺・甕などがある。甕の胴部破片が半数以上を占める。白色土器は椀あるいは皿が4片出土した。焼締陶器はほとんど甕の破片である。輸入陶磁器には図示した青白磁合子（636）・同安窯系青磁皿（637）・磁州窯系壺（図版60-638～650）・吉州窯の壺（図版60-651～653）のほか、白磁椀・黄釉褐彩盤・緑釉盤・龍泉窯系の青磁皿・椀などがある。磁州窯

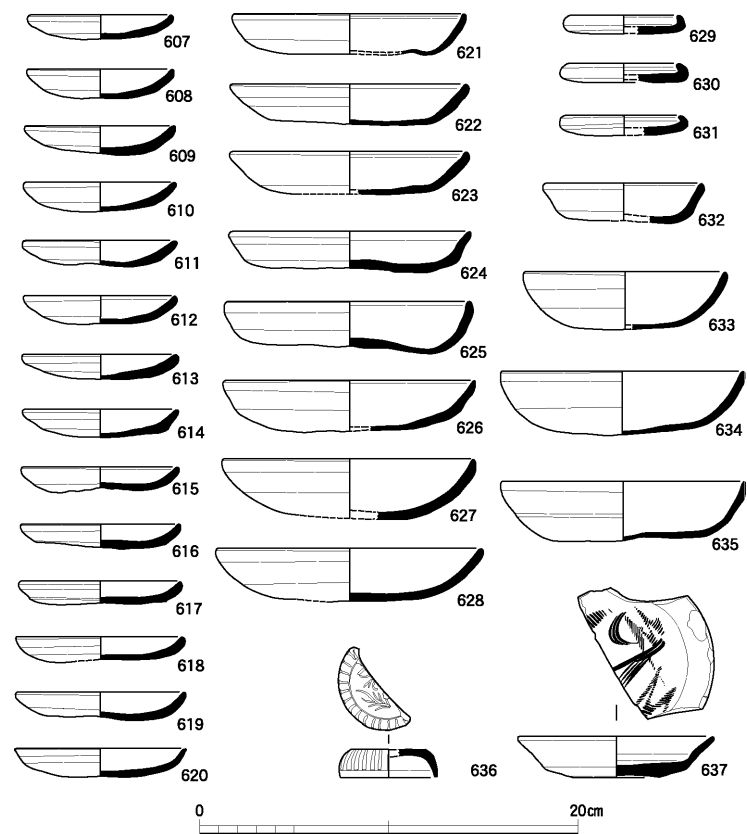


図115 SB79出土土器実測図（1：4）

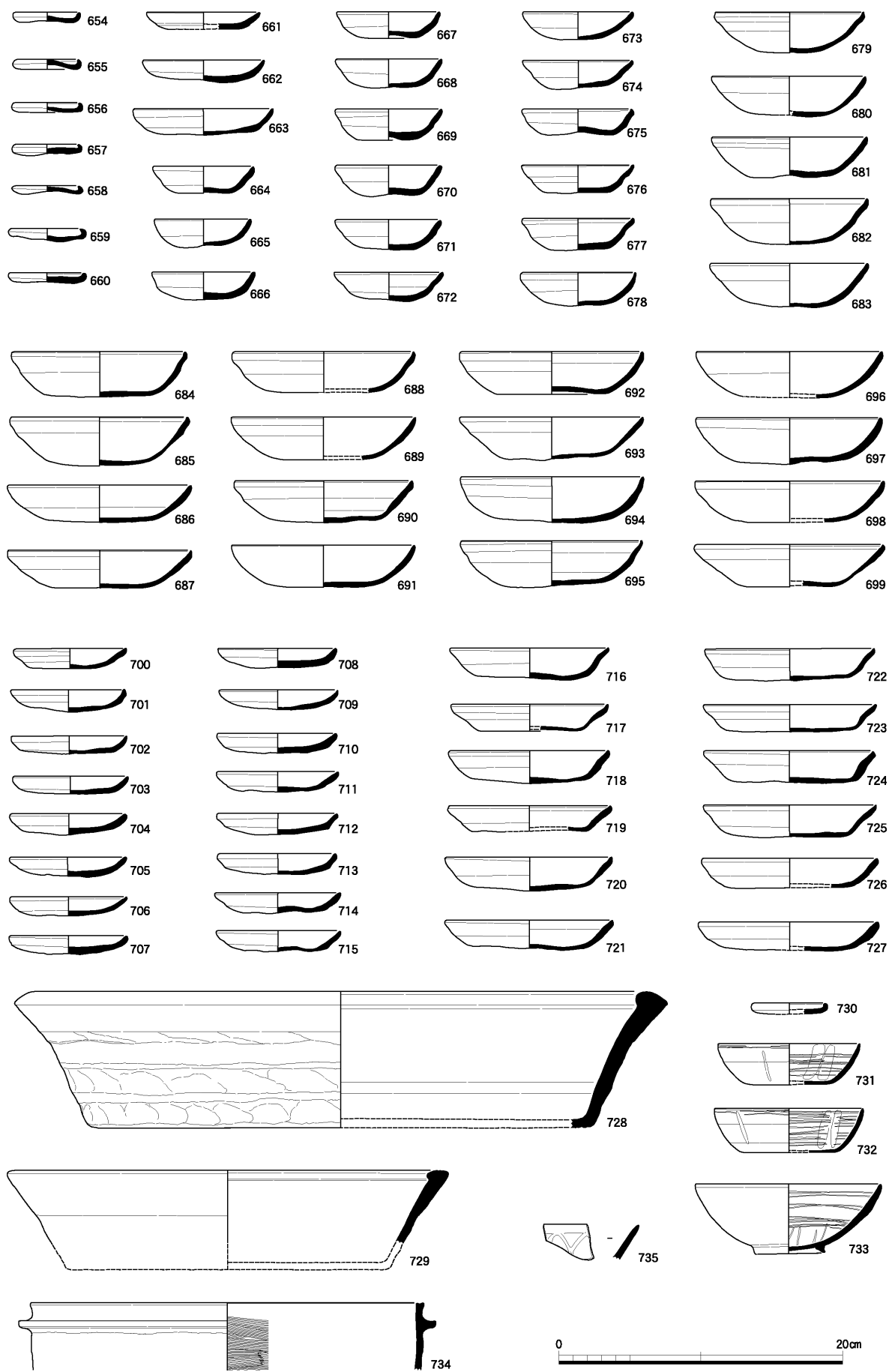


图116 SE06出土土器实测图(1:4)

系壺は暗灰色の胎土に白化粧し、文様部を残して化粧土を掻き落とす。掻き落とした部分には黒彩を施した後に全体に施釉したものである。吉州窯の壺は明灰褐色の素地に黒化粧を掛け、文様部を掻き落として鉄絵で文様の細部を描く。この土器群はSG26と比較すると、土師器皿類で相対的に法量の縮小傾向があること、皿S系に後出的な要素がみえる点から、SG 26より新しく13世紀前半に位置づけられる。

SE06出土土器(654~735)(図116、表24、附表27) 総数で13,651片の土器類が出土した。そのほとんどが土師器皿類で、そのほかに瓦器・須恵器・古瀬戸・焼締陶器・輸入陶磁器がある。土師器には皿Sc・皿Sn・皿S・皿N・盤・釜がある。皿Sc(654~660)は口径5.0cm前後の小型品ばかりである。皿Snには口径8cm台(661・662)と10.0cmのもの(663)がある。皿Sには口径7.6cm前後(664~678)・11.0cm前後(679~683)・13.0cm前後(684~699)の3群がある。皿Nには口径8.5cm前後(700~715)・11.8cm前後(716~727)の2群がある。製作技法はSB79のものと同通するが、皿S系・皿N系ともにSB79より薄く成形されているものが多い。火鉢(728)は底部外面に靱痕跡が残る。瓦器には皿Scに類似する小型の皿(730)・底部が平坦で高台を付けない輪花椀(731・732)・椀(733)や、土師器盤と同型の盤(729)・羽釜(734)などがある。731・732は内面に粗いミガキ、底部に花形の暗文を施す。須恵器には山茶椀・東播系の鉢・甕などがあるが、すべて小片である。古瀬戸には灰釉の椀皿類・壺などがあるが、図示できるものはない。焼締陶器はほとんどが甕体部片で形態は不明である。輸入陶磁器も細片ばかりであるが、龍泉窯系の椀(735)や黄釉褐彩盤がある。

瓦類(瓦22~100・103~112)(図117~119、図版38~43) この時期の瓦類は大半がHK地区とXF地区の東部を中心とする地域から出土している。特に御堂跡が検出された右京六条一坊六町では平安時代末から鎌倉時代の瓦類が多く出土した。瓦類には丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦があり、ヘラ記号を持つものも多い。以下、主要な瓦類について概説する。なお出土地にHK地区と冠したもの以外は、右京側のXF地区からの出土である。

瓦22 単弁蓮華文軒丸瓦 蓮子は1+4。凸面から瓦当面向けて縄タタキ痕が残る。凸面を縦方向ケズリ。凹面に布目痕。瓦当裏面はナデ指オサエ調整。顎部分にも縄タタキ痕が残る。焼成軟質。六町SB79出土。

瓦23 単弁蓮華文軒丸瓦 文様は4弁の花菱状。Y字状の間弁が両先端が花弁を包む様に延びる。瓦当裏面指オサエ。顎部分横方向ケズリ調整。凸面縦方向ケズリ調整。六町SG26出土。

表24 SE06出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	椀・皿	13255	99.9%
	鉢・盤	2	0.0%
	甕・鍋・釜	4	0.0%
	その他	13	0.1%
	不明	1	0.0%
	小計	13275	100.0%
瓦器	椀・皿	121	54.5%
	鍋・釜	98	44.1%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	2	0.9%
	その他	1	0.5%
	不明	0	0.0%
	小計	222	100.0%
須恵器・山茶椀	杯・椀・皿	11	13.6%
	鉢	38	46.9%
	壺・瓶	7	8.6%
	甕	25	30.9%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
小計	81	100.0%	
白色土器	杯・椀・皿	0	-
	高杯	0	-
	盤	0	-
	その他	0	-
	不明	0	-
	小計	0	-
国産施釉陶器	椀・皿	4	50.0%
	壺・瓶	2	25.0%
	その他	2	25.0%
	不明	0	0.0%
	小計	8	100.0%
焼締陶器	壺	0	0.0%
	甕	23	95.8%
	鉢・盤	0	0.0%
	その他	1	4.2%
	不明	0	0.0%
小計	24	100.0%	
輸入陶磁器	椀・皿	33	80.4%
	壺・瓶	4	9.8%
	その他	4	9.8%
	不明	0	0.0%
	小計	41	100.0%
他	その他・不明	0	-
総数		13651	- 100.0%

瓦24 蓮華文軒丸瓦 単弁4弁だが、弁の基本形がよくわからない。外区に珠文を配する。六町SG26出土。

瓦25 複弁蓮華文軒丸瓦 凹形中房で、外区との圏線は二重。焼成硬質。山城産。『木村捷三朗 収集瓦図録』図版48の778と同型式。HK地区一町土取り跡出土。

瓦26 三巴文軒丸瓦 右巻き。外区に珠文は無い。瓦当裏面は指オサエ痕。凸面は縦方向のヘラケズリ調整。凹面に布目痕が残る。巴文様中心と左上に范傷がある。四町土取り跡出土。

瓦27 三巴文軒丸瓦 右巻き。外区に珠文は無い。丸瓦の厚みは8mmと薄い。瓦当面は横楕円形。六町SG26出土。

瓦28 三巴文軒丸瓦 右巻き。巴の尾部が二重に回り圏線状になる。外区に珠文は無い。范傷あり。凸面縦方向ケズリ調整。顎部分は横方向にヘラケズリ調整。四町土取り跡出土。

瓦29 三巴文軒丸瓦 右巻き。外縁は重圏文状となる。外区に珠文は無い。瓦当部には離れ砂が付着する。四町土取り跡出土。

瓦30 三巴文軒丸瓦 左巻き。巴の尾部がつながり圏線状になる。外区に珠文は無い。范傷有り。凸面縦方向にケズリ調整。六町SG26出土。

瓦31 三巴文軒丸瓦 左巻き。外区に珠文は無い。范は深い。六町土取り跡出土。

瓦32 三巴文軒丸瓦 右巻き。巴の頭部が中心でがつながっている。外区に珠文は無い。三町土取り跡出土。

瓦33 三巴文軒丸瓦 右巻き。外区に珠文は無い。六町SB79出土。

瓦34 三巴文軒丸瓦 左巻き。外区に珠文を配する。珠文間隔は密。六町SB79出土。

瓦35 三巴文軒丸瓦 右巻き。外区に珠文13個を配する。巴の尾部がつながり圏線状になる。凹面布目と紐痕が残る。凸面縄目痕。「×」のヘラ記号がある。六町SG26出土。

瓦36 三巴文軒丸瓦 右巻き。外区に珠文13個を配する。凹面は布目痕が残る。端部から瓦当裏面にかけて指オサエ・ナデ調整。瓦35と同范の可能性ある。凸面は縄目タタキ痕が残り、端部にかけて縦方向のケズリ調整。六町SG26出土。

瓦37 三巴文軒丸瓦 右巻き。巴文は細い。外区に珠文を配する。HK地区一町土取り跡出土。

瓦38 三巴文軒丸瓦 右巻き。外区に珠文15個を配する。凹面瓦当裏指オサエ調整。六町SB79出土。

瓦39 三巴文軒丸瓦 右巻き。巴の周囲に圏線が巡る。外区に珠文16個を配する。凹面に布目痕。端部から瓦当裏面指オサエ・ナデ調整。凸面は端部にかけて縦方向のケズリ調整。六町第2層出土。

瓦40 三巴文軒丸瓦 左巻き。外区に珠文を配する。六町SG26出土。

瓦41 二巴文軒丸瓦 右巻き。外区に珠文13個を配する。凹面に布目痕がわずかに残る。丸瓦部は指オサエ・ナデ調整。凸面は端部より縦方向のヘラケズリ。三町土取り跡出土。

瓦42 三巴文軒丸瓦 右巻き。巴の周囲に圏線が巡る。外区には珠文を配する。六町SB79出土。

瓦43 三巴文軒丸瓦 右巻き。巴の尾部が接続する。外区には珠文22個を配する。やや大振り

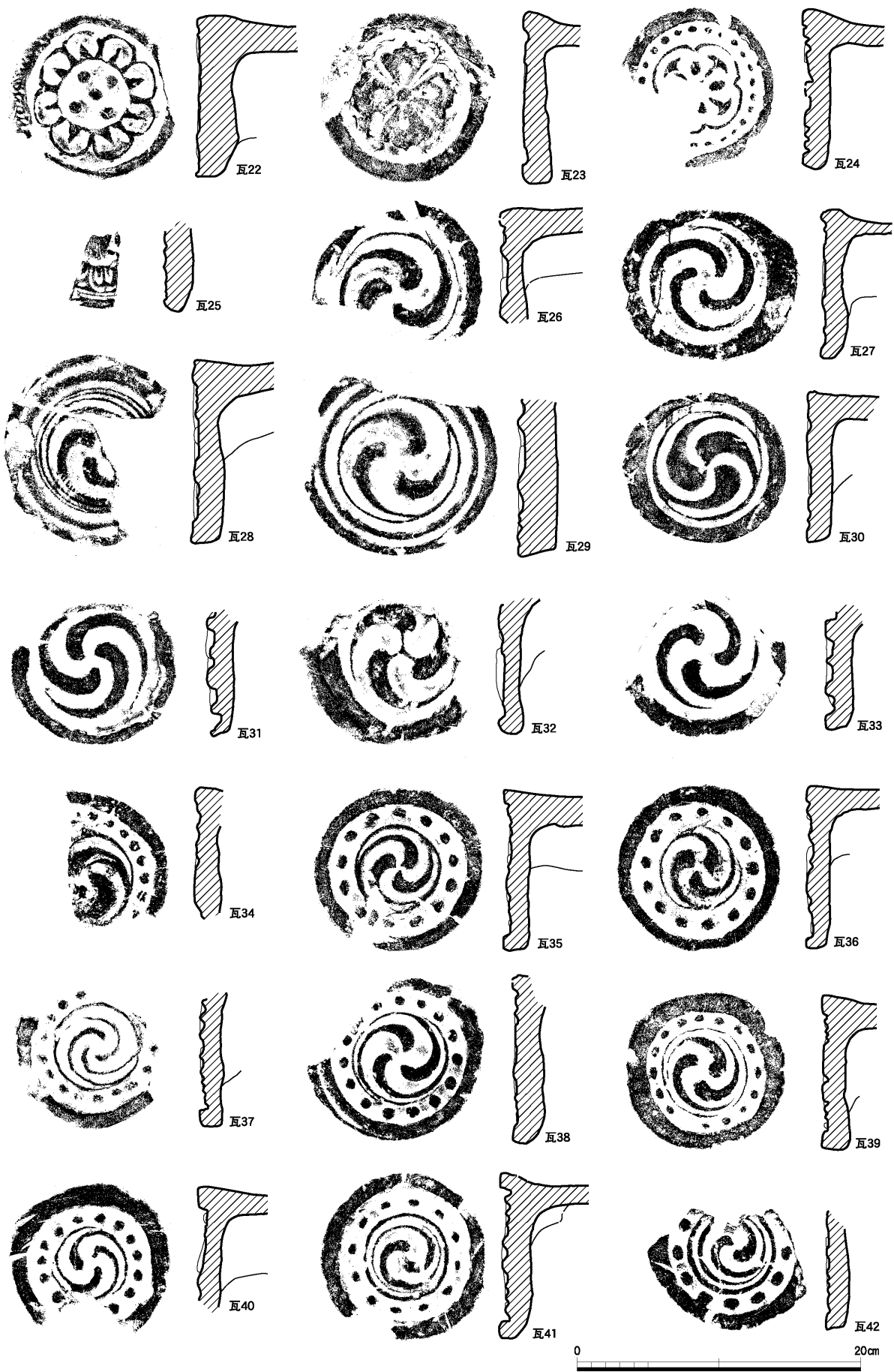


図117 平安時代後期から鎌倉時代の軒瓦拓影・実測図-1 (1:4)

の瓦。十四町SD34流路5出土。

瓦44 三巴文軒丸瓦 右巻きで、外区に珠文は無い。十四町SD34流路5出土。

瓦45 三巴文軒丸瓦 右巻き。外区に珠文を配する。凹面は指ナデ・オサエ調整。凸面は縦方向ケズリ調整。六町SG26出土。

瓦46 三巴文軒丸瓦 右巻き。巴周囲に圈線が巡る。外区に珠文を配する。六町SG26出土。

瓦47 三巴文軒丸瓦 右巻き。巴の周囲に鋸齒文。圈線は二重凸面横方向縄目タタキ痕、丸瓦凸面縦方向縄目タタキ痕。丸瓦凹面に布目痕。瓦当裏面指オサエ調整。六町SB79出土。

瓦48 三巴文軒丸瓦 右巻き。外区に珠文は無い。六町SG26出土。

瓦49 格子文軒平瓦 半折り曲げ式。顎部は横ヘラケズリ、瓦当裏面指オサエ・ナデ調整。『木村捷三郎収集瓦図録』図版12の118と同種。HK地区一町土取り跡出土。

瓦50 斜格子文軒平瓦 折り曲げ式。凹面には布目痕が残る。『木村捷三郎収集瓦図録』図版12の120と同種か。六町SE31出土。

瓦51 鋸齒文軒平瓦 折り曲げ式。凹面から瓦当面に布目痕が続く。瓦当上面は横方向にヘラ削り、凸面・顎下面に縄目タタキ痕が残る。六町SB79出土。

瓦52 斜格子文軒平瓦 顎下面横方向ヘラケズリ調整。小片で詳細不明。六町SG26北岸出土。

瓦53 格子文軒平瓦 折り曲げ式。凹面に布目痕。十四町SD34流路5出土。

瓦54 唐草文軒平瓦 焼成良好で瓦当文様は明瞭だが小片である。凹面は縄目痕が残る。瓦当上面は横方向にヘラケズリ調整。珠文は上下で大きさが違う。HK地区一町土取り跡出土。

瓦55 唐草文軒平瓦 段顎で、凹面は布目痕が残る。端部を横方向にヘラケズリ調整、凸面は横方向にヘラケズリ調整。播磨産。六町SD24出土。

瓦56 唐草文軒平瓦 折り曲げ式。焼成が甘く、表面が磨滅している。六町SD29北部出土。

瓦57 唐草文軒平瓦 折り曲げ式。凹面は布目痕。凸面は端部指オサエ調整。六町SE30出土。

瓦58 唐草文軒平瓦 折り曲げ式。凹面は布目痕。凸面は端部指オサエ調整。十四町SD34流路5出土。

瓦59 唐草文軒平瓦 折り曲げ式。凹面は布目痕を残す。凸面・瓦当下面は縄目タタキ痕。瓦当上面・下面は横方向にヘラケズリ調整。十四町SD34流路5出土。

瓦60 偏行唐草文軒平瓦 折り曲げ式。三町土取り跡出土。

瓦61 唐草文軒平瓦 折り曲げ式。凹面は布目痕を残す。凸面・瓦当下面は縄目タタキ痕。瓦当上面は横方向にヘラケズリ調整している。三町土取り跡出土。

瓦62 波形文軒平瓦 折り曲げ式。小片で詳細不明。六町SB79出土。

瓦63 波形文軒平瓦 折り曲げ式。瓦当上面はヘラケズリ。平瓦部凹面は布目痕を残し縦方向にヘラケズリ調整。凸面顎部分は横方向にケズリ調整。『法住寺殿発掘調査概報』古代學協會第22図-6と同型式。播磨産。六町SB79出土。

瓦64 花菱文軒平瓦 曲線顎。凹面に縄目痕。凸面は指オサエ調整。文様はわずかに花文が残る。六町SB79出土。

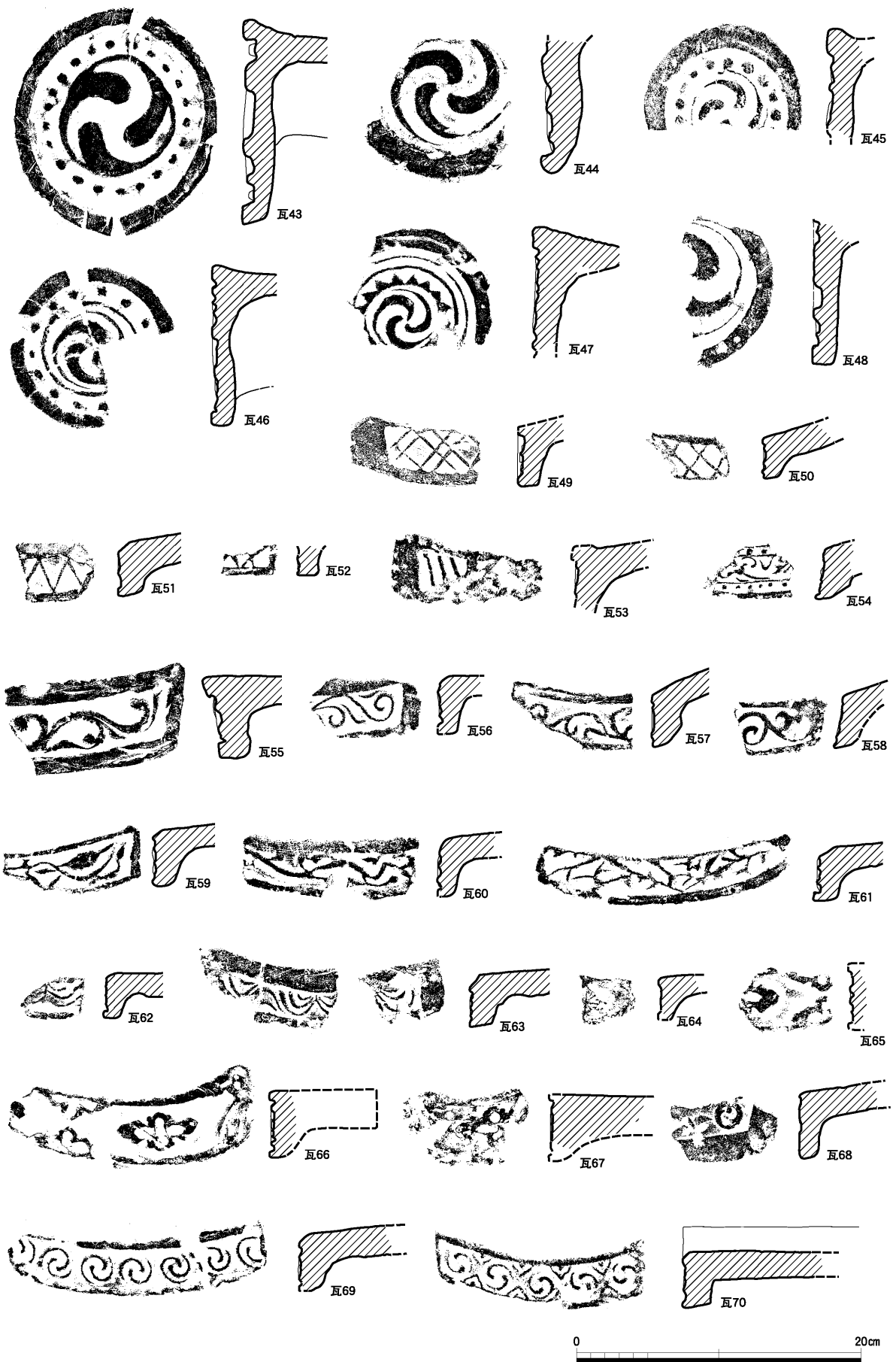


図118 平安時代後期から鎌倉時代の軒瓦拓影・実測図-2 (1:4)

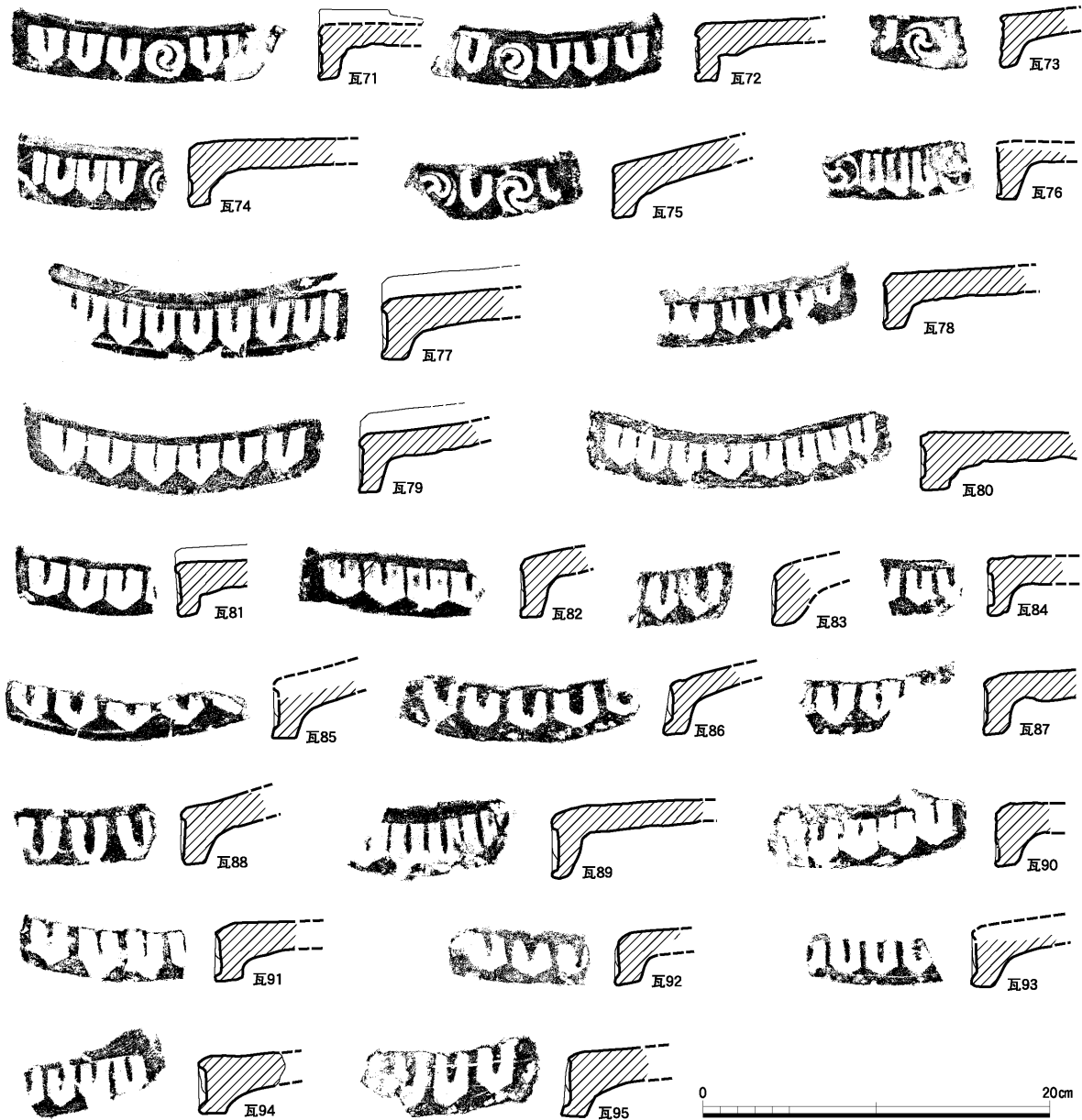


図119 平安時代後期から鎌倉時代の軒瓦拓影・実測図-3 (1:4)

瓦65~67 花菱文軒平瓦 左右に全形、中央上下縁に半裁した花菱文を配する。瓦当面には黒漆が塗布されている。瓦当面の形態や奥行きが約7.5cmと短いこと、胎土が赤褐色で焼成が非常に緩いことなど通常の瓦と異なる点の多い製品である。屋瓦ではなく特殊な用途に供されたものか。六町SK23(瓦65)・六町SB79(瓦66・67)出土。

瓦68 雁巴文軒平瓦 尾部がつながり圈状になった右巻き二巴文と雁文が確認できる。瓦当上下の幅に対して、范の幅が狭く上方に施文されている。六町土取り跡出土。

瓦69 巴文軒平瓦 右巻き二巴文を7つ配する。両端の巴文は瓦当縁で途切れている。凹面に布目痕。凸面には粗い縄目タタキ痕が残る。三町土取り跡出土。

瓦70 巴文軒平瓦 折り曲げ式。左巻き二巴文とその間に上下縁から花卉文を配する。段顎で、凸面に縄目タタキ痕が残る。四町土取り跡出土。

瓦71 剣巴文軒平瓦 半折り曲げ式。中央に右巻き二巴文、その両側に剣頭文を3個ずつ配する。凹面に布目痕。瓦当端部は横方向ヘラケズリ。凸面は縦方向ヘラケズリ。六町SB79出土。

瓦72 剣巴文軒平瓦 瓦71と同範。右側部分。六町SB79出土。

瓦73 剣巴文軒平瓦 右巻き三巴と剣頭文が一部残る。小片で詳細は不明。六町土取り跡出土。

瓦74 剣巴文軒平瓦 半折り曲げ式。中央に右巻き巴文、その左に剣頭文を3個半配する。凹面は布目痕。瓦当端部は横方向ヘラケズリ。凸面は縦方向ヘラケズリ・指オサエ調整。六町SB79出土。

瓦75 剣巴文軒平瓦 半折り曲げ式。右巻き二巴文と剣頭文を交互に配する。凹面は布目痕。瓦当端部は横方向ヘラケズリ。凸面は縦方向ヘラケズリ調整。六町SB79出土。

瓦76 剣巴文軒平瓦 3個の剣頭文を挟んで左巻き巴文を配する。瓦当端部は横方向ヘラケズリ。凸面は縦方向ヘラケズリ調整。六町土取り跡出土。

瓦77 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。剣頭文を9個（両端は半分）配する。凸面の顎部分に曲げた時のしわが残る。凹面から瓦当面に布目痕。瓦当上下面・横方向にヘラケズリ調整。六町SB79出土。

瓦78 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。剣頭文は8個（残数は6。同範の検討による）右から5つ目の剣頭文の幅が広い。凹面は布目痕。凸面ナデ・オサエ調整。顎は横にヘラケズリ・ナデ痕。六町SB79出土。

瓦79 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。剣頭文を6個配する。凹面に布目痕。瓦当部分にも布目痕が残る。凸面は縄目タタキ痕。瓦当上下面は横方向にヘラケズリ調整。六町SE30出土。

瓦80 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。剣頭文は8個で、右から5つ目の剣頭文の幅が広く瓦78と同範の可能性がある。凹面に布目痕。凸面はナデ・オサエ調整。顎部分は横方向にヘラケズリ・ナデ痕。顎頸部に凹形の調整台の圧痕がある。六町SE30出土。

瓦81 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。凸面に「×」ヘラ記号。焼成甘く表面が磨滅している。六町SB79出土。

瓦82 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。凹面は布目痕。顎部分横ヘラケズリ調整。瓦当上端をヘラケズリしている。六町SG26北岸出土。

瓦83 剣頭文軒平瓦 瓦当の一部のみ残存。HK地区一町土取り跡出土。

瓦84 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。凹面から瓦当部にかけて粗い布目痕。HK地区一町土取り跡出土。

瓦85 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。剣頭文6個（同範の検討による）。六町SB79出土。

瓦86 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。左側の剣頭文2個が範の破損で大きく崩れている。凹面に布目痕。凸面はナデ・オサエ調整。六町SB79出土。

瓦87 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。凹面に布目痕。凸面はナデ・オサエ調整。三町土取り跡出土。

瓦88 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。顎裏面に強いナデ痕跡。六町SB79出土。

瓦89 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。文様は端正。凹面に布目痕。凸面には縄目タタキ痕。瓦当裏面指ナデ・オサエ痕、調整台痕がわずかに残る。十四町SD34流路5出土。

瓦90 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。凹面に布目痕。凸面にヘラ記号の一部が残る。六町SB79出土。

瓦91 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。凹面に粗い布目痕。凸面は縄目タタキか。表面が磨滅している。六町土取り跡出土。

瓦92 剣頭文軒平瓦 折り曲げ式か。表面磨滅のため観察困難。HK地区一町土取り跡出土。

瓦93 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。凸面はナデ調整。六町土取り跡出土。

瓦94 剣頭文軒平瓦 瓦当と笱の曲率が合っていない。凹面に糸切り痕。顎下面をヘラケズリ。凸面は縦方向のヘラケズリ。六町SB79出土。

瓦95 剣頭文軒平瓦 半折り曲げ式。凹面に布目痕。凸面はナデ調整。六町土取り跡出土。

瓦96 丸瓦 長さ29.5cm、幅10.8cm。凸面は縄目タタキで、先端部を横方向にナデ調整。凹面には全体に布目痕が残る。周縁部をヘラケズリする。焼成はやや軟質である。六町SB79出土。

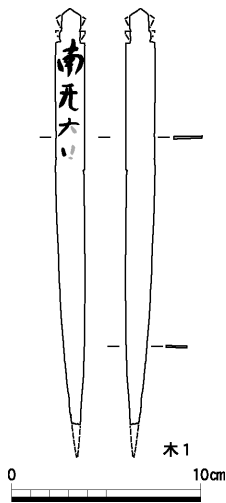


図120 SD01出土木簡
実測図(1:4)

瓦97 丸瓦 長さ29.0cm、幅11.0cm。技法の特徴は瓦96と同じで、焼成はやや硬質。六町SB79出土。

瓦98 平瓦 長さ23.5cm、幅15.0~16.0cm。凹面・凸面とも糸切り痕が強く残る。四周をヘラケズリ調整する。焼成は甘く、軟質で磨滅が激しい。六町SX28出土。

瓦99 平瓦 残長17.5cm、幅14.0cm。凹面に離れ砂。凸面には斜格子タタキ痕。焼成は硬質。六町SB79出土。

瓦100 平瓦 残長11.5cm、幅16.5cm。凹面に糸切り痕と離れ砂。凸面には縄目タタキ痕。周囲をヘラケズリ調整する。焼成は軟質。六町SB79出土。

瓦103~112 ヘラ記号「×」「」・「」・「|」の4種類が確認できた。「×」は瓦103・瓦111平瓦凸面、「」は瓦104・瓦105・瓦106いずれも丸瓦凸面の玉縁付近・瓦109平瓦凸面、「」は瓦110・瓦112平瓦凸面、「|」は瓦107・瓦108平瓦凸面に刻まれている。

木簡(木1)(図120) 片面に「南無大日」と墨書されている。裏面には墨書はない。頭部に刻みを入れ、塔婆形にしている。SD01出土。



図121 SD01出土ヒト下顎骨

人骨(骨1)(図121) 成人男性と思われる下顎骨。右臼歯2・大臼歯2と左大臼歯2が遺存している。右第2大臼歯は欠損しているが、歯槽の窪みが完全に埋まっており、脱落后長期間を経ていることがわかる。SD01出土。

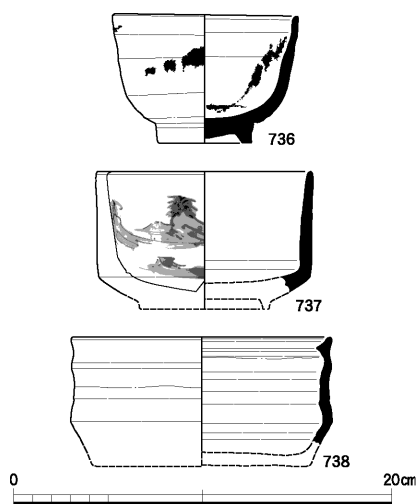


図122 SD67出土陶磁器実測図（1：4）

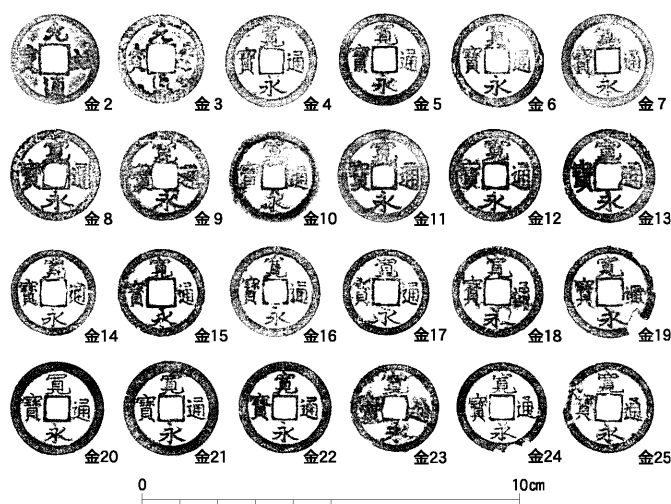


図123 SD67出土銭貨拓影（1：2）

（4）江戸時代の遺物

SD67出土土器・金属製品（736～738、金2～25）（図122・123、図版60、付表28）出土量はきわめて少ない。土器類では図示した美濃鉄釉椀（736）・伊万里染付椀（737）・丹波鉢？（738）のほか、土師器皿・信楽播鉢の細片が少量ある。時期的には17世紀後半にまとまっており、御土居の濠の廃絶期を推定する資料として貴重である。金属製品には銅銭がある。もともと緡銭として束ねられていたものとみえ、紐は検出できなかったが連なった状態で出土した。元祐通寶（金2）と元豊通寶（金3）の2枚の宋銭以外はすべて寛永通寶である。

表25 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器・尖頭器		縄文土器7点・尖頭器1点		
弥生時代	弥生土器・石斧・石包丁・砥石・石製模造品(剣形)		弥生土器13点・石斧1点・石包丁2点・砥石1点・石製模造品1点		
古墳時代	土師器・須恵器		土師器6点・須恵器21点		
平安時代前期	土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器・青磁・軒丸瓦・軒平瓦・鴟尾・平瓦・丸瓦・硯・土馬・製塩土器・銭貨・石製鈔具		土師器131点・須恵器142点・黒色土器7点・緑釉陶器31点・灰釉陶器25点・白色土器1点・青磁2点・軒丸瓦12点・軒平瓦8点・刻印瓦2点・鴟尾1点・製塩土器2点・土錘2点・萬年通寶1点・石製鈔具3点・土馬8点		
平安時代後期	土師器・須恵器・白磁・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・木簡・人骨		土師器52点・須恵器3点・白色土器3点・白磁4点・軒丸瓦27点・軒平瓦47点・丸瓦2点・平瓦3点・ヘラ記号瓦10点・木簡1点・人骨1点		
鎌倉時代	土師器・瓦器・陶器・白磁		土師器239点・瓦器9点・輸入陶磁器21点		
江戸時代	染付磁器・鉄釉陶器・焼締陶器・銭貨		施釉陶器1点・染付磁器1点・焼締陶器1点・宋銭2点・寛永通寶22点		
合計		792箱	880点（33箱）	38箱	721箱

4.まとめ

平成3年度から14年度にかけて実施した一連の調査を通じて、この地域の変遷の概略を知ることができた。以下ではその成果について簡単にまとめておきたい。

既に述べた通り、今回の調査で検出した遺構・遺物は、平安時代以前（縄文時代から古墳時代後期）・平安時代前期（9世紀）・平安時代後期から鎌倉時代（12世紀後半～14世紀前半）・江戸時代（17世紀後半）の4群にまとめられる。ここではそれを1期～4期と仮称する。

各期は継続的に遷移しておらず、その間に古墳時代後期から奈良時代（7～8世紀）・平安時代中期から後期（10～12世紀前半）・鎌倉時代後期から江戸時代初期（14世紀後半～17世紀前半）の空白期が介在している。

1期は長期にわたり、この間にも何らかの変化が見込まれるが、遺構・遺物の密度が低く、平安時代以降のように様相を具体的にとらえることができなかつた。平安京が成立する以前という枠で一括してとらえておく。いずれにせよ、この期間のうちに積極的な土地利用の痕跡は確認されておらず、周辺の調査結果を含めた流路や湿地などの分布状況からみて、ほとんど未開発の自然地形が大勢を占めていたものと思われる。

2期の遺構は左京側のHK地区では検出されず、すべて右京側のXF地区に偏っている。六町・十一町・十四町それぞれの町で井戸や建物を検出したが、今回の調査に限れば、皇嘉門大路の西側、特に十四町で多くの遺構・遺物を検出した。このなかで注目される点は、平安京の造営を契機として旧流路や湿地など自然地形が埋め立てられ宅地化してゆく過程が判明したことである。

さらにこうした開発が遷都後の短期間に限らず、9世紀後半までの幅の中で漸進的に進行したことを確認できたことは重要である。SD34のように、自然河川が遷都後もしばらくのあいだ町内を流れ、それに制約されながらも川岸に近接した地域まで生活空間として利用し、やがて川を埋め立て、利用可能な土地を拡張し、それに伴って9世紀後半には楊梅小路側溝も西延長されてゆく。平安京域のなかで、こうした変化が確認された例は以外に少なく、地域の都市景観の変遷を考察する上で貴重な情報といえよう。

六町や十一町でも、十四町ほどの密度ではないが平安時代前期の遺構・遺物を検出している。六町のSX15や十一町のSD53の状況も、SD34と同様に川跡や湿地が段階的に整地され宅地へと変化していったことを示している。そしてこれらの遺構が9世紀末頃にほぼ一斉に廃絶する。こうした現象は周辺の調査結果でも確認されており、その要因については今後とも検討を進めるべき点ではあるが、この地域に共通する様相として認識できる。またこれは地域により多少の時期差はあるが、平安京の右京が遷都後の比較的早い段階で衰退して行ったことを示す事例の一つとしてとらえることができる。

3期の遺構はHK地区では主に、朱雀大路東側溝・路面・樋口小路北側溝・坊城小路西側溝など条坊街路関連の遺構を検出した。いずれも平安時代後期から鎌倉時代前期のもので、土取り跡のため坊城小路では未確認だが、朱雀大路・樋口小路については鎌倉時代前期に路面側に移動して

いることを確認した。この街路関係の遺構が造営期から継続的に存在していたのか、あるいは右京側の遺構のように一時廃絶した後に再び開削されたのかは、調査区の制約もあり現時点では明らかではない。

XF地区では六町や三町でこの時期の遺構を多数検出した。条坊街路関連の遺構としては、西坊城小路の両側溝や一部ではあるが楊梅小路北側溝を確認している。

この時期で特に注目されるのは六町の平安時代末から鎌倉時代の遺構群である。SB79・SG26などをはじめ、その周辺でほぼ同時期と目される溝・井戸・建物・石列などが検出され、この町に池や御堂を備えた邸宅が存在していたことが明らかになった。御堂SB79は火災を受けた後に同じ場所に再建されており、さらに下層には先行する12世紀後半の区画溝と思われる東西方向の溝やその溝と同時期の井戸などを検出した。これは9世紀末頃に衰退したこの地が12世紀後半に再び利用されるようになり、鎌倉時代前半まで継続して生活が営まれたことを示している。

六町西部の南北中央付近に位置するSB79の下層には平安時代以前の川跡SD85が重複しており、腐植土・シルト・砂層などの軟弱な土層が重層した、六町の範囲内では条件の悪い場所である。調査区内に限ってみても、建築場所を東あるいは南にわずかに移動すればこの川跡の影響はなくなる。しかし、敢えてこのような場所に、複雑な工程を経た地盤改良を施してまで御堂を建築したのは何故か。これはおそらく町の中央に位置するSX84や池SG26との関係が考慮された結果と思われる。町の南部の池、町の中央に配置された何らかの施設、その西側に南北を揃えて配置された御堂、さらにこの御堂は被災後にも同じ場所に建て替えられているなど、こうした邸内施設の配置には計画性がうかがえ、SB79の基礎地業はそれに規制された結果と考えられる。

今回の調査地以外でも、右京では平安時代前期に放棄された地域が、平安時代末から鎌倉時代前期に再開発される事例が数箇所知られている。右京が衰退した後の実質的な京の縁辺部といえる地域に、この時期こうした再開発が行われた契機や背景を追求することが今後に残された課題の一つといえよう。

4期は耕作関係の溝や土取りがほとんどで、御土居の濠のほか顕著な遺構は無い。御土居の濠は今回の調査範囲の東寄りで見出しており、それより西の地帯は近世に至っても洛外として近郊農地としての利用に止まっていたのであろう。鎌倉時代後期に再び衰退したこの地域がどの時点で耕作地化したのが問題となるが、それをを知る手がかりは今回の調査では得られなかった。

付表1 SX15下層出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
1		縄文土器 深鉢				10YR4/2 灰黄褐色	胎土やや粗 白色粒含む
2		縄文土器 深鉢				7.5YR4/3.5 褐色	胎土粗 砂粒含む多い
3		弥生土器 壺	21.5			2.5Y8/3 淡黄色	
4		弥生土器 器台				10YR7.5/2 断面N5.5/0 灰色	
5		弥生土器 壺				10YR8/2 灰白色	胎土やや密 雲母・白色・褐色粒含む
6		弥生土器 壺				10YR7/2 にぶい黄橙色	胎土砂粒を含むが密
7		弥生土器 壺				10YR7.5/4 浅黄橙色	口縁部外面に凹線がめぐり円盤状の粘土を貼り付ける 口縁部から頸部にかけて貝殻を押し当て調整・装飾とする
8		弥生土器 高杯				10YR6/3 にぶい黄橙色	
9		弥生土器 鉢	15.0	6.1	5.1	2.5Y7/2 灰黄色	
10		弥生土器 鉢			13.2	2.5Y7/1 灰白色	内面刷毛目
11		弥生土器 壺			5.9	2.5Y8/3 淡黄色	内面底部刷毛目
12		弥生土器 壺			8.2	2.5Y7/2 灰黄色	
13		弥生土器 壺			5.5	10YR8/2 灰白色 断面N4/0灰色	胎土粗
14		弥生土器 壺			5.5	10YR8/1.5 断面10YR7/1 灰白色	
15		土師器 甕	14.6			2.5Y8/1.5 灰白色	胎土粗 体部外面刷毛目
16		土師器 甕	15.6			5YR7/5 にぶい橙色	胎土粗 体部外面刷毛目
17		土師器 甕	15.8			10YR7/3.5 にぶい黄橙色	胎土やや粗 白色砂粒多く含む
18		土師器 台付き甕	13.3	23.3	7.8	10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部以外を刷毛目 内面は細く弱い 肩部に横方向のカキメ
19		土師器 小型丸底壺	11.0			7.5YR8/6 浅黄橙色	
20		土師器 小型丸底壺	12.1			5YR7/6 橙色	

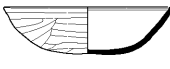



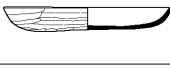
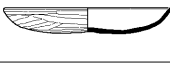
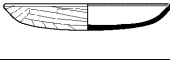


No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
21		須恵器 壺	8.6	7.4		5PB6/1 青灰色	内面底部に押さえ具の痕
22		須恵器 甕				10B4/1 断面7.5R4/2 灰赤色	外面肩部・内面底部に降灰 外面底部ケズリ
23		須恵器 平瓶				N7/0 灰白色	胎土密 硬質 内面底部から体部にかけて降灰
24		須恵器 器台	14.4			N5/GY灰色 断面5R6/1 赤灰色	胎土密 焼成良好
25		須恵器 高杯	13.0			N4.5/Y灰色 断面N7.5/0 灰色	脚部を欠く
26		須恵器 高杯			(7.5)	N6/0 灰色	
27		須恵器 高杯			13.4	N5.5/B 灰色	
28		須恵器 高杯(器台?)			15.6	N5/0 灰色	胎土緻密 焼成良好
29		須恵器 杯蓋	12.7	4.1		N7/0 灰白色	黒色細粒混 外面降灰 天井部ケズリ
30		須恵器 杯蓋	14.7	4.7		10YR8/1 灰白色	胎土密 焼成やや軟質 天井部ケズリ
31		須恵器 杯蓋	15.3	5.0		10B6/1 青灰色	胎土やや粗 天井部ケズリ
32		須恵器 杯身	11.6	5.0		10B6/1 青灰色	外面底部時計回りのケズリ
33		須恵器 杯身	13.0	4.0		7.5B6/1 断面7.5Y5/1 灰色	胎土細粒 白色砂粒混 外面底部時計回りのケズリ
34		須恵器 杯身			(4.8)	5Y7/1 灰白色	外面底部ケズリ 他の部位はナデ
35		須恵器 壺	13.6			2.5Y8/1 灰白色	胎土やや密 焼成やや軟質
36		須恵器 壺	15.8			5PB5/1青灰色 断面7.5R6/2 灰赤色	胎土密 硬質
37	写真のみ掲載	弥生土器				10YR7/3 にぶい黄橙色	破片中程に横方向の沈線文
38	写真のみ掲載	縄文土器				10YR8/2 黄橙色 断面N4/0灰色	底部に刻み目凸帯 長石粒含む
39	写真のみ掲載	縄文土器				10YR8/3 浅黄橙色	底部に刻み目凸帯
40	写真のみ掲載	縄文土器				10YR4/1 黒褐色	口縁部直下に刻み目凸帯




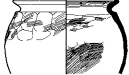




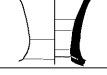

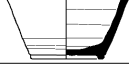

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
41	写真のみ掲載	縄文土器				5Y3/2 オリーブ黒色	口縁部直下に刻み目凸帯 胎土砂粒多いが均質
42	写真のみ掲載	須恵器				5Y5/1 灰オリーブ色	内面ヨコナデ 外面に刺突文を施す

付表2 SD53下層出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
43		縄文土器 浅鉢	16.2			7.5YR7.5/3 にぶい橙色	縄文と沈線文
44		須恵器 杯身	12.8			10B6/2 青灰色	
45		須恵器 杯身	13.1	(5.1)		N6/0 灰色	
46		須恵器 杯蓋	不明			10B7/2 明青灰色	
47		須恵器 壺	9.4			N7/0 灰白色	

付表3 SE13出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
54		土師器 椀A	13.7	3.9		10YR7/4 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
55		土師器 椀A	14.0	3.8		2.5Y8/3 淡黄色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
56		土師器 杯A	17.5	4.2		7.5YR7/3 にぶい橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
57		土師器 皿C	9.5	1.5		7.5YR8/4 浅黄橙色	e手法
58		土師器 皿A II	16.0	2.3		10YR7/3 にぶい橙色断面 2.5YR6/6橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
59		土師器 皿A II	16.2	2.5		2.5YR6/6 橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
60		土師器 皿A II	16.3	2.5		10YR7/3 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
61		土師器 皿A II	16.5	2.4		10YR8/2 灰白色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
62		土師器 皿A II	19.2	2.5		10YR7/2 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ








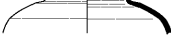
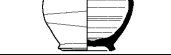

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
63		土師器 皿A I	20.6	2.1		7.5YR7/3 にぶい橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
64		土師器 皿A I	22.0	2.1		10YR7/3 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
65		土師器 杯B	17.2	5.0	9.5	2.5YR6/6橙色 断面10YR7/2 にぶい黄橙色	器表磨滅する
66		土師器 甕	14.0			10YR7/1~8/4 浅黄橙色	胴部最大径16.0cm
67		土師器 壺E	8.2	7.1	6.0	7.5YR6/6 橙色	外面ミガキ 肩部最大径11.1cm
68		土師器 高杯 杯部	31.0			10YR6/3 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ後ヘラミガキ
69		土師器 高杯 脚部			13.3	7.5YR7/4 にぶい橙色	
70		須恵器 壺M	3.7	9.0	4.0	5B6/1 青灰色	
71		須恵器 壺L	8.7			5PB5/1 青灰色	
72		須恵器 鉢D	11.1	7.0	5.4	5Y6/1 灰色	
73		須恵器 壺E	8.6	6.5	6.6	2.5Y7/1 灰白色	肩部最大径11.6cm
74		須恵器 杯蓋	16.2	2.7		5Y7/1 灰白色	

付表4 SD77出土掲載土器一覧表



No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
75		土師器 椀A	12.6	3.3		10YR7/3 にぶい黄橙色	胎土密滑らか 外面ヘラケズリ 内面ナデ
76		土師器 椀A	12.7	3.2		10YR7/2 にぶい黄橙色	胎土密滑らか 体部外面オサエ
77		土師器 椀A	13.2	3.8		10YR7/2 にぶい黄橙色	胎土密滑らか 体部外面オサエ
78		土師器 椀A	13.2	3.6		5YR6/4 にぶい橙色	雲母・赤褐色細粒含む 外面ヘラケズリ 内面ナデ
79		土師器 椀A	13.2	3.9		7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒多く含む 器表磨滅しケズリの単位不明
80		土師器 椀A	13.7	3.5		10YR7/2 にぶい黄橙色	雲母・赤褐色細粒含む 器表磨滅する 外面ヘラケズリ 内面ナデ

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
81		土師器 杯X	12.8	2.8		7.5YR7/2 明褐灰色	胎土やや砂質
82		土師器 杯A	16.4	3.4		10YR7/2 にぶい黄橙色	赤褐色粒・雲母細粒含む 外面ヘラケズリ 内面ナデ
83		土師器 杯A	17.0	3.6		7.5YR7/3 にぶい橙色	胎土やや砂質 外面ヘラケズリ 内面ナデ
84		土師器 杯A	18.1	3.7		10YR7/2 にぶい黄橙色	胎土細粒やや砂質 外面ヘラケズリ 内面ナデ
85		土師器 皿X	16.2	2.0		10YR7/2 にぶい黄橙色	胎土密細粒 体部外面オサエ
86		土師器 皿A II	16.6	1.8		10YR7/2 にぶい黄橙色	体部外面オサエ
87		土師器 皿A I	17.2	1.9		10YR7/2 にぶい黄橙色	雲母細粒含む
88		土師器 皿A I	17.4	2.1		10YR7/2 にぶい黄橙色	雲母・赤褐色細粒含む 外面ヘラケズリ 内面ナデ
89		土師器 皿A I	17.7	(2.3)		10YR7/2 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
90		土師器 皿A I	19.6	2.1		10YR7/2 にぶい黄橙色	胎土密細粒 雲母細粒含む 外面ヘラケズリ 内面ナデ
91		土師器 杯B (盤)?			14.6	10YR7/2 にぶい黄橙色	胎土密滑らか 高台は貼り付け
92		土師器 甕	18.6			10YR8/2 灰白色	胎土やや粗 内面磨滅し調整不明
93		土師器 甕	23.8			10YR6.5/2 灰黄褐色	内外面に煤附着する
94		須恵器 杯蓋	13.2			10B6/1 青灰色	転用硯 ツマミの接合痕が認められる
95		須恵器 杯蓋	15.9	1.9		2.5PB6/1 青灰色	天井部に墨書 転用硯 よく使い込まれ内面は磨滅している
96		須恵器 杯B	12.6	4.5		10B6/1 青灰色	胎土密 焼成良好
97		須恵器 壺G	6.1			器表N4/0 灰色 断面N7/0 灰白色	胎土やや粗 焼成良好
98		須恵器 壺M			4.1	N7/0 灰白色	胎土密 焼成良好
99		須恵器 壺L			9.4	5PB5/1 青灰色	

付表5 SE39出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
100		土師器 椀A I	13.0	3.1		10YR8/3 浅黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ 口縁端部に煤付着
101		土師器 皿X	14.8	2.1		10YR8/2 灰白色	外面底部オサエ 他の部位はナデ
102		土師器 皿A II	16.4	2.1		10YR8/2 灰白色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
103		土師器 杯A	16.6	3.5		10YR8/2 灰白色 外面 2.5Y2/1黒色	外面ケズリ 内面ナデ 口縁部にナデを残す
104		土師器 杯X	15.1	3.7		5YR7/4 にぶい橙色	外面オサエ後粗いミガキ 内面螺旋状の暗文
105		土師器 杯X	17.4	4.2		7.5YR6/4 にぶい橙色	外面オサエ後粗いミガキ 内面螺旋状の暗文 内外面に煤が付着
106		須恵器 杯B	12.0	4.5	8.5	N6/0 灰色	高台内から体部外面にかけて墨が付着
107		須恵器 壺A	11.4			N7/0 灰白色	外面降灰多くピードロ状を呈する
108		須恵器 壺L			6.3	N7/0 灰白色	内面に内容物の痕跡が残る 外面底部糸切り後ナデ
109		須恵器 壺L			7.8	N5/0 灰色	内面に内容物の痕跡が残る 外面底部静止糸切り

付表6 SE50出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
110		土師器 椀A	13.0	3.2		5YR7/2 明褐灰色	外面オサエ後粗いミガキ
111		土師器 椀A	13.2	3.4		5YR6/4 にぶい橙色	外面オサエ後不規則な粗いミガキ
112		土師器 椀A	13.0	3.2		10YR7/2 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
113		土師器 椀A	13.4	3.2		2.5Y7/3 浅黄色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
114		土師器 椀A	13.7	3.2		2.5Y8/3 淡黄色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
115		土師器 椀A	13.5	3.3		10YR7/3 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ 内外面に煤付着
116		土師器 椀A	13.4	3.8		5YR7/3.5 にぶい橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
117		土師器 椀A	14.0	3.3		10YR7/2 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
118		土師器 皿A II	15.5	2.2		7.5YR8/3 浅黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
119		土師器 皿A II	15.3	2.3		7.5YR8/3 浅黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
120		土師器 皿A II	16.0	2.3		10YR7/3 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
121		土師器 皿A II	16.4	2.5		10YR6/3 にぶい黄橙色	ケズリ粗く口縁部にナデ残る 内外面に煤付着
122		土師器 皿A II	16.4	2.3		10YR8/2 灰白色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
123		土師器 皿A II	17.0	2.7		5YR7/4~7.5 Y R 8/3黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
124		土師器 皿A I	17.0	1.9		2.5Y8/2 灰白色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
125		土師器 皿A I	17.2	2.5		10YR8/2 灰白色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
126		土師器 皿A I	19.9	2.0		10YR8/2 灰白色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
127		土師器 杯A	16.0	3.1		7.5YR7/3 にぶい橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
128		土師器 杯A	16.3	3.8		10YR7/2 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
129		土師器 杯A	16.5	3.2		10YR7/2 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ 煤付着
130		土師器 杯A	17.1	4.0		2.5Y7/2 灰黄色	外面ヘラケズリ
131		土師器 杯A	18.2	4.0		7.5YR8/2 灰白色	外面ヘラケズリ 口縁部に一部ナデを残す
132		土師器 椀X	11.8	3.9		5YR6/3 にぶい橙色	外面粗いオサエ痕残す 粗いミガキ
133		土師器 杯BX	15.8	5.4	8.1	7.5YR6/3 にぶい褐色	外面粗いミガキ 内面螺旋状の暗文3段
134		土師器 杯X	13.8	3.3		10YR8/2灰白色 断面2.5YR7/6 橙色	外面底部オサエ 他の部位はナデ 煤付着
135		土師器 杯X	13.3	3.3		10YR8/2 灰白色	外面底部オサエ 他の部位はナデ
136		土師器 皿X	16.2	2.5		10YR7/3 にぶい黄橙色	外面底部オサエ 他の部位はナデ
137		土師器 皿X	18.0	2.0		5YR7/4 にぶい橙色	外面底部オサエ 他の部位はナデ




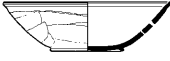


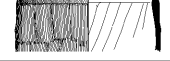
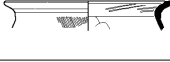

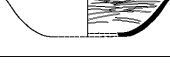
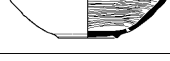

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
138		土師器 杯X	14.0	2.9		2.5YR6.5/6 橙色	外面底部オサエ 他の部位はナデ
139		土師器 皿X	15.6	2.3		7.5YR7.5/2 明褐灰色	外面底部オサエ 他の部位はナデ
140		土師器 皿X	18.8	2.3		10YR8/2 灰白色	外面底部オサエ 他の部位はナデ
141		土師器 皿X	19.5	2.4		5YR7/3 にぶい橙色	外面底部オサエ 他の部位はナデ
142		土師器 甕	17.5			5YR7/2.5 にぶい橙色	内外面に刷毛目残す
143		土師器 甕	18.6			10YR8/1 灰白色	内外面に刷毛目残す
144		土師器 甕	26.0			10YR7/2 にぶい黄橙色	内外面に刷毛目残す
145		製塩土器	14.2	18.8		10YR6/4にぶい 黄橙色断面5YR 7/3にぶい橙色	胎土粗 外面火を受け赤変する
146		土馬脚部				10YR6.5/1 褐灰色	前部左足
147		黒色土器 杯	18.0			器表N1.5/0黒 断面 5YR6/3 にぶい橙色	内外面とも黒化 外面ミガキやや粗 内面密なミガキに暗文を施す
148		須恵器 壺M			4.0	N3/0暗灰色 断面 2.5Y8/1 灰白色	焼成軟質 底部糸切り未調整
149		須恵器 短頸壺	8.8			5YR4/2灰褐色 断面 10YR4/1 褐灰色	肩部に降灰 猿投産長胴形壺
150		須恵器 鉢D	17.0			2.5Y7/1 灰白色	胎土密
151		須恵器 円面硯			29.6	5Y6/1 灰色	圈台部分長方形の透かしが残る 内面に降灰

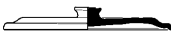






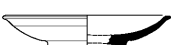


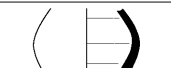


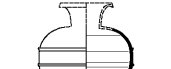

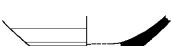


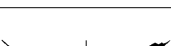
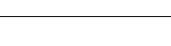
付表7 SK47出土掲載土器一覧表



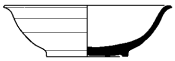

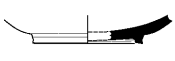


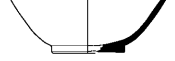




No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
152		土師器 椀A I	12.6	3.6		7.5YR7/4 にぶい橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
153		土師器 椀A I	13.2	3.6		7.5YR7/4 にぶい橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
154		土師器 皿A II	15.4	1.9		7.5YR8/3 浅黄橙色	外面ヘラケズリ 内面ナデ
155		土師器 皿A I	20.0	2.3		2.5Y8/3 淡黄色	外面ヘラケズリ 内面ナデ

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
156		須恵器 杯蓋	14.2			N6/0 灰色	
157		須恵器 杯蓋	15.8			N7/0 灰白色	
158		須恵器 杯B	13.4	4.3	9.2	N6/0 灰色	底部ヘラ切り後高台貼り付け
159		須恵器 壺M	6.0	13.5	5.8	2.5GY6/1 オリーブ灰色	
160		須恵器 壺L	7.7			5Y6/1 灰色	
161		須恵器 壺L			7.3	N6/0 灰色	外面底部糸切り ヘラ記号有り

付表8 SX15出土掲載土器一覧表

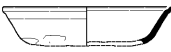
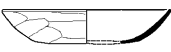
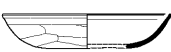



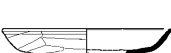



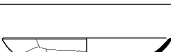


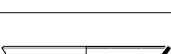
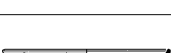



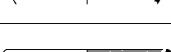
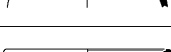
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
162		土師器 皿A	13.2	1.9		10YR7/2 にぶい黄橙色	
163		土師器 皿A	13.4	1.4		2.5Y8/3 淡黄色	
164		土師器 皿A	15.0	2.0		10YR8/1 灰白色	
165		土師器 杯B	22.4	6.6	9.8	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ
166		土師器 盤			10.5	10YR8/4 浅黄橙色	外面体部下段にミガキ
167		土師器 甕	19.0			10YR7/3 にぶい黄橙色	体部はタタキ 口縁部内面は刷毛目
168		土師器 甕	20.0			10YR7/3 にぶい黄橙色	体部内面板状のもので上方にナデ 外面刷毛目
169		土師器 甕	27.0			2.5Y8/3 淡黄色	体部タタキ 口縁部内面刷毛目
170		土師器 甕	25.4			2.5Y8/3 淡黄色	器表が荒れているため調整不明
171		黒色土器 杯	17.4	4.4		N2/0 黒色	内面やや粗いミガキ 外面は器表磨滅のため調整不明
172		黒色土器 椀	16.4	5.0	5.8	N2/0 黒色	内面のみ密なミガキ
173		須恵器 杯蓋	15.4			N7/0 灰白色	天井部に墨書あるが判読不能

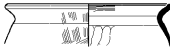

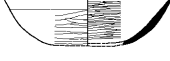
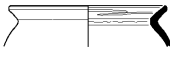






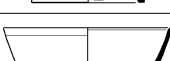
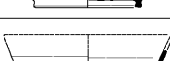


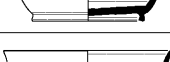

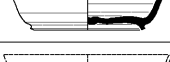



No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
174		須恵器 杯蓋	17.1	2.3		N7/0 灰白色	
175		須恵器 杯B	11.6	4.2	5.5	10B6/1 灰色	
176		須恵器 杯B	13.2	4.5	7.2	N7/0 灰白色	
177		須恵器 杯B			8.0	N7/0灰白色 断面7.5YR6/1 褐灰色	
178		須恵器 杯B			10.0	10BG7/1 明青灰色	
179		須恵器 杯B			10.2	N8/0 灰白色	外面底部に降灰ビードロ状を呈する
180		須恵器 皿	14.6	2.6	6.5	N8/0 灰白色	胎土密細粒須恵質 ミガキは認められず 底部の形態はIA
181		須恵器 皿	15.6	2.9	7.2	2.5Y8/2 灰白色	胎土密 焼成硬質 全面ミガキ密 底部の形態はIA
182		須恵器 椀			5.6	2.5Y7/1 灰白色	内面幅の広いミガキ 底部の形態はIA
183		須恵器 椀			7.6	2.5Y7/1 灰白色	底部の形態はIA
184		須恵器 壺M			4.8	N7/0 灰白色	
185		須恵器 壺L				2.5Y6/1黄灰色 断面10YR7/3 にぶい黄橙色	頸部と体部の接合痕が明瞭に残る 頸部内径3.4cm
186		須恵器 壺M				N6/0 灰色	合成復元
187		須恵器 壺				5PB7/1 明青灰色	耳付きの壺と思えるが耳部分は残らず 肩部に降灰多くビードロ状を呈する
188		須恵器 壺A?			11.1	N6/0 灰色	
189		須恵器 鉢			14.4	2.5Y7/1 灰白色	外面体部下段以下をケズリ 他の部位はナデ
190		緑釉陶器 皿	13.1	2.2	6.1	2.5Y8/2灰白色 釉10Y7/2 灰白色	全釉 全面ミガキ 焼成やや軟質 底部の形態はIA
191		緑釉陶器 皿			6.3	2.5Y8/2灰白色 釉7.5Y5/3 灰オリーブ色	全釉 内面ミガキ 外面ケズリ 焼成軟質 底部の形態はIA
192		緑釉陶器 椀			6.3	2.5Y8/3淡黄色 釉10Y7/2 灰白色	全釉と思われるが外面底部は施釉の有無 確認できず 外面ケズリ 内面ミガキ 焼成軟質 底部の形態はIA
193		緑釉陶器 椀			7.4	2.5Y8/2灰白色 釉10Y6/3 オリーブ灰色	全釉 外面ケズリ 内面不明 焼成軟質 底部の形態はIA








No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
194		緑釉陶器 椀			8.8	2.5Y8/2灰白色 釉7.5Y6/3 オリーブ黄色	全釉 内面ミガキ 外面不明 焼成やや軟質 底部の形態はIA
195		緑釉陶器 皿			7.3	10YR8/4 浅黄橙色	施釉確認できず 白色土器の可能性あり 外面ケズリ後粗いミガキ 内面ナデ
196		緑釉陶器 椀	12.3	3.9	6.1	N5/0灰色 釉7.5Y6/2 灰オリーブ色	全釉厚 内面のみミガキ 底部の形態はIBb
197		緑釉陶器 椀	15.4	4.5	6.8	2.5Y8/2灰白色 釉5Y7/3 浅黄色	全釉 全面ミガキ 焼成硬質 底部の形態はIA
198		緑釉陶器 椀			8.5	N8/0 灰白色	全面ミガキ密 底部の形態はIBb
199		緑釉陶器 椀			8.4	N8/0 灰白色	全面ミガキ密 底部の形態はIBb
200		緑釉陶器 椀	16.6	5.2	7.6	2.5Y8/2灰白色 釉7.5GY7/1 明緑灰色	全釉 内面ミガキ 外面不明 焼成やや軟質 底部の形態はIA
201		緑釉陶器 椀	18.4	6.8	8.0	5Y6/1灰色 釉7.5Y4/2 灰オリーブ色	全釉刷毛塗り厚さ中～薄 全面ミガキ 底部の形態はIBa
202		緑釉陶器 火舎	不明			2.5Y8/3淡黄色 釉7.5Y7/3 浅黄色	外面のみ薄く刷毛塗り施釉
203		灰釉陶器 椀			5.9	2.5Y8/1灰白色 釉10Y6/2 オリーブ灰色	内面体部以上を刷毛塗り施釉 外面は施 釉不明 外面底部ケズリ後貼り付け高台 形態はIIBd1
204		灰釉陶器 皿			8.0	2.5Y8/1灰白色 釉10Y7/2 灰白色	内外面ともに底部以外を薄く施釉 外面底部ケズリ後貼り付け高台 形態はIIBb3
205		灰釉陶器 椀			8.6	10Y6/2 オリーブ灰色	釉は漬け掛け 透明なオリーブ色 高台内に墨書「X」 内面底部にトチン痕 底部はIIBd2

付表9 SD34出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
206		土師器 椀A	12.8	3.7		10YR8/3 浅黄橙色	外面オサエ後口縁部を粗いミガキ 内面ナデ
207		土師器 椀A	12.5	3.1		10YR8/1 灰白色	胎土やや砂質 細粒 器表磨滅激しく調整不明
208		土師器 椀A	13.0	3.6		7.5YR8/4 浅黄橙色	外面ヘラケズリ
209		土師器 椀A	13.2	3.4		10YR8/2 灰白色	外面ヘラケズリ
210		土師器 椀A	13.2	3.4		10YR8/2 灰白色	外面体・底部オサエ 他の部位はナデ
211		土師器 椀A	13.8	3.6		10YR8/2 灰白色	外面ヘラケズリ 口縁端部はつままれ小さく肥厚する

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
212		土師器 杯A	15.2	3.5		10YR8/2 灰白色	外面体部オサエ 他の部位はナデ 口縁端部は小さく屈曲しつまみ上げる
213		土師器 杯A	16.9	3.4		7.5YR8/3 浅黄橙色	外面ヘラケズリ 口縁端部は小さく肥厚する
214		土師器 杯A	17.3	3.6		10YR8/2 灰白色	断面に漆が付着する
215		土師器 杯A	17.8	3.6		10YR8/2 灰白色	外面ヘラケズリ 口縁端部は小さく肥厚する
216		土師器 杯A	19.2	4.4		器表5Y2/1黒色 断面7.5YR6/2 灰褐色	外面ヘラケズリ 口縁端部は小さく肥厚する
217		土師器 皿A II	16.8	2.9		10YR8/1 灰白色	外面ヘラケズリ 口縁端部は小さく肥厚 外面底部に墨書があるが判読不能
218		土師器 皿A II	16.1	2.5		10YR8/1 灰白色	
219		土師器 皿A II	16.3	2.3		7.5YR7/6 橙色	外面ヘラケズリ 口縁端部は小さく肥厚する
220		土師器 皿A II	16.4	2.4		10YR8/2 灰白色	外面ヘラケズリ 外面底部に墨書「大」
221		土師器 皿A II	17.0	2.6		10YR8/2 灰白色	外面ヘラケズリ 口縁端部は丸くおさめる
222		土師器 皿A II	17.2	2.4		10YR8/3 浅黄橙色	外面ヘラケズリ 口縁端部は丸くおさめる
223		土師器 皿A II	17.6	2.5		10YR8/2 灰白色	外面ヘラケズリ 口縁端部に煤付着
224		土師器 皿A II	17.6	3.0		10YR8/3 浅黄橙色	外面ヘラケズリ 胎土緻密 焼成良
225		土師器 皿A I	19.6	2.5		10YR8/2 灰白色	口縁部はナデ 外面底部のみヘラケズリ
226		土師器 皿A I	19.7	2.8		5YR7/4 にぶい橙色	外面ヘラケズリ
227		土師器 杯B	18.8			10YR8/3 浅黄橙色	外面ヘラミガキ
228		土師器 杯B			11.1	10YR8/2 灰白色	外面底部にヘラケズリを残す
229		土師器 甕	15.6			10YR8/1 灰白色	口縁と体部の境に指跡を残す
230		土師器 甕	16.8			10YR8/1 灰白色	器表磨滅激しく調整不明
231		土師器 甕	20.8			10YR8/2 灰白色	体部無文のタタキ 内面頸部刷毛目 口縁端部は内方に肥厚する

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
232		土師器 甕	31.3			2.5Y8/2 灰白色	外面および口縁部内面は刷毛目 体部内面は規則的なオサエ痕を残す
233		製塩土器	11.6			10YR8/1 灰白色	胎土粗 粘土の継ぎ目、指痕を残す
234		黒色土器 杯	15.2			内面黒色 外面10YR7/3 にぶい黄橙色	A類
235		黒色土器 甕	14.0			全面黒色	外面に煤が厚く付着する
236		須恵器 杯B	12.2	4.4	8.5	N7/0 灰白色	須恵器杯Bはいずれもヘラオコシの 底部に貼り付け高台
237		須恵器 杯B	12.6	4.2	9.4	N6/0 灰色	
238		須恵器 杯B	12.4	4.2	8.4	N7/0~10B8/1 明青灰色	
239		須恵器 杯B	13.2	4.2	9.5	10B8/1 明青灰色	
240		須恵器 杯B			9.4	5Y8/1 灰白色	高台内に墨書有り
241		須恵器 杯B	15.6	5.6	10.5	N7/0 灰白色	
242		須恵器 杯B	16.0	5.9	10.2	5B7/2 明青灰色	
243		須恵器 杯B			11.3	5B6/1 青灰色	
244		須恵器 杯B	15.3	5.7	11.4	N7/0 灰白色	
245		須恵器 杯B	15.8	5.8	10.6	7.5B5.5/2 青灰色	
246		須恵器 杯B	16.0	5.5	11.4	7.5Y7/1 灰白色	焼成やや軟質
247		須恵器 杯B	15.8	5.3	10.8	器表10B6.5/2 断面7.5R6/2	
248		須恵器 杯B			11.8	N7/0 灰白色	
249		須恵器 杯B			11.8	器表 10B6/2 断面 10Y5/2 オリーブ灰色	
250		須恵器 杯蓋	13.2	1.7		器表 10B7/4 断面7.5R5/1 赤灰色	胎土密 焼成硬質 天井部にツマミの接合痕認められず
251		須恵器 杯蓋	12.3			10B6/4 青灰色	胎土白色細粒多く含む 焼成硬質

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
252		須恵器 杯蓋	13.6			10B7/1 明青灰色 断面 N7/0灰白色	
253		須恵器 杯蓋	15.2			5Y8/1 灰白色	焼成やや軟質 内面に墨が付着する
254		須恵器 杯蓋	16.4			N7.5/0 灰白色	内面に墨が付着する
255		須恵器 杯蓋	16.4	3.2		5B7/2 明青灰色	胎土密 焼成硬質
256		須恵器 杯蓋	16.4	3.6		2.5Y7/1 灰白色	胎土密 焼成硬質 内外面に墨が付着する
257		須恵器 杯蓋	16.2			7.5B7/2 明青灰色	内面磨滅し墨が付着する
258		須恵器 杯蓋	17.0			5B6/1 青灰色	胎土密 焼成硬質
259		須恵器 杯蓋	17.6	3.0		2.5Y8/2 灰白色	胎土密 焼成軟質 全面に煤が付着する
260		須恵器 杯蓋	17.2	2.7		N7/0 灰白色	胎土密 焼成やや軟質 天井部に墨書「寮」
261		須恵器 杯A	11.7	3.0	8.0	7.5B6/2 灰色	内外面に墨が付着する
262		須恵器 杯A	12.0	3.4		N7/0 灰白色	杯Aは底部ヘラオコシ他の部位はナデ
263		須恵器 杯A	12.5	3.0		7.5B8/2 明灰色	
264		須恵器 杯A	13.5	3.9		5B8/1 明青灰色	外面底部に墨書が認められるが判読不能
265		須恵器 杯C	13.8	2.9		N7/0 灰白色	内面に墨が付着する
266		須恵器 杯C	14.0	2.9		5GY6/1 オリーブ灰色	胎土密白色粒含む 焼成硬質
267		須恵器 杯C	15.2	3.2		N7/0 灰白色	胎土やや粗 外面底部に墨書「厨」
268		須恵器 皿C	14.6	1.8	11.5	5B4/1 暗青灰色	胎土密 焼成硬質 焼き歪み大きい
269		須恵器 皿C	16.6	2.3		N7/0 灰白色	胎土密 焼成硬質 口縁端部から内面に煤が付着
270		須恵器 皿C	20.6	2.4		N7/0 灰白色	底部ヘラオコシ後外周部をナデ
271		須恵器 壺M	4.0	9.8	3.9	外面N4.5/0 内面10B7/2 断面N7/0	胎土密 焼成硬質 底部糸切り未調整








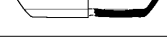








No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
272		須恵器壺M	3.8	10.6	3.8	2.5Y8/1 灰白色	胎土密 焼成軟質 底部糸切り未調整
273		須恵器壺M			3.3	N7/0 灰白色	胎土密 焼成やや軟質 口縁部を欠く
274		須恵器壺G	6.7			器表N4/0 灰色 断面10R4/3 赤褐色	壺Gの口縁部 内面に絞り目を多く残す 胎土密 焼成硬質
275		須恵器壺M			5.2	N5/0 灰色	胎土やや砂質 焼成やや軟質
276		須恵器壺M			6.4	10B7/2 明青灰色	胎土密 焼成硬質 底部糸切り未調整
277		須恵器壺M			6.4	10B6/2 青灰色	胎土密 焼成硬質 胴部を風船挽きで成型後孔を開け口縁部を取り付ける
278		須恵器壺L			6.4	10B6/1.5 断面7.5R5.5/1 赤灰色	胎土密 焼成硬質 底部糸切り未調整
279		須恵器壺L			7.8	N6/PB 灰色	胴部最大径14.0cm
280		須恵器壺蓋	14.6			5PB7/1 明青灰色	胎土密 焼成硬質 天井部ヘラオコシ後ケズリ 降灰多い
281		須恵器壺蓋	16.2			N7/0 灰白色	胎土密 焼成硬質 天井部ヘラオコシ後ナデ 降灰多いが溶けず
282		須恵器壺M			7.0	5Y7/1 灰白色	底部は糸切り後貼り付け高台 糸切りは残さず
283		須恵器壺M			6.5	5Y8/1.5 灰白色	胎土密 焼成軟質 高台内に墨書 内面底部に墨跡残る
284		須恵器鉢D	24.0	14.7	10.2	5Y7/1 灰白色	胎土密 焼成軟質 底部は糸切り未調整
285		須恵器壺A?			12.4	N7/0 灰白色	胎土密 焼成硬質 体部下段から底部をケズリ後貼り付け高台 体部に火膨れが見受けられる
286		須恵器播り鉢			9.8	5PB6/1 青灰色	胎土密 焼成硬質 円盤状の粘土板を貼り付け接地面をケズリ底部とする 内面および外面底部は平滑に磨滅する
287		須恵器風字硯				器表10B5/4 断面5R4/1 暗赤灰色	胎土密 焼成硬質 硯面は平滑に磨滅する 底部はケズリ脚は貼り付け後面取り
288		須恵器甕				N7/Y 灰白色	胎土密 焼成硬質 外面タタキをナデ消し口縁端部は折り返す
289		須恵器甕				10B7.5/2明青 灰色 断面5P 6/1紫灰色	288と成型手法は同じ
290		須恵器甕	18.2			N7/0 灰白色	体部から頸部までタタキ 口縁部はナデ自然釉がたっぷりと掛かる
291		須恵器甕	17.1			N6/0 灰色	体部から頸部までタタキ 口縁部はナデ

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
292		須恵器 甕	21.7			N7/0 灰白色	体部から頸部までタタキ 口縁部はナデ
293		須恵器 甕	23.7			7.5B6/2 青灰色	体部から頸部までタタキ 口縁部はナデ
294		緑釉陶器 椀	9.5	3.0	4.1	5B7.5/1 釉2.5GY7/8 明オリーブ灰色	外面底部以外を薄く刷毛塗り施釉 底部糸切り未調整 他の部位はナデ 底部の形態は0A
295		緑釉陶器 椀	10.0	3.2	4.6	10YR7/2 にぶい黄橙色 釉5Y7/3浅黄色	外面底部以外を薄く刷毛塗り施釉 底部糸切り未調整 他の部位はナデ 底部の形態は0A
296		緑釉陶器 皿	14.0			胎土N6/Y灰色 釉10Y5/1.5 オリーブ灰色	刷毛塗り施釉 内外面にやや密なミガキ
297		緑釉陶器 椀	17.9			2.5Y8/2灰白色 釉7.5Y5/2 灰オリーブ色	内外面ともミガキ やや厚めの施釉 焼成軟質
298		緑釉陶器 椀	17.8	6.0	8.4	7.5Y7/1灰白色 釉10Y6/2 オリーブ灰色	
299		緑釉陶器 皿			8.0	胎土N7/0 灰白色 釉7.5Y 7/3浅黄色	全釉 全面に密なミガキ 内面に陰刻花文を施す 内外面にトチン 底部の形態はII Bb2 焼成硬質
300		緑釉陶器 皿			8.2	2.5Y8/1灰白色 釉5GY8/8	全釉 全面に密なミガキ 内面に陰刻花文を施す 底部の形態はII Bb1
301		緑釉陶器 椀			8.3	10Y8/3灰白色 釉2.5GY8/6	全釉 全面ミガキ外面底部のミガキは粗 内面に陰刻花文を施す 内外面にトチン 底部の形態はII Bb3 焼成軟質
302		緑釉陶器 椀			8.1	胎土2.5Y8/3 淡黄色 釉2.5Y8/8黄色	全釉 内面ミガキ 外面磨滅し調整不明 底部の形態はI Ab
303		緑釉陶器 椀			8.3	5Y8/1灰白色 釉2.5GY8.5/8	全釉 外面底部以外をミガキ 底部の形態はI Aa 焼成やや軟質
304		緑釉陶器 椀			7.2	胎土N6/Y灰色 釉10Y5/1.5 オリーブ灰色	全面ミガキ 刷毛塗り施釉 内面に2次 焼成の重ね焼き痕
305		緑釉陶器 素地 椀	17.2			N7/0灰白色	全面ミガキ 焼成良好
306		須恵器 壺G				2.5Y8/1 灰白色	体部と口縁部の接合痕が残る 自然釉がかかる
307		灰釉陶器 瓶				N7.5/PB 釉7.5Y5/2 灰オリーブ色	体部と口縁部の接合痕が残る 口縁部にビードロ状の釉が垂れる 頸部内径4.2cm
308		灰釉陶器 壺蓋	16.8			N7.5/PB 釉10Y6/1.5 オリーブ灰色	天井部に厚く降灰
309		灰釉陶器 短頸壺	8.2			N8/PB 釉7.5Y6/2 灰オリーブ色	口縁部から肩部にかけて厚く釉がかかる
310		灰釉陶器 瓶			10.3	N7.5/0 灰白色	体部最下段をケズリ 底部糸切り未調整 内面底部の降灰の様子から小口径の壺と 推測できる
311		灰釉陶器 小壺			2.6	7.5Y7.5/1 灰白色	施釉痕認められず


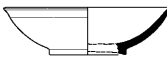
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
312		灰釉陶器 瓶			4.6	5PB8/1 釉10Y6/2 オリーブ灰色	体部最下段をケズリ 底部糸切り未調整 体部に釉が掛かる
313		灰釉陶器 瓶			6.2	7.5Y7.5/1 釉10Y5.5/2 オリーブ灰色	底部糸切り未調整 体部に釉が掛かる
314		灰釉陶器 耳皿			4.5	7.5Y7.5/1 灰白色	施釉痕なし 自然降灰もわずか 底部の形態はⅡBd1 長径11.5cm
315		灰釉陶器 瓶			6.5	5Y7.5/1 灰白色	体部最下段を細かな単位のケズリ 底部糸切り未調整 釉垂れが認められる
316		灰釉陶器 皿	13.4			胎土7.5Y7/1 灰白色 釉5GY7/6	下段以外を漬け掛け施釉 釉は薄い
317		灰釉陶器 椀			7.4	胎土N7.5/0 釉7.5Y5/3 灰オリーブ色	内面底部平滑に磨滅する 底部はⅡBd4
318		灰釉陶器 皿			7.8	N7.5/0 灰白色	内面底部平滑に磨滅する 底部はⅡBd2
319		灰釉陶器 椀			7.2	7.5Y7/1 灰白色 釉10Y6/2 オリーブ灰色	底部以外を薄く施釉 底部はⅡBd4
320		灰釉陶器 椀			8.6	2.5Y8/1 灰白色	施釉痕認められず 底部はⅡBb4
321		白色土器 椀			5.8	7.5Y8/1 灰白色	器表の磨滅激しく調整不明 底部は浅いケズリの蛇の目高台
322		越州窯青磁 椀			7.1	N7/0灰白色 釉2.5Y6/3 にぶい黄色	底部以外を施釉 高台畳付き部分に貝メが残る
323		土馬				10YR7/2 にぶい黄橙色	高さ8.7cm 墨描で馬具表す
324		土馬				10YR7.5/2	
325		土馬				7.5YR8/3 浅黄橙色	
326		土馬				10YR8/2 灰白色	
327		土馬				5YR7/3 にぶい橙色	
328		土馬				7.5YR8/3 浅黄橙色	
329		土馬				10YR8/2 灰白色	
330		土師器 ミニチュア 鍋	8.0			7.5YR7/3 にぶい橙色	
331		土師器 人面土器	15.0			10YR7/2 にぶい黄橙色	眉と目の一部が残る

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
332		土錘				10YR7/2 にぶい黄橙色	残長4.3cm 最大径2.1cm 孔径0.4~0.6cm
333		土錘				10YR7/2 にぶい黄橙色	長さ3.9cm 最大径1.3cm 孔径0.35~0.4cm

付表10 SD53出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
334		須恵器 杯蓋	13.6			10B7/2明灰色 断面 10R6/1 赤灰色	
335		須恵器 杯蓋	13.9	2.0		N7/B 青灰白色	胎土緻密 焼成硬質
336		須恵器 杯蓋	18.1	3.8		5PB5.5/1 灰色	胎土やや密 焼成硬質
337		須恵器 杯蓋	21.6			10B7/2 明灰色	胎土密 焼成硬質
338		須恵器 杯A	13.2	3.4	7.0	N7.5/0 灰白色	胎土密 焼成やや軟質
339		須恵器 杯A	14.1	3.3		7.5Y7.5/1 灰白色	胎土密 焼成軟質
340		須恵器 杯A	14.8	3.8	9.9	5Y7/1 灰白色	胎土密 焼成軟質
341		須恵器 皿A	14.6	2.3	11.2	10B7/1 明青灰色	胎土緻密 焼成硬質
342		須恵器 皿C	19.4	1.4	16.4	10B7/1.5 明青灰色	胎土密 焼成硬質
343		須恵器 杯B	12.8	4.5	9.7	N7/0 灰白色	胎土密 焼成硬質
344		須恵器 杯B	14.0	4.6	10.2	N7/0 灰白色	胎土密 焼成やや軟質
345		須恵器 杯B	16.2	5.6	10.6	N7/B 青灰白色	大粒の石粒をかむ 胎土密
346		須恵器 杯B	16.4	5.4	11.6	N7/0 灰白色	内面底部平滑に磨滅する
347		須恵器 鉢D	18.9			10B6.5/1 灰色	胎土密 焼成良好
348		須恵器 鉢	23.8			N5/0 灰色	胎土やや密 焼成良好
349		須恵器 壺蓋	6.2			10B6.5/2 灰色	胎土密 焼成硬質


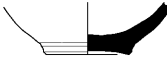
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
350		須恵器 壺蓋	15.2			N7/0 灰白色	重ね焼き部分に藁の痕跡が残る
351		須恵器 短頸壺	8.8			5Y7.5/1 灰白色	胎土やや密 焼成硬質
352		須恵器 短頸壺	11.8			N7.5/0 灰白色	胎土密 焼成硬質
353		須恵器 壺M		(11.0)	3.6	N6/0 灰色	胎土密 焼成硬質 底部糸切り未調整
354		須恵器 壺M	3.8	10.6	3.8	2.5Y8/1 灰白色	胎土密 焼成軟質 底部糸切り未調整
355		須恵器 壺M			3.8	N7/B 灰白色	胎土密 焼成やや軟質
356		須恵器 壺L	7.3			5Y7/1.5 灰白色	胎土やや密 焼成軟質
357		須恵器 壺			8.4	10B6.5/2 灰色	胎土やや粗 焼成硬質
358		須恵器 双耳壺					胴部最大径16.6cm 肩部に2条の凸帯が 巡りその位置に粘土板を折り畳んだ耳を 相対する2方に貼り付ける 播磨産
359		須恵器 壺			7.7		播磨産
360		須恵器 壺			6.2	N7/0 灰白色	胎土密 焼成良好 底部糸切り未調整
361		須恵器 風字硯				N7/0 灰白色	胎土緻密 硬質
362		須恵器 甕	15.1			10B7.5/1 明灰色	胎土密 焼成硬質
363		須恵器 甕	18.6			器表N6.5/0灰色 断面10R5/2 灰赤色	胎土密 焼成良好
364		須恵器 甕	19.5			10B6.5/2 灰色	胎土密 焼成硬質 体部夕タキ調整
365		須恵器 甕	20.4			N5.5/B 灰色	胎土密 焼成良好
366		須恵器 大型壺			18.1	5P8/1 明灰色	胎土密 焼成硬質
367		須恵器 大型壺			15.2	N7/0 灰白色	胎土やや密 焼成硬質 体部外面コテ調整
368		須恵器 甕	22.8			5Y8/1 灰白色	胎土やや密 焼成硬質 体部夕タキナデ消し
369		須恵器 甕	27.6			器表N7/0灰白色 断面7.5YR7/1 明褐色	胎土密 焼成良好

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
370		須恵器 甕				器表7.5B6.5/2 断面2.5YR6/1 赤灰色	胎土やや密 焼成硬質
371		緑釉陶器 皿	14.2	2.1	6.1	胎土10Y6.5/1 釉5GY7/1 明オリーブ灰色	山城系 全釉 全面に密なミガキ 底部の形態はIA
372		緑釉陶器 碗	18.1	5.1	8.2	胎土7.5Y6.5/1 釉2.5Y4/4 オリーブ褐色	山城系 胎土密 焼成やや硬質 全面に厚く施釉 密なミガキ



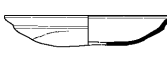
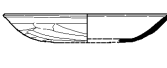




付表11 Pit69出土掲載土器一覧表




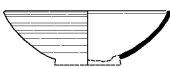

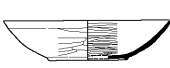
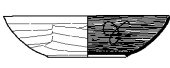

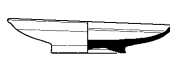

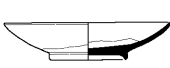

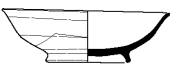


No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
373		緑釉陶器 蓋	13.2	6.6		5PB7/1明青灰色 釉7.5Y6/2 灰オリーブ色	全面ミガキ 全面施釉 焼成硬質 天井部中央に穿孔 ツマミ径7.5cm 最大径14.7cm

付表12 十一町整地層出土掲載土器一覧表


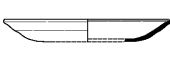

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
374		灰釉陶器 鳥鈕蓋				胎土2.5Y8/1 釉7.5Y6/2 灰オリーブ色	外面に薄く刷毛塗り施釉
375		越州窯 青磁碗			5.1	胎土5Y8/1 釉5Y6/2 灰オリーブ色	


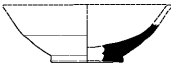

付表13 SE51出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
376		土師器 碗A	14.1	(2.5)		10YR8/1 灰白色	外面底・体部オサエ 他の部位はナデ
377		土師器 碗A	14.0	2.9		2.5Y8/1 灰白色	外面底・体部オサエ 他の部位はナデ
378		土師器 碗A	14.5	2.7		2.5Y8/2 灰白色	外面底・体部オサエ 他の部位はナデ
379		土師器 碗A	15.4	2.7		10YR8/2 灰白色	外面底・体部はオサエ後粗いケズリ 他の部位はナデ
380		土師器 杯B	17.4	3.4	8.2	2.5Y8/2 灰白色	高台は貼り付け 外面底・体部オサエ 口縁部はナデ 内面底部に刷毛目が残る
381		土師器 皿A	14.3	2.0		10YR8/2 灰白色	外面底部オサエ 他の部位はナデ
382		土師器 皿A	14.5	1.8		2.5Y8/2 灰白色	外面底部オサエ 他の部位はナデ
383		土師器 皿A	17.0	2.2		10YR8/1 灰白色	外面底部オサエ 他の部位はナデ



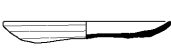
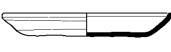




No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
384		土師器 高杯				7.5YR8/3 浅黄橙色	7面の面取りをした脚部
385		須恵器 壺M	3.7			N6/0 灰色	肩部に降灰
386		須恵器 杯B	15.2	5.0	7.4	N7/0 灰白色	椀に高台を付けたような形状
387		須恵器 鉢	18.6			N6/0 灰色	端部の形状からみて篠産とは少し異なる印象をうける
388		須恵器 鉢D	23.4	11.1	9.3	N7/0 灰白色	口縁部は玉縁状を呈する 口縁下段の屈曲は大きい
389		黒色土器 椀	17.0	4.0	8.0	内面N3/0暗灰色 外面10YR6/2 灰黄褐色	高台は貼り付け 外面体部はオサエ後ケズリ 口縁部はナデ 内面は粗いが丁寧なミガキ
390		黒色土器 椀	17.2	4.3	8.0	内面 黒色 外面 10YR7/4 にぶい黄橙色	高台は貼り付け 外面体部はオサエ後ケズリ 口縁部はナデ 内面は丁寧なミガキに暗文を施す
391		緑釉陶器 椀	9.7	3.0	5.7	7.5YR8/4浅黄橙 釉10Y5/2 オリーブ灰色	山城系 底部糸切り未調整0A
392		緑釉陶器 皿	14.8	2.5 ~3.0	6.7	10YR8/3浅黄橙 釉7.5Y6/3 オリーブ黄色	山城系 内面粗いミガキ 底部の形態はI Ba
393		灰釉陶器 耳皿	10.8 ~8.2	2.5	4.3	7.5Y7/1灰色 釉7.5Y6/2 灰オリーブ色	底部糸切り未調整0A
394		灰釉陶器 皿	14.2	3.1	6.6	10Y7/1灰白色 釉5Y7/1灰白色	底部以外を漬け掛け施釉 高台内に「西方」の墨書 底部の形態はII Be1
395		灰釉陶器 皿	15.2	2.8	7.8	5Y8/1灰白色 釉7.5Y6/2 灰オリーブ色	内面自然釉 外面口縁部以下ケズリ後高台を貼り付け 底部の形態はII Bb2
396		灰釉陶器 椀	14.0	4.3	7.5	10Y7/1灰白色 釉7.5Y6/2 灰白色	底部以外を施釉 内面底部にひと刷毛施釉 外面底部はケズリ 底部の形態はII Bb4
397		灰釉陶器 椀	15.0	5.0	7.2	7.5Y8/1灰白色 釉7.5Y6/2 灰オリーブ色	底部以外をやや厚めに施釉 内面底部にひと刷毛施釉 外面底部はケズリ 底部の形態はII Bd3
398		灰釉陶器 椀	19.2	6.5	7.8	7.5Y8/1灰白色 釉10Y5/2 オリーブ灰色	内外面底部以外を施釉 外面底部はケズリ後高台を貼り付け 底部の形態はII Bb3

付表14 SE52出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
399		土師器 皿A	13.8			10YR8/1 灰白色	口縁部および内面はナデ 外面はオサエ
400		土師器 皿A	15.2	2.0		7.5YR7/4 にぶい橙色	口縁部および内面はナデ 外面はオサエ
401		土師器 椀A	14.2	2.7		7.5YR7/3 にぶい橙色	口縁部および内面はナデ 外面はオサエ


No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
402		土師器 杯B	19.0	4.6	8.9	器表2.5Y7/2 灰 黄色 断面10YR7 /3 にぶい黄橙色	外面底部オサエ 高台は貼り付け 内面は刷毛目
403		緑釉陶器 椀	(9.2)	3.2	4.0	断面5Y8/1 灰白 色 釉5GY7/1 明オリープ灰色	山城系 底部の形態は0A
404		灰釉陶器 皿	14.7	3.2	6.6	断面7.5Y8/1 灰 白色 釉10Y6/2 オリープ灰色	内面体部・口縁部に薄く刷毛塗り施釉 底部の形態はII Be1

付表15 SD01出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
405		土師器 皿N	9.4	1.8		10YR8/3 浅黄橙色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
406		土師器 皿N	9.7	1.6		10YR7/3 にぶい黄橙色	
407		土師器 皿N	9.9	1.3		10YR8/2 灰白色	
408		土師器 皿N	14.3	2.1		2.5Y8/1.5 灰白色	
409		土師器 皿N	14.8	2.6		10YR7/3 にぶい黄橙色	
410		土師器 皿N	15.7	3.1		7.5YR7.5/4 にぶい橙色	
411		土師器 皿N	16.7	3.4		10YR8/1 灰白色	
412		白磁 椀	16.2			胎土N7.5/0 釉5Y7/2灰白色	

付表16 SE30出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
413		土師器 皿N小	8.7	1.4		10YR8/3 浅黄橙色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
414		土師器 皿N小	9.0	1.8		10YR7/2 にぶい黄橙色	
415		土師器 皿N小	9.1	1.6		10YR8/2 灰白色	
416		土師器 皿N小	9.0	1.7		10YR7/4 にぶい黄橙色	
417		土師器 皿N小	9.1	1.5		10YR7/3 にぶい黄橙色	










No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
418		土師器 皿N小	9.4	1.3		10YR8/3 浅黄橙色	いずれも口縁部および内面はナデ 外面はオサエ
419		土師器 皿N小	9.3	1.7		7.5YR7/4 にぶい橙色	
420		土師器 皿N小	9.3	1.7		10YR7/3 にぶい黄橙色	
421		土師器 皿N小	9.7	1.6		10YR7/3 にぶい黄橙色	
422		土師器 皿N小	9.5	1.7		10YR7/3 にぶい黄橙色	
423		土師器 皿N小	9.7	1.7		10YR7/3 にぶい黄橙色	
424		土師器 皿N大	13.7	2.5		10YR7/4 にぶい黄橙色	
425		土師器 皿N大	13.7	2.5		10YR7/3 にぶい黄橙色	
426		土師器 皿N大	13.9	3.0		7.5YR7/4 にぶい橙色	
427		土師器 皿N大	14.3	2.1		10YR7/4 にぶい黄橙色	
428		土師器 皿N大	14.3	2.8		10YR8/3 浅黄橙色	
429		土師器 皿N大	14.2	2.5		5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒多く含む
430		土師器 皿N大	14.2	2.7		10YR7/3 にぶい黄橙色	
431		白磁 碗	16.0			断面10YR8/2 灰白色 釉2.5Y 8/1灰白色	外面体部下段以下露胎 釉は失透する
432		白磁 碗	17.5			断面N8/0灰白色 釉10Y7/1灰白色	外面体部下段以下露胎 内面に櫛描き文

付表17 SE71出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
433		土師器 皿N小	9.2	1.8		10YR8/2 灰白色	いずれも口縁部および内面はナデ 外面はオサエ
434		土師器 皿N小	9.3	1.6		2.5Y8/1 灰白色	
435		土師器 皿N小	9.4	1.6		10YR8/3 浅黄橙色	

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
436		土師器 皿N小	9.5	1.8		5Y8/2 灰白色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
437		土師器 皿N小	9.5	1.6		2.5Y8/2 灰白色	
438		土師器 皿N小	10.4	1.3		2.5Y8/1 灰白色	
439		土師器 皿N大	14.5	2.5		2.5Y8/3 淡黄色	
440		土師器 皿N大	14.5	2.7		10YR8/3 浅黄橙色	
441		土師器 皿N大	14.6	2.6		2.5Y8/2 灰白色	
442		土師器 皿N大	15.0	3.0		2.5Y8/1 灰白色	

付表18 SD80出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
443		土師器 皿N小	9.0	1.5		10YR8/3 浅黄橙色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
444		土師器 皿N小	9.2	1.7		10YR7/2 にぶい黄橙色	
445		土師器 皿N小	9.2	1.6		10YR8/2 灰白色	
446		土師器 皿N大	14.2	2.7		10YR7/2 にぶい黄橙色	
447		土師器 皿N大	14.2	2.9		7.5YR8/3 浅黄橙色	
448		土師器 皿N大	14.6	2.8		10YR8/4 浅黄橙色	
449		土師器 皿N大	14.6	3.1		7.5YR7/4 にぶい橙色	
450		土師器 皿N大	14.9	2.6		7.5YR8/3 浅黄橙色	
451		土師器 皿N大	14.9	2.8		10YR8/3.5 浅黄橙色	

付表19 六町土取り跡出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
452		須恵器 壺			15.6	2.5Y8/1 灰白色	残高46.9cm 最大径26.6cm 轆轤の上に灰を敷き粘土板を置いて底と する 体部はタタキ 頸部以上はナデ

付表20 SK23出土掲載土器一覧表














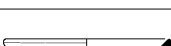
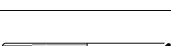
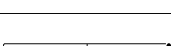
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
453		土師器 皿N小	8.9	1.4		10YR8/2 灰白色	胎土密 白色粒含む
454		土師器 皿N小	9.5	1.6		5YR8/3 淡橙色	胎土密 雲母細粒含む
455		土師器 皿N大	13.3	2.7		7.5YR7/3 にぶい橙色	赤褐色粒含む
456		土師器 皿N大	13.3	2.3		2.5Y7/3 浅黄色	胎土やや密 白色粒・雲母含む
457		土師器 皿N大	13.7	2.2		10YR7/3 にぶい黄橙色	胎土やや密 白色粒・雲母含む
458		土師器 皿N大	13.8	2.3		5YR7/6 橙色	
459		土師器 皿N大	14.2	3.0		2.5YR7/4 淡赤橙色	
460		土師器 皿N大	14.5	2.9		10YR8/3 浅黄 橙色一部黒色	
461		山茶碗	13.6	4.3	6.5	7.5Y7.5/1 灰白色	外面底部糸切り 貼り付けの高台底部に粉の付着痕
462		須恵器 鉢	18.8	6.4	8.9	N7/0 灰白色	外面体部下段から底部にかけて回転ケズリ 内面は平滑に摩耗する
463		白色土器 高杯				2.5Y8/1 灰白色	胎土細粒やや砂質 軸部は粗雑な面取り 後にぎったようなオサエ
464		白色土器 皿	8.8	1.6	4.4	10YR8.5/1 明灰白色	外面底部糸切り後ナデ
465		白色土器 皿			4.6	2.5Y8/1灰白色 釉 5GY7/1 明オリーブ灰色	ミガキ無し 薄く刷毛塗り施釉 底部の形態はOA
466		白磁 皿	10.0	2.3	4.3	N7/0 灰白色 釉 7.5Y6/2 灰オリーブ色	外面体部下段以下露胎 内面底部高台径 程の大きさで釉をドーナツ状にカキトリ

付表21 SE32出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
467		土師器 皿Ac	8.6	1.3		10YR8/1 灰白色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
468		土師器 皿N小	9.1	1.5		7.5YR8/2 灰白色	
469		土師器 皿N小	9.2	1.9		10YR7/2 にぶい黄橙色	口縁部に煤付着
470		土師器 皿N小	9.3	1.8		10YR8/2 灰白色	完形 内面に煤付着

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
471		土師器 皿N小	9.8	1.6		10YR8/2 灰白色	胎土やや砂質 雲母微細粒含む
472		瓦器 椀	14.0	5.2	4.4	器表 銀黒色 断面 N8/0 灰白色	内面のみ密なミガキ

付表22 SD24出土掲載土器一覧表（17次調査出土分）

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
473		土師器 皿N小	8.7	1.5		7.5YR7/4 にぶい橙色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
474		土師器 皿N小	8.8	1.8		7.5YR7/3 にぶい橙色	
475		土師器 皿N小	9.0	1.4		7.5YR8/3 浅黄橙色	
476		土師器 皿N小	9.0	1.5		7.5YR8/3 浅黄橙色	
477		土師器 皿N小	9.0	1.6		10YR7/3 にぶい黄橙色	
478		土師器 皿N小	9.2	1.4		7.5YR8/2 灰白色	
479		土師器 皿N小	9.3	1.3		7.5YR8/2 灰白色	
480		土師器 皿N小	9.3	1.4		7.5YR7/4 にぶい橙色	
481		土師器 皿Ac	8.6	1.7		7.5YR7/4 にぶい橙色	
482		土師器 皿S小	8.8	2.4		10YR7/3 にぶい黄橙色	
483		土師器 皿S小	9.7	2.5		10YR7/3 にぶい黄橙色	
484		土師器 皿S大	12.9	3.5		2.5Y8/1 灰白色	
485		土師器 皿N大	13.0	2.4		7.5YR7/4 にぶい橙色	
486		土師器 皿N大	13.0	2.5		7.5YR7/4 にぶい橙色	
487		土師器 皿N大	13.0	2.5		10YR7/2 にぶい黄橙色	
488		土師器 皿N大	13.0	2.8		7.5YR7/4 にぶい橙色	

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
489		土師器 皿N大	13.2	2.8		7.5YR7/4 にぶい橙色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
490		土師器 皿N大	13.2	3.1		7.5YR7/4 にぶい橙色	
491		土師器 皿N大	13.4	2.2		7.5YR8/3 浅黄橙色	
492		土師器 皿N大	13.4	2.4		7.5YR7/3 にぶい橙色	口縁部に煤が付着
493		土師器 皿N大	13.4	2.6		7.5YR7/4 にぶい橙色	


付表23 SD24出土掲載土器一覧表（13次調査出土分）

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
494		土師器 皿Ac	7.5	1.6		10YR7/3 にぶい黄橙色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
495		土師器 皿N小	8.6	1.6		10YR8/2 灰白色	
496		土師器 皿N小	8.9	1.5		10YR8/2 灰白色	
497		土師器 皿N小	9.3	1.5		2.5Y8/1 灰白色	
498		土師器 皿N小	9.5	1.3		10YR8/2 灰白色	
499		土師器 皿Sc	8.6	1.4		7.5Y8/1 灰白色	
500		土師器 皿S小	8.6	2.4		10YR7/2 にぶい黄橙色	
501		土師器 皿N大	13.2	2.8		2.5Y8/2 灰白色	
502		土師器 皿N大	13.2	3.3		10YR7/3 にぶい黄橙色	
503		土師器 皿N大	13.3	2.4		10YR8/2 灰白色	
504		土師器 皿N大	13.5	2.6		10YR8/3 浅黄橙色	
505		瓦器 椀	13.5	4.8	6.0	器表銀黒色 断面N8/Y 灰白色	内面底部にミガキによる花文あり

付表24 SK33出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
506		土師器 皿N小	8.3	1.4		7.5YR7/2 明褐灰色	いずれも口縁部および内面はナデ 外面はオサエ
507		土師器 皿N小	8.4	1.6		10YR7/2 にぶい黄橙色	
508		土師器 皿N小	8.6	1.6		10YR8/2 灰白色	
509		土師器 皿N小	8.7	1.5		10YR7/3 にぶい黄橙色	
510		土師器 皿N小	9.1	1.2		10YR7/3 にぶい黄橙色	
511		土師器 皿N小	9.1	1.4		7.5YR7/2 明褐灰色	
512		土師器 皿Sn	9.7	1.7		10YR8/1 灰白色	
513		土師器 皿Sn	12.2	2.6		7.5YR8/1 灰白色	
514		土師器 皿N大	12.5	3.2		5YR7/4 にぶい橙色	
515		土師器 皿N大	12.6	2.2		7.5YR8/3 浅黄橙色	
516		土師器 皿N大	12.9	1.9		7.5YR7/2 明褐灰色	
517		土師器 皿N大	13.1	2.5		10YR7/2 にぶい黄橙色	雲母・黒色細粒含む
518		土師器 皿N大	13.3	2.4		10YR7/2 にぶい黄橙色	
519		土師器 皿N大	13.4	1.9		5YR7/3 にぶい橙色	
520		土師器 皿N大	13.5	2.1		7.5YR7/3 にぶい橙色	

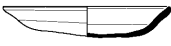


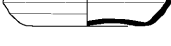





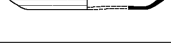
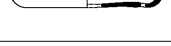

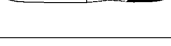
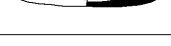
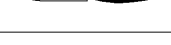


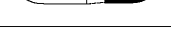
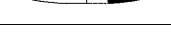

付表25 SG26出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
521		土師器 皿N小	8.1	1.6		10YR8/3 浅黄橙色	いずれも口縁部および内面はナデ 外面はオサエ
522		土師器 皿N小	8.3	1.1		10YR7/3 にぶい黄橙色	

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
523		土師器 皿N小	8.3	1.6		2.5Y8/3 淡黄色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
524		土師器 皿N小	8.6	1.5		10YR8/2 灰白色	
525		土師器 皿N小	8.6	1.5		2.5Y8/2 灰白色	
526		土師器 皿N小	8.6	1.8		2.5Y8/3 淡黄色	
527		土師器 皿N小	8.7	1.6		10YR7/2 にぶい黄橙色	
528		土師器 皿N小	8.8	1.3		2.5Y8/2 灰白色	
529		土師器 皿N小	8.8	2.3		10YR8/3 浅黄橙色	
530		土師器 皿N小	8.8	1.5		2.5Y8/2 灰白色	
531		土師器 皿N小	8.8	1.9		2.5Y7/2 灰黄色	
532		土師器 皿N小	8.9	1.6		10YR7/3 にぶい黄橙色	
533		土師器 皿N小	8.9	1.7		2.5Y8/2 灰白色	
534		土師器 皿N小	8.9	1.8		10YR8/2 灰白色	
535		土師器 皿N小	9.0	1.7		10YR8/2 灰白色	
536		土師器 皿N小	9.0	1.7		10YR8/2 灰白色	口縁部に煤附着
537		土師器 皿N小	9.0	1.3		2.5Y8/2 灰白色	
538		土師器 皿N小	9.0	1.4		10YR7/2 にぶい黄橙色	
539		土師器 皿N小	9.0	1.2		2.5Y8/1 灰白色	
540		土師器 皿N小	9.1	1.5		2.5Y8/2 灰白色	
541		土師器 皿N小	9.1	1.6		10YR8/2 灰白色	
542		土師器 皿N小	9.1	1.6		2.5Y8/2 灰白色	

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
543		土師器 皿N小	9.1	1.6		2.5Y8/2 灰白色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
544		土師器 皿N小	9.2	1.3		7.5YR8/3 浅黄橙色	
545		土師器 皿N小	9.2	1.4		2.5Y8/2 灰白色	
546		土師器 皿N小	9.2	1.4		2.5Y8/2 灰白色	
547		土師器 皿N小	9.2	1.4		10YR8/3 浅黄橙色	
548		土師器 皿N小	9.3	1.8		2.5Y8/1 灰白色	
549		土師器 皿N小	9.3	1.3		7.5YR8/3 浅黄橙色	
550		土師器 皿N小	9.3	1.5		5YR8/4 淡橙色	
551		土師器 皿N小	9.4	1.8		2.5Y8/2 灰白色	
552		土師器 皿N小	9.5	1.4		10YR8/2 灰白色	
553		土師器 皿N小	9.5	1.6		2.5Y8/3 淡黄色	口縁部に煤付着
554		土師器 皿N小	9.5	1.7		10YR8/3 浅黄橙色	口縁部に煤付着
555		土師器 皿Ac	8.7	1.1		10YR7/3 にぶい黄橙色	
556		土師器 皿Ac	9.0	1.4		7.5YR7/4 にぶい橙色	
557		土師器 皿Ac	9.1	1.4		2.5Y7/2 灰黄色	
558		土師器 皿Ac	9.2	1.5		10YR7/2 にぶい黄橙色	
559		土師器 皿N大	12.6	2.6		2.5Y8/2 灰白色	
560		土師器 皿N大	12.7	2.1		10YR7/2 にぶい黄橙色	
561		土師器 皿N大	12.8	2.3		7.5YR8/2 灰白色	
562		土師器 皿N大	13.0	2.3		7.5YR8/3 浅黄橙色	

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
563		土師器 皿N大	13.2	2.7		10YR8/3 浅黄橙色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
564		土師器 皿N大	13.2	2.1		2.5Y8/2 灰白色	
565		土師器 皿N大	13.3	2.2		2.5Y8/2 灰白色	
566		土師器 皿N大	13.3	2.4		2.5Y8/3 淡黄色	
567		土師器 皿N大	13.3	3.0		10YR8/2 灰白色	
568		土師器 皿N大	13.4	2.5		2.5Y8/3 淡黄色	
569		土師器 皿N大	13.4	2.5		10YR8/2 灰白色	
570		土師器 皿N大	13.5	2.1		2.5Y8/1 灰白色	
571		土師器 皿N大	13.6	2.4		2.5Y8/1 灰白色	
572		土師器 皿N大	13.6	2.9		2.5Y8/2 灰白色	
573		土師器 皿N大	13.7	2.3		10YR8/2 灰白色	
574		土師器 皿N大	13.7	3.5		7.5YR7/4 にぶい橙色	
575		土師器 皿N大	13.8	3.2		2.5Y8/4 淡黄色	
576		土師器 皿N大	13.8	2.6		10YR8/3 浅黄橙色	
577		土師器 皿N大	13.8	2.7		10YR8/3 浅黄橙色	
578		土師器 皿N大	13.8	2.3		2.5Y8/2 灰白色	
579		土師器 皿N大	13.8	2.4		10YR7/4 にぶい黄橙色	胎土やや砂質
580		土師器 皿N大	13.9	2.3		2.5Y7/2 灰黄色	
581		土師器 皿N大	13.9	2.2		2.5Y8/2 灰白色	
582		土師器 皿N大	14.0	2.5		2.5Y8/2 灰白色	

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
583		土師器 皿N大	14.0	2.6		5Y8.5/1 灰白色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ 胎土やや粗
584		土師器 皿N大	14.0	2.7		7.5YR8/4 浅黄橙色	
585		土師器 皿N大	14.0	2.4		2.5Y8.5/2 灰白色	赤褐色粒含む 歪み大きい
586		土師器 皿N大	14.2	2.5		7.5YR8/3 浅黄橙色	
587		土師器 皿N大	14.2	2.8		2.5Y8/2 灰白色	
588		土師器 皿N大	14.4	2.3		10YR8/2 灰白色	
589		土師器 皿N大	14.5	2.2		2.5Y8/2 灰白色	
590		土師器 皿N大	14.5	2.7		2.5Y8/2 灰白色	
591		土師器 皿N大	14.6	2.7		10YR8/3 浅黄橙色	
592		土師器 皿N大	14.7	2.2		2.5Y8/1 灰白色	
593		土師器 皿N大	15.0	2.3		2.5Y8/2 灰白色	
594		土師器 皿Sc	8.2	1.2		10YR8.5/1 灰白色	
595		土師器 皿Sc	9.0	1.0		2.5Y8/2 灰白色	
596		土師器 皿Sn	8.4	1.5		5Y8.5/1 灰白色	
597		土師器 皿Sn	9.5	1.7		2.5Y8/2 灰白色	
598		土師器 皿S	12.2	(3.1)		2.5Y8/2 灰白色	
599		土師器 皿S	12.8	3.4		5Y8.5/1 灰白色	
600		土師器 皿S	13.2	3.2		2.5Y8/2 灰白色	
601		土師器 皿S	13.3	3.4		7.5Y8/1 灰白色	
602		土師器 皿S	13.4	3.3		2.5Y8/1 灰白色	



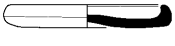
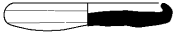
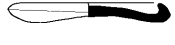


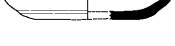



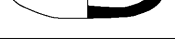
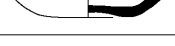

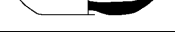

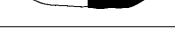
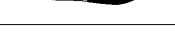

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
603		土師器 皿S	13.8	3.5		2.5Y8.5/1 灰白色	口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
604		瓦器 椀	17.8			器表N3/0暗灰色 断面N7/0灰白色	内面のみ密なミガキ
605		龍泉窯系 青磁皿	8.8	2.4	3.1	胎土N6/Y灰色 釉7.5GY6.5/1 緑灰色	胎土緻密 内面底部に櫛描きで草花文を表す
606		黄釉褐彩盤	28.6			胎土2.5Y7.5/2 灰白色 釉5Y6/ 3.5オリープ黄色	胎土やや粗 砂粒を多く含む

付表26 SB79出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
607		土師器 皿N小	7.8	1.3		7.5YR7/4 にぶい橙色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ 雲母含む
608		土師器 皿N小	7.8	1.6		10YR7/3 にぶい黄橙色	雲母含む
609		土師器 皿N小	8.0	1.6		10YR7/3 にぶい黄橙色	胎土密細粒
610		土師器 皿N小	8.1	1.6		10YR7/3 にぶい黄橙色	雲母含む
611		土師器 皿N小	8.2	1.4		10YR7/4 にぶい黄橙色	胎土緻密
612		土師器 皿N小	8.2	1.5		7.5YR7.5/3 にぶい橙色	胎土緻密
613		土師器 皿N小	8.3	1.4		10YR7/3 にぶい黄橙色	雲母含む
614		土師器 皿N小	8.3	1.5		10YR7/3 にぶい黄橙色	雲母含む
615		土師器 皿N小	8.4	1.4		10YR8/1 灰白色	
616		土師器 皿N小	8.5	1.4		2.5Y7.5/2 灰黄白色	雲母含む
617		土師器 皿N小	8.6	1.8		7.5YR7/4 にぶい橙色	
618		土師器 皿N小	9.0	1.4		10YR7/1 灰白色	
619		土師器 皿N小	9.0	1.5		10YR7/2 にぶい黄橙色	
620		土師器 皿N小	9.1	1.5		10YR8/2 灰白色	













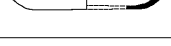







No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
621		土師器 皿N大	12.4	2.2		10YR8/2 灰白色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ 雲母含む
622		土師器 皿N大	12.7	2.2		7.5YR8/2 灰白色	雲母含む
623		土師器 皿N大	12.7	2.3		10YR8/1.5 灰白色	
624		土師器 皿N大	12.9	2.2		5YR8/3 淡橙色	砂粒含むが緻密
625		土師器 皿N大	13.2	2.8		10YR8/2 灰白色	
626		土師器 皿N大	13.4	2.8		10YR8/2 灰白色	赤色粒含む
627		土師器 皿N大	13.5	3.2		10YR8/2 灰白色	
628		土師器 皿N大	14.2	2.8		7.5YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒含む
629		土師器 皿Sc	6.5	1.0		2.5Y8/1 灰白色	
630		土師器 皿Sc	6.8	1.0		2.5Y8/1 灰白色	
631		土師器 皿Sc	6.8	1.1		2.5Y8/1 灰白色	
632		土師器 皿S小	8.6	2.1		2.5Y8/1 灰白色	
633		土師器 皿S中	10.9	3.1		2.5Y8/1 灰白色	
634		土師器 皿S大	13.0	3.4		2.5Y8/1 灰白色	胎土やや粗 白色粒含む
635		土師器 皿S大	13.0	3.2		10YR8/1 灰白色	
636		青白磁 合子蓋	5.2	1.5		胎5Y7/1灰白色 釉5Y5/2 灰オリーブ色	口縁下端と内面下段露胎
637		同安窯系 青磁皿	10.4	2.2	4.6	胎10Y6/1灰色 釉7.5Y7/2 灰白色	外面底部以外を施釉
638 ┆ 650	写真のみ掲載	磁州窯系 壺					白化粧 掻落し・線刻 鉄彩の後施釉 緑釉
651 ┆ 653	写真のみ掲載	吉州窯系 壺					黒化粧 掻落し・鉄彩



付表27 SE06出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
654		土師器 皿Sc	4.8	0.7		10YR8/2 灰白色	いずれも外面底部オサエ 他の部位はナデ
655		土師器 皿Sc	4.9	0.7		7.5YR8/2 灰白色	胎土やや砂質
656		土師器 皿Sc	5.0	0.7		2.5Y8/2 灰白色	
657		土師器 皿Sc	5.0	0.8		2.5Y8/1 灰白色	
658		土師器 皿Sc	5.1	0.7		2.5Y8/1 灰白色	
659		土師器 皿Sc	5.5	0.9		2.5Y8/1 灰白色	
660		土師器 皿Sc	5.6	0.8		10YR8/2 灰白色	
661		土師器 皿Sn小	8.0	1.2		2.5Y8/1 灰白色	器形は皿Nと共通するが胎土は白色系の 特徴を示す
662		土師器 皿Sn小	8.6	1.6		10YR8/2 灰白色	器形は皿Nと共通するが胎土は白色系の 特徴を示す
663		土師器 皿Sn小	10.0	1.9		2.5Y8/2 灰白色	器形は皿Nと共通するが胎土は白色系の 特徴を示す 胎土緻密 焼成良好
664		土師器 皿S小	7.0	1.7		2.5Y8/1 灰白色	
665		土師器 皿S小	7.0	2.0		2.5Y8/2 灰白色	
666		土師器 皿S小	7.3	2.0		10YR8/2 灰白色	
667		土師器 皿S小	7.4	1.9		2.5Y8/1 灰白色	
668		土師器 皿S小	7.5	2.1		2.5Y8/1 灰白色	
669		土師器 皿S小	7.6	2.2		2.5Y8/1 灰白色	
670		土師器 皿S小	7.6	2.2		2.5Y8/2 灰白色	
671		土師器 皿S小	7.6	2.2		2.5Y8/1 灰白色	
672		土師器 皿S小	7.7	2.1		2.5Y8/2 灰白色	
673		土師器 皿S小	7.8	2.0		2.5Y8/2 灰白色	

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
674		土師器 皿S小	7.8	2.0		2.5Y8/2 灰白色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
675		土師器 皿S小	8.0	1.9		2.5Y8/2 灰白色	
676		土師器 皿S小	8.0	2.0		2.5Y8/2 灰白色	
677		土師器 皿S小	8.0	2.3		2.5Y8/1 灰白色	
678		土師器 皿S小	8.2	2.4		2.5Y8/1 灰白色	
679		土師器 皿S中	10.7	2.8		2.5Y8/1 灰白色	
680		土師器 皿S中	11.0	2.9		10YR8/2 灰白色	
681		土師器 皿S中	11.2	2.9		2.5Y8/1 灰白色	
682		土師器 皿S中	11.2	3.3		2.5Y8/2 灰白色	
683		土師器 皿S中	11.2	3.1		10YR8/2 灰白色	
684		土師器 皿S大	12.4	3.2		2.5Y8/1 灰白色	
685		土師器 皿S大	12.9	3.4		2.5Y8/1 灰白色	
686		土師器 皿S大	13.0	2.7		2.5Y8/2 灰白色	
687		土師器 皿S大	13.0	2.7		2.5Y8/2 灰白色	
688		土師器 皿S大	13.0	2.9		2.5Y8/2 灰白色	
689		土師器 皿S大	13.0	3.0		7.5YR8/2 灰白色	
690		土師器 皿S大	13.0	3.0		2.5Y8/1 灰白色	
691		土師器 皿S大	13.0	3.0		2.5Y8/2 灰白色	
692		土師器 皿S大	13.0	3.0		2.5Y8/2 灰白色	
693		土師器 皿S大	13.0	3.1		2.5Y8/2 灰白色	

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
694		土師器 皿S大	13.0	3.3		2.5Y8/2 灰白色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
695		土師器 皿S大	13.0	3.4		2.5Y8/2 灰白色	
696		土師器 皿S大	13.2	3.2		2.5Y8/1 灰白色	
697		土師器 皿S大	13.2	3.3		2.5Y8/2 灰白色	
698		土師器 皿S大	13.5	2.9		2.5Y8/3 淡黄色	
699		土師器 皿S大	13.5	3.0		2.5Y8/2 灰白色	
700		土師器 皿N小	8.0	1.4		2.5Y8/3 淡黄色	
701		土師器 皿N小	8.1	1.6		10YR8/3 浅黄橙色	
702		土師器 皿N小	8.2	1.3		10YR8/2 灰白色	
703		土師器 皿N小	8.2	1.3		10YR8/3 浅黄橙色	
704		土師器 皿N小	8.2	1.5		10YR7/4 にぶい黄橙色	
705		土師器 皿N小	8.3	1.5		7.5YR7/4 にぶい橙色	
706		土師器 皿N小	8.3	1.4		2.5Y8/2 灰白色	
707		土師器 皿N小	8.4	1.4		2.5Y8/2 灰白色	
708		土師器 皿N小	8.4	1.4		10YR8/3 浅黄橙色	
709		土師器 皿N小	8.4	1.4		10YR8/2 灰白色	
710		土師器 皿N小	8.5	1.4		10YR8/3 浅黄橙色	
711		土師器 皿N小	8.6	1.5		10YR8/3 浅黄橙色	
712		土師器 皿N小	8.6	1.5		2.5Y8/2 灰白色	
713		土師器 皿N小	8.6	1.5		2.5Y8/1 灰白色	

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
714		土師器 皿N小	8.9	1.5		10YR7/3 にぶい黄橙色	いずれも口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
715		土師器 皿N小	8.9	1.6		10YR8/3 浅黄橙色	
716		土師器 皿N大	11.2	2.3		7.5Y8/3 淡黄色	
717		土師器 皿N大	11.2	1.9		2.5Y7/2 灰黄色	
718		土師器 皿N大	11.4	2.3		2.5Y8/2 灰白色	
719		土師器 皿N大	11.5	1.9		7.5YR8/3 浅黄橙色	
720		土師器 皿N大	11.8	2.5		10YR8/2 灰白色	
721		土師器 皿N大	11.9	2.1		2.5Y8/2 灰白色	
722		土師器 皿N大	12.0	2.3		10YR8/2 灰白色	
723		土師器 皿N大	12.2	1.9		2.5Y8/2 灰白色	
724		土師器 皿N大	12.2	2.3		7.5Y8/3 淡黄色	
725		土師器 皿N大	12.3	2.3		7.5YR8/3 浅黄橙色	
726		土師器 皿N大	12.5	2.1		2.5Y8/3 淡黄色	
727		土師器 皿N大	12.8	2.0		10YR8/2 灰白色	
728		土師器 火鉢	46.0	9.6	35.0	10YR7/3にぶい 黄橙色 断面 2.5Y4/1黄灰色	体部外面規則正しいオサエ 底部に粗の痕跡を残す
729		瓦器 盤	31.2			器表5Y4/1灰色 断面2.5Y8/2 灰白色	
730		瓦器 皿	5.4	0.7		N3/0 暗灰色	器形は土師器皿Acに似る ミガキ認められず
731		瓦器 輪花椀	10.0	2.9		器表N2/0黒色 断面2.5Y8/1 灰白色	体部外面よりヘラで押さえ輪花とする 口縁部から内面に粗いミガキを施す
732		瓦器 輪花椀	10.6	3.1		器表N4/0灰色 断面7.5Y8/1 灰白色	
733		瓦器 椀	13.2	5.0		器表N4/0灰色 断面2.5Y8/1 灰白色	内面に粗いミガキ

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
734		瓦器 羽釜	27.8			2.5Y3/1黒褐色 断面2.5Y7/1 灰白色	内面は密なミガキ
735		龍泉窯系 青磁碗				5Y8/1灰白色 釉2.5GY7/1 明オリーブ灰色	鎊連弁の椀口縁部

付表28 SD67出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
736		美濃 鉄釉丸椀	10.0	6.9	5.3		鉄釉の上に灰釉を流し掛け
737		伊万里 染付筒椀	11.6				
738		丹波 鉢?	13.9				口縁部の内外面に灰釉

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょういちぼう・さきょうろくじょういちぼうあと
書名	平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報
シリーズ番号	2002-6
編著者名	平尾政幸・山口 真・永田宗秀
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2002年5月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 ちゅうどうじみなみまち・ 中堂寺南町・ あわたちやう・みょうぶ 粟田町・命婦 ちやう・ほうじやうちやう 町・坊城町	26100		34度 59分 33秒	135度 44分 36秒	1991年7月 15日～2002 年5月23日	15,780m ²	市街地再 開発計画

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡	都城跡	平安時代以前	湿地、川	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石製品	
		平安時代前期	楊梅小路北側溝、掘立柱建物、柵、溝、井戸、湿地、川、ピット	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器・青磁・瓦類・土製品・銭貨・石製品	
		平安時代後期	朱雀大路東側溝、樋口小路北側溝、西坊城小路西側溝、掘立柱建物、門、柵、溝、井戸	土師器・須恵器・白色土器・白磁・瓦類・木簡・人骨	
		平安時代末期～鎌倉時代	朱雀大路東側溝、樋口小路北側溝、坊城小路西側溝、西坊城小路東側溝・西側溝、御堂、地業、池、礎石列、石列、溝、井戸、土壌	土師器・瓦器・輸入陶磁器	
		江戸時代	御土居濠、井戸、土取り跡	施釉陶器・染付磁器・焼締陶器・銭貨	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-6
平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡

発行日 2002年5月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961